

---

# オハライ！（仮）

鬼の子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オハライ！（仮）

### 【Nコード】

N1971I

### 【作者名】

鬼の子

### 【あらすじ】

代々御祓い家業を生業にする紅神社。

主人公、紅樹くれない たつきは幽霊になった姉、綾香あやかに憑かれながらも、御祓い家業に専念する高校生。

樹は内に眠るもう一人の自分「鬼」と戦いながら、オハライは第二章へ。



## 1話 紅神社、樹の初仕事

まだ日が出ていない、神社の社の中で向かい合って正座をしている一人の男と子供がいた。

「いいか、樹。お前はまだ小さいからよく分からんかもしれんが、よく聞け。この紅神社くれないじんしゃには祭られているのは地獄の鬼だ。その力を恐れた俺たちのご先祖様がここの奥に封印をした。だが、50年に一度はこの封印を直さなければならぬ。俺の父はこれを見事に成功したが、命を落とした。封印はまだ当分先だが、そのときになったらお前も覚悟を持っておけよ」

「プンプンプン！」

目覚ましが鳴ると同時に僕は眼を開けた。起きてみると、いつもの見慣れた部屋にいる。

「夢……か」

ずいぶん懐かしいものを見た気がする。あれは自分が神社の修行を始めたばかりぐらいのときだ。

僕の名前は紅くれない 樹たつき

家は代々神社の神主の家系。中でも御払いを扱うという専門の「紅神社なにいじんしゃ」という神社だ。歳は15歳で今年から高校生になったばかり。僕は幼少のときからこの家系の血筋もあり、霊感が強いほうだった。今となつては慣れたものだが、はじめはさすがに怖い思いをしたものだ。しかし、なんとかここまで耐えてやってきた自分だが、未だに解決されていない一つ悩みの種がある。

「とりあえず今は学校の仕度をしないと」

ベットから起き出し、ハンガーに立てかけてある制服をはずして着

始める。

まったく、背は伸びるから大きめに買ったのはいいが、さすがに少し大きすぎである。

これじゃあまるで

「七五三で無理やり着せられた感じよ、樹」

不意に僕の右肩にのしかかり、聞き覚えのある声が聞こえた。

その女性の声は聞き覚えのあるのも当然、それは僕の姉だからだ。

しかし、その姉こそが僕の今一番の悩みの種なのである。

なにせ彼女はもう【この世のものじゃない】からだ。

「姉さん、いい加減に成仏したらどうです？」

僕はそう言うと姉はフワフワと右肩から離れていき、そのまま僕のベットに寝転がり本棚にあるマンガを取って読み始めた。

「なんせ死んだのが、あんたと同じ年ぐらいだしねえ。まだ青春を謳歌したいのよ」

しかし、その姿はどうみても働きたくないニートに近いものがある。

姉さんの名前は紅くれない綾香あやか

姉さんが高校生の時に事故で亡くなったはずだったが、どういうわけか天国に行かないまま、姉さんは僕の家族の前に突如として現れたのである。といっても、その姿を見ることができたのは靈感のある父と僕だけで靈感のない母は未だに見ることができなかった。

別に身体に悪影響を与えるだとか、そういうものはないのだがさすがに自分の姉が成仏しないまま、この世に留まるのはどうかかと思っ  
ている。しかし、無理に御払いしたりすることもできないのが本心だ。

僕はそんな姉が漫画を読んで笑っているのを横目に見ながら学生服に着替えていた。

「樹ー、そろそろ学校の時間でしょうー？」

母がそう呼ぶのを聞こえると、「おーう、勉強に励めよ若人」と片手で手を振る。

「姉さん、くれぐれも学校についてこないでください」

たまにこの姉は学校にフラフラと飛んでくることがあったのだ。そして、たいていイタズラをして帰っていく。あるときは自分の体操服がどこからか女子のものになっていたり、まあひどいものである。

「んじゃ、行つてきますから」

しかし、今回はあらかじめ手を打っていたので心配にはなることはないだろう。

樹が学校に行ったあとベッドに寝転んだままの綾香だったが、むくりと漫画をピタッと閉じる。

「ふふふ、あんなことを言つて、私が黙つてると思つてるのかね。

さて」

しかし動こうと思つたのにその身体はまるで接着剤が付いたかのようにはベッドから離れることができない。

「な、なんで？ 動かないのよ！」

原因を探ろうと綾香はなんとか背中の中のほうを見てみると御札が貼り付けてあった。

「姉を計つたわね！ 樹！！ てか、これじゃあサロンパスみたいじゃない！」

こうして綾香の思惑は樹の策略によって防がれたのである。

「樹ー、おはようー！」

「おう、おはようさん」

学校に行く途中の道で朝からこんな元気よくあいさつをしてきたのは、幼馴染の岬結衣<sup>みさき ゆい</sup>だった。学校ではよく「カワイイ」という評判があるようだが、実際自分にとってはあまり思っていない。まあ長いこと幼馴染なので顔を見飽きているということもあるが。しかし、僕にとってこの岬結衣はあることだからかつのが日課だ。

「ああ、結衣ー？」

「なに？ どうしたの樹」

僕はちよいちよいと結衣に耳を寄せた。

「また近所のおじさんが後ろに憑いてるぞ」

「……」

無言になった結衣に向かい、僕は某ファーストフード店にありそうなスマイルをした。

「……ぎゃあああああああああ……！！！！！！！！」

結衣はこの手の話が本当に苦手なのである。

「ビシッ！ ビシッ！ ビシッ！ ビシッ！」

いつもこの話をして僕は頬に連続ピンクをされてしまうわけだが、これも日課の内だ。

学校に着くと先ほどの結衣とは学校の廊下で別れる。

いつもずっと同じ学校で同じクラスであったが、高校からは初めての別クラスになったのだ。

「じゃあね、樹」

「おう、さて僕も教室に入るか」

教室に入り、一番後ろで窓側の僕の席の隣にいる男にあいさつする。  
「おはようっす」

僕はあいさつすると、それに気づきこっちを向いたのだがびっくりとした顔になった。

「おはようって、樹！ 頬腫れすぎだろ！？ また痴話喧嘩でもあ

ったのか」

「うるせー、あいつとはそんな関係じゃないー（棒読み）」  
全力で否定したいところだが、このパターンは何度何度も言われたので飽きてきた。

「うわ、むかつく。ありがちなパターンだけどむかつく」

このよくしゃべる男は内藤正輝ないとう まさき

一番の親友というか悪友というか、小学生以来の腐れ縁だ。

どいう男なのかといえば「なあ正輝、今日の英語の課題やったか？」

「やるわけないだろ」

とまあ、こんな奴である。

しばらく正輝と話をしていると学校のチャイムが鳴るのと同時に

「おら、授業だー。席つけ、てめえら」

男口調だが割と美人な女性教師がこう言いながら教室に入ってきた。

「おおう、我が愛しのアッキーモ！」と正輝は叫び、すかさず黒板消しが飛んでくる。

「アッキーモっていうな、秋本だと何度言えば分かりやがる」

とりあえず、黒板消しが正輝に当たった衝撃でこちらにもチョークの粉が飛んでくる。

これが僕にとって高校生活。普段とは変化がないもので、これが日常だった。

今日も勉強して、休み時間は友達としゃべり、昼休みは正輝と飯を食うという実に変わらないはずだった。しかし、いつも違うことがあったのは家に帰ってからのことだ。

「なあなあ、最近のここの噂聞いたか？」

放課後、部活も特に入っていない僕は帰り支度を始めてると隣に座っていた正輝は突然、噂について聞いてきた。

「噂？ アッキーモの彼氏の噂のことか？」

「ああ、それも気になる噂なんだが違う。なんでも神隠しにあった生徒がいるっていうんだよ」

「正輝、僕が深く知っているのかと思うのか？」

「いやいや、これも神社の人の意見を聞きたくてだね」

その言葉を聞き、僕は自分の机をバンとたたいた。その居残っていた生徒たちは何事かと僕の方を見て、教室はシーンと静まる。

「そのことは学校じゃ禁句って言っただろ、正輝」

正輝は「しまった」という顔をし、

すぐに「す、すまん。つい忘れてた」と謝った。

そのことを言わないのには訳があるのだが、あまり思い出したくない。

「まあ、専門職の親父に聞いてみるよ。依頼が来ているかもしれないからね」

僕の親父とは知ってるの通り、紅神社の神主のことだ。

「ああ、何か分かったら聞かしてくれ。記事にしたいからよ」

正輝の父は筋金入りの新聞記者で、その血なのか彼自身も新聞委員の記者魂が騒ぐようだ。

学校も終わり、正輝や途中で会った結衣と話し、別れて家に帰宅すると。

「樹、今依頼人が来てるわよ」と、母が言う。

僕はすかさずに鞆を置き、学生服のまままで神社の方へと向かった。

「うちの娘をどうか探してくださいませ」  
金持ちそうな少し太った男が頭を下げている。  
神社の社には二人の人影があった。

その男ともう一人、ヒゲを生やした袍姿（ほう）（神主の装束）の男。  
彼こそ樹の父親、紅（くれない） 宗治（そうじ）である。

「しかし、行方不明者を探す専門は警察などだ。俺らはただの悪霊  
払い」

宗治はタバコを吸いながら話す。

「いえ、それが何でも娘が行方不明になったのは「こっくりさん」  
をした後だったのです」

それを聞いて、宗治はため息を付いた。

「まったく、こっくりさんとは。本当にありがちな。自業自得だ。  
そのままにいなさい」

太った男は今にも泣きそうな顔でせがむ。

「そ、そんな困ります。先生！どうか、娘を！お金なら糸目は付け  
ませんので」

宗治はニヤリと顔を浮かべると

「まあ、そんなに言うなら仕方ないですな。子を心配するのが親の  
性です」

「この親父は……」

神社の社に着いた僕はその話を障子越しに聞く耳を立てている。

どんな「御被い」の依頼が来るのかを聞くのも、跡継ぎとしての勉  
強の役目だ。

しかし、この親父は本当にお金にガメツイ……その言葉を出させよ  
うと話を渋ったな。

「じゃあ、先生。どうか娘のこと、よろしく願います」

そう、依頼者は頭を下げて、神社を後にした。

「樹！」その後すぐ、親父は僕を呼びつけた。

僕は障子を開くと、「はい、なんでしようか」と親父に尋ねた。

「お前、この仕事。やってみるか？」

「は？」

この親父は僕の初仕事をさせようとしていた。

しかし楽をして自分だけが儲かる気でのいるのだろつ。

「なに「こつくりさん」など、ただの低級な動物霊だ。お前でも簡単に除霊などできるしな」

なるほど……確かに簡単ではある。僕は了解の返事をした。

「まずは情報集めからですね……。実際、こつくりさんをやった他の友達にも聞いてみないと」

仕事をするにしても、まずは情報集めだ。僕は口に手をやると

「その子の住所は聞いてある、すぐに向かえよー」

と、住所を書いた紙を渡された。どうやら、すでに下準備は済ませているようだ。

「あれ？」

ふと見覚えのある住所を見た気がするが、まあいい早速向かっていくことにしよう。

僕の「御被い」の初仕事がいよいよ始まるのであった。

その頃の樹の部屋では

「樹ー!!! いい加減、お札はがせええええ！」

姉はまだ縛り付けられているのであった。

## 1話 紅神社、樹の初仕事（後書き）

新改良版。元を見てたらなんだか恥ずかしくなってやり直した。  
ほとんど書き直し状態。

## 2話 こっくりの正体

神社を出た僕は親父から渡された住所の家に向かっていた。その間に依頼者の内容をおさらいしておこう。

「行方不明になったのは伊藤美香さんか」

依頼人の男から聞いた情報だと、どうやら同じ高校で同学年だが、クラスが違うようだった。

「1-Aってことは結衣と同じクラスか……何か嫌な予感がする」  
ちなみに僕と正輝は1-Bだ。

さて、今僕はこっくりさんをやったもう一人の人物を探しに来ている。

なんせ、こっくりさんは一人ではできない。

こっくりさんとは鳥居が書かれた文字盤の上に100円玉を置き、何人がそれぞれに指を乗せ、質問していくと100円玉が動き、文字を指していくという占いみたいなものである。

しかし「こっくりさんは一種の交霊術こうれいじゆつみたいなものだ。外国ではヴイジャ盤という幽霊と会話する道具に似ておる。しかし、こっくりさんの場合はイタズラ好きな動物霊を呼び寄せる」

この説明は小学生の頃、正輝と神社でやろうとし、親父に見つかった時の説教で聞かされたものだ。

「よし、着いたぞ……えっ？」

紙に書かれた住所に来てみたはいいが、見覚えがあるはずだった。

「どうみても……結衣の家です。本当にありがとうございます」と  
これを知ってて親父は僕に仕事を託したな……。

とりあえず、お邪魔することにして僕は門に近づく。

「ピンポン」とインターホンを押すと

「はい？」と結衣の母親の声が聞こえた。

「お久しぶりです。紅樹です。結衣にお話があった。」

「樹君！？ 待ってて今結衣呼ぶから、先に玄関に上がってて！」  
久々に来たからか、おばさんはインターホンの向こうではしゃいでいた。

思えば小学生の時は正輝とよく来たけど、中学生になって異性の違いもあつてか恥ずかしくて来なくなつたな。まあ今でも十分に恥ずかしいのだが。

僕は玄関に上がると、階段の上から結衣が降りてくる。

「ちよつ、どうしたの？ 何か話があるって聞いたけど。」

結衣は驚いて、僕に聞く。

「まあまあ、立ち話もなんですから、お部屋で話しませんかね。」

結衣はため息を吐き、「それ私のセリフだから」とツッコんだ。

「久々だなー、結衣の部屋！」

結衣の部屋に上げてもらった僕はテンションがちょっと高くなつていた。

「もうあんまり見ないですよ。」

結衣は恥ずかしそうに言う。

小学生のときは特に意識していなかったが、結構ドキドキものだ。

ベットを見ると

「ふむ……相変わらず動物のぬいぐるみは好きなようですね。」

小学生の時も動物のぬいぐるみがわんさかベットに置いてあった。

「うるさい。で、話して？」

結衣はベットに座り、僕は部屋の中央に置いてあった座布団に座る。

「うん、まあな……」

僕はちよつと言い難い顔をした。

「ど、どしたの？ 真剣な顔になって……ま、まさか！」  
結衣の顔が少し赤くなつた。

「いや、でもまだ心の準備が。でも樹なら」

そんなことをボソボソと口にはしているので僕は否定した。

「一人で盛り上がつてるところ悪いが、そんな話じゃない。実は伊藤さんのことで聞きたいんだ」

結衣はそれを聞いて焦り出す。

「まさか樹！ 美香のことを！？」

違つと言つてもよいのだが、僕は説明するのが面倒なので

「ああ、もうそういうことでいいや」と諦めた。

「そ、そうなんだ……。うん、行方不明のことは美香のお父さんが探しているときに聞いたよ」

一旦、結衣はがっくりしたが、気を取り直して伊藤美香さんのことを言う。

「それで、その前にこっくりさんとかやらなかったか？」

結衣はそれを聞いて驚いた。

「えっ、何で知ってるの？ やつたけど、これ話したの美香のお父さんだけよ？」

「それは……ええと」僕は少し困惑する。

僕はお父さんが直接探してくれと依頼で来たと言つことができない。なぜなら紅神社の御祓い家業はそこらにいる霊能者が対処しきれない依頼を請け負うものか、裏情報などで直接依頼人が来るものだ。

たぶん、今回は後者だろうが、一般人には知られてはいけないのだ。まあ一部例外の正輝がいるのだが、知られた経緯をあまり思い出したくはない。

僕は少し考え、答える。

「まあ美香のお父さんと会って直接聞いたんだ」  
家業のことは伏せて言う。

「そうなんだ。でも、やっぱりそれが原因なのかな？」

結衣は腕を組んだが、もろにそれが原因です。

「少し詳しく教えてもらえないか？」

僕は聞くと、結衣は静に「うん……」とうなづいた。

結衣は静かに語る。

「おとこの学校の放課後の時のこと、美香から隣に気になる子がいるから、こつくりさんを一緒にやってくれないかと頼まれたんだ」

「へえ」

僕は相槌を打つ。

「いちおう、私も聞いてみたかったこともあるし。誰もいなくなった教室でやることにしたの。暗くなった教室で、こつくりさんに私を付き合う人は誰って美香が聞いたら（わし）って文字盤が指したのよ！」

と、結衣は僕を驚かせようとした。

「で、結衣が聞いた質問って？」

僕は普通にそれを流すと「そこスルー！？ てか、そんなことになったらできないわよ！」とツッコミが入った。

「えっ！ つまんねー！」

僕は残念な顔を見ると、結衣はやれやれという表情をした。

「いちおう、これ本当のことなのよ？ まあ私があったのはこれだけだわ」

その時に僕は座布団から立ち「トイレ」と言って部屋を出ようとした。

「トイレ？ もう、よく人の家で」

結衣は呆れ顔になっているが。

「まあ大だけど」

とセリフを残して扉を閉めると、部屋の中から「やめてー！」という叫びが聞こえた。

「ガチャ」

さて、トイレを借りたわけだけど、もちろん大をする為じゃない。

僕はズボンを下ろさずに便座に座った。

水がある場所は霊と交信しやすい場所である。たとえば風呂とかトイレも。

「さて、本当に話を聞きたかったのはあなたなんだ。近所のおじさん？」

すると、結衣に憑いてた近所のおじさんの幽霊が閉めたトイレの扉から「ぬう」と出てきた。

「だいたい、予想はついているさ。動物霊で神隠しはだいたいは狐の類だ」

と、僕は先に言ったが、近所のおじさんは首を横に振る。

「あれはテング様じゃ」

僕はそれを聞いて、驚愕した。

「天狗だつて!？」

「いいか、天狗だけには絶対手を出すなよ。あいつらは妖怪の類だがその力は強く、人間の話など聞かんし、困ったことに女好きだ。とある譲れぬ事情で戦うことになったが、もう戦いたくはない」

と親父の話を思い出した。

親父でも手こずる相手だ、しかし、親父に相談している暇がない。

「妖怪の類に神隠しになるとすると急がないと戻ってこれなくなる」と、僕は口に手をやる。

霊などならこの世に留まり続けているのだが、妖怪とは住む世界が違う。

あちらに長く居続けると、幽霊か妖怪になるまでは人間の世界には帰ってこれなくなるのだ。

「仕方ない。結衣に頼むか」

僕は近所のおじさんの頭をお札でポンツと叩いた。

「じゃあ成仏してくれ」

おじさんはそのまま安らかな笑顔で天国へと昇っていくのを見届けたあとトイレから出て、結衣の部屋に戻った。

結衣の部屋に戻るいなや、頼みごとをした。

「はあ！？ また学校でこっくりさんをやれって!？」

僕は両手を合わせ「結衣頼むよ。伊藤さんを助ける為なんだ」とせがむ。

結衣はまた腕を組むと少し悩む表情をした。

「こっくりさん呼び出して、場所を聞かっていうのは分かるけど」

「大丈夫だ。何かあったら責任は持つ」

僕は胸にポンと手で叩く。

「わ、分かったわよ」

結衣は渋々承諾し、一緒に学校へと向かうことにした。

僕たちは辺りが暗くなった学校に忍び込んでいる。

「暗くなった学校ってやっぱり怖いわね」

結衣は少しビクビクしているようだ。

「ああ、この学校はよく出るからねー」

僕は少しニヤッと笑いながら言うと、結衣は袖を掴んできた。まあ実際、僕は何人か見ているがどれも害はないわけだが。

「ええと、11Aと」

僕たちは目的地の教室までたどり着いた。

こつくりさんは同じ場所でないという意味がない。

別の場所でやるとその土地にいる霊を呼び寄せてしまうからだ。

「んじゃ、始めるぞ」

教室の中に入った僕たちは適当な席で紙を広げた。

やはり親父はこんなこともあるのかと、住所が書かれた紙の裏面はこつくりさんの文字盤だったのだ。

「準備良すぎだろ……常識的に考えて」

僕は文字盤の紙をまじまじと見つめる。

「どしたの、樹？」

横に首を振り「なんでもない」と答えた。

僕と結衣は席に座り、文字盤に10円玉を置き、指をその上に置いた。

「こつくりさん、こつくりさん。おいでになりましたら、「はい」とお答えください」

僕は聞くと、10円玉は動いて、文字盤に書いてある「はい」を指した。

結衣を見ると、こわばった表情をしている。

「こつくりさん、こつくりさん。伊藤美香さんを返してください」それを聞いた結衣は慌てた。

「ちよ、樹。場所を聞くんじゃなかったの!？」

無視無視。

すると、10円玉は動いて「いいえ」を指した。

ムツとした僕は「だが断る」と強引に「はい」の方へと動かした。

「樹、まずいよ。それは……」

結衣がそう言った瞬間に文字盤を置いていた机がガタガタと震えだした。

「や、やっぱり怒ってるんだよ！ 早く謝らないと！」

結衣は僕の腕をつかむ。

教室全部の机がガタガタ震えだしたところで、僕は結衣を連れて教室の外にへと結衣を投げた。

「樹！」と教室の外に出た結衣がドアに近づく瞬間、教室のドアはカシャツと閉まる。

僕は文字盤の置いてあった机を見ると、竜巻のようなものが文字盤の中心から出ていた。

「さて、天狗様のご登場か」

僕は真剣にそれを見ていると、竜巻は静まってくる。

静まって竜巻から出てきたのは赤い顔、長い鼻、山伏の格好をしている天狗そのものだった。

「小僧！ ワシの嫁を奪いにきたのか!？」

天狗は僕に指を差して聞く。

「伊藤さんは僕の嫁！ じゃなかった。これも仕事だ。返してもらいたい！」

と、返すと「そうはいかん！ 今回こそ嫁を見つけたのじゃ。昔、ワシは人間に負け、嫁を失った。今日こそはワシの嫁を渡すわけにはいかんのじゃ！」

天狗はどうしても返す気はなさそうだ。

「お前なんか、空気嫁で十分だ！ 紅の名の下に貴様を倒す！」

僕はお札を構えると「紅だと!？」と「紅」の言葉に反応する。  
「そうか小僧、紅神社の者か! 思えば、あの時の者によく似ておる。ここであつたが好機! 復讐のときじゃ! フハハハハ!」

あのときの者に似ている?まさか

「ワシから行くぞ! それーい!」

考えている時、天狗は叫んだ。

すると教室の中で風が吹きはじめている。

天狗は風を操る妖怪だ、その風が僕に襲い掛かった。

「ちつ、やつぱり親父がやりたくないという相手も分かる」

持っていたお札が吹き飛ばされそうになっていると、少し自分の頬に痛みができた。

どうやら傷ができているようだ。

「ソニックブームか!」僕は少し焦つたが「だが、やられてばかりじゃないぞ!」

と持っているお札をすぐに目の前に合つた机に貼る。

「兵!」と叫ぶと、お札を貼つた机は浮き出した。

それを見た天狗は驚く。

「何!? 小僧、器物を操ることができるだ!?!」

紅家は九字護身法をお札に籠め、放つことができる。

といつても、効果はオリジナルで「兵」は文字通り器物に貼ると、自分の兵となり自在に操れる。

「行け!」僕は机に命令すると、机は天狗に風を無視して特攻していく。

「くっ」

天狗はすぐにそれを避けようとしたので、一旦風が静まった。

天狗が風を操っている最大の武器は葉団扇だ。それを取ってしまえ

ば、こつちのものだが。

だが、天狗を見るとあることに気づく。

「なっ、葉団扇を持っていないだど!？」

「ふははは、ワシをなめおつたな小僧。あれは未熟な天狗が使う道具! ワシほどになるといらすとも風などは操れるわい!」

そういうと、また天狗は風を起こし始めた。

「ちょ、ちよつとやばいな」と僕は焦り始めた。

「さあ、終いじゃ! 切り刻まれるがよい!」

天狗を風を凝縮させ、真空の刃を作っている。

「このままだと人間のぶつ切りできあがりつてか、冗談じゃない」

僕は少し冗談を言いながら何か手はないか……と探ってみているが、策がない。

「ははは、初仕事で僕は終わりが」

と、その時

「で、あんたはそこであきらめるのね」

「姉さん!？」

姉はいつの間にかどこから登場したのか分からなく、僕の目の前にブカブカと浮いていた。

「な、なにやつじゃ!」と天狗も突然の姉の登場に混乱して、風が止んだ。

「どもー、こいつの姉です。幽霊やってまーす!」

姉はドーモと右手を上げて天狗にあいさつする。

「幽霊だど!？ 馬鹿馬鹿しい、ワシの邪魔をするではない……んっ?」

というと、天狗は姉の顔をまじまじと見つめる。

「おや、私の美貌に惚れちゃった? でも、ごめんなさい。ピノキオには興味ないの」

「ピノキオって……」僕はすかさず姉にツッコむ。  
と、天狗は何かを思い出した。

「娘、昔ワシが連れようとした嫁にそっくりだわ！」

「ね、姉さん知り合い？」

「いや、こんなお鼻が高いおじさんなんて知らない。ああ、でも

姉さんは確か　　という表情だ。

「そういえば、お母さんが昔、天狗にさらわれたって言ってたよう  
なあ？」

姉が言った言葉を聴いて親父のゆずれない事情が、母さんを取られ  
るかもしれないということがあった。

そのことにも天狗は気づいたのか怒り始める。

「貴様ら、憎きあの男の子か！　ゆるさん、ワシの嫁を手にかかけ  
おつて！」

元々天狗の嫁ではなかったと思うのだが。

それを見た姉もコブシをボキボキと鳴らし始めた。

「さて、私もゆるせないのよ。恋に生きた乙女としてね！」  
姉が怒っている。

「おもしろい、幽霊ごときが！！！」

と天狗は姉を小馬鹿にした感じだが天狗さん、姉さんにより本気  
にさせないほうが……。

「いいわ、前にみたアニメの必殺技を試すときね！」

綾香さん……？それはちょっとまずくないです？

「綾香！　ドリル！！！！　ブレイクウウ！！！！！」

そう叫ぶと姉はまるでドリルのように回転しはじめて、天狗に突っ  
込んでいった。

「な、なにいいー！？」

天狗は回転した姉の体当たりに捕まり、腹にグリグリと姉の足が食込んで行った。  
「言わんこつちやない。」

「な、なんとという妖力じゃ。こんな幽霊ありえるのか」

姉さんの前に天狗は土下座のように頭を下げ、腹を抑えていた。

そりゃ、姉さんの実力は僕なんかより相当高かった。

まして幽霊となったら、それも異常なパワーになったのだ。

「樹！ お札！」姉は僕に告げる。

「は、はい！」

僕はすかさずお札を天狗に貼り「陣！」と唱えた。

ちなみに姉を縛り付けたのと同じ術だ。

「くつ、人間とたかが幽霊に負けるとは…」

天狗はしょんぼりとしていた。

「いい天狗さん。乙女というのは恋に生きるものなのよ。それを奪つちやいけないわ」

「何が、恋に生きるだよ。彼氏とか見たことないよ」と僕は姉にツッコミを入れるが

「た〜つ〜き〜く〜ん？」

と怖い笑顔で見られて姉に見られてしまった。

「さて、天狗。今なら伊藤さんを返すだけで逃がしてやってもいいけど？」

話を戻して、天狗に交渉してみることにしたが

「いやじゃ！あの娘は渡さん！」と天狗は首を横に振る。

僕はためいきをつき「まったく……やはりここは命を取るしかないのかな」と諦め顔になる。

すると姉さんが「まって、樹。少し時間を頂戴」と待ったをかけた。

そういつて姉さんは外に出て行くと、数分で帰ってきた。

「はい、天狗さん。これあげるわ」

何か姉は人型のようなものを天狗にあげた。

「こ、これは……？」

不思議に何であるかを天狗は聞く。

それって……まさか

「うん、ダッチワイ〇」

天狗はそれが気に入ったのか、ご機嫌で持ち帰った。

その後、こつくりさんをやった文字盤から、また竜巻が現れ、伊藤さんが倒れて出てきた。

「あ、あれ？ 私はどうしたの？」目が覚めると、伊藤さんは何も覚えていないようだった。

そのまま教室の外に放り出した結衣を見ると、そのまま廊下の壁を背に寝ている。

「まったく……こんなところで寝れるとは大物だ」

僕は結衣を背負って、伊藤さんを家に送っていった。

伊藤さんを家に送ると、伊藤さんのお父さんが門の前で待っていた。

「美香！」

「お父さん！」

二人は出会うと、抱きしめあっていた。

空気を読んで、僕は早々そこをあとにする。

それに後ろの荷物が重いのだ。

結衣をなんとか背負って家に送り、僕はようやく自分の部屋に着いた。

「しっかし、危なかったわねー。いきなり天狗相手なんて姉さん信

じられないわー」

姉さんは僕の部屋に着いて早々ベットに寝転がる。

「僕だつて、こつも予想していなかったよ。しかし、姉さんはすごいなあ」

制服を脱ぎながら話すと、姉さんは胸にポンと手で叩き

「あつたりまえよ。これでも紅家の人間だつたんだから」と得意げになつていた。

そつえば

「姉さんはどうやつて、僕のお札から逃げ出したの？」

僕は疑問に話しかけると、姉はハアと深く息をつく。

「大変だつたわ。父さんに発見されるまで縛りつけられるわ、天狗の気配がしたから助けに行つてやれだわで」

その言葉を聞いて、僕はピクつとなつた。

「親父はお見通しだつたてわけか……」

こつして僕の初仕事は終えたのである。

「そつえば、あの……ダツ〇ワイフはどこから持つてきたの？」

「ああ、あれ？ あれあんたの友達の正輝君からよ」

えっ？

「ま、まさきいいいいいい！！！！」

正輝を友としていいのか疑う1日であつた。

## 2話 じっくりの正体（後書き）

修正版の2話完成です。

あ、結構おもしろくなってる。

### 3話 アツキーモの災難 前編

「お、神隠し事件は解決したようだな樹！」

朝、僕は学校に登校すると、それより早く教室にいた正輝が話しかけてきた。

だが、正輝……君とはあまり話したくはない。

僕はまだ昨日、正輝が持っていた物の件が忘れられなかった。

「なんだ、ずいぶん落ち込んでるな。どうした悩みか？」

正輝は心配で顔をのぞいてくるが

いや、友として男として、これは胸にしまっておこう。

「いや、なんでもない。やっぱり情報早いなあ、もう聞きつけたのか」

気を取り直し、僕は神隠しの話に戻す。

「そりゃ、今回の学校新聞の特ダネだぜ。これを超えるネタはアツキーモの彼氏の噂ぐらいだな」

と、正輝は言うが確かにそれは僕も気になっている。

アツキーモモとい秋本先生はそこそこ美人で若いが、男が寄り付かない。

なぜなら「おらーてめえらー！ 朝のHR本ルームじゃー！」

と、姿もジャージでまさに男子校の体育教師のように竹刀を持ち歩いた秋本先生が教室に入ってきた。

でも、そんな秋本先生に彼氏ができたっていう噂がある。

なんでも「超イケメンだった」とか、「アツキーモが女らしい口調だった」とか。

「そつえば樹」

不意に隣の席に座っている正輝が話しかけてくる。

「今HR中ホールドだろ？ 静かにしないとまた黒板消しが飛ぶぞ」

僕は毎回黒板消しが飛んできて、正輝と一緒に被害を被るのでそれは避けたかった。

「まあまあ、それよりアツキーモが最近ストーカーに追われている噂知っているか？」

「ん？ そうなの？」

初耳だ、というかストーカーも命がけだろうに、秋本先生は剣道2段、柔道3段という有段者だ。

「いや、どうも先生が言うには人間とは思えないって言うんだ」それを知ってて正輝は続けた。

気になる……確かに幽霊の中には心霊ストーカーっていうものが存在する。

もちろん、好きだけという感情なら特に問題はないが、時には嫉妬し、悪霊に変化する恐れもある。

「それ、僕に仕事ってわけか？」

「ふ、バレたか」と正輝は鼻で笑った。

どうせ、その事件を解決し、ついでに秋本先生の彼氏を探ってこいという魂胆だろう。

「そういうことだ」

まるで僕の頭を読んだかのように言った。

「分かったよ。あとで少し話を聞いてみる」仕方なくその件を承諾する。

「おう、頼むぞー」

と、唐突に、正輝に黒板消しが飛んできた。

「こらあー内藤！！ またお前か！！！」

だから、先生。黒板消しだと隣の僕にもチョークの粉がああ。

HRが終わり……

「秋本先生、最近何か困っているあるようで」

僕は教卓にいる先生に話しかけていった。

「どこから聞いたんだ……まったくまた内藤か。そうだ、最近何か私の背後に気配を感じる」

「で、何か被害にはあつたんですか？」

僕はしつこく聞いてみることにした。

「いや、特には。ただ車がつつこんできたり、階段を突き落とされそうになったりとかはあつたが」

それを淡々と先生は言うが……

「十分被害ですよ。てか、なんで無事なんですか？」

「昔やってた新体操でな。車が突っ込む瞬間に気づき、車を飛び台にしたり。階段は落ちる瞬間に回転して見事に着地に成功した」

先生は少し自慢げに答えた。

超人すぎるぞ、この先生。てか、新体操というレベルではない。

「もう授業が始まるぞ。さっさと授業に準備をする」

と、先生に話は切られた。

仕方なく席に戻ると「どうだった？」と正輝が聞いてくるが、

「いや、別に。あの先生なら大丈夫じゃないか？」

「大丈夫なんだろうが、やっぱり心配だろ。お前がやらないなら俺だけでも調査する」

友だけが調査して何かあつては気分がいいものではない。

「わかったよ。それに付き合っよ」

ということ、神社を通さない仕事をする事になった。

授業も進み、放課後のこと。

「そっぴや、お前の姉さんは今日はいないのか？」

職員室のすぐ近くで正輝が唐突に聞いてくる。

話し遅れたが、正輝は見えないけど姉さんが幽霊という話はしてある。

「なんか最近いないんだよな。どこに行ってるやらで、帰ってきたと思っいたら何も話さず寝るし」

僕は考え深げに答えると、正輝はまあいいやという顔をした。

「まあ、何かやり残したこともあるんだろう。と、先生が帰るぜ」

先生が職員室から出ていくのが見える。よし、さっそく尾行しよう。

「勘のいい先生だ。慎重に行くぞ樹」

霊感のないのに幽霊の存在に気づくぐらいだ。しかし、その幽霊がないな。

「おい、何か見えるか？ 幽霊とか妖怪とか？」

丁度、先生の家まで半分に来たところで正輝が話してくる。

「いや、特には感じない？ 気のせいなんじゃないか？」

「うーむ、はたからみると俺たちが怪しいぐらいか」

本当にこれじゃあ僕たちがストーカーだ。

とっさに正輝が先生を見て気づく。「先生が携帯見始めたぞ」

メールか？ いや、電話しようとしている。

「もしもし、母さん？ またお見合いダメだったわ。なんでかなあ」

先生の電話の会話が聞こえた。

その言葉を聞いて、正輝はショックした。

「ちょ、お見合いだって！？ じゃあ今までの彼氏の噂はお見合い相手だったのか」

なるほど、先生もあせっているわけか……。

と、そこに

「ふふ、友達としてまあ当然よね」

「ちよ、姉さん!？」

「な、何？ 樹のお姉さまか!？」

また唐突に目の前にプカプカと浮いていた。しかし、友達って

「姉さん、まさか秋本先生と友達だったの？」

「そうよー、高校時代の親友だわー。いい子だからいい相手に会ってもらいたいじゃない？だから日夜、彼女のお見合いに行つて、ダメだったら破談にさせてるわ」

ニコニコと姉さんは笑っているが……

「それ、姉さんが単に嫉妬してるとかじゃないのか？ 待てよ、それじゃあ姉さんがストーカー？」

「あ、ストーカーは私じゃないよー」と姉さんは手を振る。

「違うのか」

「なあ、樹。お姉さまはなんて言っているんだ？」

無視され続けたのか、正輝が寂しそうに話しかけてくる。もちろん幽霊の声も聞こえないのである。

姉さんはヨツと手を上げ「お、君は〇ツチワイフ少年」と言った。

「もう、そのネタはいい!!」

正輝は？の顔になってるが、とりあえずストーカー事件は解決してないようだ。

「姉さん、何か知らないの？」

「うーん、ちよつとあなたには手ごわい相手よー」

前回の天狗より手ごわいつていうのか？ 一体。

「まあ、とりあえず見てれば分かるわ」

姉さんがそう言うのと秋本先生の電話が終わり、先生はマンションを通りすがろうとした瞬間。

「ゴトツ」と上から植木鉢が落ちてきた!

「アッキーモ! あぶないー!!」

植木鉢に気づいた正輝は叫び飛び出していった。

それに気づくと、秋本先生はすぐに上の植木鉢を察知し、手刀で割った。

「すげえ……」それに見惚れるが、明らかに人間技ではないだろ。

「先生大丈夫ですか!？」と正輝は近寄る。が

「内藤……お前、家こつちじゃねえだろ! 寄り道してねえで早く帰れ!」

植木鉢のことより先生は正輝の寄り道に怒る。

「いや、先生。俺は植木鉢が落ちてくるのを」

どうやら、植木鉢のことを先生はなかつたかのように正輝に足蹴りしていた。

あれは反射神経なのだろうか？

「姉さん、一瞬気配を感じたけど、あれはもしかして」

僕は一瞬察知した気確かめるために姉に問う。

「そう、「死神」ね」と姉は軽く言ったが、ぶっちゃけ言うとな勝てる相手ではない。

「死神というのはその名のとおり死を司る神だ。会ったものを死に至らすという厄介な神である。ちなみに刀とか持っていたり、バンカイ!とか言わないから注意だ」

と、父さんの解説がどこからともなく頭に入ってきた。

「しかし、先生あのままでも死なないんじゃないか」

このまま無視してもいいのではないかと僕は思うと

「いや、それは半分私が気づかせているのよ。彼女の身体能力は異常だけ」

なるほど、姉が何らかの方法で先生に危険を察知させていたのか。通りで最近忙しかったと。

「でも、その死神がどこにいるのかは検討つかないのよね。いつの

まにか背後にいてもあるし」

姉は考えている。

たいてい死神は霊能者が見れば黒いモヤのように見えるが、それを見た覚えはない。

「本当に死神かな……。もう少し調査しないと」

先生がマンシヨンのところを後にすると、僕は正輝に駆け寄るが正輝は足蹴りにされ再起不能のようなので置いていくことにした。

「正輝お前の勇氣は無駄にはしない。南無」

僕は正輝に手を合わせた。

姉がそれを見て「あんたって結構ひどい奴よね」と言う。  
うるせー！。

先生をそのまま尾行していくと、どうやら先生のマンシヨンに着いたようだ。

「何もなかったか……。うーん、でも家にもしなんかあったら」

僕は悩むと「んじゃ、私が憑いて行くわ。あんたはもう帰っていいわよ」

姉さんが提案する。

「それしかないか……。んじゃ帰ってきたら教えてくれ」

それを聞いた姉が僕に手を振って、先生の部屋に向かった。

3話 アツキーモの災難 前編（後書き）

修正完了。

次だ次！

#### 4話 アツキーモの災難 後編

「ふう、正輝は家に送ったし、あとは姉さんの報告次第だ」  
部屋に戻った僕は私服に着替え、ベットに座った。

先生の尾行は姉さんが続けているので、まあ心配はいらないだろう。

「さて……僕は僕で何かしないとな」  
とりあえず、こうというのが詳しい人に聞くのが適切である。

「親父ー！」  
神社へと出向いた僕は社務所しゃむしょ（神社の管理をする場所）という場所に行った。たいてい親父は日夜、仕事のない時はここで神社の管理をしている。

「どうした、樹」

タバコを吸い、何かの書類を見ていた親父は僕に視線を合わせた。

「いや、ちよつと死神について教えてくれないか」

そう言うと親父は手をヒョイと出し「お賽銭」と言った。

「神社の息子にお賽銭せびるとか、どういう神主だよ……」

「死神の話題は高いぞ！ 最近、何か漫画流行っちゃてるから小学生とかに大人気！」

「小学生相手にも同じようなことしてんのか……親父」

とりあえず「お賽銭、お賽銭」と話が進まないのので社の方に賽銭を入れてきた。

社務所に戻った僕は親父に死神のこと聞く。

「よし、教えよう。元々死神とは黒のローブを身にまとい、鎌を持った骸骨のことを指す」

「そんなことは分かっている。僕が聞きたいのはその対処法だ」  
僕は少しムツとしたが、親父はそんな僕の気を知らずにタバコを吸い続け言う。

「死神は神だ。勝てるとか、勝てないとかいう相手じゃない。何せ攻撃をすり抜けてしまっからな」

その言葉を聞くあたり何か親父は戦ったことあるように思えた。

「親父は戦ったことあるのか？」

僕は聞くと、以外な答えが返ってきた。

「死神には勝てない。しかし、死神を操る者には勝った」

「死神を操るだつて!？」

僕は詳しく追求をした。

「死神を呼び出す儀式の際、なんらかの術などによって物に封じ込めることができる。あの時は西洋の魔女なんか水晶に封じ込めてな。それを割ったことでなんとか死神を退いた」  
なるほど、だいたいのことは分かってきた。

「つまり先生は何らかの方法で死神を呼び出したか、封じ込めた何かを持っているのか」

これでは姉の意見を聞くだけだが……

親父と別れ、部屋に着いた僕は家に戻っているはずであろう正輝と電話で連絡をしていた。

「なるほど……つまり先生は魔女か、偶然にその物を持ってしまったのかということだな」

正輝はなんとなく理解はできているようだ。

「うん、でも靈感はまったくない先生が魔女だという説には無理がある。ああいうのは僕たちと似たような境遇だし、たぶん何か持っ

てしまったんだろう。正輝なら何か情報ないかな？」

アッキーモの噂を確かめていた正輝なら、たぶん何か知っていると思っただが

「残念ながらそれっぽいことはないな。ああ、ただアッキーモのメルアドなら盗み見たぞ」

「盗み見みつて……まさかイタズラメールとかしてないよな？」

僕は確かめようとすると

「え、それはしろってこと？ わかった！」

「ちょ、ちよつとまって！僕はダチヨ○倶楽部みたいこと言ってるんじゃない！」「

ピッ……て、切りやがった。

何、困るのは正輝の方だ、僕は関係ないことにしておこう。

また学校で黒板消しが飛んでくるのはごめんだが。

しばらくすると、突然「樹！」という声が聞こえた。

「この声は姉さん？ 帰ってきたの？」あたりを見回すもそれらしき姿は見えない。

「テレパシーで送ってるのよ。とりあえず早く沙織さおりのところへ！」  
頭の中に声が響いた。

「テレパシー？ そんな超能力みたいなことできたのか！？ てかさ織さおりって！？」

「ああ、あなたの言っている秋本先生のことよ！」

ああ、そういえば秋本沙織あきもと さおりなんていう名前だったのを今思い出した。いつも秋本かアッキーモだったから……

僕は家から飛び出したと同時に樹にも連絡をした。

「正輝！ 先生が危険らしい、万が一死神との戦闘になる恐れがあるから、少し時間が立ってから来い！」

「分かった！ 気をつけていけよ！」

電話を切り、僕は先生のマンションに急ぐ。

なんとか先生のマンションに着くと、住んでいる部屋に急いだ。

ドンドン！「先生！ 大丈夫ですか！？」

ドアをノックしても返事がない。すると、「樹！カギはあいてるから急いで中へ！でも、息を止めて入ってくるのと、火のようなものは持ってこないで！」と頭の中で聞こえた。

それは……ガスか！

急いで入ってみると、ガス臭く電気が消えていた。どうやらガス漏れで先生はガス中毒にやられたようである。それに電気で発火する恐れがあるので姉が消したのだろう。しかし、なぜガス栓を止めないのか。

息を止めて部屋の奥を見ると床に秋本先生が倒れており、何かを止めているようにふんばっている姉が見えた。

「姉さん！」と叫ぶと「急いで、沙織を外へ！」とうながされた。

僕は急いで、先生を抱え外に出る。

「先生！」と呼び続けたが、どうやら気を失っているようだ。とりあえず、そのまま駐車場の脇に寝かせておく。

僕は急いで部屋に戻り、ガスの元栓を締めると、姉の状況を確認した。

「くう……止めているだけで精一杯だわ……」

「姉さん！」

僕は暗闇の中よく目を凝らすと、信じられないものが見えた。

「黒いローブ、大きい鎌、骸骨！？」

そう、死神だ。死神はハツと何かを察知したのか、くると方向転換をして姉を退き出口の方へと向かった。どうやらターゲットが外にいると分かったのか、ドア側にいる僕へと寄ってきた。

「樹！ あんたの敵う相手じゃない！ 逃げなさい！」

死神は一直線に僕にへと向かってくる。僕はお札を取り出し、死神に投げつけた。

「陣じん！」僕はすかさず縛り付ける効果の印を唱え、お札を投げたが死神の体をすり抜けた。

そして、そのまま僕をすり抜け、そのまま死神は外に出る。

「このままじゃ先生があぶない！」

駐車場にいる先生を見ようとすると、そこには寝かしていたはずの先生がいない。

「せ、先生！ どこですか！」まさか一人で歩けるようになったのかと思うと、電話が鳴った。

「樹！ 今先生抱えて、病院に向かってるぞ！」

どうやら正輝が先生を連れ出したようだ。少しガス臭かったことからガス中毒と分かったのだろう。

「正輝！ とりあえず俺の神社に向かえ！ 死神が追ってるはずだ

！」

「な、なにいいい！？ わ、分かった。一旦お前の神社に向かうわ

僕も急いで正輝に追いつこうと走り始め、電話を切ろうとすると、姉が止めた。

「正輝君に絶対に沙織の携帯の電源を切るように言って！ それが死神の正体よ！」

「そうか！」

マンションから植木鉢が落ちる時も携帯を使っていた。

そして、これは正輝のイタズラメールが引き起こしたのか！

「正輝！すぐに先生の携帯の電源切れ！ 死神が出てくるぞ！」  
「おっしや任せろ！ ……て、ええ！？」

何か正輝があわてている。

「樹どうしよう！ アツキーモの携帯が着信してる！」

「な！！ すぐに携帯を捨てて、そこから早く逃げろ！」

「て、うわああああ！ ガシャーーン！！！」  
電話の向こうからすごい音が聞こえた。

「正輝！？ ど、どうした！？」

「うう、ちよつと放置自転車に足取られただけ」  
こいつめ、どこまでおっちょこちょいなんだ。

「てつ、アツキーモが道路に！？」

どうやら、正輝の手から逃れた先生は放心状態で道路に立っているようだ。

「ト、トラックが来る！」

僕はやっと追いつこうとすると、トラックが今にも先生を轢こうとしているのが見えた。

「くっ、ここからだ間に合わない！ 先生！！」

叫んだが、先生は気づかないようだ。そして、よく見ると先生の背後にはあの死神がいる。

「操られているのか！ このままじゃ、先生が！」

僕は考え、ハッと、あの時のことを思い出した。

「……一か八かだ！ 正輝！」  
僕は正輝に向かって叫ぶ。

「先生の携帯を先生に向かって思いっきり投げつける！！」

「分かった！！」

正輝は落ちていた先生の携帯を拾い、先生に思い切り投げつける！

トラックはほんの数メートル　と、同時に向かってくる携帯を先生は

「じゃあああああああああ!!!!!!」

と叫びながら条件反射の手刀で割ってみせた。

「やっぱ化け物だわ、この先生」僕は関心する。

トラックは先生の目の前でピタッと止まった。気づけば死神もそこにはいない。

すると、先生もハツとしたように目が覚める。

「へ？　な、なに？　ここどこ？」

「ね、姉ちゃん！怪我ねえか!？」

トラックの運転手が出てくる。どうやら運転手は居眠り運転だったようだ。

「ア、アッキーモ!!!」正輝が飛びつこうとしたが、すぐに回し蹴りが決まった。

「さて、お前ら……これはどういうことだ」

樹と正輝とついでに運転手は道路で正座されていた。

とりあえず、秋本先生にはガス漏れでたまたま散歩で通った僕と正輝が臭いで気づき、先生を部屋から連れ出して病院に抱えようとしたところ、自転車に躓き、そのまま道路に放り投げてしまったという苦し紛れな言い訳をした。

「おめえら……そういうときは救急車を呼ぶんだ……」

と、ツッコミされたが、どうやら信じてくれたようだ。

しかし僕と正輝で拳骨1発お見舞いされた。

「ボコスカボコスカ」

あっ、運転手はタコ殴りにされている。

「だが、ありがとな。おかげで助かった」と先生は運手主の襟を持

ちながら笑顔で僕たちに言う。

「やっぱりアツキーモって美人だよな」正輝がニヤニヤして、僕に言った。

「今やっていることが無ければな……」僕はハアとためいきを吐いた。

その頃、姉は

「やっぱりこの携帯……」

姉は秋本先生の携帯の残骸を見た。すると、中から紙らしきものが。

「そ、そんなまさか！」

一方それを見ていた、すぐ近くの場所で

「ちっ、失敗しちまったか。結構イケると思ったのになあ」

身長高く、帽子をかぶった男がそれを陰で見ると言うように言った。

「私の死神入り護符で何の遊びのつもりだ？」

赤い服を着た男が少し怒り問う。

「いえいえ、ちょっとした余興ですよ。あいつらの力調べ。まあ、たいしたことないっていうのは分かりましたが」

帽子の男はクククツと笑う。

「まあいい。儀式の第一段階は済ませた。見ておれ、紅。真の鬼の力を得るのは私だということを」

先生を家まで送り、その帰り道

「うーん……」

正輝は何かを悩んでいるようだ。

「どうした正輝、浮かない顔して」

「いや、ちょっと無くし物してね。しかし、あんなでかいものが無くなるはずが……」

「そ、それってまさか……」

僕はあのダツ○ワイフのことが頭に浮かぶ。

「抱き枕だよ、抱き枕。親父からもらってさ。眠れないって言ったからお前も男だからなって、変な形した抱きまくらもらってよ。おかげであれ無しだと眠れないわ」

と、笑いながら言った。

「お前、抱き枕って……」まさか……知らないのか。

「ん？ どうした樹？」

「いや、なんでもない」

それを聞いた、僕と姉は共感した。

「……姉さん」

「……樹」

樹（姉）「汚れちまったな、僕（私）」

#### 4話 アツキーモの災難 後編（後書き）

さて本編の最大の敵が登場。

一体、姉は何を見たのかは次回で分かります。

と、どうやら正輝はまだ初心だったようです。

（修正完了しました）

## 5話 高校の日常

綾香は紅神社の社務所しゃむしょにいた。

「父さん、これはどういうこと？」

綾香は携帯の残骸あやかを紅宗治くれないに見せる。

「……………」

「樹にも聞いたと思うけど、これは私の親友が死神に襲われた時の携帯よ」

「ふむ……………」

それを聞いても平然とタバコを吸う宗治。

「もちろん、携帯を見ろっていうことじゃない。見てほしいのはこの中であつた護符」

綾香は携帯の中に入っていた紙　護符を取り出した。

「これに死神が封印されていたわ。封印なんて芸当はかなりの靈力が必要よ。ましてや死神なんて封印するとしたらもつとだわ。だけど、私が言いたいのはそれだけじゃない」

護符の裏面を見せると、紅と赤文字で書いてあつた。

「これ、紅家の護符じゃない……………」

秋本先生もガス中毒になつたが、驚異的な回復力で復活した。

それから普段と変わらなく今も授業をしている。

「一時はどうなるかと思つたぜ」

隣の正輝はやれやれといった表情だ。

「だけど、なんであんな携帯持ってしまったんだろうか」

僕は疑問に思うと、正輝はその言葉を待ってましたと言わんばかりの表情をした。

「実は先生、空き巣に入られたかもという話がちょっと前にあったらしい。ただ力ギだけ開いてて、特に現金とか預金通帳には目もくれず何も盗まれていなかったという話だ。おそらく、その時だろう」「それが携帯改造されて、死神呼び出し機能付き携帯にされてたって話か……」

「ドラ○もんもびつくりだぜ」  
確かに、ドラ○もんもその発想はないだろう。いや、奴ならやりかねないか。

と、話をしていると

「紅！ 内藤！ さつきからうるせえ！」

いつもの黒板消しではなく、ピンポイントにチョークを投げられヒツトしたのであった。

「目があああ、目がああああああ！」

正輝は目にヒツトしたようだ。南無……てか、おでこに当たったのに僕もまだジンジンする。

そんなこともあって昼休み、僕と正輝はいつも購買に昼食を買いに行く。

「あーあ、金がピンチだわー。バイトしようかなー」

購買に向かって歩いているおり、正輝はしゃべり出した。

「どうやら正輝はお小遣いが足りないようだ。いや、この前新作ゲーム買ってなかったか？」

「お前はいいよな樹。なんせ高額収入の職業があるから」

「別にそんなことは……あるか」

実は御被いは結構な額をもらっている。霊能者から回ってきた仕事はその霊能者がもらう報酬の60%を取り、裏情報を得て依頼をしてくるのは決まって金持ちばかりで依頼料も高い。

まあそれも命がけだからなのだが。

「そんなこと言うのは僕がおこれってことか？」

「さっすが、察しのいい樹様。そういうことでござえます」

「まったく……」

しばらくして途中で結衣と伊藤さんと廊下で会った。

見た所、誰か探していたようだが。

「あつ、ここにいた！ 樹！」

結衣が駆け寄ってくる。どうやら探していたのは僕のようだ。

「この前、お世話になったから美香と二人でお弁当を作ってきたのよ」

結衣は布で包まれた弁当箱を見せてきた。

「この前はありがとうございました、紅君」

と伊藤さんがお礼とおじぎをする。

「いやいや、同じ学年が行方不明って聞けば、心配にもなりますさ  
正輝がなにやら横から出てきた。」

「正輝、あんた何もしてないでしょ」それに結衣がツツコムが。

「俺は情報屋だぜ。そのことを樹に言わなければ今頃どうなっていたか」

いや、別に無くても、仕事の依頼としてきたわけだが。が、御被いのことは言えないのでそういうことにしておこう。正輝のことだ、そうと分かっていて言ってるのもあるし。

「と、とりあえず。はい、弁当！」結衣が弁当を僕に差し出す。

俺は？俺は？という顔を正輝はしたが、

「じゃあ、内藤君は私の食べてください」と伊藤さんのが出された。

「ひゃっほおーい」ああ、女の子から初めてのお弁当かこいつ。  
「とりあえず、屋上でみんなと食べないか」  
僕が提案すると全員の賛成の声を聞き、屋上へと向かった。

屋上に着いた僕たちはまっさきに正輝の口が開いた。

「いやーいい風だねー、こういうときにお弁当食べるのは最高だねえー」

相当、正輝はうれしいみたいだな。

「わざわざありがとな。弁当なんて作ってくれて」

僕が改めて、伊藤さんにお礼をすると

「いえいえ、あの時、紅君は家まで送っていただきましたから」  
と伊藤さんはまたおじぎをする。

そういえば、伊藤さんの家はかなりの豪邸だった。言葉遣いからも察するにお嬢様なのだろうか。

「伊藤さんはかなりのお嬢様だね。何でもお父様が大会社の社長とか」

と、正輝が言う。なんでこいつは僕の考えていることが分かるんだ。  
「いえ……そんな」伊藤さんが顔が少し赤くなった。

と、その様子を結衣がジロジロと見てくる。

「どうした？ 結衣？」

「私もお弁当作ってきたんだけど？」

「だ、大丈夫なのか？ それ」

「ちょ、ひどいわー！。せっかく作ってきたのに」

「そうだぞ、樹。せっかく作ってきたんだ、食べないなら俺が食べる」

そう言っつて正輝は僕が結衣に渡された弁当に手を伸ばす。あ、卵焼き取られた。

それを食べた正輝は「う、うーん……」と、唸った。

しばらくすると「この卵焼きを作ったのは誰だ!!」と怒り出したではないか。

「いや、結衣だろ」冷静にツツコムと、正輝は落ち着いてちよつとがつくりしている。

「ビミヨ―な味付け？ おいしくもなく、まずくもなく……」

まあ、結衣の料理は昔からそういうもんだと僕は知っていたんだが……。

「二人してひどい。もう作ってやらん」結衣はプンスカ怒っていたが

「ごめんごめん、結衣ちゃん。俺ならいつでも受付中だから」正輝はフオローした。

「とりあえず、伊藤さんの作った弁当を味見させてくれ」僕は正輝の弁当から唐揚げをいただく

「うわ、なにこれ……プロの板前さんが作ったの？」

こんなおいしいからあげは食べたことがなかった。うちの母さんでもこんなものは作れない。

「そんな、私なんてまだまだですよ」伊藤さんが謙遜するのを見て、正輝もすぐ食べる。

「うう……ううう……」相当おいしかったのか、泣き出した。

「と、とりあえず、半分づつ食べるか」僕は正輝に言う。「うん」とうなづいた。

そりゃ、食べることに泣かれてるところがちが適わない。

しばらく屋上でみんなと昼食を食べていると

「いいわねー、青春ねえー」と、聞き覚えのある声が聞こえた。

「また姉さんか。今、正輝以外の奴がいるからあんまり話かけるなよ」僕は小声で言った。

相変わらず僕の目の前にプカプカ浮いているが、それにはさすが慣

れてきた。

「リアクション薄いわねー。お弁当かー私もよく作ったなあ」  
「……………」

僕はそれに関しては黙っている

「あ、作る相手なんていたのか？ っていう顔してる」  
バレたか。

「というか、何で姉さんがここにいるんだよ。学校には来るなって  
言っただろ」

「これは父さん命令よ。これからは私が学校でも憑くのでよろしく」  
それを聞いて大声になってしまった。

「なっ！ おい、どうということだよ！」

みんなが一瞬ビクつとなって僕を見る。

「ちょ、どうしたの樹？」 結衣が心配そうに聞いてくる。

「い、いや。なんでもない」

正輝は分かったようで、特になにも言わなかった。

ん？伊藤さんが何か見ている。僕の目の前のほう。

「い、伊藤さん？ どうしたの？」

「え？ いや、なんでもありませんよ、紅君」まさか…………と、正輝  
が急に

「紅君つておかしいぜ、こいつは樹でいいよ美香ちゃん。俺も正輝  
でいいからさ」

「えっ…………では、樹君と正輝君で」また顔を赤らめてる。

「はいはい、あんまりいじらないでね、美香は結構はずかしがりだ  
から」

結衣は正輝がちょっとかいするのを止めに入る。

そういえば、伊藤さんはこっくりさんで隣のクラスの気になる人が

いるからから聞いたんだよな。

「まさかな……」「うん、これ以上正輝が思い上がらない為にも話さないでおこう。」

と、気づくと姉さんは消えていた。一体どこにいったんだ？

「あ、もうすぐ授業のチャイムが鳴る」結衣が気づき、弁当を片付け始める。

「弁当ありがとう。結衣はともかく伊藤さんののは美味しかったよ」「ともかくは余計よ樹」結衣が少し怒ってる。

それから別れようとしたが「あ、あの……」と一人で伊藤さんが話しかけてきた。

「そ、その私のごとも美香って呼んで下さい」「ん？……いや、まさかな。」

「わかった。それじゃ……んと、美香さんで」「はい！」とうれしそうに返事をする。

一緒にいた正輝はそれを見て「か、かわええわ」と惚れていた。

教室に戻り、席に座ると

「いや、危なかった」と姉さんが話しかけてきた。

「突然いなくなつて、どうしたんだよ」

僕はまたもや小声で姉さんと話す。

「いや、あの伊藤美香ちゃん？　って子。少し靈感あるわね」

あの時、僕の目の前を見ていたのはそれだったか。

「やっぱり、見えてたのか」

「すぐに隠れたからよかったけど、あの子の前ではちょっと消えな  
いとダメね」

さきほどいなくなったのはそのためだろう。靈感がある一般人が幽

霊をいきなり見たらパニックになる。

「で、親父はなんで僕に憑いてると命令を？」

それより親父がなぜ姉にそんな命令をしたのか気になった。

「あんた、今朝テレビのニュース見なかった？ 人気の霊媒師が殺されるっていうの」

そういえば、そんなのやってた気がする。

実はあの人はちょっと前からうちに依頼を頼んでくる人でもあった。それを見事自分が解決しましたーとしていたのは気に入らなかつたが。

「で、僕と何の関係が？」そんな人が殺されるニュースなんて珍しくもない。

「死因が原因不明の死。調査の結果、溺死よ？ しかも部屋の中で濡れた所も無く、捜査は難航」

いまいち、話がよく飲み込めない。だが、その死因は間違いなく幽霊か妖怪だ。

「で、そのあとに父さんの元に差出人不明の手紙が届いた。内容はお前の息子も直になる、と」

「つまり……僕は殺されるかもって？」

「そういうこと。だから、何かあったら私が助けるからよろしく」そのことを聞いて、何か……思い当たる。

「……話から聞くに何か霊能者ばかりだな」

「うん」

「なあ、その靈感あれば誰でもいいってことないか、それ」うーんと姉は考えた。

「いや、そんなことは。でも、もしかしたら靈感は少しでもよくて私たちと縁があるものなら誰でもってことはあるかも。あの霊媒師もそんなに靈感なかつたけど、神社と縁があつたもの」

また嫌な予感がする……。

「あのさ、さっきの美香さんはやばくない？」

「あっ……」

とりあえず、御被い仕事の始動である。

## 5話 高校の日常（後書き）

美香は俺の嫁。

ありきたりだが、それがいい。

早めの5話です。

## 6話 ドキドキ？

「で、美香ちゃんが狙われるかもしれないってことか」

姉のその話をしばらくしたあ、と隣にいる紅神社の事情を知っている正輝にも、現在の件を話しておいた。

「でも、それは考えすぎなんじゃないのか？ だって靈感なんて持っている奴は数え切れないだろ？」

正輝のその質問には僕も思っていた。

「殺された人気霊能者は私たちの神社と縁深かったわ。樹が狙われているってことはその縁が深いものも殺そうとするはずよ。特に靈感持ちはね」

「しかし、まだ確証がないな」

「これは私の予想なんだけど、この前の沙織もといアッキーモの死神のこと。ちよつと調べてただけど、どこから見られていたという痕跡があったわ。私から見ると今回の件はそいつらと同じ奴なんじゃないかしら」

「そういえば、タイミングがいい時に先生の携帯が着信したんだよな。見られていたという件は確かにあるのかも。でも、先生がなんで狙われる？」

「たぶん、私たちの力量を測ったんだと思う。ただそれで恐るに足りぬということで行ってきたのでしょうね」

「なるほど……それで、まずは手短に親父の知り合いより僕の友人を殺していったほうが効率が良いと判断したわけか」

「樹、これは相当、紅家を恨んでいる奴よ。気をつけなさい」

と、話が終わろうとすると、正輝は。

「あの……二人だけで納得しないでくれるか」

そうか、こいつは姉さんの話が聞こえないんだった。とりあえず、僕はまとめて正輝に話す。

「つまり、紅家を恨んでいる奴がお前のお父様の友人を殺そうと思っただが、路線変更でお前の友人を殺し

始めると。確かに親父さん相手にしたくないのは分かるが、因縁なヤローだな。しかし……」

正輝は思いつめたが、僕もそれを思い出していた。

「ああ、昔あった、あの事とよく似ているよ」

だがあの事は思い出したくはない

「靈感を持った友人は今のところ伊藤美香さんだけだ。たぶん、早く手を打たないと」

しかし、手を打つにしても、彼女といつでも一緒というわけでもない。けないし。

「相手はこの前の力量を測り、相当私たちのことなめてるはずよ。なら真っ向から挑戦すれば乗ってくるはず」

姉が言うのをいちいち正輝に話すと「そうか！」と理解したようだ。

「んじゃ、今日は美香ちゃんの家におじゃましちゃえばいいんじゃないか！」

いや、待て。お前は別のことが目的に見える。

「そうね。それが一番安全だし、手っ取り早いわ」姉もノリ気だ……。

「それじゃ、早速言って来る！」

「ちよつと、待て」僕はすかさず止めた。

「な、なんだよ樹」

「お前が行くと、余計な結衣オブリジョンが付きそうだから、僕が行く」ということで、僕は隣の教室へと出た。

「やっぱり結構ひどいところありますよね、樹」見ても聞こえもしない姉に正輝は言う。

「ほんと……誰に似たのやら」姉はあきらめ顔だった。

隣の教室を見ると、どうやら美香さんは一人にいる。

「よし、結衣がいない今のうちなら」

僕はすかさず美香さんの近づく。もちろん周りに結衣がいないかを確認して。

「や、やあ美香さん」

どうも結衣以外の女子と会話するのは慣れてない。

「あ、樹君。結衣ちゃんなら先生に呼ばれて職員室だよ？」

「いや、結衣と話に来たんじゃないんだ」

「え、私と話しにきたの？」

「ああ、うん。実はそうなんだ、ちょっと聞きたいことがあって」

何か、何か泊まりにいけそうな口実は……あつ、料理。

「あのお弁当がすごい美味しかったから、料理を教えてほしくてさ。結衣とか正輝をびつくりさせてあげたいじゃないか。ということで、放課後に教えに行ってもいいかな？」

ちよつと、強引だろうか……だがこれぐらいしか彼女の家に行く口実が。

「え、そんな料理だなんて。でも、基本ぐらいなら私も教えてあげれるから、私でよければ教えてあげるよ」と笑顔でOKされた。

その笑顔にちよつと心が痛いです。

「じゃあ、結衣ちゃんや正輝にも秘密にしないとね」  
あ……そういうことか。

「じゃあ、放課後に」  
ということで約束を取り付けた。

自分の教室に戻り、正輝にそのことを話すと。

「樹……貴様！ 裏切つたな！！」と正輝は手が付けられないほど怒ってた。

だが、この前の死神の件はなんとなく活躍してたが、今回は正輝にはお休みしていただこう。

「うう……俺も、俺も美香ちゃんに二人つきりでお料理習いたい」  
やっぱり、こいつは……目的が違かったか。

「とりあえず、あの子にバレると私は厄介だから、緊急時まで隠れてるわあ」と姉は消えていった。

放課後

結衣や正輝にはバレないように、こっそり非常階段から出れる学校の裏口から帰った。

「いいの？ ここから帰って？ 裏口なんて、非常事態のときぐらいしか」

「大丈夫、大丈夫。よく正輝が、授業抜けるときに使ってたんだ」  
「くす、正輝君って結構ワルなんですネ」

ワル？っていうか、あいつはなまけただけなんだろうが。

「そういえば、今日は何作りますか？材料とか買って行かないとあ、そうか。いちおう料理を教えてもらうことになっているんだっ  
た。」

「え、ええと。肉じゃが……とか？」

「肉じゃがですか……。とすると、牛肉、じゃが芋、ニンジン、たまねぎなどを買いませんかとね」

「あ、お金は僕が出すよ」

「いえいえ、ここは私が払いますよ。今日のご飯にしようと思いま  
すし」

ん？それって……。

「美香さん、自炊なの！？ お嬢様なのに？」

「そんな、お嬢様なんて。ただお父さんが嫁入り修行だということ  
で、私が作るようになってるんです」

……ただ娘の手作り料理が食いたいただけなんじゃないか、あのお父  
さん（一話参照）

僕と美香さんは近所のスーパーに着き、先ほどの肉じゃがの材料を  
買うことにした。

そういえば、女の子と制服でスーパーに入るなんて初めてだ。

結衣とも、こんなことはなかったなあ。

ん………そういや、これデートになるのか？

特に意識はしてなかったが、気づくとちよつと頬が赤らむ。

「あの………大丈夫です？ 顔赤いですけど」

「い、いやいや大丈夫大丈夫！ ちよつと暑いなと思ってさ！」

平常心、平常心だ、樹。

とりあえず、材料は買い、お金は結局割りカンという形にした。

「なんか良い感じじゃない？」姉の声がふつと聞こえた。うるさい。

さて、彼女の家に着くとあいかわらずの豪邸だ。

「荷物持ってくださいって、ありがとうございます」

「いやいや、教えてもらうのに対したらこのくらい当然だよ」

「樹君って見かけにも寄らず力あるんですね」

そりゃ、小さい頃から鍛えられていた。でないと、命を落とすことは明白だからだ。

「送ってくださった時も結衣ちゃんをここまで運びながらですもん、びっくりしました」

いや、結衣は僕でも重かったんだけどな。

「おじゃましますー」

美香さんの家に入ると、玄関から上にシャンデリアや、豪華という装飾だった。

「あ、キッチンはこちらです」

僕は美香さんに案内されると、これまた厨房みたいな広さのキッチン。

「パーティの時に大人数の食事を作る為、大きいんですよ」  
パーティって……なにその貴族。

「じゃあ、肉じゃがを作りましょうか」  
こんなところで肉じゃが作っているのかはいささか疑問だが、作り方を学んだ。

しばらく肉じゃがを作り……

「で、ここで落し蓋をして」

作り方は普通と変わらないと思う。だが、作り方がとても丁寧なの

だ。美味しさの秘密はこれか。

「あんたも目的忘れてない？」と、姉の声がまた聞こえる。凶星なので、ちよつと息を詰まらせた。すると「できましたー」と美香さんが言った。肉じゃがを作れたようだ。

「ついですから、うちで晩御飯にしませんか？ 今日、父は仕事でいませので」

……お嬢さん、そういう言葉はもっと大人になってから取っておきな。

だが断る理由もないし、目的は別にある。素直に了承しよう。しばらく、待っていてと言われたが、それもいやなのでずっと手伝つことにした。

「すみません、お客様がこんなことを」

僕は野菜を切りながら「なに、これも教えてもらっている内だよ」と他の料理を作っていた。

味噌汁と、美香さんの家にあつたほうれん草を使ったおひたしをテーブルに置く。

「樹君つて、結構手先が器用なんですね。お料理上手ですよ」

と、美香さんが褒めてくれる。まあ、手先が器用なのも訓練の賜物なのだが……。

そして、肉じゃがの味を確かめてみた。

「どう、ですか？」美香さんはおそろおそろ聞くが、答えは分かっている。

「めちゃくちゃ旨い。やっぱ美香先生の腕はいいなー」

「これは樹君が作ったんですよ。私の腕じゃないです」

と、お互い謙遜しあってた。

「食べたい・・・」という声が聞こえるが無視無視。

晩御飯も食べて、さて……どうしてよう、果たして今日本当に来るのだろうか。

「ただの予測の範囲だったからなあ」

美香さんを狙う確証もまだない。これは一種の賭けだ。しかし、何も無ければただそれでいい。

ふと美香さんがソファーに座ってた僕に尋ねてくる。

「あ、あの樹君？ お風呂に入ってきてもいいですか？」

と、こんなことを言い出した。

「え、ああ。どうぞどうぞ」

「じゃあ、失礼して」

なんか僕は思いつきり泊まる雰囲気じゃないか？

「いや、ちよつと待てよ……。なんかいろいろ間違ってる気がしてきた。」

僕は葛藤していた。このまま帰るべきなんじゃないか、いや男として残るべきか、いや、さすがに高校1年でそれは。すると、突然。

「キヤアアアー！！！」という悲鳴が聞こえた。

「美香さん！？」僕はすかさず、お風呂場へと向かう。

「大丈夫ですか、美香さん！」と、見たのは、バスタオル1枚の美香さんだった。

「ちよ、何か服着てください！ どうしたんですか！？」

「なんか、浴槽に変なのが！」変なの？

僕はよく見てみると浴槽に見たことあるシルエットが見えた。

「姉さん……何でお風呂に入ってるんですか？」

「あら樹、そんな歳になっても私と入りたかったの？」

「冗談はさておき、なぜいきなりこんなことを？ 美香さんにあまり見られたくはなかったんじゃない？」

「うーん、実はねえ。ちょっと厄介なものに憑かれてるわよ、その子」

と、後ろにいたはずの美香さんがいない。

「あ、逃げた。追うわよ樹」

「な、どういふことだよ姉さん」

憑かれてる？美香さんが？一体全体に何に。

美香さんが外に出て追いついたのは家のすぐ前にあつた公園だ。辺りもう暗くなって人通りもない。

「いや、美香さん？ バスタオル1枚は寒いと思いますよ」

逃げたばかりか、先ほどの格好だ……女子がその格好はいかんだろ。

「もう少しで殺せると思うたのに……惜しい、この体」

美香さんらしからぬ発言をした。

「まさか憑依霊か？」

「憑依霊とは字の如く、霊が憑いて行動や性格まで乗っ取られてしまふ。まあ私らはそれを簡単に出させることができるのだが」

いつもの親父の説明が聞こえた。

てか、なんでいつも頭に伝わってくるんだ。

憑依霊と聞いた美香さんと思われる者は首を横に振った

「霊？ そんなものではない」

と、モワモワと美香さんの体から煙のようなものが出てきた。そのモワモワが何かに変形している。これは、見たことある。

「あちゃー、なんでこんなところに」  
それを見ていた姉も気づいたようだ。

肌は緑色、手に水かき、そして頭に・・・皿。

「か、河童……？」  
美香さんから出てきたのは河童だった。

「河童とは河などに住む妖怪だ。元々人間とは友好関係だったのだが、襲ってくる河童もたまにいる。」

元々河の守り神が変化した姿であると言われている」

また親父の解説が、ご苦労なことだ……。

「しかし、何で河童がこんなところ。」

僕は疑問をぶつけると

「人間に憑依をする術は教えてもろうてな、その条件に貴様を殺せというのだった。暇つぶしになると思ってた次第よ」

「つまり、僕は河童相手にドキドキを……」

超ショックと、姉を見るとクスクス笑ってる。うぜえ。

「とりあえず樹。」

唐突に姉が話しかけてきた。

「長くなっただけ次回よ！」

「え、えええええ」

というわけで河童との戦闘は次回にご期待。

## 6話 ドキドキ？（後書き）

河童との戦闘は次回です。

と、次回でいよいよあの方の勇姿が見れます。

一体誰だかご期待ください。

## 7話 水にはご用心

「で、河童と戦闘するわけだが」  
河童はジリジリと僕を見ている。

僕はお札を構えながら状況を確認することにした。

憑かれていた美香さんは気絶している。

姉はいつもの位置、つまり僕の右肩の方にいる。

「樹、河童の戦闘能力は異常よ。でも、ここには水がないから大丈夫だと思うけど」

姉からの助言を受けるがここは公園だ、水なんてものは……。姉の言葉を聞いた河童は笑った。

「カップパパ、何を言うておる、水ならここにたくさんあるだろう」  
「なに？」と僕は返した瞬間。  
「バーン！！！」

公園にある水飲み場の蛇口が壊れた。

「な、壊れていた！？」

おそらく、ここに来る前に壊わされていただろう。

「なるほど、つまり私たちはおびき出されたってことね」  
「どうやらそのようだ。おそらく僕を狙っている奴だろう。」

「いい樹？　ここは私がやるわ。あんたは離れてお札で援護しなさい」

「分かった、姉さん！」

いざ、姉が戦闘をしかけようとした時。

どこからともなく、僕のではない別のお札が飛んできたのだ。

「えっ」の声の瞬間、姉にお札が貼り付けられた。

「ちょ、動かない」

「こ、これは！ 陣の術！？」

紅家の九字護身法がなぜこんなところに？

「ふははは、戦いとは1対1でするものよう。紅樹！ 貴様と正々堂々と戦おうではないか」

「く、やるしかないか」

公園は壊された水飲み場で水浸しになっていた。

「いいのう、これでこそワシも本気で戦えるというものよ」

河童は水をピチャピチャしている。どうやら機嫌が良いらしい。

「河童。どうして僕を殺そうとする、昔河童は人間たちと仲良かったと聞く、暇つぶしだからって人間を殺すってものじゃないだろう？」

僕はできれば戦いたくないのでなんとか説得できないかと試みた。

「ここは昔も河じゃった。その時は人間と仲良うし、ワシの仲間たちもたくさんおった。しかし、人間はワシらを騙し、河を無くした。その時にワシらの仲間は別れ、死んでいったものもおる」

「その仇を今になって取ろうと思ったのか！」

「否、ワシはこれ以上人間と関わりたくないと思っていた。だが、奴が現れた。これは機会だと教えてもろうた。」

「奴……？」 僕を狙ってくる奴か？

「話をし過ぎたようだ。さて、始めるか」

くっ、もう少し説得したかったけど。

「しょうがない。紅の名の下に貴様を倒す！」

河童は手を交互に泳ぐような動作をしている。どうやら水を操っているようだ。

「ふはは、ワシを倒すとは笑止！」

そっぴいながら、水は竜の形へと変わった。確かに今までの妖怪とは妖気が桁違いだ。

「くらしい！」竜が僕に体当たりをしようとしたが、僕はすぐに避ける。

「くっ、こっちの番だ」お札を取り出し、竜へと投げつける。

「臨！」唱えると、お札は頑丈になり竜を切り裂いた！

「ほう、ワシの水竜を切るとは！しかし！」切り裂いた部分はすぐに水を吸い治っていた。

「ほれほれ！」

ひたすら、水竜を僕にぶつけようとしてくる。

「避けきれない！」僕はまたお札を数枚出し、前に広げた。

「列！」前に広げた札は列になり水をなんとかはじき返えす！

「ワシの水力を耐えるとは！こうでなくてはおもしろくない！」

「次は河童本体を狙わなくては」と手元のお札の枚数を確認すると3枚しかない。

「3枚のお札ってか……シヤレにならん」

僕は1枚目のお札を使った。

「闘！」

僕に貼り付けると、力がみなぎって来る。

「強化した所で、ワシには勝てんぞ！」  
水竜は激流を噴く。

「者！」僕はすかさず2枚目のお札を使い唱えた。

「手ごたえありい！！！」

激流は樹を飲み込んだ……かに見えた。

「隙あり！！！」

「なぬ！？」僕は河童に後ろに回りこみ一撃で仕留めようとした。

「臨！」僕は最後のお札を持ち、臨を唱え切り裂いた！

「ぐああああああ」

河童の右腕を1本切り裂くことができた。

河童は苦しみながら問う。

「ぐ、貴様ああああ。確かにあのとき手ごたえがあ」

あの時、水竜がしてきた激流を受けたのは僕の分身だ。

2枚目で唱えた「者」は分身の術を作り出すことができる。

といつても動かないし、その時の姿をそのまま投影するといったほうが正しい。

右手を取られてから、水竜はいなくなっていた。

腕を取られてしまえば水は操れなくなるようである。

「河童！　ここでおとなしく降参しろ！　もう決着は着いた」  
降参を河童に促すが

「カッパパパ、そうはいかんのよ！」

どうやら河童は最後まで決着を着けたらしい。

そんな時、どこからともなくまた札が飛んできた。

「やはりか……。貴様、命がほしくば逃げろ」

お札は河童に張り付くと河童は苦しみもがき始めた。

「グ、グギヤアアアアア！」

そして、目が紅くなっていく。

「あ、あれは……。鬼の眼！？ 樹、逃げなさい」

縛られていた姉は叫ぶ。

「逃げるっっていたって、このままだと美香さんが危ないだろ」

そういえば美香さん、バスタオル1枚で倒れている。

そして公園は水浸しだ。水でタオルが透けるんじゃないか。

「樹！ 変なこと考えている場合じゃないでしょ！」

いかん、河童は目の前にいるのだった。

「グギヤアアアアア！」

隻腕の河童は僕を切りつけようとしたが、なんとか避けたが。

「いてえっ！」 かすただけでかなりの傷跡ができていた。

「なんて力だ」

そして、戦闘しようにも手持ちのお札はなかった。

「おいおい、また絶対絶命かよ……」

とりあえず間合いを離れ、河童の出方を見た。

すると、2本ないと水が操れないはずが、1本で水を操っているではないか。

しかも数が。

「2匹！？」

そのまま河童は竜を僕にぶつけてきた。

1匹目はなんとか避けるも、その後の2匹目に捕まってしまった！

「くう、苦しいー！」

水竜の水が、僕の口に直接入り込んでくる。  
たぶん、これで人気霊媒師は命を無くしたのであろう。

だんだんと意識が遠のいていく。

「姉さん、正輝、結衣、美香さん、母さん、親父……」  
いろいろな人のことが走馬灯として出てくる。

「まったく、まだまだだな。お前は」

気づくと僕は水竜から開放され、倒れていた。

目の前に見覚えのある背中が見える。

間違いない、こいつは。

「……親父、もうちょっと早く来てくれよ」

「すまん。タバコを切らしてたから買ってから行くこと思っていた」  
と、親父はタバコを吸い始めた。

「父さん！」と姉も叫ぶ。

「綾香、お前が付いていながらどういうことだ」

親父は陣で動けない綾香に怒り始めた。

「グギャアアアアア！」

だが、そんなことをしている場合ではない。

「説教もあとにしておくか。すまん河童、恨みは無いが紅の名の下に貴様を成敗する！」

親父はお札を左右の手に3枚つつ出すと、河童に投げつける。

「臨りん！」刃と化した6枚の札は全て河童に襲った。

「ギャアアアアア！」2体の水竜は河童をかばおうとするが

「水ごとき、無駄だ」

お札は水竜を貫通し、河童を微塵に切り裂いた。

「一撃かよ……」

僕はさっきやってきたことを無駄と思わせるような感覚に囚われた。

それに臨のお札を扱うには僕の力ではせいぜい1枚か2枚しか使うことができない。

それを6枚を一気に使うなど反則だ。

「すまん河童。そうなってしまつてしまうと助けることはできない」

親父は切り裂いた頭だけの欠片になつた河童に言った。

「よい、鬼なるくらいなら死んだほうがマシじゃ。紅の者よ、あの世で会おう」

「そうか……その時はあの世の酒をご馳走してくれ」

河童の残骸はそのまま水になり、地面へと消えていった。

「さて……臨！」

父は1枚の臨のお札を公園の木に投げる。

臨のお札は木に突き刺さつたが何かの陰がさつと消えた。

すると、その直後に姉に貼つてあつた陣の札は解けたではないか。

「ち、逃がしたか。おい、樹立てるか」

親父は倒れていた僕に手を差し伸べる。

「ああ、なんとか」

その手を取つて、なんとか立つた。

「悪いが、あの倒れている娘のことは任した」

「分かつてる。それは僕の役目だろ」

僕はとつさに美香さんのところに向かうが。

その間に姉が止めてきた。

「樹、あんたの学生服貸しなさい。さっきどんな状態か妄想してたでしょ」

「惜しかったな樹」

親父は惜しそうに言った。

いや、俺は別に……。

「さて、俺は水道を直しておくかな……」

親父は水飲み場の蛇口を直しに行った。

「あぶねえ、あぶねえ。危うく刺されるところだったぜ」

背の高い帽子を被った男は汗を袖で拭く。

「失敗したな……羅刹。私の貴重な鬼の札まで持ち出して」

赤い服を着た男はまたもや怒っていた。

「いやいや、あの男が来るのは想定外ですさ。しかし、あの小僧もなかなかやるもので」

「樹か……いつの間にあんな子ができたのか知らんが」

「旦那、次はどしましょうか」

「しばらくは様子を見る」

「え、いいんですかい。あの小僧、このままだともつと厄介になるんじゃ」

「羅刹、貴様は私の言うことを聞いておればいい。余計な事はするな」

「へいへい、旦那の意のままに」

僕は美香さんを背負って家に着いた。

「さて……濡れてるな」

そりゃ水道の水がを被ったのだ、かなりビシヨ濡れだ。

「ちよつとこのままじゃ、風邪引きそうね。私がお風呂に入れてあげるから」

と、姉さんに美香さんを渡す。

「あ、絶対のぞかないことね？」

んなことは分かっている。

(美香視点)

「あれ……私、どうしたんだろっ」

美香は気づくと、ベットに寝ていた。

「そ、そっいえば樹君は」

自分の部屋をドアを開けて、リビングに出る。  
すると

「あ、樹の作った肉じゃが食べさせてよ！」

「だめだって、全部食べちゃったから」

「じゃあもう一回作ってー」

美香は愕然とした。

「え、あれはさっきの浴槽にいた幽霊？ 何、樹君と知り合い？」

すると「あっ……」 幽霊と目が合った。

「にこっ」 微笑んだ！？

幽霊はそのまま樹君に叫ぶ。

「樹ー、バレちゃったー」

「えっ……って、美香さん!？」

僕はバレてしまった美香さんに全ての事情を話した。

「じゃ、じゃあその幽霊はお姉さんで、この前の行方不明事件のことは」

「うん……あれは君のお父さんの依頼で」

「今回の事件は樹君のせいで私が狙われたってこと？」

「そういうことになる……」

「そう……」

美香さんは下を向いてた。そりゃ、僕のせいで命を狙われてしまったのだ。

「樹君。私は今怒ってます」

「分かってる、君にはもう姿は見せないよ」

「そういうことで怒ってるんじゃないです。なんでもっと早く言うてくれないんですか」

「えっ？」

以外な答えに予想外だった。

「だって、正輝君もこのこと知っているんでしょう。私たち友達じゃないんですか？」

「だ、だけど、君は！」

「大丈夫です。それにあなたが守ってくれましたから」

「僕はそんな強い人間じゃない。今回も親父が助けてくれたからだ」

「それでも大丈夫です」

「そうか。でも、結衣にはこのことはまだ……あいつには関わってほしくない」

「分かりました……。その時が来るまで私からも話しません」

姉はそれを見守るように離れて見ていた。

「いい友達を持ったわね樹」

その頃、親父は姉に貼られた札と河童に貼られた札を捨てた。

「この護符は……やはりお前なのか、誠治<sup>せいじ</sup>」

## 7話 水にはご用心（後書き）

親父・・・強すぎだろ。

また結衣ちゃんハブってます樹君。

さて次回からは普通に御被い仕事をしていきます。

## 8話 直接依頼

「……樹、許さん!」

学校の朝、早速昨日のことを正輝に話すと、急に怒り出した。

「た、確かに彼女を巻き込んでしまったのは反省してるよ!」  
「そうじゃない!! 俺はそっちで怒っているんじゃない!」

なんだ、一体何に怒っているんだ。

「俺も……俺も、美香ちゃんを背負って上げたかった!」  
あーあ、そういえばこいつはこんな奴だった。

「うつ・うつうつ。」  
しまいには泣き出したぞこいつ。

「お前がそんなことをやっている間にポケモンのLv上げにしたり。なんか話聞くと結衣ちゃんまでおんぶしたって言うし。何なんだよ、この差は」  
いや、結衣重いぞ?」

「で、とりあえず結衣ちゃんにはまだ話さないんだな。」

「切り替え早いな!」

正輝は平常心に戻っている。

「ああ、過去のこともあるからな。話したくないだろ」

「おまえなー、そんな過去のこと執着してると読者の人の好奇心がマツハなんだが」

読者って何だよ……。あとその言葉遣い知らない人いるからやめろ。

「とりあえず、あのことは思い出したくないし、結衣は巻き込みた

くない」

「おやおや、好きな子に危険な身にあってほしくないってか？」

「ドカンッ」僕は正輝の頭を殴った。

「いてえな、たく冗談なのに。」

「冗談でも言うな。僕は……結衣を「好き」になっちゃいけない。それがあいつとの約束だ」

「そろそろ昔の罪を許してやったらどうだ？」

正輝は真剣に言う。

「整理が付いたら考えてみる。今はまだな」

と、ガラガラと教室に秋本先生が入ってきた。

「おおーアツキーモ！」

正輝……それを言うと……ほら、また黒板消しが。

昼休み

「……ほんと、ヘタレね」

いきなり目の前に出てきてヘタレ発言かよ、この姉は。

「姉さん、また学校まで付いて来て、一体何のようです」

「なぬ！？ またお姉さまがいるのか！」

正輝、しばらくお前はスルーする。

「言ったでしょ。私はあなたのボディガード。昨日の件で父さんに散々説教くらうわ。眠いわで」

「寝てていいです。てか姉さん、昨日役に立ってなかったでしょう」

「あれは想定外よ！ まさか陣のお札が飛んでくるなんて」

「それなんだよ。どうして陣のお札が飛んできたんだ？」

姉は「しまった」という顔をしている。まあ、いずれ問い詰める予定だったけど手間が省けた。

「あれは紅家独自の九字護身法の呪文だ。あれを使える人間は僕たちの血筋しか」

「そうね……でも樹、それを知るにはまだ早いわ。時期が来たら教える」

いつになく姉の真剣な表情を見る。

「分かったよ。ただその時期が来たら教えてください。」  
「ええ」と姉はうなづいた。

「あつ」と教室のドアのほうで声が聞こえた。

「美香さん」

「おー愛しの美香ちゃん」

美香さんが教室のドアに立って僕たちを見ていた。

「どうしたの美香さん。もしかしてまた何かあった？」

僕は美香さんに駆け寄る。

「いえ、ただ昨日のお礼が」

と、美香さんは布に包んだ何かを出した。

「またお弁当作ってきたんです。一緒に食べませんか？」

「俺は俺は」というまなざしの正輝が見てきたが。

美香さんは気づいて「ごめんなさい。一人分しか作ってなくて」と言った。

その言葉に正輝は白く燃え尽きてた。

「燃えたぜ……真っ白にな」

とりあえず、あまり邪魔が入らない屋上に二人で向かう。

「そういえば、結衣たちの方は？」

「結衣ちゃんには少し用事ができたって抜けてきました」  
「いや、なんだ。とりあえず、お礼は分かるが正輝がいてもいいと思  
うんだが。」

「あの樹君。実は今日お礼だけの話じゃなくて」

「ま、まさか……この様子だと。」

「実は私、樹君に……」  
「く、来るぞ。」

「お仕事を頼みたいんです！」

「はい！……え？」

「まあ、そんなことだろうと思った。」

「とりあえず仕事って、御被いのことかな」

「僕は詳しく仕事内容を聞くことにした。」

「そうです。実は父の会社で最近夜な夜な女性の泣き声が聞こえて  
くるというのです」

「本当に泣いてたとかじゃ。結構そういう噂話とか聞いたこともあ  
るし」

「それが父も実際遭ったらしくて」

「なるほど、それで本物だったというわけか。」

「でも、そういうことならお父さんが直接うちの神社に来るんじゃないか？ 前も来てたし」

「それが、そのことを遭ったあとに父はその話をあまり触れたがら  
なくなっただんです」

「何かうちに頼むと困ることがあったのかな……」  
それで娘が心配して直接というわけか。

「分かった。僕が直接その依頼を受けるよ」

「ありがとう！ 樹君。お金はそんなに払えませんが」

「いやいや、友達からそんなの受け取れないって」

僕は親父と違って金にガメつくくない。

「では、会社に向かう時には私も連れていってください。会社に入るには指紋スキャンのIDがいるんです」

「なんかすごいハイテクな会社だな……。一体何をやってる会社なの？」

「よく分かりませんが、銀行などのセキュリティを管理するシステムを作る会社だそうです」

……。え、入るのだけで難しくね？

しかし、一度引き受けてしまった以上、断るわけにもいかない……。

「とりあえず樹さん、一緒にがんばりましょう」

ああ、つまり金にガメツイ親父に頼むと銀行のセキュリティがバレて大変なことになると。

確かにあの男なら銀行強盗をやりかねない。

「親父さんが、うちに頼まないわけが分かったわ」

その頃、屋上の入り口からひっそり聞いている影があった。

「樹め……夜中に美香ちゃんと密会だと？美香ちゃんだけに密会……。シャレを言っている場合じゃないな。とりあえず、今度は付けさせてもらっぜ」

まあ、誰だかはすぐ分かる。

## 8話 直接依頼（後書き）

何かミッションインポッシブル的な空気がしてきました。

結構アイディアの文章化をするのに手間取ってたりしますので、いちいち1話ずつの文字数が違います。

すみませんが、ご了承くださいませ。

そのうちまとめたら、話を繋げてまた新たなに作っていくと思います。

## 9話 御被いインポッシブル

午後10時、夜も遅くなってきた、この時間に僕と美香さんは駅で待ち合わせをしていた。

「ていうか、これデートっぽいよな？」

周りをみると、おそらくデートだろうという待ち合わせの人たちがたくさんいる。

ちなみに僕もその中に入ってしまったているのだが。

「今の光景を姉が見たら、からかわれるんだろうなあ」

そういえば、こんなおもしろい話を飛び込んできそうな姉が昨日からいない。

「まさか……余計な空気を読んだのか？」

しかし、今まで一度もそんなことはないのだが。

と、考えているうちに「樹さんー」と声をかけられた。

「はい！」とすかさず返事をして、美香さんを見たが……。

「ど、どしたんですか？ じっと見て」

「い、いやあ」私服を着たかわいさに見とれてしまったとは言えない。

「ほんと、かわいいよな……」

と、僕の後ろから聞き覚えのある声が聞こえた……この声は間違いない。

「正輝……こんなところで何をやっているんだ？」

後ろにいたのは間違いない、正輝だった。って……。

「お前、なんて格好してるんだ！」

その姿は迷彩柄の服に、頭にはバンダナ、そして片方の目には眼帯。

「ふふふ、これはいわば潜入スタイル「スーキングミッション」って奴だよ」  
明らかにこれは……あのゲームだよな。  
「正輝さんのって、それが私服ですか？」  
あ、美香さん、あまり深く聞かないほうが……  
「いいセンス……だろ？」  
「バカはほつといて行こう。美香さん」  
僕は美香さんの手を引いて、会社へと向かった。

「あ、ここです」  
と、案内された場所は……立派なビルだった。  
「入り口から警備員がいるな……どうする？」  
正輝は何かの役になりきっているように美香さんに聞く。  
「あ、大丈夫ですよ。あの警備員さんなら」  
と、スタスタと美香さんは歩いていった。

「こんばんわ、川島さん。父に会いにきたのですが」  
と、警備員はあわててあいさつをする。  
「こ、これは！ 伊藤社長のお嬢さん！ はい、どうぞお通りくださいー！」  
「あの、お友達も一緒にいいですか？」  
警備員はそれは……という顔をしたが、美香さんがお願いというまなざしを耐えられなかった。  
「わ、分かりました。一緒に通りください」  
警備員の意味ないだろ……。  
僕は思うが口に出さないようにしよう。  
「さあ、樹君。行きましよう」  
と案内されて、僕と正輝は向かったが……。  
「あっ、君はだめ！」と正輝は警備員に止められた。  
「ど、どうしてー!？」

いや、どうしてってそんな格好の奴を入れるのがおかしいだろ……。  
「すみません、正輝さんはここで待っていてください」  
と、美香さんは笑顔で言った。

「意外と、美香さんって怖いね……」

「なんのことですかー？」

いや、自覚がないならいいや。

「あ、エレベーターのボタンが指紋スキャンなので私が押します  
と、ボタンを押すと動いた。

「これは僕が押しても反応がないってことか……」

「ええ、部外者が押した時点での警備員が飛んできますよ」  
たいしたセキュリティだ……。

エレベーターに乗る時、問題の場所はどこかを聞く。

「システム管理室って所ですよ。35階ですね」

……一番、入るの困難な場所じゃないかそれ。

システム管理室に到達するが、誰も人がいないようだ。

「ここは夜は人がいないんです。というのは高性能なコンピュータ  
ーで済ませてしまふみたいですよ」

「なるほどな……で、問題の場所は……」

奥に行くと、デカイコンピュータと頑丈な扉があった。

「あの……もしかしてだよ。この頑丈な扉の奥が……？」

「女の人の泣き声が聞こえる場所です……」

「さてと、開こうにも、どうしたものか」

うん、だいたいこういうときに出てくるんだ。パターンはだいたい  
つかめてきたぞ。

「姉さん、いるのは分かっています」

「あちゃー、分かったか」

「やっぱり、目の前にプカプカ浮いていた。」

「あ、樹君のお姉さん！ 先日はいろいろお世話になりました」と、美香さんは姉さんにお辞儀する。

「これはこれにご丁寧にどうも」姉もお辞儀換えした

「で、姉さん。ここにきたのは何のよう？」

「いやだなー、問題のその子を連れてきたのよー」  
ん、まさか……

「うう、ぐす……」と、メガネをかけている女性の幽霊が泣きながら出てきた。

「た、樹君！？ この人って！」

間違いなく、この人がこの事件の犯人だろう。

「ありがとうございます。じゃあすぐ除霊しちゃうよ」と、僕はお札を構えると

「こらああああ！」と頭を殴られた。

「な、何をするんだ」

「なんでこんな泣いているとか、あんたは気にならない！？ 話だけでも聞いてあげなさいよ」

しかし、僕はさっさと面倒ごとは済ませたかった。

「お願いです樹君。私も聞いてみたいです」

と、美香さんをお願いされてしまったのは仕方ない。

「じゃあ、そのメガネかけた幽霊さん。なんで泣いているの？」

お名前も一緒にどうぞ」

僕は尋ねると、メガネの幽霊はボソボソとしゃべった。

「私、五十嵐里美いからし さとみって言います。実はこの会社の会社員でこのフロ

アにいました。ある時、少し用事であの扉の奥に入ったら、閉じ込められて、そのまま窒息死してしまいました」

「ああ、それは無念無念。はい、成仏成仏」

僕は話を聞いたので、お札を構えたが、また姉に叩かれた。

「話は最後まで聞く！」

五十嵐里美さんは話を続ける。

「実はその時に大事な彼氏からもらった指輪をあの中で無くしてしまつて……」

そのことを聞いて、美香さんは目に涙を浮かべる。

「樹さん、この人の指輪を見つけましょう！」

と、僕にお願いしてきた……。

「分かつたよ。依頼人がそついうなら僕はやるしかない」  
仕方なく承諾した。

「さて、承諾したはいいが、あの扉の中にどうやって入るんだ」

僕は疑問をぶつける。

「開けるにはパスワードがいるのですが、その2種類あつて、1回開ける毎にそのパスワードが交互に変わっていくんです」

と五十嵐さんは語る。

「樹さんのお姉さんと、五十嵐さんは幽霊だから入れないんです？」  
と、もつともな意見だが。

「それができたら、五十嵐さんが泣いてないわ。私も試してみただけ、あの扉は磁場ができてるのか幽霊でさえも通り抜けられないのよ」

と姉が言う。

「幽霊というのはマイナスプラズマーという性質でできていると言

われている。つまり強力な磁場で幽霊バリアーを張れたり、除霊させちゃったりすることもできるらしいぞ。ちなみにゴーストバスターズって映画はまさにそれだ」

いつもの親父の解説が聞こえてきた。

「じゃあ、五十嵐さんと美香さんはパスワードを。僕と姉さんはあの扉に入るよ」

五十嵐さんは頑丈な扉を開くのに必要なコンピューターを立ち上げる。

「パスワードは何か分かります？ 英字4つに数字4つみたいです  
が」

あの社長のことだ、やはり美香さんのことではないだろうか。

「美香さんの誕生日は？」

「私は6月20日です」

五十嵐さんも納得したのか、それを入力した。

「MIKAO620つと」

ピー！ガチャ！

なんと、一発で扉は開いた。

「よし、探すぞ！」

「おー！」

僕と姉は頑丈な扉の部屋の中に入った。

「ここがセキュリティシステムか」部屋の中にはコンピューターだらけだ。

「さて、指輪はどこかしらね」

僕たちは探しているが、ふと疑問が浮かんだ。

「なあ、姉さん。どうして五十嵐さんは閉じ込められたんだろうね」

「さあー？ 結構おっちょこちょいだから、勝手に閉めるの忘れて

たりしてねー」

「ああ、それありそうだねー」とその言葉のあとに  
僕と姉は扉を見た……閉まっているやんけ。

「ちょ、五十嵐さんー美香ー！」

僕はドンドンと扉を叩いたが、向こうに伝わる様子はない。

「大丈夫よ、どうせ向こうでも気づいているはずよ」  
姉が心配なさそうにいうが……

一方、扉外のグループは

「ねえ、五十嵐さん？ 扉閉まってませんか？」

美香さんは五十嵐さんに尋ねる。

「あ、そういえば一度開けたらすぐ閉まるんです。私もその時死  
んじやっただですよねえ」

「いやいや！ 今あの中に樹君がいるから！」

とりあえず、なんとか扉のことは気づいているようだが。

「あーあ、扉のパスワードさっきとは違うんですが……なんだが分  
かります？」

「えっ、五十嵐さんは知らないんですか？」

「実は社長でしか知らないことになってて」

「えっ、えええええ！？」

「み、美香さん！ 何かお父さんに携帯で連絡は取れないんですか  
！？」

「実は……父、携帯今日忘れて行って……」

「あ、ありえない社長ですね……」

つまり、パスワードがまったく分からないということに。

扉の中グループは

「さて……このまま無駄しててもしょうがない。指輪を見つけないとな」

「ポジティブになってきたわね、樹」

とりあえず、時間の無駄だと思っただけだ。

「あっ」何か、キラッしたものが、隅の方に落ちている。

「指輪ってこれか」

僕は手に取って、ポケットにしまう。

「意外と簡単に見つかって、暇になったでしょ樹。」

「……それよりもここを出るほうが本題になったな」

扉の外グループ

「ええと！ キャバクラのかわいい子の生年月日でもない。女子職員にセクハラした数でもない！」

五十嵐さんは一生懸命探しているが、内容がひどい。

「父は……普段どんな人なんですか」

美香さんはシヨックを受けていた。

扉の中グループ

「ああー息苦しくなってきたわー」

もうすぐ限界に近い気がする。

「樹ー、幽霊になってもいいことないから早く成仏しなさいよ」

「諦め早！ もっと弟に対してガンバレとかいえないのか!？」

「ほらほら、騒いでいると空気がもつと無くなる」

姉はそんなことを言っ、眠り始めた。

扉の外

「うっ、考えつかない……あげくには私の名前と生年月日も違うし。」

ふと、美香さんはモニターを見るとミルクィウェイという言葉が見えた。

「あの、このミルキーウェイって？」

五十嵐さんはああ、という表情をする。

「これはこのセキリユティシステムの名前よ。これも社長が着けたのよね。確か意味は」

「天の川」美香さんは先に答えた。

「母の……生年月日！」

「そうか、それ忘れてたわ！ 社長の奥さんの名前は理香りかさんだから、ええと「RIKAO707」ね！」

ピーガチャ！

という音が聞こえると共に、僕は部屋の中から外にドサッと倒れた。

「た、樹君！ 大丈夫!？」

美香さんは駆け寄るが、僕は笑顔で「何とか」と答えた。

ポケットに手を伸ばし、あの指輪を五十嵐さんに渡す。

「あ、ありがとうございます！ これで無事天国に登れそうです。」と、五十嵐さんは指輪を持って、パァーッと光に包まれた。

「あつ、もうお迎えが来ました。みなさんありがとうございます！」

彼女は笑顔で天国に昇っていった。

「これで事件も解決です」

美香さんは笑顔で僕に言う。

「なんかうれしそうだね」

「実はお父さん、亡くなったお母さんのことまだ好きだったなあなんて」

「えっ?」

「あのセキリユティの名前がミルキーウェイ。そして、パスワードがお母さんの名前と生年月日の7月7日でした。私が小さいときに

亡くなってしまった。母のことはよく覚えてないんですが、なんだからうれしくなりました」

このとき、僕は言うことができなかった。

美香さんはどうやら見えてはいなかったが、僕には彼女の背にそのお母さんが見守っているということを知った。

「さてと、正輝も待ちくたびれているだろうし、帰りますか!」

「はい!」

「そういえば、美香さんのお父さん会社にいないんじゃない?」

「今日も仕事で遅くなるって言ってたのですが、キャバクラですかね

……」

と、美香さんは笑顔で怒っている。

あっ、後ろの美香さんのお母さんも似たように怒ってる。

そういえば、誰か忘れていたようなあ……。

その頃、頑丈な扉の中。

「うおおおお! 樹ー! わたしを忘れるなあああ!」

姉は閉じ込められていましたとさ。

## 9話 御被いインポッシブル（後書き）

実は……この話には幻のボツ話があるんです……。

執筆をしていたのですが、あまりにも長すぎる＆ふざけすぎているのですが、なにかゆえか保存しようにもエラーで消える始末。

仕方なく、このような形にまとめました。

## 10話 鬼切の娘

休日の朝には樹はいつも紅神社の管理の仕事を手伝っている。

僕の役目はいつも境内を箒で掃くことだ。

「大変な1週間だったなあ」

御被いの仕事が始まって、いろいろな物と戦って、ドキドキさせられて、閉じ込められたりして。

「……体がもたないんじゃないか僕は」

今のままだと確かに寿命は減ると思っている。

「まあ今日は1日休みだ、仕事もどうせ来ないだろうし」

僕はさつさと、箒で掃いていくが……そういえば、姉さんが静かだ。「まだこの前の扉の中に置いてったことを気にしているのかな。あのあと気づいて、美香さんのお父さんに出してもらおうよう頼み込んだのに」

この前の美香さんの依頼のあとは大変だった。

なんせ、そのまま警備員を美香さんは問い詰めて、行きつけのキャバクラまで乗り込み、美香さんがお父さんに直接説教していたぐら이다しな……。

その後にお父さんに扉を開けてもらって、姉はなんなく救出された。

「まあいつものようにちょっかいかけて来ないからマシだな」

そういえば、もう一人神社を管理すべき人物がいない……。

「ああ、お父さんなら紅神社の集まりに行ったわよ。なんか急な集

まりとかで」

またこの姉は目の前にプカプカ浮いていた。

「油断した……今のは油断した」

最近、登場のタイミングを気づき始めていただけに悔しかった。

「紅神社の集まりって？」

初めてそんな集まりがあったのを聞いた。

「なんか各地の紅神社の人々が、集まって、お話会するみたいよ  
紅神社っていっぱいあったのか……それも初めて聞いた。

「大事なお話があるっていうので手紙来てね」

話……？まさか……身内に借金をしているとかの話じゃ……。

ポツポツ……という考えいてるうちに頭に水滴が当たった。

上を見てみると、雲行きが荒れている。

「ありやいや、こりや結構降りそうね。樹、社務所に退避よ」  
僕と姉さんは社務所に逃げ込むことにした。

その頃、山奥にある少し大きな神社の中。

「紅宗治……ただいま参上しました」

紅宗治は苞ほうを着て、周りに人が並んでいる中、進んでいく。

「あれが……噂の鬼を封印してある紅神社の……」

「確か、あいつの身内が……」

「あいつの父親が元徳様の娘を……」

宗治が進む中、並んでいるものたちはヒソヒソと話をする。

「静まれい！ 長老殿が話しをする」

いかつい男はそう叫ぶと、場はピタッと静まった。

「よく来た、紅宗治。なるほどのう……父、紅孝治くれない とうじにそっくりじゃ

わい」

一番、最奥にいた長く白ヒゲを伸ばした老人が言う。

「お久しぶりです。紅元徳くれないげんとくさま」

紅宗治は深くお辞儀をする。

「堅苦しくするでない。いちおう、わしの孫なんじゃから」

その言葉を聞いて、場は騒然とした。

「静まれい！」またもや、いかつい男を叫び、場は静まった。

「ほほほ、知らないものもおったようじゃのう」

紅宗治の父、紅孝治は紅家では下級である方でもあるにもかかわらず、紅元徳の娘、紅夜月くれないよつきと恋をした。そして、生まれたのが宗治であつた。

「あの時はわしも孝治に怒りを覚えた。だが、しかし夜月も死に、孝治もいなくなった今では子であるお前には罪はない」

紅元徳は笑って答える。

「元徳さま、お話というのは？」

宗治は切り出すと「ふむ」と元徳はヒゲをさわりながら言う。

「最近、お前の「弟」。「誠治」を見たという情報が入つてのう」

「誠治……ですか」

また場はヒソヒソと話が聞こえた。

「誠治って、あの鬼の力を欲した者か」

「ああ、紅家の汚した者だ」

「そう、奴は紅家を汚した者じゃ。残念ながら、奴を許すことはわしにもできん」

元徳の目はするどくなった。

「奴は過去のこと、紅家を恨み、紅の鬼の封印を解こうしてくる

じやろう」

と、元徳はニヤリとした。

「そこでだ、わしの昔からの友人の鬼切おにきりいちぞく一族に頼み。お前の神社の戦力として行かせた」

「鬼切!？」

宗治は驚く。

「きつと、今頃着いているはずじゃ」

宗治はそれを聞くと、すぐに神社を出ようとした。

「どこに行くのじゃ、宗治よ」

「家に……戻ります!」

紅宗治は止めようとした輩がいたが、元徳は「良い」と言い、宗治を行かせた。

「しかし……鬼切め、まさかあんな子を送るとはのう」

「雨も上がったなあー」

姉と共に社務所に退避していた僕は濡れずに済む事ができた。

「雨が止んだあとの空気はいいわよねー」

姉は腕を伸ばしている。

と、そこに「頼もう、誰かおらんか!」という声が社の方で聞こえた。

「? まさか依頼者か?」

僕と姉は社に向かうと……布で巻いた大きな棒のような物を持った袴姿のポニーテールの女子がいた。

「……なあ、あれもありがちパターンだよな」

僕はそれを指で指して、姉に聞く。

「樹、ありがちなパターンほど人気を得られるのよ」

姉さんは僕の肩にポンと手を乗せた。

「む、主が紅樹殿か」

その女子は僕に気づくところ言った。

「ええ、まあ。あの……何か御用ですか？」

僕は近づこうとした瞬間……。

女子は布で巻いたものから刀を出し、僕の喉元に突きつけられていた。

「あ、あのう？」

「今で主は死んだぞ、樹殿」

「あのう、こんなバイオレンスなことをするのはどこのどなたで喉元に突きつけられながら僕は問う。」

「私の名は鬼切燕<sup>おにきりつばめ</sup>。今日からこの紅神社に居候する身になった」

「居候……?」

つまり、ここにこの子が住むっていうことか!?

「またずいぶん物騒な子ねえ」

姉はいつの間にか、その子の右肩にいた。

「妖しきか!」

鬼切燕は刀を僕の喉元から姉に斬ろうとしたが、とっさに避けた。だがその反動で姉は倒れてしまう。

「ちよつ、あぶないわね。女の子がそんなの振り回しちゃだめよ!」  
姉は怒るが。

「妖しきにそんなものを論される筋合いはない!」  
と、鬼切燕はまたもや斬ろうとした。

「おとなしく、あの世に昇れい!」  
そして、倒れた姉を斬ろうとした瞬間。

「あ、あれ！？ 動けん！」

僕は鬼切燕に陣のお札を貼っていた。

「はいはい、とりあえず、そこに倒れているのは僕の姉だから成敗はしないでくれ」

「く、そんな！ でもこやつは妖しきだぞ！？」

まあ、確かに幽霊に取り付かれている神主の息子がどこにいるのかは不思議であろうが。

「こいつもいちおう家族なんだから……言うこと聞かなきゃ、そのお札は剥がさないよ」

僕は脅したが……。

「いいだろう。私もここを動かかん！」

と強気な態度で示された。

姉はそれを見て、「！」といいことを思いついたようだ。

「じゃあ……これでどうだ！！」

姉は鬼切燕にコチヨコチヨ攻撃をした。

「な、なに……キャハハハハ、ギャハア、ちよ、やめ、キャハハハ」

ああ、そういえばあの技をよく姉や親父にやられたものだ。

その名も「陣コチヨコチヨ縛りの術」だ。

「わ、わかった。も、もうっ斬らないから！」

どうやら鬼切燕は観念したようだ。

僕は陣を解くと「一事はどうなることかと……」鬼切燕は嘆いていた。

「あのう、鬼切燕さん……？」

「燕でいい。して、なんだ」

「じゃ、じゃあ燕はなんで、この神社に居候を？」

燕は懐から書状を出した。

「主たちの長、紅元徳さまからだ。最近の妖魔どもの不穏な動きから、この紅宗治神主の紅神社を護衛せよという命令が下った」

つまり、上からの命令で来たってわけか。

「しかし、息子がいると聞いていたが、その姉が幽霊となっているのは情報がなかった……」

まあ、確かに幽霊が居ついていますと言えないだろう父は。

と、話をしている内に……。

「綾香ー！ 大丈夫かー!?」と遠くから聞き覚えのある声が聞こえる。

「綾香！ 大丈夫か!? 怪れないか!?」と、宗治はいつもよりのあわてようだった。

「大丈夫、大丈夫よ。父さん」

どうやら、姉さんが心配で飛んで帰ってきたのだろう。

「紅宗治殿、お初お目にかかる」

「ああ、どうも。」

紅宗治は燕におじぎする。

「で、樹。鬼切って人が来なかったか？」

「いや、さっきあいさつしたじゃない」

「えっ　？」

鬼切とは平安時代の昔からいたという鬼を狩る一族のこと。鬼や魂まで切れてしまう刀を用い、剣術も天下第一といわれるほどの達人であると言われている。

「　な、はずなのに」

確かにそれを聞くと、こんな女の子とは思えないな。

「ええと、燕君。君の歳はいくつだい？」

親父はまだ確認しているようだ。

「歳は樹殿同い年で十五になった」

お、同い年？

「そ、そうか……で学校は」

「村では中学まで行っておったが……私の村には高校というものが無くてな。ついでだからこっちの高校に入れてもらえという父上の願いじゃ」

「いや……それメインなんじゃないか、君の父上」

親父はなぜこの子が来たのか分かったようだ。

何はともあれ、燕を家に案内することになった。

「じゃ、じゃあ。学校には俺から連絡しておくから、試験は明日その時受けると思う。大丈夫だ、うちのバカ息子でも合格したぐらいだから」

僕じゃなくても正輝が合格したぐらいだから大丈夫だとは思う。

「で、部屋なんだが……」

チラツと親父は僕を見てくる。

「譲れませんよ？」

僕は断る。

「別に私は樹殿と一緒にの部屋でもいいんだが」

いや、燕さん。そういうのはちょっと……。

「仕方ないな……燕君には神社の社務……」

と、親父が言いかけたその時

「お父さんが社務所で泊まればいいじゃない。どうせお父さんの部屋そんなに使ってないし」

と、母が入ってきた。

「か、母さん！？ あそこは夏だと暑くて、冬だとめちやくちや寒いんだぞ！」

親父は慌てていたが「あらっ、男なんだから。これも修行よ。それともあんな女の子をそこで寝かそうと思ったのかしら」

「ぐっ」と親父は諦めた。

「本当によろしいのだろうか……」

燕は困惑しているようだが「いいの、いいのお父さんあれでも丈夫だから」と姉は笑って答える。

「あつ、そういえば」と姉は物置部屋へと入っていった。

「? どうしたんだ姉さんは」

「さあ……」

とりあえず、燕を親父の部屋に案内した。

「す、すごいな」

燕が驚いたのは親父の本棚だった。

親父の部屋の中はあらゆる妖怪や幽霊、鬼に関する書物の置いてあるのだ。

「といつても、これを集めたのはじいちゃんらしいけど」  
残念ながら、僕は生きているときを見たことがない。

と、書物を見ていく燕はピタッと止まった。

「樹殿……これはどういう本だ？」

と、見せてきたのは……「ダンディーな親父が簡単に女の子を落とす方法」というのだった。

「こ、これは……うん、男にしか分からない本だよ」

僕はそれを奪って、隠しておいた。「あの、バカ親父」

すると「燕ちゃん」と姉が物置から戻ってきたようだ。

「これこれ、私の服。たぶんサイズあとと思うから着てみて！」

と、自分の昔の服を持ってきたのだった。

「えっ?」

燕は無理やり姉に引っ張られて着替えさせられていった。

「あーあ、僕は部屋の外出てよう」

「ちょ、燕ちゃん。さらしなんか巻いちゃって……でかっ!?!」

「な、なにをする!」

「いいじゃないの減るものじゃないし」

「きゃ、キヤアアア」

僕はドアの中の燕の悲鳴が聞こえたが……平常心を保つように心がけた。

「見てみて、樹！」

と、姉に呼ばれ見せられたのは袴姿から、スカート姿の燕だった。

「これは……またなかなか」

ちよつとまんざらでもない。

「あの、綾香殿……」燕は少し顔が赤くなって言う。

「少し胸がきついのだが……」

そのことをいうと、無言で姉はボコンと燕の頭を叩いた。

「樹ー、燕さんー、ご飯よー」

母に呼ばれ食卓に行ってみると、何か豪華な食事だった。

「か、母さん。今日はまたずいぶん豪華だね」

「ふふふ、今日は新しい家族のお祝いだからね」

母はにこやかに笑った。

「じゃあ、新しい家族に乾杯だー」

親父はいつの間にか席に付いていた。いつから沸いたんだ……。

食事も終わり、僕と姉は親父のもとい燕の部屋にいた。

「で、高校のことなんだけど」

僕は燕がどのくらいの学力なのか調べておきたかった。

いちおう試験として入るわけだから……。

「で、いちおう僕の時の試験問題があるんだけど。ちよつとやってみて」

僕が受けたのは国語、数学、英語の3教科だ。まあどれも平均的に取っていけば合格はできる。

その試験問題を渡して、燕にやらせてみた。

「わかった!」という合図と共に、1時間後……。

「樹殿。終わった!」という燕の声を聞いた。

「うし、んじゃ採点するか」

僕と姉とで手分けして、僕は数学と英語を。姉は採点に時間かかる国語を担当した。

「え、ええと……数学は基本問題はできているな。英語は……ぜんぜんダメと」

と、数学は50点、英語は0点だった……。このままでは国語が抜群にできないときびしい。

しかし、思いもよらぬ点数だった。いや、予想はしていたのかもしれないが。

「姉さんー国語はー?」

「100点……」

「は?」僕は疑ったが、答案用紙を受け取ってもう一回見てみる。

「本当だ……」

国語は完璧だった……。

そしてその後、燕はこの通りに高校の試験を合格したのである。

10話 鬼切の娘（後書き）

ありきたりだけど、それが良いのがマイポリシー。  
新キャラ登場して結衣はどんどん影が薄くなる！  
そのうち結衣の番外編作ります……。。

## 11話 新たなる敵！

ここは朝の学校。

秋本先生がほホームルームHRを行うのに来る前の時間。

生徒はほぼみんな揃ってワイワイガヤガヤしていた。

と、そこに。

「鬼切燕だ！ よろしく頼む！」

と、転校生はいきなり教室のドアを開けて大声で自己紹介し入って来た。

そしてそう言うやいなや、僕の隣に席を付けて座っている。

「いやいや、いきなりすぎだろ！？」

僕は燕にツツコム。

「た、樹？ このお嬢さんは誰なんだ？」

僕の隣に入って来た燕を見て、正輝は僕に聞いてくれた。

「えっ、いやあ？ 僕にもさっぱり」

と、シラをきろうとしたが。

「何を言うておる！ 樹殿の家に居候することになった鬼切燕だろ  
う！」

と、僕に言うてきた。

「い、居候だと……？」

正輝はそれを聞いて、机にうなだれる。

「女の子が……居候だと……？」

ボソボソと正輝は言っているのを見て、燕は不思議と見て僕に聞く。

「樹殿。彼はどうしたのだ？」

「持病の悪化だよ」と適当に言っておいた。

「あ、こんなところにいたのか！ たく、先に職員室来ないとだめ

「じゃねえか！」

先生が急いで教室に入ってくる。

「うお、それはすまなかった。ついせつかちで！」

どうやら燕は順序が逆で教室に来てしまったようだ。

「まあいいや！ てめえら静かにしろ！ 転校生を紹介する！」

と言うが、「先生！ もう知ってます！」

と一人の男子が言った。

「手間が省けたな！ HR終了だ！」

と、すぐに先生は出て行ってしまった。

本当、嵐のような先生だ……。

さて休み時間はお決まりの転校生の質問攻めだ。

だが、やはり聞いてくるのは「なんで、樹君の家に居候なの？」ということだ。

しかし詳しくは言えないはずだ……燕、どうする気だ。

「父と樹殿の父親の合意の上で樹殿の家に身を置くことになった」

うん……確かに、確かにそれだと紅神社のことはバレずに済むだろう。

そこに正輝はムクツと起きた。

「許嫁……だと？」

そして、またがつくりと机にうなだれた。

それからが大変だった。正輝の許嫁という言葉を聞くと、僕にも質問攻めに会い、隣のクラスから噂を聞きつけて見に来る。

やっとほとぼりが冷めたのは昼休みのことであった。

「樹殿、購買というものに行くようじゃが」

「そうそう、燕は購買は初めて？」

「私のところは、お昼はおにぎりを作って食べていたからな……」

おにぎりね……。

「樹君！」

と、廊下の方から声が聞こえた。

「おや、この声は……美香さんか」

そこには美香さんと……あれ結衣もいる。

「どうしたんだ、二人とも」

「また、お礼にお弁当を作ってきたんです」

と、美香さんは僕に弁当をくれた。

「ごめん、いつもありがとう」

「いえいえ、樹さんにはお世話になっていきますから」

と、それをジロジロと結衣は僕を見る。

「……どうした、結衣？」

「……」

と、僕に無言で結衣のお弁当をくれた。

「あ、ありがとうな」

しかし……さすがに2個も食べえないな。仕方ない正輝にと見ると

「ま、正輝？」

正輝はまだがつくりしていた。授業中ずっとこんなだったなこいつ。

そこに燕が僕を気になってか来た。

「どうしたのだ、樹殿」

「ああ、美香さん。燕にこの弁当食べさせてあげていい？」

「え？ あ、はい。いいですよ」

美香さんには少し悪いけど、その料理の腕を見せてどういっつ反応するか見てみたかった。

「これはかたじけない。して、そちらの方は？」

「あ、燕はまだ知らなかったな。このお弁当をくれたのは……」

「はじめまして、伊藤美香です」

「これは丁寧。私は鬼切燕と申す」

「あ、噂の樹さんの許嫁さんですか」

「許嫁はただの誤解だから!？」

「まあそうだ。許嫁ではない」

燕も否定してくれたので美香さんは信じてくれたが

「で、こっちは……」

僕は結衣を紹介しようとする

「……!」

結衣は全力で走って行ってしまった。

「ど、どうしたんあいつ？」

いつもの結衣ならあんなことはしないんだが。

「なんか朝からおかしかったんですね、結衣ちゃん」

美香さんも不思議に思っていた。

「で、樹殿の食事は？」

「まあ、僕には結衣からもらったお弁当を食べるよ  
さすがに結衣には悪いからな。」

とりあえず3人で屋上に向かうことにした。

屋上に着いた僕たちはお弁当を食べることにした。

「ほい、ではいただきます」

「いただく」

「はい、どうぞどうぞ」

さて、美香さんのお弁当を食べる燕を僕はじっくりと見た。

「……モグモグ……」

「燕、どうだ美香さんのお弁当は？」

僕は聞くと、燕は固まった。

「ど、どうしたの燕さん？」

美香さんも心配そうに聞く。

「……う、うまい」

正輝と同じ反応で泣き出した。

「ええと、はい。ハンカチどうぞ」

「かたじけない」

美香さんはハンカチを差し出し、燕は涙を拭いた。

「そういえば、樹殿のお弁当はどうなのだ？」

泣き終えた燕は僕に尋ねてくるが、結衣の料理の腕は知っていたはずであったが

「パクツ……!!?」

食べると……おかしい。これは結衣の料理じゃない!

「美味い! 美味すぎるぞ!!!」

「結衣ちゃん、かなり料理の修業していましたよ。あんなことを言われれば女が廃るって」

ああ、前の僕と正輝が言ったあれか。

「あの、話は変わりますが燕さんが来た理由って紅神社の関係のことですよね?」

美香さんは唐突に聞いてきた。

それを聞いて、燕はジロつとこちらを見る。

「樹殿。なぜ彼女が紅神社のことを知っているのだ？」

「実は御祓いの仕事をしていたら巻き込んでしまった……」

紅神社の御祓い仕事は一般人には知られてはいけないことになってしまっている。

「まあバレたのなら仕方ない。その通り、私は紅神社の戦力として鬼切の村から来た」

「やっぱり、そういうことでしたか」

と、美香さんはなぜかホツとしている。

「フフフフ」

と、そこに……不気味な笑い声が聞こえる、これは正輝?

「うお!? びっくりした!?!」

正輝は目の前にいたのだ。

「け、気配を読めなかった……」

燕も気づかなかったようだ。

「ど、どうしたんだ正輝？」

「フフフ、そりやそうだよな。許嫁なはずないもんな」

まだこいつは気にしてたのか、そのこと。

「樹殿。もしやこやつも事情を知っているのか？」

まあ、そうなんだが……。

「まったく……これだと先が思いやれるな。他にはおらんだろうな？」

「さすがにこれ以上はいないって。それにこいつは情報源として使えるんだから」

と、正輝は不思議そうな顔している。

「あれ、結衣ちゃんは一緒じゃないのか？」

「結衣はなんかどっかに行ったな」

「結衣ちゃん、やっぱり少しおかしくないですか？」

美香さんも不思議に思っていたようだ。

「確かに、あの時もずっと無言だったし……」

まさか……？

「しかし、まだ確証はないな。すまないけど、美香さん。結衣の様子をしばらく見てくれないか？」

「ええ、分かりました」

「しかし、妖しきの気配を私は感じなかったぞ」

燕の言うとおり、僕もだ。幽霊や妖怪とかはすぐ感じられるのだが。

「とりあえず、もうすぐお昼休みも終了だから、教室に戻ろうぜ」

僕たちは教室に戻ることにした。

美香さんと別れたあと、僕と正輝と燕は並んで教室まで戻った。

「なんか、こう3人組だと中学の頃思い出すな」

正輝は僕に言ってきたが。

「正輝！」僕は怒っていた。

「あ、ごめんごめん」正輝はすぐに謝る。

「？なぜ樹殿は怒っているのだ？」

当然の疑問だが思い出したくないんだ、中学の時のことは。

その頃、結衣と美香さんの教室では。

「あ、結衣ちゃん。樹君がお弁当美味しかったって」

丁度、席に座っていた結衣に美香さんは話しかけてた。

「……」

やはり、何かおかしいようだ。

「……ねえ、美香」

「な、何？結衣ちゃん」

急に離しかけてきたので美香さんはビクっとなった。

「……放課後に少し大事な話があったいの、学校の裏まで来てもらえないかな」

「わ、分かった」

美香さんは少し怖がったが、そのことに承諾した。

放課後。

「なあ、今日は燕ちゃんが来たことだし、結衣ちゃんや美香ちゃんたちも誘ってカラオケでも行かないか？」

正輝は提案してきた。

「いいけど、お前。お金持ってるのか？」

「へへへ、何かの為に貯めてあるんだぜ、これでも」

なら、それ使って僕に購買でおごらせるなよと思うが。

「「からおけ」とはなんだ？」

どうやら、燕はカラオケを知らないようだ。

「ま、まあ簡単に言っと、歌う所だよ」

「おう、歌か！ 歌は良いぞ、手紙には欠かせぬからな！」

……そりゃ短歌だ、燕さん。

僕たちは隣の教室の二人を誘うと出向いたが。

「あれ？ 二人がいない？」

教室を探しても、二人が見当たらない。

「なんか、学校の裏に行ったようだぞ」

正輝はもうすでに他の人に聞いて回ってた、さすが記者魂。

「!?!?」

と、その時、何かをすぐに察知することができた。

「樹殿！」

燕も気づいたようだ。

ああ、これは……なんだ？ こんなでかい妖気を放つ物に僕は会ったことがない。

「燕、これなんだか分かるか？」

「これは……いや、まさか。しかし……」

と、少し困惑しているが。

「やはり、間違いはない。これは「鬼」だ！」

「お、鬼だつて!?!?」

僕たちはすぐに学校の裏に急いだ。

11話 新たなる敵！（後書き）

新キャラも増えたということでも新たなる敵も登場。  
鬼は手ごわいぞ樹。

## 12話 嫉妬

「ハア……」

岬結衣は自分の部屋の机でため息を付いていた。

「ほんとだつて、夜に駅であの紅つて人と美香が待ち合わせして会ってるの見たつて子がいるのよ」

結衣はそのことを友達から電話で聞いてしまった。

樹と美香は付き合っているのだろうか。

確かに私は樹と幼馴染つてだけで、関係ないといえば関係ない。

「でも……何か言いなさいよ」

二人とも大切な友達であることには変わりはない。

でも、私はある言葉を忘れていない。

「あいつはお前の気持ち気づいているよ」

とある人から中学生の時に言われたこと、名前は……なぜか思い出せない。いや、思い出したくない。

「私……どうすればいいんだろう」

結衣は頭を抱え込んでいた。

「その悩み、解決しましょうか？」

「だ、誰!？」

聞いたことない声が聞こえた。あたりを見るが、自分以外誰もいない。

「見えないわ。だつて、私はあなたの心にいるんだから」

「こ、心?」

「そう、私はあなたの「嫉妬」」

嫉妬……?

「私を受け入れなさい。全てあなたの望み通りにしてあげるわ」  
「わ、わたしのぞミドリ……?」  
「そう、望みどおりにね」

「急げ！ 結衣殿と美香殿は学校裏だ！」

学校の廊下、僕と燕、正輝の3人は全速で走っていた。

「あ、ああ！ はあはあ……」

「ど、どうした樹！」

「い、いや少し息を切らただけだ。大丈夫」

僕はしばらく走っていると少し息を切らした。

おかしい、いつもならこれぐらいで息を切らさないのに。

学校の裏には少し空いたスペースがある。

昔、親父の世代ではよく呼び出されて「教育」をされていた場所だ。最も親父は「教育」する側だったらしい。

「確かにあそこだと人目が付かない。俺もよく授業をそこで授業をサボっていたしな」

「学校裏だ！ 結衣殿!？」

学校裏に付くと、結衣は美香さんを木に縛り吊るしていた。

「結衣！ どうしたんだ、こんなことをして！」

僕は結衣を説得する。

「……どうして？ その理由も分からないの……?」

結衣は静かにしゃべる。

「無駄だ、結衣殿は鬼に操られておる」

「操られている？ 違う、この子は自らの意思でこうしているのよ」

結衣とは違う、誰かがしゃべっている。

「お前！ 結衣じゃないな!? 誰だ！」

「私は、嫉妬の鬼。心の中に潜む鬼」

心の鬼だと……？

「し、嫉妬の鬼だって!？」

と、珍しく正輝は反応した。

「知っているのか、正輝」

「聞いたことがある、宇治の橋姫という嫉妬により鬼になった話を」

「人の心に弱さが生まれると、鬼が生まれる。しかし、今はまだ結

衣殿は完全に鬼と化してはいない。鬼を中から引きずり出すのだ、

樹殿！」

僕はお札を構える。

「待っている、結衣！ 今、鬼を出す……から……な」

お札を落とし、僕の視界が急に歪んだ。

「な、なんだこれは……」

「大丈夫か！ 正輝！」

よろめいた僕を正輝は支えた。

「く、さっきの息切れも」

「今頃、毒が効いてきたか」

ど、毒だと……ま、まさか。

「ふふふ、今頃気づいたか。そう、お前が食べた弁当だよ」

「き、きたねえ」

「心配するな、命を取るまではしない。だが、しびれは1、2日は続くかな」

結衣の中の鬼は笑っている。

「さあ、その娘、お前も樹の許嫁だそうだな。命はないぞ」

結衣は包丁を持って、燕に飛び込んでくる。

「や、やめろ！ 結衣殿！」

何とか燕は紙一重で避けている。

「くっ、なんて身のこなし。鬼の力は普通の者をここまで！ 私の刀があれば」

燕の刀は樹の家に置いてきてしまったのだった。

「ま、正輝。僕のことはいいから、美香さんを」

僕を支えていた正輝を美香さんを助け出すように言う。

「わ、分かった」

そういうと、僕をその場で座らせ、美香さんに近づく。

「お前も命が惜しくはないようだな」

それに気づいた結衣は燕を足で転ばせ、正輝に近づく。

「ま、正輝!」

僕はそれをとつさに正輝を刺すのをかばおうとした、その時。

「陣!」

ピタッと、正輝にあと数センチで包丁が刺さるところで、結衣は止まった。

「だ、誰だ!？」

「学校まで寄ってくれば、鬼の気配がして。来てみれば樹に嫉妬ですって……? なら、ここで言わせてもらうは、樹は姉である私の

「おもちゃよ!」

姉さんは美香さんを縛った木の上に立っていた。

「姉だと……? く、この娘にはなんのことが分からんみたいだな」

「ふふふ、そりゃその子には私のことが見えないからね。正輝君!

美香さんをキャッチしなさい!」

「ま、正輝! 美香さんをキャッチ!」

と、僕はなんとか正輝に伝えると、落ちてくる美香さんを見事にキャッチし、そのまま走り去っていった。

「さて……今のままじゃ、結衣ちゃんを傷つけちゃうわね……。燕ちゃん受け取りなさい!」

と、姉は布でくるまった棒状のものを燕に投げた。

「こ、これは! かたじけない、綾香殿!」

即座に中から刀を抜いた。

「力を貸せ！ 鬼切り！」

「お、鬼切りだと！？」

結衣の中の鬼はその刀を見て怯えている。

「わ、忘れもしない！ その刀は渡辺綱のわたなべのつな！

「結衣殿の体から出よ！ 嫉妬の鬼め！」

そういうと、燕は結衣ごと刀で斬ったが。

「き、斬れてない？」

僕は驚いていた。

「この刀は魔だけを斬るもの。ゆえに人は斬れん！」

結衣は無傷で、後ろから苦しそうに出てきたのは白髪で鉄輪かなわ（鉄の輪つかのようなもの）を被り、角が生えた鬼であった。

結衣はその衝撃でか気絶している。

「貴様、あの憎き四天王の子孫か！ 許さん、許さんぞ」

嫉妬の鬼は怒り狂っているが、燕は冷静に刀を構えた。

「では、その時と同じように切り捨てよう」

燕は動くと、嫉妬の鬼は大きな腕を振り下げる。

しかし、燕はその動きを見えていた。

軽やかにそれを避け、その大きな右腕を切り落とした。

「ぎゃ、ぎゃああああああ　！」

声にならない悲鳴が聞こえる。

「憎い、憎いぞ、ならばこの娘も道連れだ！」

「し、しまった！」

嫉妬の鬼は左腕で、倒れた結衣をつぶそうとしていた。

「ちょ、燕ちゃんに見とれてたから間に合わない！」

姉もボーっとしていたようだ。

「動け、動けよ。僕の体」

僕にはそれを見ることしかできないのか。

なつかしい声がする。

「樹、約束だぞ。あの子にはお前からは恋をしない。あと、なんかあつたら化けて出てやるからな」

修二……。

時が止まった。

「結衣を守るって約束したんだ」

僕は……結衣を守る！

「こ、この感じは!？」

嫉妬の鬼はあまりの妖気に一瞬たじろいだ。

「な、動けん!？」

嫉妬の鬼の足元にはいつの間にか無数のお札が貼りめぐらされていた。

「こ、これは!？ いつの間に!」

「全て 陣のお札だと!？」

姉と燕も驚く。

「き、貴様! なぜ動ける!？」

僕は動いていた。だけど、僕ではない誰かが僕を動かしている。

「……皆<sup>かい</sup>」

僕はそう唱えると、無数のお札が嫉妬の鬼を包んでいった。

「た、樹!」姉は叫ぶが、聞こえない。

僕はいいつを倒すしかない。

「こ、この妖気は……紅<sup>こう</sup> さ……ま

臨<sup>りん</sup>!!!」

無数のお札は刃となり、一斉に嫉妬の鬼を切り刻んでいった。

「こ、ここは……」  
気がつく、僕は保健室にいた。  
隣のベットには結衣が寝ている。  
「……あれは、現実だったのか」  
いくら鬼といえでも、残酷までの殺し方。  
そして、僕は鬼が切り刻まれていくのを「楽しんでいた」。

「あ、樹さん。気がついたんですね」

「よかった、よかった。なんとか無事で」

美香さんと正輝は笑顔で保健室にやってきた。

そういえば、この二人は先に逃げて、僕のやったことを知らないよ  
うだ。

「まったく、お前もドジだなあ！。毒入り弁当なんて食ってよ」

正輝は笑っている。

「正輝君、ここまであなたを運んできてくれたんですよ」

「あ、ありがとな」

僕は素直にお礼すると。

「うお、お前が素直なのは気持ち悪いなあ」  
まったく、こいつは……。

「こりゃー、樹……」

と、よくある寝言パターンが聞こえてきた。

「いい気なもんだぜ、鬼に操れていたのに、そのお嬢様はのんきな  
夢を見てると」

結衣は寝ぼけて寝言を言っていたのを正輝はまた笑っていた。

「本当に、まったくだ」

僕と正輝は共に笑ったが。

「あ、修……」

結衣のその寝言に笑うのがピタッと止まった。

「ど、どうしたの二人とも？」

美香さんが心配に話しかけてくるが。

「い、いや。なんでもないよ」

僕は否定し、ベットから立とうとした。

「あ、まだ無理すんな。あの鬼が言うには1、2日しびれて動けないって……」

と、正輝は僕に言うが。

すんなり、僕は立ってしまった。

「な、なんだ？ あの鬼、嘘でも付いたのかよ」

おそらく、あの鬼が言ったことは真実だろう。

僕の中で何かが起こった。それは事実だ。

「綾香殿。樹殿の先ほどの技。無数のお札を操ったものです。あんな他の紅家の者でも見たことがありません」

「そして、一瞬でしたが、あの妖気。あれも人間のものとは思えませぬ。そう、むしろ」

と、言いかけた瞬間。

「燕ちゃん。まだこのことは詳しく言えないわ。でも、何かが樹を動かした。それを知っていけないといけないわね」

姉の言葉に燕は黙った。

「おいおい、もう立てるからといって、大丈夫なのか？」

「これくらい平気だって」

他の3人は先に家に帰ってもらい、結衣が起きるまで待とうと思っただが、なかなか起きないので仕方なく僕は結衣を背負っていた。

「まったく、お前も先に帰ればいいのに」

「まあまあ、心配だからだよ」

こいつはいつもこうだ。面倒ことでも僕をいつも待つ。

「それに……結衣ちゃん。あいつの名前言ったからよ」

……修二。結衣の中ではもうすっかり記憶に無くなっていると思っ  
ていた。

「やっぱり完全に忘れられなかったってことか」

正輝は腕を組む。

「うし、じゃあ俺は帰るわ!」

と、唐突に正輝は帰り出した。

「お、おい!」僕はそう正輝を呼び止めようとするど。

「うーん?」と結衣は目が覚めたようだ。

「やあ、寝ぼすけさん」僕は結衣に話しかける。

「ちよ、なんで私が樹に背負われてるの!?」

「いやまあ、いろいろあつてだな。降るすか?」

「え、ま、まあいいけど」

と、このまま背負っていることにした。

「……」

二人して、無言だ。

「あ、あのさ!」

切り出したのは結衣だった。

「樹、美香と付き合っているんでしょ? こんなことしてちゃま

ずいんじゃない」

「ん……? 誰と僕が付き合ってるって?」

「え、誰って美香と。それにこの前デート現場を目撃したって友達  
から」

デート現場? ああ、親父さんの会社の時か。

「あれはちよつとした用があっただけだよ。それにあの時には正輝  
もいたぞ」

「え、ええ!?」

そういえば、正輝。あの時の格好が潜入スタイルとか言ってたな。

つまり、発見されなかったってことか……。  
「じゃ、じゃあ私の誤解だったんだ……」  
誤解で毒入り弁当食べさせられた、こっちの身にもなってほしいもんだ……。

「旦那。やはり……」

背が高く帽子をかぶった男が見ていた。

「ああ、興味がわいてきた。もう少し様子を見ることにしよう」  
赤い服の男は言った。

「ふふふ、あの小僧……」

帽子の男は不気味に笑っていた。

## 12話 嫉妬（後書き）

今回の話は今後のキーとなる話題がいつぱい出てきました。  
てか、正輝の潜入スタイル、ここで伏せ線を回収とは作者本人も予想していなかった。（えっ）  
意外と書いてみるもんです。  
間違いがあったので修正。

### 13話 紫ババアと燕の決闘

僕と親父は神社の社にいた。

「親父、学校が終わってから来いって行ったけど、何があるんです？」

今日の朝にそんなことを言われ、今現在ここにいる。

しかも、いつもなら僕は普段着か学校の制服なのだが神主の正装の苞<sup>ほう</sup>まで着ていた。

「樹、お前がこの前会ったことよく聞いておきたい」

「この前とは結衣が鬼に操られた話です？ 姉さんから聞いたんですか」

「どうやら、先日の嫉妬の鬼の話のようだ。確かに鬼など出たことはタダ事ではないが……」。

「お前が倒したと聞くが、その時に起こったこと詳しく話せ」

「僕ではない、誰かが僕を動かしていた。見たことない技も使ったし」

僕はそのことを言うが、親父は「そうか……」とつぶやくだけだった。

「樹、忘れずに覚えておけ。怒りや本能は確かに強いが、それに頼りすぎてはいけない。気づいた時には取り返しの付かないものになる」

親父は真剣な顔で僕に言った。

「肝に銘じておきます……」

と、いきなり親父は真剣な顔が緩む。

「さて、本題はこのあとだ。この後、依頼人が来る」

「えっ、それなら僕は障子外に出てない」と

外に出ようとすると親父は僕の腕を掴み止めた。

「なにを言っているんだ。お前が受ける仕事だ。お前が聞くんだは？」

「なに。これも修行の内だ。お前も知っているだろうが、お得意さんの霊媒師の依頼を受けてもらう」

「お得意の霊媒師って、あのうさんくさいおばさん!？」

妖しげ紫色の色、胸元が開いている服を着り、いつも水晶玉を持っている。いかにもな、おばさんだが霊感はまったくくないらしい。しかし、なぜかこの紅神社のことや幽霊、妖怪などに対してはかなりの知識を持っている。

「おや、来たみたいだぞ」

社の障子には、その影があるが……あれ、なんか煙が出てきたぞ。と、突然障子がガラッと開いた。

モクモクと白い煙が社の中に入ってくる。

「うわ、つめて!」

煙を触ってみるとどうも冷たい……これはドライアイス？

「零奈!<sup>れいな</sup> いい加減に変な登場の仕方はやめろ!」

と、親父は怒鳴ったあと出てきたのは……相変わらず紫色のお色気おばちゃんだった。

「お姉さんよ? 樹君?」

うわ、こつち見た。しかも何で考えていることが分かった。

「で、その紫ババアがなんのようで」

親父はいつもの調子で答える。

「まったく、あなたまでひどいわね。これでもあなたのライバルと言われたほどののに」

「誰が、ライバルだ。お前が一方的に仕掛けて、一方的に負けたくせに」

この親父と言い争っているババ　ごほん、お姉さんは御被い仕事のお得意様でたいてい厄介な仕事を引き受けてはうちにも持つてくる、とつても迷惑な人である。まあ一般人と紅神社の仲介人といえは、便利であるが。なんでも親父とは昔からの知り合いだったらしいが、何者なのだろうか。

「で、樹君大きくなったわね。いつも障子越しから覗いてるか、立ち聞きだけだったから今日が始めて、お話するわね」

そう、いつもならこの人が来るたびに身を隠してバレないようにしていたのだが、この人はたいてい見つかったている。しかも、覗いた時には目が合ってウインク。

「改めて紹介するわ、ワタクシはおおぞら大空零奈。霊媒師の仕事をしていますわ」

「く、紅樹です……」

名前を言うと、大空零奈は「クスッ」と笑った。

「いえ、何でもありませんわ。で、今日はワタクシの依頼を受けてくださるんでしょう?」

「は、はい」

「いいわ、依頼ヒジネスの話をしましょう」

「依頼人は老人の殿方。何でも、最近になって後ろから黒い影が忍び寄ってきたら追い払ってほしいということ。まあこれを聞けば、あなたたちならだいたい何が憑いているか、お気づきでしょう?」

その話……確か前にも。僕は考えていると、親父は先に口を開いた。

「死神か」

そうだ、秋本先生が襲われた時だ。しかし、確か死神は……。

「ええ、死神は倒せない。追い払うのは術者を倒すか。もしくは憑

かかっている物を壊すこと」

「だが、お前のことだ。そんなものはとっくに調べているんだろう」  
「その通り。そして、そのような人や憑かかれている物は見つからなかった」

「ということは、死神は倒せないはずだ。なんせ、紅家のお札さえも通り抜けられてしまったのだから。」

「私らが出る幕じゃない。その老人はとっくに死期が来たってことだ。本人にもそう伝えておけ」

「そういうことをNOと言えないのが、この職業よ。大丈夫、倒す方法はちゃんとあるの」

「倒す方法があるだって!？」

僕は驚いた。なんせ、お札が効かない死神を倒せるということとは。

「あら、反応が大きいわね、樹君。やっぱり男の子ね、興味があるでしょう?」

いや、その言い回しは何か勘違いする。あとそのデケえ胸を見せてくるな。

「樹、悪いことは言わん。この話はなかったことにしろ」

「親父は止めてくるが。」

「樹君。男は度胸、何でも試してみるものよ」

僕は……（はい いいえ）

「て、選択肢を出すな！ 分かりました、やりますよ」

僕は諦めと、その方法に少し興味で受けてみることにした。

「方法はこう、あなたの家に最近、鬼切の娘が来たでしょう?」

鬼切の娘って燕のことか……。

「親父は話に入ってきた。」

「情報が早いな。どっから聞いた?」

「仕事柄、情報源は大切よ」

話を戻す。

「で、燕をどうするんですか」

「今回、その燕さんの力を借りて、死神を斬ってもらいます」  
死神を斬る！？ そんなことが可能なのか？

「本来、死神は思わぬことの拍子に物が当たると一目散に逃げます。それは死神が実体化してしまうからです」

「だが、今まではその方法がなかったが……なるほど、鬼切りの刀を使うのか」

親父は一人で納得した。確か、前に燕が刀を出したとき。

「この鬼切りは魔を斬るもの、ゆえに人は斬れん」

そんなことを燕が言っていた気がする。

「その通り、鬼切りの刃の魔を斬る特性をを使って実体化させる。

あとは逃げないようにワタクシが建物自体に簡単な呪術式で封じ込めますわ」

しかし、そんなことを燕は承諾してくれるのだろうか。

大空零奈が「では、そろそろ」と立ち上がった。

「それでは、御被い決行時はまた連絡ください。その時に場所や時間を指定しますが、できるだけ早くお願いね」

まあ今日中にその老人は死ぬかもしれないのだから、時間はないのだろう。

「それではまた」

そう言っつて、社を出ていった。あ、またドライアイスがモクモク出てきた。

「樹、これはお前の依頼だ。前のように助けにはいかんぞ」

「分かってますよ」

「なら、いいんだが。あの女はあまり信用するな。仕事の付き合い

「と思え」

「どうやら、親父は大空零奈を相当嫌っている。一体昔何があったの  
だろうか。」

「さて、まずは燕に聞いてこないとな」

「この仕事は燕がいなければ始まらないものだ。」

「僕は普段、この時間は神社裏の林で修行をしている燕に会いに向か  
った。」

「どうしたのだ、樹殿」

「木刀で素振りをしていた燕が僕に気づいた。」

「いや、少し話しがあつてな」

「さて、率直言うべきか、遠まわしに言うべきか。」

「御祓いの仕事ならやらんぞ。私は紅家を守ることが仕事だ」  
「ありゃ、バレてた……。」

「それが燕がいないとできないことなんだ。頼む、力を貸してくれ」

「私にしかできぬこと？　なんだ、それは」

「燕は少し興味を持ち出した。」

「死神を……倒す」

「ほう……」お、完全に興味を持った。

「しかし、どのようにじゃ」

「僕は先ほど説明された大空零奈の考えた案を言う。」

「なるほどのう、鬼切りの力を使って。しかし、そう上手く行くと  
も限らんが」

「少し燕は疑っているようだ。無理もない、僕や親父でさえ試したこ  
とがない手だ。」

「樹殿。私との条件を呑めたら付き合おう」

「どうやら、何かを切り出した。」

「私と本気の勝負をしないか？  
はい？」

「私は今まで九字護身法の力を侮っていた。しかし、この前の戦いを見て、武者震いがしてきたのだ」  
ように、どちらが強いかを決めるといふ。

「ふふふ、一枚、私も乗ったわ！ その話」と、聞き覚えのある声が。

「審判はこの私！ 紅綾香が勤めます！」  
うわ、出たよ。しかもなんかK1とかで出てくるレフェリーの格好だ。

「ルールは簡単。とにかく戦闘が続行できなくなったら、勝ち。万が一死ぬようなことあっても止めないのでよろしく」と、笑顔で姉さんは言った。

「て、そこは止めるやああああ!？」

「それでは、オハライファイト！ レディーゴー！」  
僕のツツコミを無視して、どこかで聞いたことのあるフレーズと共にゴングが鳴った。

「いくぞ、樹殿！」

いつの間にか、燕は本物の鬼切りを持っていた。

「安心せい！ 峰打ちで済ますつもりじゃ！ 骨の1本折れるかもしれんがな！」

「あ、安心じゃねええ!？」

逆向きに振ってくる鬼切りをなんとか避けながら、林の中走る。僕は走りながらお札を構えた。

「さすがに臨唱えて傷つけるのやばいな、それなら僕は走りながら途中の木に貼り

「兵!」を唱える。

貼られた木は動き、僕を追ってくる燕を止めようとした。

「甘い！」

と、鬼切りを刃向きに変え、木を一瞬に斬ってしまった。

「ちよ、自然を大切にしろおー！」

僕はまたもや走って逃げている。

「そ、それなら 皆！」

お札を1枚投げると、お札は動いて燕に貼り付こうとするが。

「シユツ！」普通にお札が斬られてしまった。

「樹殿！ 逃げてばかりでは埒が明きませんぞ！」

考える、考える。もし互角で戦うなら闘とを使つて、なんとかだと思  
うが。

あれをやると地獄の筋肉痛が待っている。仕事をするとしたら、そ  
んな身体にはできない。

「そうか……あれなら」

一つだけ打開策があった。

僕は急に立ち止まり、木に手を置いて呼吸を整えた。

「鬼ごっこは終わりか、樹殿。ゆくぞ！」

燕は僕の元に走りこみ、逆向きに振った鬼切りをなんとか避けたが、  
その拍子にこけた。

「隙あり！！」

追撃がすぐにやってくるが、燕の今の立ち位置を待っていた。

「！？ な、動かん！ これは陣じんか！？」

「燕、横の木を見てみな」

燕は横の木を見ると、お札が貼ってあった。

「く、あの時、呼吸を整えるふりをして」

そう、すでにその時にお札は貼っていた。

「これが前ぜんだ。前はその近くの範囲に入れば自動的に仕込んでおい

た九字護身法が発動する」

「ひ、卑怯なことを」

卑怯だつて？ これをよくやられたのは決まって、親父や姉さんだ。

「さて……と、燕！ 覚悟！」

僕は必殺技をした。

「コチヨコチヨコチヨコチヨ……」

「きゃ、ちよ、やめ、キャ、キャハハハハハハ」

陣コチヨコチヨ縛りは功をなし「降参」という声が聞こえた。

「勝者！ 紅樹！！」

レフェリーが高らかに僕の腕を上げた。

13話 紫ババアと燕の決闘（後書き）

紫ババアの歳は宗治と同じくらい。

つまり40前後？

女性はいつでもお姉さんです。

## 14話 飲みすぎ注意

「うう、卑怯な戦術じゃが、負けは負けだ」

陣コチヨコチヨ縛りから開放された燕は膝を落としていた。

「うつし、じゃあ僕は依頼者から詳しい話を聞かないと、いちおう燕も付いてきてくれ」

「かしこまった。少々準備をくれ」

と、燕は自宅に戻っていった。

とりあえず僕は連絡方法も分からないので親父の元に行こう。

「燕ちゃんは承諾してくれたのか」

神社の社務所に行くと、親父は聞いてきた。

「ああ、まあ力づくでといった所だけど」

「お前の依頼だ。私はお前の方法に口出しはせんよ」

「とりあえず、あの大空のおばさんに会いたいんだけど、電話とか知らないかな」

というと、親父はポケットから名刺を出した。

「あいつの名刺だ。電話より手っ取り早いから直接あいつの店に行け」

うわ……名刺まで紫かよ。

「ええと、バー『ウィッチ』大空零奈……?」

これは霊媒師の名刺じゃないよな。

「あいつの副業だ。表向きはバーのママで裏側はインチキ霊媒師だ」  
「な、なるほど」

どおりである色気な服というわけか。

「ま、まあ行ってくるよ」

「酒飲まされないようにしろよ」

親父にそんなことを言われたがまさかな……やりかねないか。  
僕は燕を迎えに自宅に行った。

「で、私はもちろん付いていくのよね？」

壁から綾香が出てくる。

「ああ、頼む」

「本人にそっけない態度してても、心配なわけね」

「うるせえい」

「では樹殿。行こう」

自宅で燕を待っている、服を着替えたらしいが……。

しかし、さっきの修行も同じ袴姿だったよな？

「なあ、さっきとどう着替えたんだ？」

「さすがにあのままでは汗臭いだろ」

なるほど……そこは女の子なわけか。

僕たちは商店街にあるバーにたどり着いた。

「樹殿。本当にここなのか？」

「確かに名刺にはそう書いてあるんだけど」

古い感じでいかにもお化け屋敷みたいな店構え。

バー「ウィッチ」 初めてのの方でもお気軽入れます。

と、またもや妖しげな紫色の看板があった。

「私はこういう店は初めてなんだが……」

「それは僕だって初めてだよ」

恐る恐る、僕たちは中に入ってみることにした。

「す、すいませーん？」

店内は少し薄暗くカウンターテーブルにイスが並んでいる。

「すごい種類のお酒だ」

棚にはいろいろな種類のお酒がある。どれも高そうだ……。

「そのお酒集めるのには何年もかかったわ」

と背後から大空零奈の声がした。

「うわあ、出た」

「何が出たですか。親子そろって失礼ね、あなたたち」

いや、背後から紫色のおばさんがいきなり話しかけてきたら誰でもビビる。

「だから、お姉さんよ？ 樹君」

だから、なんで僕の考えてること分かるんだよ。

「それで、依頼を受けに来たんでしょう？ あら、そちらの方が鬼切燕さんね」

大空零奈は僕の後ろに少し身を寄せていた燕に気づいた。

「あら、ずいぶん樹君のこと頼ってるのね。もしかして、あなたたち……」

それに気づいた燕は僕を蹴っ飛ばした。

「わ、私は別にいきなり話しかけられて驚いたただけだ！ べ、別に樹殿のことは……」

うん、見事なツンデレだと関心するが。

「あうち……」

「だ、大丈夫か！？ 樹殿」

僕は大事なところを蹴られていた。

「あなたたち、おもしろいわね。ワタクシの名は大空零奈。よろしくね、燕さん」

と、燕にあいさつをし、カウンターの向こう側に行った。

「それじゃあ、そこに座って。何か飲む？」

と、僕に勧めてきた。もちろん首を横に振った。

「まったく、男は度胸よ？ 燕さんは飲む？」

「では、私はもらおう」

！？ 燕？まさか何出されるか気づいてないんじゃないか？

「あら、なかなかの子ね。はい、これ」

すると、なにやら氷を入れたグラスに茶色の液体が入った物が出された。

「ふむ、これは麦茶か何かか？」

と、燕はグイッと一気に飲んだ。

「……………」

燕は真っ赤な顔になって倒れた。

「つ、燕ー！」

「あらら、さすがにお子様にもウオツカはきつかったかしら  
アルコール40%を飲ませるなよ……………」

「うう、樹殿？ 私はどうしたのだ」

頭を抑えた燕が起きた。

「水とエタノール混ぜた物飲んだだけだ。とりあえず、まだ寝てる  
僕はソファで燕を寝かす。」

「なんか悪いことしちゃったわねえ」

「十分悪いですよ」

倒れた燕を抱きかかえ、奥に案内されたのは妖しげな霊媒グッズが  
ひたすらある薄気味の悪い部屋だった。

「ここはワタクシの裏の顔、霊媒師の大空零奈として仕事する場所  
よ。ここで依頼を聞いたりするの」

奥のソファに座りながら大空零奈は言うが。

「それで、今回の依頼の内容を詳しく聞きたいんですが」

「いいわ。まず依頼者について」

「依頼者は独り身のおじいちゃん。お歳は今年で95歳。依頼され  
たのは少し前だったんだけど、今ではお体を悪くして病院に入院な

さってるわ」

「9、95!？」

その歳はさすがにお迎えが来ていいのではないだろうか。

「それで、その死神が現れたのはいつなんですか？」

「それが……その黒い影を見るようになったというのは90歳らしいのよ」

「じゃあ、5年も憑かれててやっと病院に入院されたんですか」  
死神…… 仕事しているのだろうか。

「でも、最近になって急に黒い影を見る頻度が増えたそうよ。たまに見えたときは二体いたと聞いたわ」

「に、二体!？」

あの死神が二体も付いていながら、やっと命があぶないと。

「それじゃあ、早速やらないといけませんね」

「乗り気になつてうれしいわ。とりあえず作戦を説明するわね」

「まず樹君は死神が近づいてくるか、そのおじいちゃんの護衛をしてもらいます。近づいてきたら燕ちゃんの刀で斬り、実体化。そこで私が入院している部屋自体に簡単な結界を貼って出れなくします」と、簡単に説明するが。

「でも、二体いるってことは片方だけ斬ってももう一体いるってことか」

「そういうこと。それを2回やる燕ちゃんだけど」

僕と大空零奈はソファーに寝てる燕を見る。

「も、問題ない」

と、重い笑顔で僕に伝えた。いや、だめだろ。

「まあ、とりあえずその病院に向かいますでしょうか」

「さあ、着いたわ。ここが依頼人が入院されてる病院」

僕たちの住んでいる地域で一番大きい総合病院だ。

「しかし、大空さんって。車運転できたんですね」

道中、ここまで大空零奈が運転する車で連れてきてもらった。

「まあ、これも仕事柄よ。それにその子をここまで連れてくるのは酷じゃない？」

僕は燕を抱えていた……まああなたのせいなんだが。

「ほ、本当に大丈夫か燕？ 無理しなくていいんだぞ？」

心配になって声をかけるも。

「し、心配するでない。これも修行だ」

と、無理な笑顔で言った。

「とりあえず、依頼者さんに面会しに行きましょう。ええと沖田おきたさんの部屋は」

大空零奈は受付で面会手続きに行った。

「た、樹殿……かわや厠かに行きたいのだが」

燕を支えていると、そんなことを言ってくる。

「か、厠？」

厠かってなんだろうか。ええと……。

「トイレのことよ。樹君」

と、受付が終わった大空零奈が戻ってきた。

「じゃあ、燕さんのことは私に任せて。先に沖田さんに会ってきてくれるかしら。場所は305号室よ」

「分かりました」

僕は燕を大空零奈に任すと、エレベーターに乗る。

「305号室は……ここか」

エレベーターを3階で降り、目的の部屋を探すとすぐに見つけることができた。

「ごめんください」

僕は恐る恐る部屋のドアを開け入る。

「なんじゃ？ 坊主は」

中を見ると、シワの寄せたおじいちゃんがベッドに寝ながらテレビを見ていた。

どうやら入院している所は一人部屋のようだ。

「あ、大空零奈さんと仕事をします紅樹と申します」

「おお、零奈ママのお弟子さんか！」

れ、零奈ママ？

「わしはあそこの常連でな。今回も悩み相談でこのことを言つと解決してくれると言つてな」

「は、はあ……」

と、僕の後ろのドアがガラッと開く。

「沖田さんー。大丈夫ですか？」

来たのは、大空零奈と燕の二人だ。

しかし、燕が普通に立っている。もう良くなったのだろうか。

「つ、燕？ 大丈夫なのか？」

「おうー樹殿ー今の私なら何も心配することはないぞー」

げ、こいつ酔ってる。

大空零奈は僕に耳打ちしてくる。

「頭痛くて気持ち悪いときはまた飲むのが一番よ」

いや、それはおかしい。

どうやら大空零奈はまた燕に何かアルコールを飲ませたようだ。

「ほほう、またかわいい娘を連れてきておつたな。新しい店の子かい？」

おじいちゃんは反応する。

「まさかー、この子はこの樹君の『コレ』よ」

「ち、違うよ!？」

僕は否定するが。

「コレってなんだー樹殿ー」

お前は知らなくていいことだ、燕。

「それでは沖田さん。今回の黒い影のことですか」  
大空零奈は話を変える。

「そうじゃ、それは夜に毎回私の元にきよる。しかも最近になって  
2体が増えてのう」

つまり、夜までいないと死神は現れないと。

「しかし、面会時間を過ぎてしまっくんじゃ？」

僕は 大空零奈にそのことを質問すると。

「それは大丈夫。ここの病院の院長さんも私のお店の常連さんだから、ちゃんと話は通したわ」

「な、なるほど」

この人、侮れないな。

「病院とはーなかなかー寝心地がいい寝具で寝てるのー」  
夜になって燕は眠いのか、部屋の中にあっ たもう一つ余分なベット  
で横になっていた。

「零奈ママは部屋の外にいるが、そなたたちだけで大丈夫なのかの  
う」

「大丈夫ですよ。むしろ僕たちのほうが安全ですから」  
死神が出たら病院の中だが携帯で連絡をして部屋に結界を貼っても  
らうということになっている。

それにあの人は除霊ができないっていうから足手まといだろう。  
しかし、簡単な結界ってどういうものなのだろうか？

すると、いきなり。

「な、なんじゃ！ 電気が消えた！」

パツと明かりが消えた。来たか！

「き、きた！ 奴じゃ！」

おじいちゃんが指を指した方向を見ると、確かに黒い影が現れ

た。が……小さい？

「確かに鎌を持って、よくみたら骸骨で確かに死神だが……」  
しかし、よく見ると何か小型だ。

「と、とりあえず。電話してと」

僕は大空零奈に電話すると、すぐにつながり、切れた。

どうやら、病院を配慮して短くしたんだろう。

「燕！ 死神が出たぞ！」

「うぬー？」

燕はその言葉を聞いて起き上がると、目の前の死神いるのを気づいた。

「うおおおー！ 成敗じゃー！！」

と、燕は鬼切りの刃を抜いて、死神の骸骨部分を割った

「へ？ な、なんで割れるの？」

妙に若い声と共に骸骨から割って出てきたのは……男の子？

「ゆ、幽霊？」

なんと死神の正体はただの変装をしていた幽霊だった。

「あ、あの？ 君はなんで死神の格好していたのかな？」

僕は男の子に話しかけると。

「ぼ、僕は死神だ！ ただまだ見習いで」

なるほど、死神に憧れている男の子が幽霊のフリをしてと……。

「あのさ、もう一人死神いるの知らないか？」

「え？ あつ、師匠のこと？」

師匠？ こいつに師なんているのか。

「師匠なら、もうちょっと夜中に現れると思うよ」

どうも遅い時間帯らしい。

と、僕をぼーっと見つめるおじいちゃんの視線に気づいた。

「坊主、一体何をさつきから独り言言っているんじゃない？」

どうやらおじいちゃんは見えていないようだ。

「うおっ！？」

いきなり僕はブルブル震えた。どうやら携帯のバイブレーションのようだ。

「マナーモードに設定してたな。ん、大空さんからだ」

「どうやら電話らしく出ることにした。」

「どうしたんですか。大空さん？」

と、僕はたずねると。

「間違えて、異界化にしちゃったテへ」

「異界化って……」

異界化とは実際の世界と同じような見た目の世界だが、まったく別の異次元の世界に入れてしまうことだ。もちろん、実際の世界に戻るにはその異界化を呪術を解くしかない。

親父の解説が聞こえてきた……。

「つまり、僕たちはここに閉じ込められてしまったってことか!？」

「とりあえず今解こうとしてるんだけど……解く術式忘れちゃった」

「あ、まてええい!」

死神どこの話ではないぞ。

「いちおう、あなたのお父様に頼んで行って来るから、しばらく辛抱しててね。あ、ちなみに死神とか幽霊はその世界には出入りできるみたいだから」

と言い残し、電話が切れた。

「じゃ、じゃあ僕はこれで」と、死神のフリしてた男の子は逃げようとしたので。

「陣!」

僕はすかさずお札を貼っておいた。

「どうやら、これからが大変なことになりそうだ。」

## 14話 飲みすぎ注意（後書き）

昔、ロシア人の15歳という友人がウオッカをそのままガブ飲みしていた経験を忘れない。もちろん、僕も試されたけど……無理です。死にます。

## 15話 死神との決着

僕たちは異界に閉じ込められてしまった。

ここにいるのは僕と酒に酔っていている燕とおじいちゃん（沖田一）そして、死神のフリをしていた男の子の幽霊。

「ううー動かない」

男の子の幽霊はモゾモゾと動かそうとしているが無駄だ、陣のお札を貼ったのだから。

「こんなことしてボクをどうするんだよー」

「とりあえず君の事を聞こうか」

「ボクの名前は幸太郎。実は死神に憧れて師匠の下で死神の修行をしていたんだ」

死神の修行？ 死神って幽霊でもなれるのだろうか。

「その師匠のことをよく聞きたいんだけど」

「それを言ったらボク怒られちゃうよ」

と男の子の幽霊はしゃべるのを渋っているようだ。

「樹殿……ここは私が……」

と、燕は僕をのけて男の子の幽霊の前に立った。

「そ、その刀でボクを斬るの？」

どうやら幸太郎は燕の刀に恐れているようだ。

すると、燕はニヤリとした。

「くらえい〜コチヨコチヨ……」

燕は幸太郎にコチヨコチヨした。

「な、ちよっ。ま、まって、ぎゃ、やめて、ぎゃはははは」

「日ごろのされた恨みじゃあああああ」

燕は必殺技をしていた。

相当、根に持ってたんだな……。

「わかった！ わかったから！ やめて」

と、幸太郎はギブアップしたようだ。

「師匠は本物の死神で、そこのおじいちゃんに憑く前から弟子入りしてたんだ。でも、ぜんぜんそこのおじいちゃんを殺すことができなくて……」

「それで5年もかかってしまったのか」

「うん……」

しかし、幽霊でも人を呪い殺せることはできるはずだ。

少し、おじいちゃんに話を聞いてみよう。

「ねえ、おじいちゃん？」

「なんじゃ、坊主」

「おじいちゃんが黒い影に憑かれた5年間。どのようなことが起こった？」

「わしのその5年間は実に最高じゃった。病気など一切なかったし、宝くじは当たるわでいい事づくめじゃ」

まるつきり殺すどころの話じゃ無くなったわけだな。

「それがもう一人の黒い影が出たときに少し体調を悪くしてのう。」

そのまま入院じゃ」

なるほど、それが幸太郎の言う本物の死神ってことか。

「でも、師匠を見かけたのは最近になってなんだ。それまでどっか行ってたのに」

幸太郎は不思議に思っていた。

「何かその死神にあったのだろうか……燕はどう思う？」

と聞いてみると。

「うう、気持ち悪い……」

燕の酔いが覚めたようだ。

「その娘は大丈夫なのかい？」

おじいちゃんも心配してくる。

「ちよっと、外出て確かめてみるよ」

僕は部屋から覗いてみると、病院は薄暗い。

「誰もいないな……これが異界ってことだな」

僕は廊下に出て、エレベーターを起動しようとしたが反応がないので仕方なく階段を使い受付に行ってみた。

「誰もいないけど、物とかは現実世界のそのままのわけか」

玄関から外の様子を見ると、真っ暗闇になっていた。

「外にも出れないと。これは……大空さんとかがなんとかしてくれないと出れないな」

そういえば、幽霊や死神などは出入りできると大空零奈は言っていた。

「つまり……アレも来れるのか？」

アレ……まあ、つまり。

「私のことね？」

いつものように僕の目の前に姉さんはプカプカ浮いていた。

「とりあえず姉さん。向こうの世界の様子はどうなった？」

僕は驚かず冷静に姉に問う。

「相変わらずリアクション薄いわね。まあ現実世界のほうは大空おばさんが、お父さん呼びに行ったから大丈夫よ」

「しかし、なんでまた結界が異界化するのやら……」

「なんか間違えて、禁術の本を見てやってしまったらしいわよ。まったくドジよね。あのおばさん」

そのドジのせいで僕たちは少し困っていることになっているんだけど。

「ギヤアアアアアア」

おじいちゃんの悲鳴が聞こえた！もしかや。

「樹、急ぐわよ！」

姉も一緒に僕たちは階段を上がる。

入院部屋を見ると、そこには大きな黒い影がいた。

「こいつ……前にも見たことあるような」

姉は何かつぶやいたが、黒い影は大きな鎌をおじいちゃんに振り下げようとしている。

「あ、あぶない！」

僕はとっさにおじいちゃんを連れ出して避けさせた。

「間一髪だった……」

「な、なんじゃ！ あいつは！？」

おじいちゃんも慌てている。とりあえず、燕を見ると、ベットに寝ていた。

「樹！ 死神が来るわよ！」

黒い影は骸骨の姿を見せ、僕とおじいちゃんに迫ってきた。

「おじいちゃん！ とりあえず逃げますよ！」

「ろ、老体をもつと労われ！」

僕はおじいちゃんを背負って、階段まで逃げた。

「行かせはしないわよ！」

姉は死神をなんとか止めている。

「えっ、あなたはあの時の！？」

姉は一瞬の隙を見せた為、そのまま退けられた。

「キヤッ」

死神は僕たちの後を追う。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

陣に縛られていた幸太郎は姉を心配していた。

「うう、なんとか。君、ちょっと頼みごとがあるの」

「な、なに？」

「あの子の刀を樹まで届けてあげて」

姉は寝ていた燕の傍にある刀を指した。

「で、でも師匠が」

「確かにあなたは師匠を思いあげてるわ。でもね、今あなたの師匠

は間違っていることをしている。あなたはそんな師匠に憧れたの？」  
「ボ、ボクは……」

「ボクは捨て子でずっと一人だった。両親もいなくて、友達もいない。孤児院から逃げ出して、そのまま飢えで誰も気づいてもらえずに死んだ。でもその時に師匠が現れて、ボクの魂と一緒にあの世まで持っていくと言ってくれて、初めて孤独じゃ無くなった。それに憧れて死神になりたいとボクは言い出したんだ」

「ボクは……人殺しする師匠を見たくない！」

姉は陣のお札を解いた。

「よし、いい眼になったわね。じゃあ、あの刀を頼むわね」

「はい！」

幸太郎は鬼切りの刀を持って、樹たちのあとを追いかけた。

「ち、逃げ場が無くなったか」

僕はおじいちゃんを背負いながら、屋上まで逃げたがもう逃げ道は無くなった。

目前には死神が来ている。

「さて……考える。何か手はないか」

しかし、奴には実体化させないと九字護身法は効かない。

「手はないのか……」

僕は屋上の端まで来ていた。もう後ずさりもできない。

死神は鎌を振り上げ、僕ごとおじいちゃんを斬ろうとする。

その時。

「師匠！ 待ってください！」

という声を聞き、死神の鎌はピタッと止まった。

「こ、幸太郎？」

陣で縛っていたはずの幸太郎が死神の後ろにいた。

「師匠、やっぱり人を殺すなんて間違っています！」

幸太郎は大声で叫んだ。

死神は鎌を持ち直して、幸太郎に向かいあう。

「幸太郎。貴様はやはり死神にはなれぬ。死神とは本来、人を狩るもの」

死神はしゃべりだした。

「違う！ 死神は！ 人の魂をあのお世まで連れていくだけだ！」

そう幸太郎は否定すると、死神は少し笑った。

「ハハハ、違うぞ、幸太郎。人の魂を死神があのお世まで持つていくのは価値のある魂のみだ」

「そ、そんな」

「お前の魂はそう、言うなれば幸運をもたらす魂だ。その魂を持つていけば私の価値も上がる」

幸運をもたらす魂……やはりこのおじいちゃんがいい事づくめだったのはそのせいだ。

「じゃ、じゃあなんで師匠は僕の魂を連れていかずに死神になろうとした僕を！？」

またも死神は笑う。

「簡単なことだ。もつと人間の世界にいて価値を高めさせる為だ。そうすれば魂は極上のものになる」

「そんなこと……それじゃあこのおじいちゃんは」

「私があるとある事情で見ない間に、この老人の魂が価値のあるものに変わっただけのこと」

つまり……価値のある魂を持っていく為に、死神は人を殺していたのか。

良い人ほど死にやすいというのはこういうことか。

「師匠……ボクはあなたを許せない！ お兄ちゃん、これを！」

幸太郎は僕に何かを投げってきた。

「これは！」

僕は受け取り見ると、これは燕の鬼切りの刀だ！

「師匠を！」

おじいちゃんを座らせた後、刃を抜いて死神に挑む。

「なるほど……あの時の奴か」

死神はボソつと言った。

こいつは昔、僕と会っている？

「まさか、あの時先生を襲った！？」

あの死神は携帯に封じ込まれていた物だ。つまりそれが逃げ出したというわけか。

最近になって現れたのも納得がいく。

「あの時の決着を着ける時だな！」

死神も鎌を構える。

刀など振ったことない僕は無我夢中で斬りつけようとするが。

「甘い！」

簡単に鎌ではじき返されてしまった。

「さすがに燕ほどじゃないと無理か」

しかし、肝心な燕はベットで寝ている。

どうする……そうか！

僕はお札を取り出し、刀に貼った。

「兵ツレ！」

唱えると、刀は宙に浮き出した。

「あの鎌ではじき返されたとき、あれはどつやら物理的な力だった。もしかしたら」

僕は宙に浮いた刀を死神に特攻させる。

「くっ！しかし、この程度では私は倒せん！」

死神は鎌ではじくが、もちろんこれだけじゃない。

「皆<sup>みな</sup>！」

僕はお札を動かし、死神にへと向けさせた。

「私にその力は通用しないぞ！」

と、死神はお札を無視したが、もちろん僕は死神自体目的ではない。

見事、お札は死神の鎌に貼り付いた。

「今だ！ 陣！」

鎌は動けなくなり、持っていた死神も止まる。

「くらええ！」

鬼切りの刃で僕は死神を斬った。

「バカな……私の実体が。くつ、ここは逃げるしか！」  
と、死神は逃げようとしたが。

「陣！」

姉はいつの間にか死神にお札を貼り付けていた。

「美味しいところ持ってちゃってごめんね。樹」

ほんとだよ……。

「さて、どうする樹」

姉は聞くが、これは僕より聞くべき相手がいるだろう。

「幸太郎。君が決めな」

幸太郎は死神に近づき、お札を取り剥がした。

「なにをする？」

死神はその行動に驚いていた。

「それでもボクの師匠だから」

「甘いぞ、幸太郎！」

すぐ様、死神は動いておじいちゃんに掴みかかった。

「幸太郎！ これが死神だ！ 私らは人を狩る者」

おじいちゃんを屋上から外に投げ捨てようとしたが、僕はすぐに動く。

「臨！」

「ぐはああああ」

お札を飛ばし死神を切り裂く。

なんとかおじいちゃん投げ捨てるのを止めることができた。

「そうだ、これが死神の末路だ」

切り裂かれた死神は倒れ、幸太郎はすぐに駆け寄る。

「師匠！」

「死神などにはなるな。お前はお前なる道がある」

死神は骨の手で幸太郎の頭をなでた。

「ボクのなる道……」

死神はその言葉を言い残し、灰になっていた。

僕はおじいちゃんを背負って、元の入院部屋に戻った。

「大変な目にあったわい」

おじいちゃんはやれやれという顔をしている。

燕は相変わらず、寝ているようだ。

「さて、幸太郎。これからどうするんだ。やろうと思えば天国にでも送れるけど」

幸太郎は考えた末、こう答えた。

「師匠はボクを幸福をもたらす魂と言った。だから、全国を回って幸福をもたらしてきます」

幸福をもたらす男の子の幽霊……あれ、それって。

「つまり幸太郎君は座敷童ざしきわらしになるわけね」

と、姉が言った。

「はい！」

笑顔で返事をし、そのまま消えていった。

なんとか、その後に異界の呪術は解けて、部屋に大空零奈と親父が

入って来た。

「無事？ 沖田さん」

大空零奈はおじいちゃんに駆け寄る。

「おお、なんとか無事じゃ」

「そう、それは良かったわ」

依頼を果たすことはでき、僕は頭痛に苦しむ燕を背負って帰路に着いていた。

しかし、ボクはあの死神がそんなに悪い奴には見えなかった気がする。

「なんだか、歯切れの悪い依頼だったわね」  
姉もそんなことを言う。

しかし、異界化か……あんなものが普通に人間にできるのだろうか。

「零奈。初めから結界なんてするつもりはなかったんだろう」

大空零奈のバーで親父はカウンターに座り、たずねていた。

「あら、なんのことかしら」

大空零奈はとぼける。

「魔女め。あの時、死神を操って、俺を殺そうとしたことを忘れたのか」

「ふふふ、なつかしいわね。でも、これは樹君の為の実験よ？ 将来、樹君が『もしも』の時になった時の」

「そうはさせない。それは紅家として、あいつの親としての責任だ」  
親父はウォツカをグイッと一気で飲みほした。

## 15話 死神との決着（後書き）

座敷童で有名だった旅館が火事にあってしまったそうで、とても残念です。

そんなこともあってか、こつこつ話を書こうとしましたが、思ったより長くなってしまった……。

## 16話 音楽室には？

いつもの朝、僕は燕と学校に向かう途中、たいてい結衣に会う。

「樹と燕さん、おはようー」

結衣はあいさつしてきた。どうやら、この前の鬼のことは覚えてないようだ。

「おう、おはよう」

「おはようございます」

さて、僕はたいていここで結衣に何か憑いてないかを確認している。というのは結衣は靈感はないくせに憑依体質（靈に憑かれやすい体質）なので常に見てないと何が出るか分からない。この前の鬼のこともよく見ておかなかったのが仇になったわけだ。

「ジー……」

僕は結衣を見つめていると、それに気づき結衣は頬を赤らめる。

「ちょ、何？ なにか顔に付いてる？」

「いや、特になにも憑いてないぞ」

うん、今日は珍しく憑いてない。

「樹殿、あまり女子の顔を見つめるのは……」  
残念ながらそういう意識はない。

三人で学校に着くと、なにやら入り口に人だかりができて騒がしいことになっている。

「ん、一体どうしたんだ？」

「あ、あれは正輝じゃない？」

「なにやら配っているようだ……」

結衣が指を差した方向を見ると、なにやら人ごみの中に台に乗って何か紙をバラ撒いている正輝が見えた。

「号外だよー、号外だよー」

どうやらバラ撒いているのは正輝が新聞委員会で作っている学校新聞のようだ。

僕は1枚、落ちてきた紙を拾う。

「ええと、アッキーモが学校の見回りで七不思議に会う……?」  
なんだ、この内容。

続きを見てみると。

「昨夜、新聞委員は学校の見回り係になったアッキーモに尾行取材。途中にアッキーモとはぐれるも悲鳴を聞き、即座に駆けつけると、そこで見たのは音楽室で腰を抜かしているアッキーモだった」

またこの尾行した新聞委員というのは正輝のことだろう。

「これ正輝がネタの為にやったんじゃないよね?」

結衣の言葉に僕も同意見だった。

「お、そのトライアングル関係!」

「な、なんじゃ? トライアングル関係とは」

燕は疑問に思っているが、三角関係とでも言いたいのだろうか。

いや、別にそんなことは断じて意識してないのだが。

正輝は僕たちに気づくと、台から降りて即座に駆け寄る。

「残念ながら、これは俺のネタじゃない。だって俺のネタを仕掛けたのは理科室で……」

ああ、やっぱり何か仕掛けていたのか。

「とまあ、音楽室は何も仕掛けてなかったんだ」

ふむ、学校の音楽室というのは何かと学校の七不思議にある。

ピアノが勝手に弾き始めたり、ベートベンの肖像画の目が動いたり  
と。

「で、その七不思議が何か分かったのか?」

「いや、実は俺にもその悲鳴を上げたときのことを見てないんですよ  
く分からなかった。当のアッキーモ本人もこのことについて何も語

らないし」

ああ、つまり……。

「そう、それをお前に調査してほしいんだ」

そういうことになるというわけか。

「なんで樹が調査するかわかんないけど、あんまり音楽室には行かないほうがいいと思うよ」

結衣が何か不安そうに言うてくる。

「音楽室のこと何か知ってるのか？ 結衣」

「私も友達から聞いたことだけで、詳しくは知らないんだけど」

「昔、ピアノが大好きで家にほとんど帰らず、学校の音楽室ですつとピアノの練習をしている女の子がいたの。家にはピアノが無いんだけど、とても上手でコンクールに発表できるほどの腕前。ついにそのコンクールの前日に学校に泊り込みでピアノの猛練習をしたそうなの。で、コンクール本番にその子は現れなかった。学校にいたはずなのにいないし、みんなで探し回ったそうよ。そして、ついに見つけた女の子は……ピアノの中にいて、首を引き裂かれていた」

「ありがちな話だなあ」

「それなら、なんで先生無事なのっていう話だしな」

僕と正輝はその話を聞いて、あまり納得しなかった。

「ピアノとは……中に入れるのか？」

どうやら、燕はピアノのことをよく分かってないようだ。

「だ、だって私もこの話は聞いただけだから。」

まあ、もしかしたら新聞などに扱われているのかもしれない。

「うーむ、そういうことならあとで図書館で調べてみるか」

正輝はとりあえず信じてみるようだ。

とりあえず、人だかりもだんだんと無くなってきたところで、もう

すぐ登校時間になる頃だった。

「と、もうこんな時間か。急ごうぜ樹」

即座にバラ撒いた新聞を回収して、正輝は教室へと向かった。

「うし、僕らも急ぐぞ」

「うん！」

僕ら3人も教室へと急いだ。

教室でもうすぐHRホームルームの時間だ。

扉がガラッと開くと出てきたのは秋本先生だ。

「おはようございます……」

「!?!」

クラスメイト全員が驚いた。

「え、アッキーモだよな？」

何より一番驚いているのは正輝だ。

「内藤君。HRを始めますから静かにしてください……」

『こいつは秋本先生じゃない』とクラスのみんなの考えは同じだろう。

「ア、アッキーモ。やっぱり昨日のことが……」

正輝はなおも質問する。

「内藤君……と紅君。そのことであとで話があります」

なぜか僕にも話があるという、僕は何もしてないよな……。

「た、樹殿。もしやまた正輝殿と良からぬことでも……?」

燕は普段、僕をどういふ目で見ているんだろうか。

なんとかHRも終わり、僕と正輝は秋本先生に呼び出され、進路指導室にいた。

「ここなら今の時間は誰も来ないわ」

しかし、本当にいつもの秋本先生ではない。

それになぜ僕まで呼び出される羽目になるのか。

「あ、秋本先生。正輝は分かりませんが、どうして僕も？」

「紅君。あなた自身には何も関係ありません。ただ関係あるのは、亡くなったあなたのお姉さんです」

「姉さん！？　そういえば、姉さんと秋本先生は学生時代の友人だったというの聞いたが。」

「でも、なんでそのことが樹のお姉さまと昨夜のことが関係するんです？」

正輝の言うとおりそうだ。そのことを今になって言う必要性がないはずだが。

「あなた達は音楽室の噂は聞いた？」

噂とは、結衣が言っていたことだろうか。

「女の子がピアノの中に遺体として見つかったという奴ですかい？」

「ええ、実はその女の子　理香子りかこと紅君のお姉さんの共通の友人だったの……」

「!？」

そんなことは初めて聞いた、そんなことを一度も姉は言ったことがなかった。

「ええ、いつもその3人だった。でも、まさかそんなことが起きるなんて……」

「やはり殺人事件なんですか？」

正輝は率直聞くと、秋本先生は首を横に振る。

「それがまだ分かってないの。自殺にしてもカッターになるようなものもないし、学校も警備が厳しかったから人が入った形跡もないつまりまだ未解決時間というわけか……」

「なあ、やっぱり」

正輝は僕にこっさり聞いてくる。

「ああ、もしかしたら僕の仕事方面になるかもしれない」

「で、先生はその、何かを音楽室で見たんですか？」

「ええ、見たわ……理香子を……」  
どうやら亡くなった友人を見たそうだ。そこで悲鳴を上げたわけか。  
「それで折り入って、二人には頼みたいことがあるの。今日も私は  
学校の見回りをすることになってるわ。その時に二人にも付いて  
来てもらいたい。もちろん親御さんの許可も取るわ」  
「でも、なぜ僕を。僕はその関係は……」  
未だになぜ僕に聞くのか。  
「あなたのお姉さんが亡くなる前に私に言ったの。何か本当に困る  
ことがあったら、弟に頼めと」  
ああ、そういうことね……。

僕は特に断る理由もないし、正輝はむしろ喜んでとそのことを引き  
受けた。

進路指導室を出るときに、正輝は聞いてくる。

「で、その樹のお姉さまは？」

確かに、いるならすぐに問い詰めたところだが今はいない。

「やれやれ、その様子だとまたいないのか。じゃあ、俺は図書館に  
行ってその記事あるかを調べてくるか」

そういつて、図書館に走っていたのだが。あれ、次授業じゃないか？

「お、おい！ 正輝！ 授業サボるな！」

この正輝のサボリ癖はなんなんだろうか。

「樹殿！」

教室を戻る中、燕に呼び止められた。

「やはり、いつもの先生ではなかった気がするが。何で呼び出され  
たのだ？」

燕も先生のことを気になるようだが、さすがに先生は知られたくな  
いのだろう。

「いや、なんでもないよ」

僕は燕にはしゃべらないでおいた。

古典の授業中、図書館に行っている正輝のことが気になった。やはり尾行していたのか、秋本先生のことだからか、いつもより真剣な気がする。

確かに不可解な事件だ。もしそういうような殺人ができる幽霊や妖怪がいるとしたら、まあいくらでも候補はある。しかし、そのようなことは決まって第二、第三の被害者が出るはずだが、そういう話はない。

「やはり、殺人か……？」

そして、気になったのは先生の友人の幽霊が出たことだ。今頃一体、何のようなのだろうか。

それになぜか姉さんを見ない。いつもならここらで飛んでくるはずなのだが。

「樹……」

ボソっという声が聞こえた。姉さん？とも思ったが、これは男の声だ。

「ここだ、ここ」

どうやら、正輝が先生に見つからないように机の下に隠れながら移動していた。

「いやあ、新聞では載ってなくてさ。でも、音楽室通りがかったら、少しだけ気になる情報聞いたぜ」

とりあえず、早く席に座わったほうがいいと思うのだが。

「先生！ 正輝殿が今頃授業に出てきたのだが」

隣の席にいた燕が正輝を先生にチクった。

それに気づき、正輝は廊下に立たされるのであった。

「燕ちゃん！ 裏切ったな！」

自業自得だと思っただがな。

なんとか授業も終わり、廊下から開放された正輝によく話を聞いてみる。

「で、気になる情報というのは？」

燕にバレないように正輝とこっそりと話す。

「実はな、さつき音楽室で校長とたぶん音楽楽器の業者が話しをしていたのを聞いたんだ」

その話を聞くと、察するに楽器を買ったのだろう。

「その時にな、音楽室の倉庫にあるピアノを引き取ってほしいっていうんだよ。どうやらすごい昔のピアノらしくて、もしかしたら、あの時事件があったときのものなんじゃないかな」

つまり……そのピアノが今もあるってことが。しかし、なぜもっと早く引き取らないのだろうか。

「どうやら、ピアノって結構処分するのが難しいらしいんだ。あと、これは僕の予想だがあまり事件のことは公にはしてないと思う。その為にピアノもほとぼりが冷めてから引き取らせると考えたんじゃないだろうか。新聞にもなかったぐらいだし」

もしかしたら、幽霊が出てきたこともそれと何か関係あるのかもしれない。

「とりあえず、実際そのピアノを見ないとな」

僕たちは昼休みに音楽室に行くことにした。

16話 音楽室には？（後書き）

お待たせしました。

とりあえず七不思議話を登場させるかということですが、今回はこのように。

燕は少しおやすみの回です。

## 17話 ムーンライト伝説

昼休み

「で、問題のピアノってというのは……」

僕たちは昼飯を食べたあと正輝と一緒に音楽室の倉庫に来ていた。音楽室の倉庫行くには音楽室を通り、そのまま連絡しているドアから行く必要がある。

「お、あれあれ」

正輝が指を指したのは埃まみれでポツンと立っているピアノだ。僕は埃を掃うと、相当な年代物のようだ。

「……」

鍵盤を叩いてみるが、どうもピアノの音が出ない。

「壊れているのか」

「ちよつくら中見てみようぜ」

正輝はピアノの蓋を取ると、弦はめちゃくちゃになっていた。

「こりゃ、ひどいな」

通りで弾けないわけだ。

「ここに例の女の子が入っていたっばいな」

正輝の言うとおり、そうなのかもしれない。

僕は弦をよく見てみると何やら赤い物が付着しているのに気づいた。

「これは……血？」

「もしかして、これで首を切ったのかな」

確かにピアノ線はとても鋭い。

「あれ、ここに何か紙があるぞ」

正輝がピアノの中の片隅から手に取ったのは楽譜だった。

楽譜には『月光』と書かれている。

「月光……英語でいうとムーンライトか」

英語にする必要性がないと思うが、正輝。

「ムーンライトか……」

正輝は思いつめた。

「ど、どうしたんだ？」

僕は恐る恐る聞くと、正輝はポーズを取り叫びだした。

「ムーンライトパワー！メイクアップー！聞いたことあると思  
つたらこれだよ、これ」

別にそのポーズをすることは無いと思うんだが。

「そこで何しているの？」

不意に後ろから声をかけられ、僕と正輝は一瞬たじろいだ。

しかし、この声は聞いたことがある声だ。

後ろ振り向くと、美香さんがいた。

「み、美香さんこそ、ここで何を」

「私は音楽委員だから、楽器の整理に来たんです  
音楽委員だったとは……ということは。」

「美香さん、もしかしてピアノ弾けるの？」

「えっ……少しなら習い事でしたので」

やはり、お嬢様か。

「あ、もしかしたら」

正輝は先ほどの楽譜を美香さんに見せた。

「美香ちゃん、これ弾ける？」

「これは『月光』ですか。ええ、これなら弾いてましたよ」

「ごめん、ちよっと弾いてもらえないかな」

「分かりました。でもそのピアノは……ちよっと、音楽室の方で  
お願いします」

どうやら、このピアノのことは知っているようだ。

僕たちは音楽室の方へと向かった。

音楽室に行くと新しいピアノの方に美香さんは座った。

「ええと、そんな上手くもないですが……」

と、美香さんはそう謙遜しながら弾き始めた。

「……………」

「……………」

僕と正輝は終始無言で聞き入ってしまった。

「……………終わりです」

美香さんがそういうと、正輝は立ち上がり拍手をしていた。

正輝を見ると、どうやら泣いている。

しかし、確かにとても上手かった。音楽にそんなに分からない僕でもすごいということは分かる。

「美香さん、すごい上手だね」

「いえ、そんな。ただ昔にコンクールに出たことあるぐらいでやっぱり只者じゃないわけか。」

「でも、なぜ『月光』の楽譜を持っていたんですか？ それにどうやらすごい古い楽譜みたいですが。」

「ああ、それは……………」

「ま、まあ。ちょっとね」

さすがにあの古いピアノから出てきた楽譜なんて言えないよな……………。

「それにどうして、あの倉庫に？」

ああ、やはり気になるか。

しょうがない、ここは正直に話すか。

「実は……………」

僕は先生に合った話や、先生が僕たちと一緒に見回りに行ってくれないかという話をした。

「まさか……………ではあの噂は本当だったのですか」

「そういうこと。で、先生がなぜ幽霊の女の子を見たのかを探ろうと思っただけ」

美香さんはそれを聞き、ピアノの席から立ち上がった。

「でも、今までその幽霊が出たという噂は聞いたことありません。

事件があったのが『噂』であって、樹さんが出られる幕なのですか

？」

確かに……本当に幽霊は出たのだろうか？

なにやら先生の様子もおかしいし。

「まあ、とりあえず頼まれただけだしな」

僕たちは昼休みも終わろうとしているので音楽室を出た。

なんとか授業も終わり、放課後に入ると、そのまま秋本先生に正輝と一緒に連れ出された。

やはりいつもの男口調には治っていない。

しかし、そうまでしての衝撃だったのだろうか。

「で、先生。実際音楽室に向かってどうすれば」

僕は聞くと、秋本先生は無言でいる。

「アッキーモ聞いているのか？」

正輝も不思議に思っているようだ。

秋本先生が無言のまま音楽室に着くと、先生にカギを閉められた。

「！？ どうして、カギを閉めるんですか？」

「……」

相変わらず無言のままだ。

何か様子がおかしい。これは……先生は操られている？

先生は立ち尽くしていると、何か音が聞こえた

「ガタガタ」

「この音は……なんだ？」

「ガタンガタン」

また聞こえた。

「隣の部屋から聞こえたぜ」

正輝はそう気づいた。

「音楽室の倉庫のほうか？」

僕たちは立ち尽くしている先生を無視して、音楽室の倉庫を見ている。

「ガタンガタン」

「あ、あれは……」

僕たちが見たのは動いている古ぼけたピアノだった。

「なんでピアノが動いているんだ!？」

正輝は驚いていたが、この正体はたぶん僕は知っている。

「これは……つくもがみ付喪神だ」

「付喪神とは99年も物を使っていると魂が宿るといわれるものだ。魂はどんなものにも宿ることができる。たとえば、傘や靴、パソコンなどにも宿ることができる。もちろん99年とは例え話で、実際はもっと早く魂が宿ることがある」

親父の昔聞いた解説が聞こえてきた。

「た、樹! 何か俺たちを襲いそうじゃないか?」

ピアノは何か牛のように後ずさりをして猛ダッシュで向かってきた。

「お、おいおい!？」

僕たちはすぐに音楽室へと逃げた。

閉めたドアからバーンとぶつかる音が聞こえる。

「あ、あれアツキーモ?」

正輝はそう言うと、秋本先生は新しいピアノの席にいた。

「せ、先生?」

秋本先生はピアノ何かを弾き始めた。

「こ、これって昼休みで聞いた」

これは美香さんが弾いた『月光』だ。

「アツキーモ、ピアノでできるのかよ」

「ガシャ、バーンツ!」

先ほどの付喪神のピアノがドアを破壊して音楽室へと入ってきた。ピアノの蓋をまるで口のようにガチガチやっている。

もしかしたら、女の子はこれに食べられたのかもしれない。

「樹！」

「ああ！」

僕はお札を取り出し、投げつけた。

「臨！」

斬りつけようとしたが、ピアノは蓋を開け、そのお札を食べてしまった。

「！？ それなら陣！」

僕は陣の札を投げるも、やはり食べられてしまった。

「攻撃が効かないというのかよ」

と、正輝は置いてあつたイスを持ち上げ投げる。

「ガチガチッ！」

投げたイスは見事に蓋との間に挟まった。

「うし！」

だが、喜んだのはつかの間、すぐにピアノはぶつかってきた。

「グハッ！」

僕と正輝は壁とピアノに挟まれてしまった。

「ガチガチッ」とピアノはイスを何とか壊そうとしている。

「あ、アッキーモ！」

僕たちを無視してか、秋本先生は『月光』を弾き続けている。

「な、なんだってんだよ」

と、急にピアノが押す力が弱まった。

「うお！」

ピアノが何か収まっている、どうやら曲を聴いているように見えた。

「この曲、好きなのか？」

呆然と見ていると。

「樹！ 何ボサつとしているの！」

秋本先生が叫んだ。いや、しかし、何か聞いたことある口調だ。

「と、とりあえず！ 臨！」

僕はピアノの足を切った。

「さて、やっと捕まえられたわ」

秋本先生は付喪神のピアノの上に足を置いた。

「な、なあ？　なんかまたアツキーモが別の人になってないか？」

正輝はそういうが、確かに僕も思っていた。

しかも、身近に誰か似ている人物がいる。

「もしかして……姉さん？」

秋本先生に話すと、ニヤリとされた。

「あんた、今頃気づいたの？」

やはり姉さんだった。

「で、なんで先生に憑依してんだ」

付喪神のピアノを縄で縛り付けていた姉に憑かれている秋本先生に聞いた。

「こいつを捕まえるためよ。こいつお札は効かないけど、この『月光』聞かせれば静まると知っていたから、憑いて沙織に弾かせたのよ」

「そういえば、姉さんって音感0だったな……」

しかし、なんでまたこのピアノを捕まえようとしたんだ。

「さてと、これでおとなしくなるでしょう」

ピアノの蓋を縄でグルグル巻きにして開けられないようになっていた。

「さて、もう出てきていいわよ」

出てきたのは……女の子の幽霊だ。

「ごめん、綾香。こんなこと頼めるのが他にいなくて」

「いいの、いいの。さて、とっとと弾いちゃいなさい」

どうやら、この女の子の幽霊は例の噂の子『理香子』のようだ。

女の子の幽霊は足を切られた付喪神のピアノ前に座ると、鍵盤を弾き始めた。

「……」

「弾けてる!?!」

先ほど弾けなかったピアノは弾けるようになっていた。

「どうやら弾いているのは『月光』だ。」

「ど、どうして」

「今、あのピアノには付喪神付いているのよ。だから弦なくても弾けるの」

つまり、音を出しているのは魂なのか……。

「……終わり」

『月光』が終わると、ピアノがガタつと粉々に崩れていった。

「ピアノが独りでに曲弾いて、崩れた!？」

そうか、正輝から見るとそういう視点なのだろう。

「ピアノ自体はとっくの昔に壊れていたということね。さて、私はそろそろ出ていくか」

秋本先生に憑依していた姉は、身体から抜けていった。

そして、秋本先生はそのまま気絶している。

姉はプカプカ浮きながら、ためいきをついた。

「ふう、たまたま沙織が憑依体質だからよかったわ。じゃなかったら、頼まないといけなかったし」

「ごめんね、綾香」

と、女の子の幽霊は謝る。

「で、一体全体どうということなんだ？」

僕は二人に聞いてみることにした。

「ああ、つまりね。彼女、理香子は私たちが高校生の時の友達だった時、放課後にこの月光を弾いていた。ずっと猛練習していたからでしょうね、ついにはピアノの弦が切れてしまったのよ。そのおかげで物に魂が付き、そのまま理香子は襲われ、中のピアノの弦にからまり首を切った。これが噂の真相よ」

そこから続けて、幽霊『理香子』が語る。

「それから私が幽霊になったあと、また私と同じ運命にならないように私がこのピアノを抑えていたの。でも、なぜこのピアノが私を襲ってくるのかを考えた。そう考えて抑えている時にあの『月光』の曲が音楽室の方から流れてきたの。それから力が弱まったのを感じて分かったわけ、この子はこの曲が好きで、それを弾けなくした私を恨んだんだって」

「なるほど、それでそのピアノに月光を弾いて、納得してもらったわけか」

「さすが樹。それにこの子が処分される聞いて、そうだったらこのピアノが本当にかわいそうだからね」

つまり、全部協力させることの芝居だったのか。

「ごめん、本当はあなたたちには関係なかったんだけど、どうしても綾香が……」

理香子さんは謝ってきたが。

「どうして、姉さんは僕たちを？」

「それはまあ、いざという時の保険よ。それにまさかどっかの誰かが付いてきて新聞の記事にされるとは思ってたから、その戒めとして」

つまり余計なことをした正輝には痛い目をあわしてやりたかったと……。

「それじゃあ、私はそろそろ……」

理香子さんは、うつすらと消えていく。どうやら天に昇るようだ。

「綾香、沙織によろしくね」

「はいはい。まあ私はそっちに行くのはまだ先だから」

「くすつ。あんまり弟さんに迷惑かけちゃダメだよ」

「うつさい」

そういつて、完全に理香子さんの姿は消えた。

「ああ、終わったか？」

どうやら正輝は幽霊など見えないので、そのまま気絶した先生を見ていたようだ。

「ああ、先生を起こさないとな」

と、僕は起こそうとすると……。

「！」

先生はパチツと目を開けおきた。

そして、僕たちの顔を見る。ああ、まさか。

「てめえら！ こんな時間になにやってんだあああ！」

僕と正輝は飛びまわし蹴りをくらうのであった。

背中を打たれ、痛い思いをしながらの帰り道。

正輝と別れたあと、僕は姉さんと話していた。

「しかし、姉さんが秋本先生に憑いていたとは……。つまり、朝からずつとか？」

「ええ、おかげでもおもしろかったわ。沙織がいつも普段どのように見られてるのか分かったし」

と、笑っている。本当はそっちが楽しみでやったんじゃないのだろうか。

「先生がピアノ弾けるとは知らなかったなあ」

「ふふ、本当は理香子のライバルとも言えるくらいだったのよ。コンクールだって、その時の決着を着けるっていうぐらいだったのに……」

結局、それはできなかつたわけか。

「でも、姉さんの高校時代に少し興味を持てたよ」

「ふふふ、あまり聞いてもおもしろくないわよ」

本当に高校生の時にどういふようなことがあったのだろうか。



## 17話 ムーンライト伝説(後書き)

月に代わっておしおきよ。

弦が切れる拍子に付喪神になるといふのは、びわの付喪神を元にしています。

## 18話 廃墟に潜む者

「ね、姉さん！」

廃墟となったビルの一室で僕は何枚のお札を持っている姉と対峙していた。

姉はお札を構えると、一斉に僕へ投げつける。

「臨！」

無数のお札の刃が僕を襲うが。

「列！」

僕はなんとか列で凌いだ。

「姉さん！ 目を覚ませ！」

僕と姉が今こんなことになったのは数時間前のことだ。

休日の朝。

僕と燕は紅神社の裏にある林に来ていた。

というのは燕から修行に付き合ってくれとのことだ。

九字護身法の術をどうすれば対処できるか、どうしても見つけたいようだ。

その為に燕から九字護身法はどういうものか教えてほしいと頭を下げられた。

どうやら、弱点を知るにはよく知っておいたほうがいいということだ。

「九字護身法とは紅家が作った札術だ。たいてい、こういう札を使うのは陰陽道なわけだけど、魔よけの術と知られている術を一字一字に力を持たせ、お札に閉じ込めた技なんだ」

が、これはあくまで親父に聞いた話だ。本当かどうかは僕には分からない。

「なるほど。樹殿はその全ての技が使えるのか？」

確かに9字護身法は9つの技を使うことだが。

「いや、僕はまだ8つしか使えないんだ」

「はて……使えぬ技とは」

僕の師でもある親父は1つだけ僕に教えてくれなかった技。それが

「在<sup>さい</sup>」だ。

この「在」は特殊で、膨大な量のお札を必要とする。

つまり、お札を何枚も操れぬものには教えても無駄な術なのである。

そのことを燕に言つと、興味深げにこちらを見る。

「ぜひ、宗治殿にその技は見せてもらえないのか」

頼み込んでくるが、そうはいかないだろう。なんせ、お札は作るのに手間がかかるのだ。

お札は常に自家製だが、多くの呪印<sup>じゅいん</sup>を書いていけなければならないので、僕の手でも1枚は15分ほどかかる。

それを何枚も使う、「在」をただ見せてやるだけでは使いもしないであろう。

「そうか……。樹殿自身は見たことがないのか？」

「ないよ。だって、九字護身法の集大成といってもおかしくないものを親父が見せるほどの敵にあつたことない」

実際、どういった術なのか。僕にも分からない。

「綾香殿はどうなのだろうか……」

そういえば、僕より長く生きている？のだ。何か知っているのかも  
しれない。

「また私の噂話？」

いつものように姉は僕の目の前にプカプカと浮いていた。

「うお！？綾香殿か！？」

燕はそれに驚いたようだ。

「あら、さすが燕ちゃん。そのリアクションをどっかの誰かさんに  
見習ってほしいわ」

何を見習えと……。

話を戻して、「在」のことを姉さんに聞いてみることにした。

「ああ、在ねえ。うーん、いちおう私も使えるんだけどね。」

それは初耳だ。確かに姉さんは生きているとき、とてつもなく力を持った御払い屋だったらしいが。

「綾香殿。どうかその技を見せてくれ！」

燕は必死に姉に頼むが……。

「まあ、そのうちね。そのうち」

と、かたくなに断った。いつものノリなら見せてくれそうなのだが。「綾香殿も断るとは……分かり申した。ならば、この樹殿と他の九字護身法の対処方を見つけるのみ！」

そういつて、燕は刀を抜いた。いや、だから真剣はあぶないから振るんじゃない。

その頃、親父は少し紅家の本家に呼び出されていた。

なにやら大事な話があるとかどうか。

まったく紅神社の神主も楽じゃないようである。

「ごめんください」

と、燕の刀を避けている内に神社の社から誰かが訪ねてくるのが聞こえた。

親父がいない間は僕が神主代わりとなるので、燕に待ったをし、その声の方に駆けつけた。

「はい？ どうしましたか」

見ると、スーツ姿の男性だ。歳は30代後半といったところだろうか。

「あの、この神社に何か御用で」

表向きの神社の仕事としては結婚の儀や、厄除けのお守り販売に、おみくじだ。

僕はその内のどれかが仕事だと思った。しかし。

「あの、御祓いをしてくれるというのはここで間違いないのでしょうか」

男性が丁寧聞いてきた。もしかして、これは依頼か？

「こちらへ、どうぞ」

社の奥まで案内し、畳に座布団をしいて座らせた。

「あの、こここの神主さんは？」

「どうやら、親父を探しているようだ。」

「父は今出かけております。あの御祓いの依頼でしょうか？」

「そうなんです。実は早急な依頼でして……弱ったな」

スーツの男は頭をかいて悩んでいる。

「あの、もしよろしければ私がその依頼を果たしましょうか」

それを聞いて、男は驚いた顔をしていた。

無理もない、まだまだ若いガキが依頼を果たせるのか心配するだろう。

「おお、それはぜひよろしくお願いしたいよ！」

と、その心配とはよそに承諾してくれた。

「ええと、すぐにお金の方は用意できてます」

そういつて、懐から取り出したのは諭吉が何枚も重なっている札束だった。

「う、わあ」

親父がこれを見たら、飛びつくところだろう。

「あ、御祓いの依頼料は後払いで……。何分、信用問題で御祓いをちゃんと果たしてからもらっていることにしているんです」

エセ霊媒師違って、僕らは基本後払いだ。もちろん、それなりの値段を取るわけだが。

「それはまた親切なことだが、時間がないんだ。これで迅速にやってもらおうと頼む」

何か急いでいるようだが、一体何があるのだろうか。

「実はうちの会社が廃墟ビルを取り壊して、新しくビルを建てるつもりでな。だが、その取り壊し作業をしている最中に幽霊騒ぎとなつて……」

なるほど、その幽霊を倒してほしいと。

「明日には作業を開始しないと間に合わないのだが、頼むよ」

「分かりました。今日中に被つて見せますよ」

僕は場所を詳しく聞いておいた。

「ああ、あの駅前の廃墟ビルか」

駅前にとても大きいけど、どことなく不気味なビルがある。

しかし、今までに幽霊が出たという噂は聞いたことがなかったのだが……。

「それでは頼みましたよ」

スーツの男性はそのまま帰っていった。

幽霊が出るのはどうやら夜らしい。

少し時間を置いてから行くことにしよう。

社を出ると、燕と綾香がジーツとこちらを見ていた。

「ど、どうしたん二人とも」

「樹殿のその依頼に付いていけば、九字護身法のことがよく分かるかもしれない」

燕はそんなことを言っている。しかし、依頼に関わるのは関係者以外は極力避けたい。

「まあまあ、燕ちゃんもいれば無敵よ」

確かに……死神みたいな敵が出るとすると、敵わないこともある。

「分かったよ。んじゃ、夜に駅前の廃墟ビルだ」

「かしこまった」

燕は一礼して、自宅に戻った。

夜になり、僕たちは廃墟ビルに向かうことにした。

「て、燕。いつもと格好が違うな」

自宅から出てきた燕はいつもの袴ではなく普通の女子の服である。

「あ、綾香殿が貸してくれてな」

しかし……スカートって。

「まあいいか。で、姉さんは？」

「先に現場へ見ていくと言っていたぞ」

どうやら、姉は先に廃墟ビルに向かったようだ。

「んじゃ、行こうか」

しかし、この光景。どっかの誰かが見られるとまたデートをしていると思われるのだろうか。

「正輝に見られると厄介だな……」

「どうしたのだ？ 樹殿」

まあフラグを立てかねないので、その考えを捨て廃墟ビルに急ぐ。

駅前の廃墟ビルに着くと、工事のガードがしてある。

「樹殿。ここは通行止めじゃないのか」

「大丈夫、ちゃんと話は通してあって、扉を開けてもらってるから  
僕らは工事関係者用の扉から中に入っていった。」

中にはシヨベルカーなどの作業者がそのまま止まっている。

「誰もいないな。幽霊騒ぎとなってるからか？」

人気がない。どうも無用心が過ぎる。

噂の廃墟ビルか……ここのビルは不況をくらって会社が倒産し、そのまま放置にされていたそうだ。

しかし、本当に幽霊が出たという騒ぎがない、どこかの過激派の廃墟マニアが工事を中断させているのではないだろうか。

1階は受付と思われるところがある。

僕らはそのまま階段を上がると、埃っぽさに咳をした。

「どうやら、ずいぶん長いこと放置されてるみたいだな」

「ううむ、本当にここに何か出るのか」

廃墟マニアならここらは喜ぶのだろうか、僕らは逆だ。

というか、アスベストを使ってないかが心配だ。

「燕、あんまり息吸うなよ」

「分かった」

このビルはそんなに5階といった、そんなに高いビルではない。

僕たちは1階、2階と調べて3階に来たところ燕が何かに反応した。

「樹殿！ 今人影が！」

階段を上がってすぐ、曲がり角に何かの人影が一瞬見えた。

どうやら、誰かいそうな気配がする。

「あれが幽霊の正体かもしれないな。追うぞ燕」

僕たちは駆け足でその人影を追う。

どうやら、何かの部屋に入ったようだ。

その中をドア越しから覗いてみると、何も物が置かれていない少し

広い部屋だ。

「ここは元が仕事場だったのだろうか」

たぶん、デスクなどが置かれていたのだろう。

「ちよつと、中を見てくる。燕は外で様子を見ててくれ」

そう燕に言い残し、先に部屋に入っていく。

「誰もいないな、本当にさっきの人影はここに来たのだろうか」

僕はあたりを見回していると。

「ボタン！」

何かの音かと思い、後ろ振り返ると、この部屋のドアが閉まっていた。

「燕！ 何かあったか！？」

「樹殿！ 一人で扉がしまつたのだ！」

僕は急いでドアに駆け寄り、ドアを開けてみようとしますが、どうしても開かない。

「くそつ、閉じ込められたか」  
どうやら罠にはまってしまったようだ。

僕はお札を取り出して、臨で斬りつけようとした。

「燕！ 離れている！ 臨！」

しかし、扉は斬れない。

何か一瞬ガードされた感じがした。

「どうした樹殿。なれば、私の鬼切りで斬る！」

そういつて、斬ろうとするも「ガキンツ」とニブイ音が鳴った。

「鬼切りでも斬れぬとは……なんて扉じゃ」

「これは何か見覚えのあるガードの仕方だ……」

紅家を使う九字護身法の一つ「列」だ！

それに気づくと「フフフ……」という密かに笑う声がした。

「誰だ！？」

あたりを見回すと、見覚えのある人影がプカプカ浮いている。

「ね、姉さん！？」

そこにいたのは僕の姉、綾香だった。

「姉さん、閉じ込められてしまった。一緒に出るよう力を貸してくれ」

そういつと、姉はお札を構える。

てつきり、扉をそのまま斬るのかと思っていた。

そのお札を僕に向かって投げてきたのだ。

「姉さん！？」

なんとか寸でのところを避けたが、頬が少し切れていた。

「まさか、姉さんがこの扉に」

「フフフ……」

姉は密かに笑って、僕をじっと見ている。

「まさか姉さん……操られているのか」

いつもの姉の目ではなかった。僕に対して殺気が漂っている。  
幽霊を操る者の話を親父から聞いたことがあった。

ネクロマンサーという霊能力だ。

「ネクロマンサーとは死霊使いの名称で、その名の通り幽霊を意のままに操ることができる。ネクロマンサーじゃなくても霊力と術を知っていれば誰でもできるがな」

親父からのいつも解説が聞こえてきた。

つまり姉は操られている為に、術者を倒さなければならぬ。

しかし、見た感じではこの部屋にはいないのだろう。それで閉じ込めたのだ。

そして、出る方法としては姉を倒すしかないのだが、倒せないことを知っている。

ということは僕を狙ったのかも知れない。

「燕！ どこかに術者がいるんだ！ そいつを倒してくれ」

「分かった！」

燕は了解の返事をして、タタツと駆け足でいく音が聞こえた。

「とりあえず僕はそれまでに時間を潰さない」と

僕は姉と対峙することになった。

それから冒頭の時の出来事である。

「皆！」

姉は数枚のお札を投げ、僕に誘導させていく。

「臨！」

そのお札を的確に1枚1枚と斬っていたが、1枚だけ間に合わずに逃してしまった。

そのまま札は僕の右肩に貼りつき、姉は臨を唱える。

「くっ」

すんでのところ、そのお札を剥がしたものの、お札を掴んでいた左手を切ってしまった。

「いてて、さすが姉さんだ。ちょっと本気でやるか」  
僕は自分自身にお札を貼り付ける。

「闘！」

自身を強化し、なんとか力押しでやっていく必要がある。

この闘には霊力を高める効果もある、それでようやく僕は6枚ほどのお札が使えるようになるのだ。

「行くぞ！ 皆！」

僕は一斉にお札を投げ、姉に向かって誘導していく。

なんとか、姉は避けていくも1枚捕まった。

「よし、陣！」

姉を縛ること成功したかに見えたが。

「者」

自分が縛ったのは姉の分身だった。

僕はすぐに間合いを取って、後ろに下がろうとした瞬間、身体が縛りつける感覚に襲われた。

足元を見てみると、お札がすでに貼ってあった。

「前だつて！？ まさかすでに陣を貼っていたのか！」

僕は捕らえられてしまったようだ。

まさかの最大の危機だ……。

18話 廃墟に潜む者（後書き）

そして、樹は倒されるのでした。めでたしめでたし。  
よっしゃああああ！オハライ！完！

嘘です（イエイ）

## 19話 VS綾香

夜の廃墟ビル、姉に陣で縛り付けられた僕はなすすべもなくじつと姉を見つめるだけだった。

「姉さん……」

だが、一向にお札を構えたままで姉は動こうとしていない。

「抵抗しているのか？」

少しブルブル震えていた、もしかしたら術者の力が少し弱まっているのかもしれない。

その頃、燕は3階、4階、5階と人影を探していた、最上階の部屋に入ると何かの人影がそこにあつた。

「貴様か！ 綾香殿を操っているものは！」

燕は鬼切りを構え、人影を追い詰めていく。

「おっと、そこまで」

「何!？」

いつの間にか、その人影は燕の後ろにいた。

「まったく、なんて体力バカな娘ですか。私はこの階段上るだけで息切れしちゃって、少し霊力が弱まってしまいましたよ」

どうも丁寧な言葉遣いを使う男声が聞こえる。

「霊力？ さてはお主が綾香殿を操っているんだな」

燕はさきほどの部屋で扉越しから聞こえてくる樹の声でなんとなく状況は理解はしていた。

「はは、まったく二人同時にあの部屋で入っておけばやりやすかったものを。少々、予定がずれましたが、無駄です。あなたをここで始末すればいいのですから」

「後ろ取って、いい気になっているようだが油断はせぬことだ」

燕はそういうと、高くバック宙をした。

「おお、そんな事もできるんですか」

それを見て関心したのか、男はパチパチと手を叩いている。

「なっ、お主は!?!」

燕は男の方を見てみると、そこにいたのは帰り際に見ただけだが、間違いはない。

この件を依頼してきたスーツ姿の男だったのだ。

「おやおや、私をご存知とは。私はお初目にかかるのですが」

そういうと、男はボワッと青白い炎を上げて体格が変化していく。

出てきたのは、身長が高くハットのような帽子を被り、タキシードのように正装している男だった。

「私、羅刹らせつと申します。いやあ、誠治様とよく一緒に様子を見させていただいたてましたよ」

「お主！ 誠治の手の者か！」

燕は誠治のことを聞いている。

紅家の名を汚した者。そして、紅家を狙っている者。

「今回のことも誠治様がお考えになりました。まったく、あの方は残酷な方ですよ。たまたま居合わせた、紅の小僧の姉がいたので。

当初考えていた予定は変更して、このような残忍な手を考えるのですから」

羅刹はクククツと笑いながら言う。

つまり姉の手で樹と燕と一緒に葬るか、姉自身を消し去るかという魂胆のだったのだろう。

「許すまじ！ 誠治！」

「まったく、本当に人間にしておくのは惜しい方ですよ。あの方こそ我が同胞にふさわしい」

「同胞……?」

燕はその言葉が気になったが、こんなことをしてられないと勝負を挑む。

「綾香殿を解放するか。ここでこのまま切り捨てられるか選べ！」  
鬼切りを構えると、クククツとまたもや羅刹は笑っている。

「なにがおかしい！」

「私を切り捨てますか。なるほど、ならばハンデを上げましょうかと、羅刹は懐から紙を取り出した。いや、あれは札だ。」

「この札は死霊使いの魂を封じ込めた物。これであの娘を操っておられます。さて、ここでゲームです」

「ゲームだと？」

「このお札を左手に持ちながら戦いましょう。これを切れば、あなたの勝ち」

燕は舐められていると思い、少しムツという表情をした。

「そんなイヤな顔しないでくださいよ。そうしないと、あなた……死にますから」

とつさに羅刹は燕に駆け寄ってきた。

そのまま右手で手刀のように斬ろうとするが、寸前で避けることができた。

「気をつけてくださいよ。私の手刀はそこの刀と同じ切れ味ですから」

確かに左腕の方、服がスツパリと切れている。

「こやつ……人間ではない」

燕はそう確信したか、慎重に鬼切りを構え斬りつけようとする。

「ははは、その刀は相変わらず怖いですね。さすが、同胞が苦しめられた刀だ！」

斬ったと思っただが、何か残像を残し避けられた。

同胞が苦しめられた刀。もしや。

「気づきましたか。そう、私は」

羅刹は帽子を取ると、そこにある物があった。

「角……」

見事な一本角だ。

「そう、私は……鬼なんですよ！」

第二の攻撃が来る。

なんとか燕は刀を構え、防御をしようとしたが、その間を抜けて横から蹴りが来た。

「まったく、ちゃんと敵の動きはよく見ないと駄目ですよ」

燕は壁にまで吹き飛ばされていた。

「なんてバカ力だ」

燕は鬼そのものと対峙したのは初めてだった。今まで人の内にいる鬼を退治していたのだが、やはり本物の鬼の力は別格だ。

「く、こうなれば札を切るまでだ」

燕は目標を羅刹から手に持っている札に変えた。

「まあ、それでも無駄なんですけどね」

またもや男はクククツと笑った。

樹と姉はそのままお互いを見つめている。

もちろん樹は縛り続けられて動けないだけだが、姉は動こうとしない。

「どうやら、燕が術者に遭ってるのだろう」

そう解釈をするしかない。

しかし、いつまでもこうしている訳にもいかなかった。

「さすがに退屈してきたな」

とりあえず変な顔して、姉を笑わせようとするも顔は変わらなかった。

「うーむ」

手は動かないが、口や顔は動かせる。とりあえず、腰に入れてあるお札になんとか命令できないか、試してみる。

「皆！」

スルスルと腰からお札がでてきた。

「よし、このまま僕に貼ってある陣の札を……」

腕は動かさないので、少し誘導がきついが、なんとか札までたどり着いた。

「臨！」

スパッと切れるとようやく陣から開放された。

「さて、姉さんをどうするか……。まずこの部屋から出られる方法を探さない」と

とりあえず、辺りを見ますが、特に出れそうなところはない。いちおう窓があるが、ここは3階だ、落ちたらタダじゃ済まない。

「とりあえず姉さんに陣を！」

と、思ったつかの間。

ずさど、窓ガラスが割れた音がした。

後ろ振り向くと、どうやら姉さんが動き出したようだ。

「なんだよ！ 動いたら動かなかつたり！」

だが、こちらもすでに対策はできている。

僕は一斉に札を投げ捨て、陣の札を前で仕掛けておいた。

「さて、これで皆！」

ただお札を操り、誘導させる。

案の定、その札を避けるように避けるが、前にかかった。

「よっしゃ、釣れた釣れた」

どうやら、操られているせいもあって思考は単純なようだ。

「さてと……。しばらくはこのまま……。うわっ！？」

姉を縛り付けていると思っていた。

だが、何か強い力が姉に宿ったのを肌で感じた

屋内なのに風が吹き、僕が撒いた前の札などが一斉に集まっている。

「……………在おい」

姉は静かにいうと、集まっていたお札は手元に何か棒状なものに形作られていった。

「在！？」

まだ親父から教えてもらっていないなかった術だ。

どういったものか予測できない。

形作り終わると、なにやら白い刀剣のようなものができていた。

そして、さつきまで貼っていた陣の札は剥がされている。

「い、いつのまに！」

姉はそのままその刀剣を振ると出てきたのは真空の刃のようなものであった。

それが向かってくるので危険を察知し避ける。

避けたあと「ビキン！」と音がなったので、後ろのコンクリートの壁を見るとどうも削られているではないか。

「く、そんな能力か！」

しかし、この程度なら避けることはできる。そう思っていると。  
「皆！」

すると、また真空の刃が僕に目掛けて飛んでくる。

しかし避けようとしても、なおひたすら僕に追ってきた。

「その剣、真空の刃がそのままお札の能力にできるのか！」

僕はもう残り少ないお札を使って「列！」と防御した。

「くっ！」

なんとという衝撃だろうか、しかしこれでもなんとか防御はできると、左手に激痛が走った。

「くそう、左手の傷口が広がったか！」

そういえば先ほど傷つけられたのを忘れていた。

なんとか、真空の刃は消え去ることができたが、あまりの痛さに左手はお札を持つことができない。

「片腕だけでなんとかしろだって……？」

僕は右手のお札を持ち、なんとか臨で突っ込むしかなかない。

そう考え「ヤアアアアア」と勢いよく突っ込んでいくのはおろか  
「陣！」

陣の真空が僕を止めた。

「くそう。また陣縛りかよ……」

僕をジワジワと斬っていくつもりだろうか。

その頃、燕は互角に戦っていた。

「ハアアア！」

壁越しに倒れたあとも、なんとか立ち上がり、持ち前の俊敏さで羅刹の手刀を避けていく。

「すばしっこい！」

羅刹も相当イライラしてきているようだ。

「戦いに焦りは禁物だ！」

その隙を突いて、指を一本切ることができた。

「くうそおおおお！ 娘ごときに私の指がああ」

「さきほどの丁寧な言葉はどうした！」

「だまれ！ あの言葉使っていると疲れるんだよお！ だがあの小僧にはもう時間がないぞ！ もうすぐ決着着く頃だ！」

「くそつ、樹殿。どうか無事でいてくだされ」

樹に姉、綾香の「在」の剣がジワジワと近寄る。

「くそ、さすがにここまでか？」

僕はなにか諦めムードだった。

僕がそのまま死ねば、次回から燕が主役になるのだろうか。そういえば、正輝に金貸したままで返してもらってなかったなというようなことを考えていた。

姉は僕の目の前に来て、剣を構えている。

僕は静かに目を閉じ、覚悟を決めた。

そのまま剣を振り下ろそうとしたとき

「よう、またなんか厄介ごとに巻き込まれているな」

目を開けると、そこには刃と化したお札で姉の剣を止めていた手が見えた。

横を見てみると、見覚えのある者がいる。

「まったく、依頼は少し怪しめ……。」

いつの間にか、そこにタバコをふかしている親父がいた。

「綾香から緊急連絡され、紅本家から帰ってきてビルの壁を登って窓から来てみれば、こういうことか。まったく、綾香もドジっ子だなあ」

と、笑っている。

いや、そこは笑うところじゃないと思うが。

「さて、バトンタッチだ。さすがにここまで来ると、俺でしか止められない」

姉は新しく介入してきた親父の目標を変え、剣を構えなおした。

「確かにいい剣だ。だが」

親父は見た感じ50枚以上のお札をばつと広げる。

「在！」

そういうと、お札は親父の両手に絡みつき棒状のような形作られていく。

「双剣………双在月」

白い2本の刃を親父は持っていた。

「樹、これが在の力。お札に靈力を籠めて具現化した剣『在月』だ」

姉はそのまま真空の刃を出す、親父も負けじと真空の刃を出す。

「おらおら、どうした！」

しかし、親父は続けて何回も真空の刃を出していく。

姉もそれに対応して続けて出していくが、ついには負けてしまった。

「陣！」

親父は真空の刃が姉に当たる直前に陣を唱え、なんとか姉の動きを止めることができた。

「よし、あとは燕ちゃんを向かえにいくか」

そして、そのままドアには列のお札が貼られガードされているので、壁を切っていく。

「またつまらぬものを斬ってしまったか」

四角に切られた壁はバタンとドミノのように倒れた。

「行くぞ！ 樹！」  
僕たちは燕の下に急ぐ。

「ガキン！」

燕の鬼切りの刀と羅刹の爪が当たる音が聞こえた。

「くっ、もう少し！」

「そう簡単にはいかんぞ！」

ギリギリと間合いを詰めていく。

「ふ、こんなもの！ ほしければくれてやる！」

と、いつて、そのままお札を投げ捨てた。

それに気を取られて一瞬に気が緩む。

「隙ありい！」

羅刹の左手がそのまま燕に襲ってくる。

「しまったあ！」

と、思った時。

羅刹の左手は切られていた。

「間に合った……」

僕はドア越しから臨のお札を投げっていたのだ。

「小僧！ なぜここに！？」

しかし、その後ろにいる親父を見て納得した。

「くっ、紅宗治か。仕方ない、ここは退かせてもらおう」

そのまま、窓を突き破り逃げ出していった。

「樹殿。よくぞご無事で」

燕は心配しているが、怪我ひどいのは燕のほうだ。

「これが……今回の原因か」

親父は落ちていたネクロマンサーが封印されていた札を切った。

「これで綾香も大丈夫だ。しかし、こんなことをするのは一人しかないな……」

「宗治殿、やはり誠治が関係してありました」

僕はそれを聞いて、何のことか分からなかった。

「誠治って誰？」

燕はしどろもどろするが、親父は僕の頭に手をやる。

「話はいづれしてやる。とりあえず綾香を向かえに行くぞ」

綾香のところに行くのと、何か落ち込んでいた。

僕が来たのに気づくと急いで僕に駆け寄る。

「樹ー！ ごめんね！ 大丈夫だった？ 怪我は！？」

どうやら操られていたときの記憶はあるみたいだ。

「姉さんこそ、大丈夫だった？」

「心配してんのはこっちよ！」

と、そのまま頬を殴られた。てか頬に傷ができていたので、また血が流れてきた。

「ほら、やつぱ怪我してんじゃない！ さあとつと家に帰って消毒するわよ！」

無理やり姉に引っ張って家に戻されたのであった。

燕と宗治はゆっくりとそのあとを追っていく。

「宗治殿。あやつは誠治の手の鬼らしいです」

「まったく今になってか。仕方ない、あいつに術を教えるときがきたか」

19話 VS綾香（後書き）

ついに「在」が明らかに活動報告の方にどういうものか書いておきます。

## 20話 修行

学校の昼休み、正輝たちの教室にて正輝、結衣、美香の3人は一緒に昼食を食べていた。

「なあ、なんで最近樹と燕ちゃんがいねえんだ？」

正輝は購買で買ってきたパンをほおばりながら、しゃべる。

結衣はそれに答える為に弁当の箸を止めた。

「正輝、口に含まながら話すの汚いよ。でも、2、3日休むとか樹のお母さんから聞いてたけど、風邪なのかな」

「俺も携帯で連絡したけど、なかなか連絡取れなくてよ。なんかあったのか？」

「……」

2人は心配になり、黙り込んでいた。

と、美香がそれを見てやれやれという顔をする。

「心配なら、お見舞いに行けばいいじゃないですか」

「そ、そうだよな。今日の放課後行こうぜ！」

正輝はすぐにパンを食べ、「ちとトイレ」と駆けていった。

「正輝……こっちは食事中」

結衣は正輝のマナーの悪さに怒っていた。

紅神社裏の林にて、僕と親父はいた。

「これで何度も言うが、樹。お前は札を何枚も扱うことができない。最低でも2枚が限度だ。『在』は何枚ものをお札を重ね合わせできる剣。それ相応の札を扱いこなさなければできん」

親父は厳しく僕に言うが、そんなことを分かっていた。というより、本当にその言葉はこれで36回目だ。

「親父、確かに僕は通常では2枚のお札しか一気に使えません。ですが、前に鬼と戦った時は親父より無数のお札が使えましたよ」

僕は反論すると、親父の目がカツと開いた。

「その力は札じゃない。それにあの技はあまり使うな、寿命を削るぞ」

「寿命を削る!？」

親父の言葉に僕は驚いた。

「あの技は夢幻札むげんふだと呼ばれるものを召喚し使う技だ。しかし、召喚は代償として寿命を削る。それだけ危険な技なんだ」

しかし、その技がなぜできたのだろうかは不思議でしょうがなかった。

僕は手を見て考えた。あ、生命線長いな。

「さて、修行を始めるぞ。その為に学校を休ませたんだ。『在』は習得しなくても最低4枚は札が使えるようにしてもらわなければ」  
修行の方法は簡単、何枚か一気にお札の術を発動し続けていればいいだけ。

しかし、簡単そうに見えて、これが難しい。

僕は2枚までのお札を簡単に術をしながら扱うことができるが、親父のように6枚を同時に発動は不可能に近い。

というのは、お札というものに術を乗せるには霊力がある。しかし、1枚なら容易なことだが、2枚、3枚となると霊力の数が半端じゃない。また均等にやっていかなければ、お札に霊力が耐えられなくて破れてしまう恐れがある。それだけ九字護身法は難しい術なのだ。

「臨!」

僕はお札を木に向け4枚同時に投げているが、臨が発動しているのはやはり2枚だけ。

「腰を入れんか! 腰を!」

親父からのアドバイスだが、どこをどうやって腰を入れるんだ。

こんなことを四六時中やっているのだが、本当にいいんだろうか。そんなことばかり考えてしまう。

親父をその様子を見てて、ためいきをついた。

「やはり実戦で身に着けないと無理か……」

そんなことをボソツといい、社に戻って行った。

「親父！ どこ行くんだよ」

「少し用事ができた、お前は続けてろ」

一体何なのだろうか。だが、僕は気にしないで札を投げ続けた。

「学校のみんなはどうしてるだろうか」

そういえば、燕も学校を休んでいるが、この前の戦いで傷が思ったより深かったようだ。

その為に今は自宅で療養中である。

話を聞けば、鬼と一人で戦ったとか。

燕が先日言うには。

「樹殿。羅刹という鬼、ただの鬼ではない。今度会った時には気をつけられよ」

羅刹というのはどうやら僕に依頼してきたスーツの男が変装していた者だったらしい。

その後は普通にビルの方の取り壊し工事も何事もなかったかのように進められていた。

つまり鬼は初めから紅家を狙い、依頼したということになる。

しかし、いくら鬼でも紅家を狙う者は相当な命知らずだ。

中でも紅の暗部と呼ばれるものたちが黙ってはいない。

「しかし、それでも狙ったというのは相当の実力者か、ただのバカか……」

そのどちらかなのだろう。

しかし、そんなことを考えているせいか、一向にお札の方は2枚しか扱いこなせない。

「本当、絶対無理だろ……」

僕は諦めていると。

「そこで諦めるの？」

馴染みのある声が聞こえた。

そして目の前を見ると、いつものようにプカプカ浮いている姉であった。

「姉さん、学校はどうだった？」

「確かにこの前のことで私が悪かったけどさ、死んでまで学校行かして勉強させるとかどうなのよ」

姉さんには僕が欠席する代わりに、授業のノートなどを頼んでおいた。

戻ってきたということはもう学校が終わったのだろう。

「まあ、懐かしかったらいいわ。それより樹」

「どうしたの、姉さん」

「今から正輝君や美香ちゃん、結衣ちゃんが来るわよ」

それは衝撃的だった。というか、姉さんはなぜ止めなかったんだ。

「そりゃ、おもしろそうだったからよ」

ひどい話だ……。とりあえず、そうなったら修行どころではない。

確かに正輝や美香さんが、来るなら心配ないが、一番厄介なのは『結衣』だ。

本当なら部外者に紅神社の裏面を知られるわけにはいかない。

幸い、家には燕もいる。ここは姉とも協力をして切り抜けるしかない。

「えっ」

と姉はめんどくさそうな顔をしたが、渋々了解した。

僕と姉は早々に自宅に戻っていった。

「ごめんくださいーい」

正輝、美香さん、そして結衣の3人の声が聞こえた。

よりもよって、母さんは買い物よつだ。母さんの買い物は長くて1、2時間はかかる。

「ここは僕が切り抜けるしかないな」

少し具合が悪そうにして、僕は玄関へと向かう。

「あ、樹」

玄関のドアを開けると、その一言が結衣から聞こえた。

「心配したんだぜ！　なんだ具合悪そうだな風邪か？」

「燕さんも大丈夫なんですか？」

正輝と美香さんも心配してくれているが、後々この二人には本当の事情を話さなくてはならない。

しかし、まずは……この結衣をどうにかしなければ。

「とりあえず、僕は大丈夫だけど。燕がちよつと部屋にいるからそれを聞いた正輝は全速力で2階の部屋へ駆けていった」

「し、しまった！　あいつ燕の部屋に行くつもりだ」  
僕はすぐに追いかける。

「ここが燕ちゃんの部屋かあ……燕ちゃん」

正輝は燕の部屋を開けようとした、その時。

「陣」

正輝はドアノブを開けようとしたところで縛られていた。

「まったく、レディの部屋に許可なく男が入るのは禁止よ」

姉はそんなことだろうと燕の部屋の前で待っていたようだ。

「くっ……樹か！　姉あねさんの仕業か！」

どうやら何が起きたのかは正輝も分かっていたようだ。

「とりあえず、私はお茶でもしてるかな……」

そういつて、姉はそのまま消えていった

僕は縛られている正輝になんとか追いつき、ボコした。

「いてて、たくっ、冗談だったのに」

と、正輝は笑っていたが、目がマジである。

しかし結衣を見ると、何か言いたげそうな顔になっていた。

「どうしたんだ、結衣？」

「樹……あんた元気そうね？」

「あっ」

すっかり風邪と偽っているのを忘れていた。

「まあ、燕ちゃんの看病で休んでいたってことね」

なんとかそのように弁解をして、結衣は少し疑い深くなりながらも信用してもらえた。

「それで燕さんの様態は？」

美香さんが心配そうに聞いてくる。

「ちよつと肋骨にヒビが入ってたみたいだね。本人曰く、階段から転び落ちたそうだ」

まあ本当は鬼の攻撃をくらったのだが、そうごまかしておいた。

「とりあえず、顔だけでも見ていってくれ」

僕は燕の部屋にノックをして、入ると。

「た、樹殿!？」

着替え真っ只中の燕がいた。

急いでドアを閉める。

「燕! 母さんが帰るまで着替えするなって言っただろう!？」

僕はドア越しに叫んだ。

「仕方ないだろう! 汗が気持ち悪ろつて」

正輝を見ると、何か拝んでいた。

「いいさらし姿だった……これは家宝にする……」

はいはい。

着替え終わったの見計らつて、燕の部屋に入った。

「先ほどは失礼した。皆が来てくれたこと感謝いたす」

少し頬を赤らめながら、ベッドの上で正座していた。

「つ、燕さん？ 肋骨にヒビ入ってるんだから安静にしててね？」  
美香さんはそれ見て、ますます心配しているようだ。

「納得だわ……これなら樹も見てないと心配になるわけね」  
結衣もようやく納得してくれたようだ。

とりあえず、これ以上いると燕に無理をさせかねないので、すぐにおいとますることにした。

「うっし、樹もなんともないし、燕ちゃんももうよくなりそうだから私帰るわ」

「それじゃあ、私もここで失礼しますね」

結衣と美香さんはそのまま帰るそうだ。

「俺はとりあえず、樹とゲームでもするか」

正輝は勝手に僕に家に居座ろうとする。

お前もはよ帰れ……。

二人を見送ったあと、とりあえず正輝を僕の部屋に招く。

とりあえず座ると、正輝から口を開いた。

「で、本当の理由は違うんだろ？」

どうやら、こいつには気づいていたようだ。

「ああ、実は親父から新しい技の修行をさせられていてね」

「やっぱりそうじゃないかと思っていたが、お前にしてはすいぶん時間がかかるな？」

確かに……今までの技はたいいてい1日あればマスターできた。

しかし、今回は2、3日はかかっている。しかも、その技自体の修行はしていない。

「まあ、それだけ難しい術なんだろう。どれどれ、俺もその修行付き合ってやるよ」

いきなり、こんなことを言い出した。

こいつのことだから、いつものように記者魂がそっささせるのだろう。  
「それに久々にあの林を見たいいな」

正輝は思い深げに話す。

こいつは林には小学生や中学生の頃、何度か来たことがある。というのも秘密基地が流行っていた時、丁度神社裏の林がうってつけだったわけだ。

僕は神社裏の林に向かうと、親父はまだいなかった。

「まあサボってたと思われないうし、いいか」

とりあえず、修行を続けることにしよう。

僕はお札を左右の手に2枚ずつ構え「臨！」と唱える。

木に投げつけ全て刺されれば成功のだが、やはり2枚しか刺さらない。

「やはり上手く行かないな……」

正輝を見てみると、一人で何か探しているようだ。

「やっぱり秘密基地残ってないよな」

どうやら、僕たちが作った秘密基地を探しているようであった。

「正輝！ あんまりうるつくな。臨の札が刺さるぞ」

「へいへい、分かってますよー。んっ？ なんだこれ」

正輝に注意を呼びかけた時、その時何かを見つけたようだ。

「おいおい、これって……」

そんなことを言い出したので僕気になり、急いで正輝の所に駆けつけた。

正輝の手に持っていたのは写真だった。

「なつかしいな、これ。俺らの小学生の頃の写真だよ」

その写真を正輝は僕に手渡すとどうやら、秘密基地を作った記念に撮った写真だ。

どこに行ったかと思っただらこんなところに落ちていたようだ。

「写っているのは僕と正輝、結衣に……修二か」

修二……とは幼馴染の一人だった。

しかし、中学生の時丁度、ある理由により命を落としてしまった。でも、あれは僕が殺したといっても間違いはない。

「あつ、いやなもん見せちまったな、樹」

正輝はすまない表情をしているが、もう慣れている。

僕はその写真をポケットにグシャツと入れた。

「いや、気にしてないさ。それより修行を続けるから邪魔するなら帰ってくれ」

「ええ、そんなことを言わずにさ」

「なら、おとなしくて見てろ」

正輝は了解と敬礼をしたが、本当に分かっているのだろうか。

その瞬間、正輝は宙にフワッと浮き出した。

「えっ？ えええ！？」

その本人も驚いているようだ。

よく見ると、何か糸のようなものが彼の身体に纏わり付いているのを見た。

「なんだこれは……」

そう思うと、またフワッと高く空に正輝は上がっていく。

そして、上を見上げるといたのは……木と木の間にも巣を張っている、でかいでかい蜘蛛だった。

「く、くもー！？」

正輝は驚いているが、何か楽しげだ。

「空をも飛べる男！ スパイダーツ」

正輝は言いかけた瞬間、蜘蛛の糸に身体をグルグル巻きにされていた。

「目が回るー」

どうして、こいつは危機感を持たないのだろうか。

とりあえず、僕はお札を構え、戦闘態勢に入った。

## 20話 修行（後書き）

お待たせしました。

つまり話ができなかったのは修行していたからです（言い訳）

20話です。ようやくです。とりあえず、まだまだ続きます。

21話 覚醒(前書き)

少し血がドバツと出ます。

## 21話 覚醒

紅神社裏の林にて、僕はなぜか超巨大な蜘蛛と戦いを繰り広げていた。

「ちいつ！」

糸を何度も吐き続け僕を捕縛しようとしているらしいが、なんとか避けている。

正輝を見てみると、相変わらず蜘蛛の糸によってグルグル巻きにされていった。

「正輝ーなんとか脱出できないかー？」

呼びかけても「無理ー、動けんー」と答える。

いや……もう少し危機感持てよ。

蜘蛛は木を伝って、蜘蛛の巣を広げていた。

そこに正輝も捕まっているわけだ。

しかし、なぜこんな超巨大な蜘蛛が神社裏の林にいるのだろうか。

もしや先日の鬼とやら放ったと思われる刺客なのかと思ったが……さつきから、気になる点がある。

「親父……どこいったんだ？」

そんな異変があれば真っ先に親父は気づくはずなんだが……。

「て、うわぁ!？」

急に超巨大蜘蛛は糸を連発してきた。

「避けきれない！」

臨で切ろうと試みても、この距離では間に合わない。

当たると思った瞬間　糸はシユルッと切れていった。

「え？　なんだ」

僕は一瞬何が起こったのかわからなかったが、隣の人影に気づき理解した。

「親父！」

「まったく、お前は戦闘中で雑念が多すぎる」  
お札を構えていた親父がいつの間にかいる。

「ていうか、どこ行ってたんだよ。それにあの蜘蛛はなんだ、紅家を狙う刺客か？」

少し怒りながら言つと「ああ、それはだなあ」とバツの悪そうな顔をしてる。

「いや、お前の修行の為に妖怪たちを封じた護符を使って、相手をしてもらおうと思つたらな。本当は普通の雑魚程度な妖怪をしようと思つたら、なんか間違えて……アレ出しちゃつてな」

親父は超巨大蜘蛛を指差した。

紅神社の神主に何代か前、式神しきがみ（陰陽師の使い魔）のように妖怪を操るといふ技を持つていた者がいたらしい。そのコレクションとして未だに蔵には妖怪を封じた護符が置かれてる。最もその技を使えるものは今やほとんどいないらしいが。

「オーケー分かつた……とりあえず親父、そこに直れ！ 成敗してくれるわあ！」

「すまん、樹よ。とりあえず冷静になれ」

この親父は本当に何様のつもりだろうか。

「で、あの蜘蛛なんだってんだよ。見たところ、只者じゃなさそうだけ」

「あー、まずいぞーあれは。土蜘蛛せむしなんて、まさかそんなものが封じてある護符があるとは思わなくてさ」

土蜘蛛……？ 不思議なのはなぜか聞いたことがある。

「ああ、有名だぞ。なんだって、あの源頼光みなせとのよりみつも戦つたという伝説の蜘蛛だ。で、とりあえずお前が勝てるわけがないぞ。あんな化け物」  
こいつ……自分で呼び出したくせにそんな言い草か。

「と、とりあえず。この前の『在』とかいつのを見せてくれよ」  
「おう、そうだな」

親父はお札を数枚出す。

「よし、行くぞ！ 土蜘蛛め！ 紅神社神主の私が相手だ！」  
と、かつこよく決めたはいいが……。

「シユルシユルツ」

「えっ？ ア〜レ〜」

親父は蜘蛛の糸にグルグルと巻かれて捕まえていった。

「あんな無駄なことばかりしゃべってるからだよ……」

「た、たつけてええー」

「あつ、お父様も捕まっただんですか」

正輝と仲良く親父は蜘蛛の巣に引っかかっている。

まさか、親父もこんな展開になるとは思ってたんだろう。

「結構、蜘蛛の糸って肌触りいいのな。粘っこいけど」

あと、正輝は頼むからもう少し危機感持て。

とりあえず後頼りになるのは姉さんぐらいなもんだ……。

いつものことなら、この辺に出てくるはずが。

一方の燕の部屋では

「あ、綾香殿。寝るなら自分の部屋か樹の部屋で寝てくれまいか？」

「やだー、ここがいいー」

綾香は燕のベッドでお昼寝中だった。

蜘蛛の糸はなお糸を吐いてくる。

「ちっ、さすがにちよつと疲れてきたな」

しかし、あちらのほうは衰えをしない。

とりあえず、攻撃を試みないことには。

「臨！」

お札を蜘蛛に向かい投げてみるが、すぐに「シユルツ」とお札が糸

に包み込まれてしまった。

「それなら正輝たちを！」

お札を正輝たちのグルグル巻きになった方に投げるが。

「カンッ」

「!?」

まるで鉄のように硬かった。

「ああ、無駄だぞ樹。そいつの糸は一本一本が硬いんだから。やるなら本体しかない」

そんなことを言われても、1枚か2枚だったらお札は糸にやられてしまう。

やるなら、3、4枚ということだ……。

「イチかバチかだ！ くらええ！」

僕はお札を左右に2枚つつ持ち、計4枚を投げつける。

「お、3枚できた」

1枚は飛ばなかったものの、3枚は臨で刃となったお札が飛んでいった。

しかし、蜘蛛は糸を吐く。

「シユルッ」

1、2枚は糸により落とされていったが、1枚はなんとか蜘蛛に当たった。

「シギヤアー」

蜘蛛が悲鳴を上げた。どうやら効いているようだが。

「いかん、樹！ 避ける！」

「えっ？」

親父がそう呼びかけた瞬間に怒った蜘蛛はすぐに反撃の構えを見せて糸を棒状にして吐いた。

まるで、その棒状は何かの刃のようにキラリと光っている。

「よ、避けられない」

僕の腹にそのまま糸が突き刺さってしまった。

「ぐう………いてえ」

「樹！」

それを見ていた正輝は叫んだ。

なんとか僕はそれを抜こうとするが、簡単に抜けない。

そういえば、正輝が言っていたとおり糸の性質は粘っこくもあるみたいだ。

たぶん、そのせいだろう。

「無理に抜こうとするな！ 傷口が広がるぞ！」

そのとおり、たぶん無理に抜こうとすれば粘っこいことだ、余計な傷までできてしまう。

だが、思ったより血がドバドバと出てくる。

このままでは出血死だろう。

「樹！ このままだと死ぬぞ！ 逃げろ！」

そんなことを言われれば、二人が食われるだけだ。

退くわけにはいかないが……。

蜘蛛はなおも先ほどの糸を吐き出した。

やはり避けきれず、次は右股みきももに突き刺さる。

「これで逃げれないってわけか……」

どうやら僕をゆっくりと痛めつけ味わうのつもりなのだろう、この蜘蛛は。

しかし、その前に血が足りなくなった気がする。

僕の視界が急に暗くなってきた。

「樹！ 気をしっかり持て！」

正輝の声がなんとか聞こえるが、どうも無理そうだ……。

僕はそのまま仰向けでガタンと倒れていった。

僕は暗闇が立っていた。

「ここは……あの世か」

どこを向いても暗闇だ。

しばらく歩いてみるが、やはり何も無い。

「そうか……死ぬって言うことはこのことか」

僕は意味を理解する。しかし、今は正輝と親父のことが心配だった。考えている内に目の前の人影を感じた。

「!？」

その人影には見覚えがあった。

なぜなら、それは僕自身だったからだ。

「なんで僕が!？」

「僕は君だよ。樹」

目の前の僕はそう言う、つまりもう一人の自分ってことか。

「ああ、その通りだ。いちおう君の考えていることも分かる」

思考も同じなのか。

「じゃあ聞きたい。僕は死んだのか？」

「まあ今のところはね。別にこのまま死なせてもいいけど……君はそうなりたくないでしょう？」

その通りだ、今は正輝と親父のピンチだ。

「もう修二の二の舞にはしたくないでしょ」

その言葉を聞いて、目をカッと開いた。

「修二の言葉を口にするな！ たとえ僕でも許さん！」

「ははは、ごめんごめん。じゃあ、ちよつとだけお願いあるんだよ」と、もう一人の僕はポケットからお札を取り出した。

「この札を先っぽを持ってほしい。なに、ただのお札だ……君に力を上げるね」

力を……こいつ何者だ。

「いいから早く、まあ今のやっている事は君が気絶してから起きるまで5秒ぐらいの出来事だけだ」

ほとんど一瞬みたいだ……しかし、このまま死ぬのは嫌なので、札を掴んだ。

「よし、じゃあこれからよろしくね」

もう一人の僕はニヤリとした。

「えっ？」



「何も、ただ一回死んだだけ」

先ほどの話は信じてもらえないだろう、僕は親父には話さなかった。

獲物を捕らえた蜘蛛はなお怒っている。

「樹！　ここは俺がやる！　お前は下がっている」

親父はお札を構えるが、僕はそれを止めた。

「親父、あいつは元々僕の修行相手なんでしょ？　だったら、修行の続きだよ」

僕は6枚のお札を持ち、蜘蛛に投げる。

「臨！」

6枚のお札は一齐に張っていた蜘蛛の巣を切り裂いていった。

そして、蜘蛛自身もドスンと落ちる。

「シギヤアー！」

蜘蛛の巣から落ちた驚きで、少したじろいでいるようだ。

「いきなり6枚臨だと……！？」

親父の得意の6枚臨を見事に使いこなしてしまったわけだ。

「だけど、これからだ！」

僕は今持っているお札の全てを広げた。

「在！」

お札は形作られ、剣のようになっていく。

そして、そのまま手に剣が握られた。

「赤い……」

しかし、持っていたものは姉が持っていたものと、親父のも違う。

刀身が赤く塗られた剣。

それを見た親父は知っているようだ。

「……紅べにありつき在月」

どうやら、この剣の名前ようだ。

僕は剣を構え、真空を放つ。

「臨！つて、赤！？」

真空が異様に赤かったのだ。

そのままその真空は蜘蛛の足を切り裂く。

なおも蜘蛛は諦めずに糸を吐くが。

「はぁ！」

糸を簡単に剣で切り裂いた。

蜘蛛は僕を見て、恐怖を感じているようだ。

「さて お前さつき、僕の股やったよな？ 倍返しだ」

そのまま7回剣を振り、残りの蜘蛛の足を全て切り裂いた。

「シギヤアアアアアアア」

まるでダルマのような蜘蛛がいる。

「樹、もういい！ やめろ！」

親父は止めに入るが、無視をした。

僕は剣を振り上げ、そのまま蜘蛛を縦に真つ二つに斬る。

赤かった刀身が、またさらに赤く塗られていった。

その感覚が不思議だった。僕は何か楽しんでいるように思えたのだ。

「樹！ やりすぎだ！」

その光景には親父が怒るが、僕はそのままガクンツと倒れた。

「樹、どうした！」

正輝も駆け寄るが なにやら非常に眠いのだ。

僕はそのまま目を閉じてしまった。

「ハッ！？ ここは？」

気がつくくと、僕の部屋のベッドにいた。

「樹殿、大丈夫か？」

心配そうに燕が僕を見ていた。

「なんとか大丈夫だ……僕は一体どうなったんだ」

僕は頭を抑える。

「しかし、樹殿すごいではないか。あの土蜘蛛をやるとは、あやつは私らのご先祖様も苦労した敵だぞ」

そつだ、僕はあの土蜘蛛をやつた。でも、あれは本当に僕だつたのか？

確かに僕としての意識はあつた、だけど何か僕自身の簡単に言えばキヤラではなかつた。

「まさか、あの時のあいつか？」

死んだと思われるときにいた、もう一人の自分。

力とは……こういうことなのかもしれない。

「燕、もう少し寝るわ」

「ああ、ゆつくりやすまれよ」

僕はしばらく寝てすごそうと思つた。

とりあえず、そろそろ学校行かないとなあ。

樹の部屋の扉前で親父と姉が話していた。

「綾香……俺は何かとんでもないことをしてしまつた気がする」

「その通りね。たぶん樹の身体……もう戻れないわよ？」

親父はその言葉にうつむいた。

21話 覚醒（後書き）

いくぜ！相棒！

うん、いくよ！もう一人の僕！

と遊○王に近い存在。

うん、元ネタはたぶんそれ。

## おまけ 紅神社レポート

今日はこの俺、内藤正輝が極秘に紅神社神主から聞いたメモを公開するぜ。

紅神社の社務所にて正輝と紅宗治がお互い向かい合うようテーブル越しに座っていた。

「約束どおり、お賽銭は入れたので教えてください」

正輝は紅宗治に神社のことを教えてもらう為、お賽銭を要求されたので早急に入れてきた後のことだ。

まず、紅神社とは。

「紅神社とは平安時代より陰陽師が活躍していた時代、陰陽道とは異なった術を使う者たちのこと。実はかの有名な陰陽師安倍清明あへのせいめいとは仲が悪かったが、鬼切りの一族つまり祖先となる頼光四天王たちの繋がりです。互いに物の怪を退治しあっていたと言われ、奉られたのが始まり」

「なるほど……しかし、現代において紅の名前は聞きませんか？」

陰陽師なんかは歴史の教科書に出てくるぐらい有名ですが」

「陰陽師というのは基本的に誰でもできる術のこと。逆に紅の術は血筋のものにしか扱えないものなので、まったく広まらなかったというわけだ」

「つまり、俺にも陰陽師はできるってことかな？」

正輝はそんな突拍子もないことをいうが。

「まあ陰陽道でも靈感の強いものが陰陽師にはなれるが、弱いものにはなれないがな」

紅宗治の言葉を聞いて、正輝は少しガツクリした。

「それでは次の質問です。まず宗治さんの奥様のなれそめについて……」  
そのことを聞いた宗治は少しムツと表情をした。  
「あんまり話したくないんだけどなあ。ええと、確かあいつが高校生の時、京都の修学旅行中らしくて途中行方不明になったりなんかして、私がたまたま清明神社（安倍清明を奉つてある神社）にイタズラした帰り、たまたま嵐山で天狗を見かけて、あとを着けていつてみれば母さんがいたわけだ」

「清明神社にイタズラって……いちおう、あなたも神社の神主なんですから」

正輝はメモを持ちながら呆れていた。

「若気の至りって奴だ。まあその後は助けたら、何かと縁があつて今にいたるわけだ」

「なるほど……でプロポーズの言葉は？」  
宗治は赤面でモジモジしている。

「ああ、言いたくなければ結構で」  
しかし、途中で宗治は渋い声で言い放った。

「一緒に被らないか？」  
「……」

『それはひょっとしてギャグで言ってるのか？』  
そんな心境の正輝はひたすらメモを取り続けた。

「ええと、次の質問は読者様から数々のお便りが寄せられました（嘘）綾香お姉さまはどうして幽霊なのに物を掴んだりできるんですか？  
というか幽霊が寝たりとか物を食べたりするのはおかしくありませんか？  
ということなのですが」

正輝は宗治の顔を伺うとどうも渋っているようだ。

「う、うーむ。とりあえず物をつかんだりという質問はいちおうポルターガイスト現象というものがあってだね、幽霊が物を自由に動かせるという現象のことだ」

「ああ、映画でもありましたね。で、食べたり寝たりするのは……？」

「確かに普通の幽霊ではありえないことだが、まあ今はノーコメントで」

正輝はメモに何か重大なヒミツありとメモに書き加えておいた。

「続いての質問でお使いが多かったのは……燕ちゃんのスリーサイズを、あつ個人的に俺も気になるのでぜひお願いします」

「ああ、燕ちゃんかあ。うーん、私の千里眼で見る限りでは……」

「ガッシャーン！」

と、社務所の窓が割られ、そこから正輝と宗治の間の壁に臨のお札が刺さっていた。

「どうみても、これ樹の仕業だよ……ちっ」

『ちなみに綾香姉さまから聞くと、普段さらしをしているが胸はでかいそうです』

「それでは次にお札を投げてきた樹の話でも聞きに行きますか」

正輝は宗治に一礼をして、神社の社の方にて掃除をしている樹に会いに行った。

「たくつ、休日から親父と何の話してんだよ」

樹は正輝を見て少しイラつとしながら箒を掃いていた。

「はいはい、取材ですよ取材。さて、では樹さんの生年月日は？」

「2月3日の節分の日。で、15歳だよ」

正輝はメモに「遅生まれ」と書き込んだ。

「そういえば樹の小さいときの写真って見たことないな」

「ああ、確か僕を写したカメラが、親父が改造したお陰で魂を吸い

取るという霊媒道具にしてから、フィルムもそのまままで売っちゃたらしい」

「なんかどっかで、そんな道具があったような……」

とりあえず、正輝はメモに宗治が某ゲームに関係あり?と書き加えた。

メモを終えると、ぱつとそのメモが宙に浮いた。

「なんだなんだ!？」

正輝は突然、メモが空中に浮かぶことに驚いたが、すぐに正体は分かった。

「これは綾香お姉さまか!」

そう分かると、メモはバサツと正輝の頭に落ちた。

「樹、綾香お姉さまの話も聞きたいんだ。通訳してくれ」

正輝は樹に頼み込む。が、どうもあまり良く思わない顔をするが仕方ないと思いいざ承諾した。

「それじゃあお姉さまに質問。アッキーモモとい、秋本沙織とはどれくらいの友人関係だったのですか」

「沙織とは高校入学の時にクラスが一緒になったから始まりだったわ。といっても、初めは私のことを良く思っていなかったそうよ」

「ほほう、それでそれで」

正輝は興味を持ち出したようだが、樹も興味を持っていた。

「あの子すっかりしすぎでしょ？ だから私みたいな、のほほんとしているのが苦手だったみたいね。といっても、それが第一印象なだけで話してみたら気があったというよく話よ」

『アッキーモつぽい』と正輝と樹は思った。

正輝はそのまま二人に別れを告げ、神社裏の林に着いた。

「さてと、燕ちゃってうわあ」

正輝は林に入り、叫ぼうとした瞬間に木刀が前をかすった。

「なんだ知らぬ奴かと思えば正輝殿か」

どうやら燕は木刀と袴というスタイルで修行をしていたようだ。

「ちよつと取材をしたくてね、休みがてら話を聞いていいかな」

「よかるう」

正輝と燕は座るのに適した石に座った。

「で、ずばりいうと樹のことどう思ってる？」

正輝は一番気になる質問をあげた。

燕はギクツと顔が引きつったが、すぐに戻した。

「ず、ずばりと言われても樹殿の家に居候してる身であり、そのよ  
うなやましいことは」

ニヤニヤしながら正輝はメモに何か書き込んでいた。

「で、質問変えるけど鬼切りの一族のことをよく聞かしてほしいん  
だけど」

「うむ、鬼切りというのは平安時代にいた源頼光四天王たちの血筋  
だといわれている。その証拠にこの鬼切りがそうだ。最も鬼切りの  
刀というの多くの数があるんだがな」

「なるほど、つまり燕ちゃんが持っている鬼切りの刀もその内の1  
本ってことなんだね」

「その中でもいわく付きと呼ばれる刀もあるが、私はまだ見たこと  
がない」

正輝はメモにそのうち登場とメモをした。

「さて最後は」

正輝は樹の家に入りこむ。

「影の実力者の樹のお母様にお話を聞きたいと思います」

正輝はずかすかとリビングに上がりこみ、樹の母がいるテーブルに  
座った。

「あら、正輝ちゃんじゃない。お久しぶりね」

樹の母は特に気にせずにお茶を飲んでいた。

「それでは質問なのですが、まずお母様の名前を……」

「くれないみつき紅美月と言います。ちなみに旧姓は桜木です」

『花道……』と思い浮かんだが、口に出すことはしない正輝だった。

「ちなみにお歳は……」

と質問した瞬間に、何か嫌なオーラが樹の母から感じられた。

「あつ、やっぱりいいです。それでは最大の質問ですが　どうして

紅宗治さんと結婚を？」

さすがにあのプロポーズの言葉は正輝も納得できなかったようだ。

「でも、あの言葉を聞いたら、ああこの人には私しかないんだな  
と思っただけよ」

正輝はそれを聞いて納得した。

とりあえず紅神社のメモはここで終了。

しかし、何か重要なことをはぐらかされた気がするの俺の気のせいではないはずだ。

これからも紅神社を調査していこうと思う。

## おまけ 紅神社レポート（後書き）

実はこの話、自分自身が話を作る際のメモを使用しています。アイデアばっかりまとめて書いていたら、これ話できるんじゃないかと思いやっちゃんいました。後悔はしてる。

## 22話 親父の過去

巨大蜘蛛が僕らを襲ったことをきっかけに自身に大怪我をしてしまったので、数日の休みが必要だった。

なんせ一度は死に掛けてぐらいの身だ。

そして、その時に会った僕と同じ容姿をした者に力を与えられ、まるで自分ではないような意思が僕に入り込んだ。

そのシヨックもあるせいかな熱も出してしまふ始末である。

その間にもいつものメンバーたちや、秋本先生までもがお見舞いに来てくれた。

看病も母だけでなく結衣と美香さんで交代で行ってもらい、途中全快した燕にも看てもらった。

そんな中で燕が看てくれる番の時のことだ。

僕の熱はようやく引いてきていて、とりあえず全快に近い状態までにはなった。

しかし、燕は僕に濡れ布巾をしつこく頭に乘せてくる。

「燕、とりあえず熱引いたからもう大丈夫だって」

僕は布巾を払いのけようとしますが、無理やりおでこを手で押さえられてしまった。

「ダメだ。病み上がりでまたぶり返すかもしれぬ。とりあえずしばらく安静にする」

こんなにも必死で僕を看てくれるのは、たぶん巨大蜘蛛と戦った時に自分がいれば、このようにならなかつたという悔しさもあるのだろうか。

「燕はもう怪我は大丈夫なのかい？」

「おかげさまでな。昔から傷にはなれている」

確かに普通の人よりは直りが早い気がする。やはり、それだけ普段鍛錬している賜物ということだろう。

「樹殿は少々ひ弱すぎる。全快の時には私が稽古をつけましょう」  
「ははは、まあお手柔らかに頼むよ」

そんな話をしている時、コンコンツとドアをノックする音がなった。  
「はい？ て親父か」

「お、仲良くやってるな」

部屋に入ってきたのは親父だった。しかし、また自分の部屋に父自ら来ることが最近では珍しいことだ。

「宗治殿、私は席をはずすか？」

燕は気を利かして、部屋を出ようとしたが親父はそれを断った。

「いや、とりあえず燕ちゃんも聞いたおいたほうがいいだろう」

そのまま親父は僕の机のイスを逆向きにして座った。

「ちよつと話は前になるが、お前たちが勝手に依頼を受けたときのことだ」

勝手に依頼を受けたというと、スーツの男が廃ビルをどうにかしてほしいものだっただろうか。

「そうだ、お前たちが騙されて畏にはまった依頼だ」

僕と燕は少し息を詰まらせたが、なぜ今頃になってこのことを語るのか不思議だ。

「気づいていると思うが、そのスーツの男に変装していた鬼、羅刹は紅家を狙う者の刺客だ」

そんな気はしていたが、予想通りだった。

「前にもお前が狙われるということもあつたよな。そのことと同一人物だ」

つまり紅家というよりは僕個人を狙っているようだ。

しかし、なんでまた？ 親父とかなら話は分かるが。

「そいつは俺に対して恨みを抱えている。そして、そいつと俺には切っても切れぬ縁があるからだ」

「宗治殿！ まさか……」

燕はしばらく黙っていたが、何を言うのか察知し慌てていた。

「そいつの名前は紅誠治くれないせいじ俺の双子の弟だ」

「!?!」

驚きで顔を隠せなかった。というか、親父に弟がいたのが初耳だ。

「でも、なぜ兄弟でそんなことを！」

兄弟がそれほどまでに恨みを買うなんてものはおかしい。

「そのことを語るには俺の過去を話す必要があるな」

普段、俺と誠治は仲の良い双子であった。

母を若い頃に亡くした俺たちはお互い助け合い、どちらも父に認めてもらいたいのが為に常に喧嘩もしていたが、あとには笑いあっていた。しかし、奴はある一つの過ちを犯してしまった。

それは俺と誠治が二十歳を共に迎えること、父から神主をどちらかが継ぐかという話をした時だ。

「兄さんに紅神社を継がせるとはどういうことですか!?!」

父は兄である俺に紅神社の神主をさせるということで、誠治は猛烈に反対した。

「兄といつても双子です。数秒の違いの差でしかありません！」

父は黙って聞いていたが、少しため息を付いた。

「では、はっきり言おう。お前は紅の神主の器はない。ましてや、妖怪を操る術を復活させようとしたお前にはな」

紅神社の蔵には大量の妖怪を封じた呪符じゆふがあるが、それを使いこなすものは当時にはいなかった。しかし、誠治はそれを完成させようとしていたのだ。

「あの技は紅を破滅に招く力を得る。そして、お前の考えはもう分

かっているぞ」

「!?!」

誠治はぎくりと驚いた様子を見せた。

ただ黙って、その光景を見ていた俺を父はジロリと見つめる。

「そういうわけだ宗治よ。もうすぐお前にも嫁ができるしな安心させてやりたいだろう」

母さんとは婚約済みであり、綾香も宿していた。

そのこともあってか、俺にどうしても神主を引き継がせたかったのだろう。

「……」

弟は黙って、こちらをすろくくらみつけた。

それから神主を引き継ぐ儀はもうすぐ行われる紅の鬼の再封印の儀式を行ったあとに行われるということになった。

その間に俺には母さんと結婚し、綾香も生まれていた。

父は俺を祝福してくれたが、誠治は最後まで俺をにらみつけるままだった。

紅の鬼の再封印は50年に1度行われるもの。

また命がけでもあり、俺と誠治は最後まで父に付き添うことにした。儀式が始まり、父は鬼を封印してる扉を一旦解いた。

そして、すぐにまた外側の扉を封印するという作業だ。

簡単そうに見えるが、一歩間違えれば紅の鬼を解いてしまう。

もしなんらかのミスで外側に扉に封印すること失敗すれば、自らが扉の中に飛び込み扉の内側から封印をするしかない。

もちろん封印された扉はもう開けることはできない。

つまり犠牲にしてまで封印をしなければならぬのだ。

父もいつもよりか真剣にそれを挑もうとしていた。

しかし、封印を解いた瞬間に誠治は動いた。

「誠治!?!」

俺の呼びかけを無視し、誠治は父に寄り　臨のお札で父を刺した。俺はそれに気づくと、すぐに誠治を突き放して親父に駆け寄る。

「父さん！　大丈夫ですか！」

「ワシのことはいい。それより誠治を抑えておけ……」

鬼が封印された扉を見ると、今にも開かんばかりな状況で扉に少し割れ目ができ広がっている。

「宗治よ。あとのことは任せた！」

父は扉を開け、すかさず中に入って行く。

「父さん！！！」

俺を呼ぶ声もむなしく扉は閉まり内側から封印の術がなされていった。

倒れていた誠治はむくりと起きて、ニヤリという顔を浮かべる。

「父さん……あなたが悪いんですよ……私を認めないから」

「誠治！　きさまあああ！」

「あなたですよ！　兄さん！」

俺と誠治はお互いにお札を構え、飛ばす。

「臨！」

お互いに術は同じで飛ばされたお札は当たり相殺された。

「さすが双子です。戦闘方法は似ていますね……」

「誠治！　お前なにをしたか分かっているのか！？　父さんを殺したんだぞ！」

「兄さんこそ私の気持ちも知らずに……小さいときから兄ばかりが良い目を見られてきた。私は父に認めてもらいたかった。だから、過去の力を蘇らせたのだ！」

「違う！　お前は認めてもらいたいためじゃない！　力という心の鬼に負けたんだ！」

「なら、その鬼をも操ってみせよう！　羅刹！」

誠治は呪符を出していた。それはまさか、鬼を封じ込めたという呪符ということはまだ知らなかった。

その呪符から出てきたのは一本角のまさしく鬼、まさに鬼の形相といわんばかりの顔を俺に見せた。

「鬼を操るなど紅家を縁を切るといふことか！」

本来、鬼と敵対している紅家は鬼に味方をした時点で縁を切るといふことにされていた。

しかし、誠治はそれをやってのけるといふことは……。

「何が紅だ。では証明してやろう！ 鬼の力こそが真に持つべき力だということな！」

俺はその鬼と誠治の死闘の末、奴の片方の眼を切り裂くことができ、それに逃げるかのように二人は去っていった。

「あいつは俺を恨んでいる。家族に手をかけ俺を落ち込みさせ、俺をやるつもりだろう」

親父の話を黙って聞いていた僕らは何か言うこともできなかった。

燕は僕の様子を見て口を開いた。

「俺の目的はその紅誠治を斬ること。そして、その操っていた鬼、羅刹を葬ることだ」

つまり燕は初めからこの話を知っていたのだろう。

「そういうことだ……言っておくが誠治は強い。お前も気を引き締めていけよ」

親父はその言葉を言い残し、部屋を去っていく。

「大丈夫だ、樹殿。いざというときは俺もいる」

燕は胸をポンツと手でたたいた。

「頼りにしてるよ燕」

宗治が部屋から出たあと、綾香は部屋の外に待っていた。

「なんだいたのか」

「いい話しちゃって、あんなこと」

綾香は少し不機嫌に宗治に話しかける。

「別にいいさ、どうせ知ることになるしな。早いほうがいいだろう」

「でも、まだその『続き』を聞かせるにはまだ早いわよ」

「そうだな……それはまだ先のことだ」

親父は静かにタバコをくわえて神社の社務所に向かっていった。

22話 親父の過去（後書き）

ようやく宗治と誠治の話がかけました。

## 23話 進路調査

僕と燕は何日かぶりの学校に行くと、クラスに入った途端みんなが歓声をあげた。

「な、何事？」

燕も困惑しているが、僕自身もここまで歓声を上げるほど人気者だったのだろうか。

すると、正輝がテクテクと近づいてくる。

「いやあ、お前がなんかもう学校来れなくなるかもって大げさに学校新聞に書きちゃったからよ。この有様で……」

どうやら、またこいつが余計なことをしていたようだ。

「燕ちゃんも大丈夫だったの？ 骨にヒビが入ったとか言ってたけど」

「わ、私は大丈夫だ」

燕にもクラス中の女の子が心配してきた、どうやら燕は人気者のようだ。

なんとかみんなが落ち着いてきた頃、HRが始まった。

「おう、紅と鬼切も久々に来たな！」

秋本先生も相変わらずの口調で僕たちに呼びかけた。

「さてと、今日のHRはこれをやってもらおう！」

と秋本先生は何かのプリントを出している。

クラス全員が？という顔になっているのだが、正輝は何かを知っているようだ。

「進路調査のプリントだ。なあにそんな大したことは聞かない。自分が大学へ行くかと将来の夢はなんだってことだけだ。明日までの宿題にするから、みんな書いてきてくれ」

進路調査ね……まあ僕自身は紅神社の神主という決められた進路があるんで特に問題はないが、隣の二人はどういう夢があるのだろうか。

「燕は大学は置いといて、将来どうするんだ？」

とりあえず燕の将来が気になるところだ、一体こいつはどういうものになりたいのか。

「いや、私は女だからな。結婚するのが普通だろう？」

主婦希望とは意外と普通で驚いた。

燕のことだからもつと侍！とか言いそうだと思ったんだが。

と、隣を見てみると珍しく腕を組んで配られたプリントを前にし考え込んでいる正輝がいた。

「ど、どうしたん正輝。そんな考え込んで、お前の夢は新聞記者じゃないのか？」

「いや、そうなんだけどさ。ただその道がとてつもなく厳しいから、良い大学にも行かないと行けないし、それから雇ってもらえるかもどうか分からないし」

こいつもいろいろと考えていることに驚いた……確かに僕自身も神主の資格を取るためには大学に行かないといけないんだが、そんなに難しいところではない。

「てか、正輝の親父さんも新聞記者なんだろ？ だったら、コネとかあるんじゃないか？」

そういう設定だったのをすっかり忘れていたが、正輝の父も新聞記者なはずだ。

「ああ、うちはだめだめ。すげえ厳しいし、自分の努力でのし上がった人だからコネとか認めない」

正輝の性格からして、そんな人とは思えないのが不思議なんだが……。

「それでは正輝殿は他に夢が？」

燕も話に入ってくると、正輝はまたもやウンと考え込んだ。

「やっぱり普通のサラリーマンとかかな？」

こいつの性格でまず普通のサラリーマンにはならないと思うんだが……。

僕と燕はすぐに書いてしまっただけで先に提出したのだが、正輝は一向に考え込んだままだ。

その考え込みは授業中も続いた。

「内藤！ 授業はまじめに聞け！！」

と先生から怒られるも、お構いなしにまだ考えている。

「正輝殿。珍しく真剣じゃな」

「初めてみたわ……こんなこと」

それがお昼休みまで続くことになった。

「さてと……正輝！ 購買で買って、てまだ悩んでいるし」

こいつはいつまで悩み続けるんだろう、と。

「樹ーお弁当作ってきたよー」

教室のドア越しに結衣と美香さんが立っていた。

「私も作ってきたので燕さんと正輝さんもどうですか？」

美香さんも作ってきたくれたようだ。

「丁度良かったか、正輝行こうぜ！」

「……」

聞く耳もたないので無理やり引つ張って連れて行った。

いつもの屋上でみんなでお弁当を広げて食べる。

考えてみれば男2人で女3人なのかと思うと、人にとってはうらやましい青春をしているのだろうか。

こんなときなら正輝は興奮しているはずだが、相変わらずポケーツとしている。

「ね、ねえ。正輝どうかしたの？」

不振に思った結衣が僕に耳打ちで話しかけてきた。

「いや実は進路調査で相当悩んでいるようで」

「ああ、あれ私たちのクラスもやったよ」

それは丁度いいと思い、結衣と美香さんについても聞いてみた。

正輝も参考にしてくれるかもしれないしな。

「私はケーキ屋とか……かな？」

結衣はそんなことを言うが、はっきり言ってこの普通の料理の弁当では相当な修業がいるだろう。

「み、美香さんは？」

「私はお父様の仕事を手伝うことですかね」  
なるほど、社長令嬢ならではというわけか。

「でも、やっぱり結婚もしたいです」

と、こちらをチラッと見てくる視線があったが、まあ気のせいだろう。

逆にそれを聞いて、こちらをジロツと見る二人の視線があったのは事実だろうが。

「で、正輝君は新聞記者になるのでは……」

美香さんの言葉にふと我が帰ったのか正輝は答えた。

「いや、いろいろなるのに難しくてさ」

「でも、やっぱり進路調査ですから、ただ将来の夢っていうだけで書いておけばいいのでは」

「それもそうなんだけど……」

どうも先ほどから正輝がしつこいように否定的なのが気づいた。

「正輝殿、何かがおかしくないか？」

燕もそれに気づいていたようだ。

「さすが燕ちゃんか……うん、実は本当に俺って新聞記者になりたいのかなって」

驚いた、あんなに学校新聞とか作るのを楽しんでいる人間がそんなことを言う。

「いや、学校新聞とかは学校内で作れるし、誰にも迷惑がかからない。だけど、社会になると違う。いつも俺の親父が毎日帰ってこない日もあるし、危険なところだっけ行くときもある。それを毎回心配するのは母さんと俺だぜ？ そんなのを自分の将来なる奥方や子供にさせることできるのかなって」

正輝もいろいろ苦難があったことに一同は目を丸くしていた。

「あれ、そんなに俺がそういうことの言うの以外だった？」

一同「以外すぎ」

「まあ今日は俺の親父が帰ってくるし、聞いてみるかな」

「それがいいだろ、明日までの提出らしいし」

とりあえず、そういうことに正輝の意見はまとまり、お昼休みは終わっていった。

放課後

帰りの支度をしていると、いつもは帰り支度が遅い正輝が早くに学校を出ようとしていた。

それだけ正輝の父親に話を聞きたいのだろう。

僕はそつとそれを見送ることにした。

**23話 進路調査（後書き）**

次回話は正輝の視点になります。

24話 正輝の親父登場（前書き）

正輝視点です。

## 24話 正輝の親父登場

「将来か……」

いつもなら樹たちと一緒に下校して、少し遅く帰るのだが今日は違った。

この俺、内藤正輝はこれまでの人生の中で一番悩んでいるかもしれない。

本当に俺がなりたいのは新聞記者なのだろうか？

だが、それはタダ単に親父がそうだからというわけであって、俺がなる必要もない。

今日はその親父が帰ってくる日だ、話を聞くにはいいだろう。

「あら、正輝。いつもより早かったね」

俺は家に帰ると、母さんが台所で晩御飯の支度をしていた。

「今日は親父が帰ってくるからね、何か手伝うよ」

「あらら、あの人の帰りを待ってるなんて珍しいわね」

確かにいつもなら「別に……」とどこかの態度の悪かった芸能人みたいな反応するが、今日はこちらも話がある。

親父は俺が小さいときから、まったく家にいることはなかった。

なんせ取材取材と記事になりそうごとがあれば、どこへでも向かうのである。

今回も米軍のことで問題となっている沖縄に行っているのである。

最初は特に気にしてはいなかったが、だんだん自分もその似たような性格に少しイラつくこともあった。

それだけ将来、どうなるかを見ているようなわけだ。

母さんはいつもよりかは上機嫌だ。

やはり親父の帰りを一番に待っているのは母なのだろう。

いつもより少し豪華な晩ご飯ができると、ドアからガチャという音が聞こえた。

「あっ、帰ってきたわ!」

早速、俺と母さんは親父を向かえに行くと、何かお土産を持った親父が玄関にいた。

「ああ、疲れたわ。とりあえず風呂」

と、何も言わぬまま俺に土産袋を渡して風呂場に向かう親父。

「父さん、あとで話があるんだけど!」

風呂に入る前にそう言つと、帰ってきた言葉は。

「疲れているんだ。すまないが明日にしてくれ」

そんなことを言う。

しかし、明日では宿題の提出期限に間に合わないし、親父の朝はとにかく早い。

またそんなときに話を聞ける状況でも無く、すぐに準備を済ませてさっさと出勤する。

「こうなつたら、手段は一つしかないな」

俺はすぐに服を脱ぎだし。

「突撃!」

風呂場に飛び込んだ。

「親父ーお背中ナガシマシヨウカー」

全裸で入った俺は恥じも捨て親父にさらけ出していた。

「お、おまえ! 前は隠せ!」

さすがの親父もいきなりのものであわてている。

「とりあえず風呂場で語ろうじゃないか、親父」

「あ、ああ」

無駄にハイテンションにした俺は浴槽に二人で入った。

「そつといえは久々だな、お前と風呂に入るのも」

親父も落ち着いてきて、なんとなく話に入ることまでできたようだ。

「うん、どのくらいかな。小学生以来？」

「もうそんなになるのか、お前もいろいろ成長したんだな」

そんなことを言いながら、下半身部分を見られたが下ネタは置いておくことにしよう。

「それよりさ、親父にさっき話があるって言ったんだけど」

「ああ、珍しいなお前から話なんて」

そりゃ、あんさんが滅多にいないから話せないことばかりなんだが……。

「実は学校から進路調査で将来の夢を決めないといけなくて……」  
親父がそれを聞いて無言でうなづいた。

「なんだ、自分の夢さえも語れないのか」

「まあそうんだけど……親父はどうして新聞記者になろうと思ったの？」

前からずっと聞きたがっていたことを聞くことにした。

「この話は母さんにも言っていないぞ？ 男同士の約束で誰にもしゃべらないなら話す」

俺はうなづくと親父はニコリと笑顔で答え、話始めた。

俺が……そうだな、正輝と同年ぐらいの頃にクラスにかわいい女の子がいてな。

誰にでも優しくして普段あまり女子と話さなかった俺にも気軽に話してくれて、俺も自然と回りの男子連中と同じように彼女に惹かれていった。

そんな中で俺にもチャンスがきた、京都の修学旅行でグループが同じになったことだ。

それに運がいいことに同じ組んだ男子は同じグループの別の女子と付き合ってるだった奴だから、邪魔者もなし。

俺は彼女と二人きりになるように仕向けたときのことだ。

「あの二人は相変わらずラブラブだね、あれじゃこっちも気を利かせて二人にさせてあげるしかないよね」

彼女と俺は普通なら4人グループで行かないといけない修学旅行のルートを二人で歩いていた。

もちろん俺が事前にそうなるよう、その男子に頼んでおいたのだ。つまり気を利かせておいて、こっちも二人つきりになる作戦だ。

「あはは、羨ましいね。でも、俺も人気者の君と二人になれるなんて他の男子に羨ましがられちゃうな」

「もう、冗談はやめてよ」

そんな会話をしながら俺は彼女にずいずいと攻めていった。

何回かみんなと合流することもあったが、同じような手口で二人になっっていた。

彼女は少し「あんたら、ラブラブすぎ」と怒り気味でもあったが。そして、最後の名所の嵐山に着いた時、俺は決心をした。

『彼女に告白しよう』

俺はまた二人つきりになるのを狙い、少し誰にもいないところに誘い出した。

「ど、どうしたの話って？」

彼女も少し緊張している感がある。

まあ普通なら、こんな状況であれば気づくはずだろう。

「じ、実は俺……」

さあ今だ！という時　とんでもない光景を直後に見た。

「えっ？　きゃ、きゃ　ああああ！？」

彼女が……浮いている？

「な、なんだああ！？」

なぜ浮いているのか俺には検討も付かなかった。しかし、肌に強い

風が伝わるのを感じる。

「い、今捕まえるからな！」

俺はとつさに彼女を手を捕まえようとした瞬間　　彼女は大空を即座に飛んでいった。

「さ、桜木！！！」

大声で彼女の名前を叫ぶも、すぐに聞こえないところまで行ってしまった。

「さ、桜木………？」

ここまで親父の話聞いた正輝は最後の部分に聞き覚えがあった。

『どこかで………どこかで聞いたはずなんだけど』

そして、その話自体も何か似た話を聞いたことがある。

「そろそろ背中を流してくれ、続きを話すか」

親父はざばあと湯船から上がると、シャワーを浴びている。俺もすかさず上がり、親父の背中をゴシゴシと洗い始めた。

「それで………そのあとどうなったの？」

俺はなんとか彼女を見逃さぬように追いかけていった。

全速で追いかけて、彼女が降りたのは竹やぶだ。

「はあはあ………一体なにがどうなってんだよ」

そこまで全速だったのもあり、息を切らして俺は膝を地に着けた。

彼女を見ると、竹に寄りかかり気絶をしているようだ。

俺はすぐに息を整え近づこうとすると　　。

「ウワッ！？」

すぐに急激な突風が起こり、俺自身吹っ飛ばしたのだ。

竹に当たった俺はしばらく呆然としていた。

まったく意味が分からない。

そして頬に伝わる痛みもあった。  
手でこすってみてみると、血が出ている。

「なんなんだ……一体？」

そして、もう一度彼女の方を見ると　竜巻のようなものが渦巻いているではないか。

竹の葉がざわざわ……と揺れている。

直感的にあれに触れることはやばいと思い、一旦後ろに逃げることにした。

しかし、すぐに竜巻は追ってきてグルッと回り込むように俺の前に現れた。

「ちっ……」

横にジグザグ移動するも、竜巻は追ってきている。

「おいおい！　なんだってんだよ！」

と叫んだ瞬間に、出てきたばかりであるうの竹の子に足をつまずいてしまった。

「くっ、まずい！」

竜巻はそれを待っていたと待ち構えるように一気に近づいてきた！  
もうだめだと腕で顔を伏せた瞬間　。

「あ、あれ？」

竜巻が襲ってこない。

腕を解いてみると、目の前にはお札のようなものが列となってでき、  
竜巻を防いでいた。

「な、なんだこれ！」

竜巻と札が同時に消え去ると、横から声が出た。

「大丈夫か？」

見ると、何者かが自分に手を差し伸べている。

その手を取り見てみると、長い髪を後ろに結い……何か神社の神主  
のような服を着ている、歳は同じくらいの青年がいた。

「まったく……とんだ厄介なことに引き込まれたな。待ってる、彼

女助けてやるから」

青年はそういうと、先ほどのお札を両手に持ち、まったく何も無いところに駆けて行った。

「なんなんだ……とりあえず彼女を助けないと！」

瞬間に彼女を救いだそうとすると、青年は見えない何かと戦っている。

彼女をとりあえず抱っこして、その場から逃げようとする。

「あぶない！ 避ける！」

青年が叫んだ瞬間、またあの竜巻が自身の方向に飛んできた！

「て、うわあああ！」

避けることもできなく、またもや吹き飛ばされ、俺は竹に当たってなんとか凌いだ。

彼女も一緒に落としてしまった。あのままでは地面に激突する。

「おっと！」

と、見事に彼女を青年はナイスキャッチする。

その衝撃か、彼女も気絶から起きたようだ。

「えっ あなた誰？」

彼女も目が覚め、目の前にはじめて見る青年の顔に驚いていた。

「白馬の騎士つてもんじゃないが、すまない。あとは自分で逃げてくれ」

青年は彼女を立たせ、また見えない何かのところにお札を構え挑む。

「臨！ 皆！」

青年が二つのまるで手裏剣のようになった札を左右に投げ、まるでブーメランのように戻ってきている。

青年に札が戻ってくる途中で何かに当たったが、まるで夢を見ているようだ、なんせ何も見えない空中で札が刺さっているのだ。

「ぐああああああ」

どこからともなく男の低い声がした。

「やっと捕まえた……これに懲りたら、もう人を嫁にしようとするなよ？」

青年は札が刺さっている何かに説教をし、そのまま風がフワッと伝わってきた。

「ちっ、逃げたか」

「どうやら、その見えない物体は逃げたようだ。」

「さてと……」

青年は事が終わると、こちらに近づいてくる。

「大丈夫だったか？ 何もされてない？」

「どうやら、それを呆然と見ていた彼女に心配をしているようだ。」

俺も竹から起き上がり、青年に近づく。

「なんだか分からないけど、助かったよ！」

「いや、何。俺もたまたまアイツを見かけたただけだから」

「アイツって？」

アツと青年は表情を変えたが、まあ仕方ないと思い、手で頭をかきながら言った。

「天狗だよ。あいつ、その娘がかわいいからって嫁にしたいから攫さらったんだと」

て、天狗……確かに京都には天狗の伝説があるっていうが、まさか。

「さてと、何かその娘、呆然としたままだけど大丈夫かな？」

彼女を見ると、確かに呆然とこちらを見たままだ。

「と、とりあえずあんたの名前を聞かせてくれ……」

と、俺は名前を求めたが。

「ああ、俺は紅……」

青年は言いかけた瞬間、何かピタッと止まった。

「捕まえた！」

青年の頭には札がいつの間にか貼り付けられていたのだ。

「ぎゃ、ぎゃあああ」

と、後ろに何かに引っ張られていく青年の先には、また驚いた。

「お、同じ顔がもう一人!?」  
なんと、そこにはその青年と同じ顔がいたのだ。  
「兄さん! また清明神社に落書きしたでしょう! 神主さん怒ってますから謝りにいきますよ!」  
と、その青年に説教してではないか。どうやら兄さんと呼ぶあたり、双子の兄弟なのだろう。  
「あ、すいません。兄が迷惑をかけました。これで失礼しまーす」  
その弟の方と思える青年はこちらに丁寧にあいさつし、この場を離れていった。

「な、なんだつたろうな、一体」  
彼女に話しかけると、何か呆然とそのあとを見ている。

「か、かつこいい……」

「桜木!？」

やばい、あの顔は一目ぼれの顔だ。

それから俺もその夜に彼女に告白したが、見事玉砕だった。理由は好きな人ができたから……やはりあの青年のことだろう。しかし、もう会うこともあるまい、そう思っていた。

だが、奇跡は起きちゃったりしたのである。

「ええ、この度、関西の方から来ました紅誠治」

「と、宗治だ。よろしく」

「ちょ、兄さん。もっと愛想よくしないと! ええ、見ての通り双子です。私が弟でこっちが兄」

まさか自分たちの学校に転校してくることになるとは思いもしなかった。

それから彼女、桜木の熱は暴走。

宗治に何度も猛烈アタックを仕掛け、見事ハートを射止めたのであ

る。

何人たちの男共は彼、宗治に恨み妬みを募った。もちろん、この俺もその一人だ。

俺はなぜか得意であった尾行を彼らにし、そのあらゆる内容を事細かにメモを書き、その情報を同じ気持ちの男共提供をし、恨みをまた募らせていった。

そのこともあつてか、進路相談時に先生から「お前は新聞記者に向いているんじゃないか」といわれなつちやたんだ。

親父の話が終わると、あまりの進路の決め方に泣いた。

「て、正輝！ 痛いから！ もうゴシゴシするのやめろ！」

俺は親父の赤くなつた背中を止めることなく、またゴシゴシして泣いた。

「正輝！ 何かのいじめか！」

「て、適當すぎなんだよ！ 親父は！」

涙目になりながら親父に訴えるも、親父はハハハツと笑つた。

「適當でいいんだよ、自分がやりたいと思つたものになれ。そのあとのことはそれから考える」

そんな簡単なことを簡単にサラツと言われた。

確かにそうだ……こんな俺が新聞記者になりたいと思つたのは、この親父をカツコイイと思つたからだ。

「難しいこと考えるな。その時、どうすればいいか考えりゃいいんだよ」

親父は笑いながら、俺の頭をなでてくる。

「まったく……」

しかし、不思議に思つた。まさかとは思つたが、これは樹の親父の話に間違いない。

確かに同じ学校と聞いていたが、双子の兄弟がいたことなんて知ら

なかった。

誠治……とは誰のことだろうか。

「あ、さつきも言ったが母さんには内緒だから。俺の好きだった子の話なんて歳にも似合わずに嫉妬するだろうからな」

と、またハハハッと笑っているが、俺の背中からゾクツと寒気がし……風呂の扉がガタンと音を立てた。

そして、曇りガラスに浮かび上がる母の姿があった……。

「ぎゃ、ぎゃあああああ」

その後、俺の家は地獄絵図となった。

「ほい、提出つと」

次の日、学校にて俺は一番に進路調査書をアッキーモに手渡した。

その姿を見てか、樹と燕ちゃんも非常に驚く。

「どうやら悩みは解決したらしいな」

「まったく……正輝殿はそういう人であったな」

「はははっ、これはご心配をおかけしましたな」

二人に頭を下げ、俺は席についた。

「それで将来の夢は？」

樹に聞かれるも、俺は自信を乗せ答えた。

「新聞記者に決まってるだろ！」

〈完〉

24話 正輝の親父登場（後書き）

いや！終わりじゃないから！？

とりあえずまだまだ続きますので。

遅くなって申し訳ありませんでした。また次回は樹視点に戻ります。

## 25話 警視の男

ピーポーピーポー……授業中、教室には近く道路を通り過ぎていく救急車の音が聞こえた。

たぶん、近くの横断歩道で交通事故に遭ったのだろう。

普通に生活していれば、何の変哲もない出来事だ。

しかし、クラスみんなは不安な表情をしている。

無理もない、始めの救急車が通り過ぎた頃から3日、これで5回もの救急車が通っているのだ。

たいていは足を擦りむいたなどや、間髪避けて大事には至らなかったということもあつたが、昨日の一人が運悪く重症者が出てしまった。

しかも、その事故に遭ったのがよりもよって、うちの学校の生徒であつた……。

「みんなも横断歩道には気をつけて渡るようにな」

秋本先生は授業を中断して、クラスみんなに注意を呼びかける。

しかし、みんなが暗い表情の中で、僕と燕の隣にいるコイツだけは違った。

「分かつてますって、アツキーモ！」

正輝はみんなが暗くなっているのを励ますかのように明るくしてみせている。

「たくつ……お前みたいなのが一番あぶねえんだよ」

「うは、アツキーモに心配されちった」

その行動を見てから、少しクラスには笑いがあつた。

本当にこいつはすごい奴なんだと思う。

「樹殿。やはりこの件、不可思議ですな」  
燕は僕に対して、ヒソヒソと耳打ちをしてくる。  
「ああ、間違いなくこれだけ起きるのは怪しい……。終わったら、調べに行こう」

「それじゃあ、今日の授業はここまでだ！ みんな定期試験が近いんだから気を引き締めていけよ！」

「ああ、忘れてた！」

秋本先生の言葉に正輝は今思い出したのだろうか、学校の定期試験が近づいてくるということに。

「たくつ、赤点だけは取るなよ」

先生が教室から出ると同時に僕と燕はすぐに帰り支度を始めた。それを不審に思ったのか、正輝が聞いてくる。

「なんだそんなに急いで。なんか用事あるのか？」

「ああ、そんな感じ」

適当に僕は答えて、その場をすぐに離れようとした。が、背中をガツと捕まえられる。

「何年のお前の友人だよ。行くんだろ？ 事故現場」

やはりこいつには隠し事はできないようだ。

「正輝殿。さすがに特殊な力を持たぬ者が今回のことに介入するのはやはり危険だ」

燕が心配そうに、そして少し叱りながら正輝に伝えた。

が、その正輝は余裕の表情だ。

「スクープというのは危険が憑き物だ。なに、自分の命は自分で守るし、深入りする気はないよ」

「うむむ、しかしだな……」

燕が困惑して、こちらにバトンタッチするよう顔を見てくるが  
燕、こいつが言い出したら僕にはどうしようもできないんだ。

「ここが事故現場か……」  
僕は問題の横断歩道に着くと、警察の鑑識の人たちが調べていた。  
「どうする？ これじゃあ入れないぜ」  
現場にはロープが張られており、一般人には入れないようにできているが。  
こんなときの為に紅は裏で手を回している。

「すみません、清水さんいらつしやいますか？」  
ヤジウマから見張りをしていた警察官の一人に話しかけた僕はとある人物の名前を出した。

「し、清水警視ですか！ お待ちください！」  
と、その警察官は現場の方に足を踏み入れ、その人物を呼びに行つたようだ。

「樹殿？ 清水殿とは？」  
「警視つて警察官では上の立場の人だろ？ こんなところに来るのか？」

確かにこんなどこにでもある交通事故現場など、警視がわざわざ来るはずないだろう。  
だが、清水さんは違う。

「清水さんは……」  
僕は話そうとした瞬間に先ほどの警察官が帰ってきた。  
そして、もう一人の人物を連れて。

「学生が俺のところ尋ねてくるとは、やはりお前だったか。でかくなつたな」  
不精ヒゲを生やし、大柄な身体に40ぐらいであろうおっさんがい

た。

この人が清水警視だ。

「お久しぶりです、清水さん。検証の方はどうですか？」

「どうもねえな。トラックの運転時、ブレーキが効かなくて信号無視ってところだが……」

清水さんは少しためいきを付いた。

「それが3日間で4、5件も同じようなことがあると結構な騒動だな。事件性があるんじゃないかという疑いも出てきた」

「なるほど……で、その問題の車などは？」

「もちろん調べたが、ブレーキが利かなくなるような原因はなかった。加害者が嘘を付いているというのが警察の判断だが」

その話をしていると、正輝と燕に背中を掴まれグイッと後ろに引きずられた。

「おいおい、紅じゃない、しかも警察官なんかは何の話をしようとしているんだ？」

「そうだぞ樹殿。これ以上、紅のことが知れ渡れば……」

二人は焦っているようだが、もちろんそんなことは承知している。

「おいおい、なんの心配をしているが知らないが……」

清水さんもそれを聞いて、僕たちの話に入って来た。

「俺は紅の人間だぞ？」

「えっ？」

燕と正輝の拍子抜けの言葉を同時に発したが、もちろん僕は知っている。

「清水さんは元々紅家の人間だよ。まあ警察のお偉いさんが入れば、この商売もやりやすいって話だし」

実はこのおっさん、紅家の長の次に偉い人でもある。

「まあ清水っていうのは母方の苗字。本名は紅楽浪だ。よろしくな」  
清水さんはニコリと僕たちに自己紹介をした。

「清水さん、やっぱりここ数日の事故は……」

「ああ、間違いなく紅家の仕事の出番だろう」

やはり予想は外れていなかったようだ。

「なあなあ、樹？」

正輝が僕の肩にトントンと叩く。

「これが妖怪や幽霊の仕業ってことまでは分かったけど、このおっちゃんも紅の人間だったら任せておけばいいんじゃないの？」

ふむ……確かに。だが。

「正輝、警察みたいな公務員は副業はできないって知ってるか？」

「えっ！？ そうなの？」

御被い仕事は商売として成り立っている。

この清水さんも家柄やたまたま霊力が使えた為に紅家に関わりがあるだけだ。

それで僕は『元々』という表現をした。

「しかし、清水殿は警察の偉い方なのだろう？ なぜこんなところに」

燕も正輝の質問に便乗してきたが、また清水さんは笑って答える。

「こんな怪しいと思った事件があったら、すかさず俺は飛ぶのさ。

そして、このことを紅家に伝える」

そう。いわば、この人のお陰で警察からの依頼が来るわけだ。

「じゃあ、この事件は僕たちに依頼しても？」

僕は当然のように清水さんに話をする。

「いや、お前じゃダメだ」

と首を横に振られてしまった。

「なんでです。僕も紅家の人間ですよ？」

「これは……恐らくお前だけの力じゃ無理だ」

それは、それだけ力がある者の仕業だろうか？

ということは、清水さんはこれが何者の仕業であるか掴めたということなのだろう。

「事故に遭った被害者から話を聞くと、トラックのタイヤが炎上し

ていたようだ」

「え、炎上!？」

「タイヤが炎上……これは何か見たことがあり、聞いたことがある。

「なるほど……輸入道わにゅうどうだな？」

それにいち早く気づいたのは燕だった。

あれ、ここらで親父からの解説が出るはずなんだが。

「樹、輸入道ってなんなんだ？」

正輝が僕に輸入道について聞いてきた。

いつもの親父からの解説がないのに戸惑ったが仕方ない。僕が解説することにしよう。

「輸入道というのは本来、牛車ぎっしゃの車輪の器物霊だと言われているが  
確証はない。見た目は炎に包まれた車輪に中央に男の顔が見える。

それを見たものは命を取られるといわれている妖怪だ。倒した方は  
真ん中の男に攻撃を加えれば勝てるけど……」

確か、こんな内容を親父から聞いたはず。

「おいおい、牛車って……。出たのはトラックだぞ？」

確かにトラックが輸入道というのはおかしいが、輸入道は輪状のも  
のであれば何にでも憑依することができるらしい。それがトラック  
のタイヤだろうがなんだろうが。

「つまりそいつがブレーキ利かなくして事故を起こしていたって  
いうことか」

正輝の言うとおり、そういうことなのだろうが。しかし、一体なぜ  
今になって？

「この辺りに何か塚とかありませんでしたか？　ただ現れたとも思

えませんが」

清水さんに聞いてみたが、首を横に振る。

「つまり……何者かが呼び出したのか」

心当たりはある、間違はなくそれは親父の弟。

紅誠治の仕業だろう。

「ああ、なるほど」

それらを考えて、なぜ清水さんが僕たちに依頼を頼まないわけが分かった。

「清水さん、輸入道だけが相手になるとは考えられないということですね？」

「なるほど、さすがは勘がいいな」

紅家を恨む者、紅誠治。

もしかしたら、これは誠治が僕をおびき出す罠なのかもしれない。

「だけど、それでもやりますよ。逃げてばかりじゃ何もできません。それに僕は一人じゃない」

「ああ、私もいるぞ」

燕は笑顔でこちらを見る。

「おう、俺もいるぜ」

いや正輝、お前は邪魔だ。

と、急に視界になにやらプカプカと浮かび上がる物体が出てきた。

「なんか私を最近忘れてない？」

「うお！？ 姉さん！？」

そういえば前回の出来事から今回にかけて、まったく話に出てこなかったのを思い出した。

「レギュラーなのにこの扱って、どうなの？ と、清水さんお久しぶり」

「綾香ちゃんじゃないか！ て、その身体はどうしたんだ！？」

ああ、そういえば清水さん含む、紅家には姉のことは秘密にしていたんだ。

「いやあ、ちょっとかくかくしかじかで」

姉は少々焦りながら笑ってごまかしているが。

「まあ、宗治もいろいろあったのだらう。あいつにも借りがあるし、このことは秘密にしておいてやる」

と、やれやれと清水さんはため息を付いた。

「なるほど……樹一人じゃなければ、まあ大丈夫だらう」

どうやら清水さんは僕に依頼をすることを認めてくれたようだ。

「それで輸入道は一体どのように出没するのです？」

とりあえず輸入道が出るタイミングに関して聞いてみた。

「不思議なことに時間の決まりがない。まったくいつになったら出没するのか」

と、急に警察の人たちが騒ぎ始めた。

清水さんは急いで駆け戻り、どうしたとかがう。

「今、すぐ近くの交差点で交通事故があったようです！」

「なに！　すぐ行くぞ！」

と、そこにいた全員の警察官が向かっていった。

「なんか取り残されちゃったわね」

姉が言うように現場に警察官はほとんどいなくなり、ヤジウマも解散していった。

「そついや姉さん、最近なんで姿見せなかったの？」

さきほども言ったが、前回というより最近話しに出てきてなかったのは確かだ。

「なんか事故多かったからねえ、私も独自に調べていたのよ」

どおりで……ということは確かに輸入道の仕業なのだろうか？

「さてそのことを話す前に……とりあえず正輝君は帰ったら？」

どうやら一般人には話せない内容らしい、とりあえず関係ない正輝には無理を言っただけで帰ってもらうことにしよう。

「分かった。んじゃ、また今度聞かせてくれ」

少し残念がってたが、納得してすぐに帰っていったようだ。

「さて相手はもちろん輪入道。原因はやはり呼び寄せたのは確かね。証拠としてこれ」

姉は懐から取り出したのは……紅家にある妖怪を封じた呪符だ。ということとは間違いなく誠治がからんでいるのだろう。

「奴らは靈感がある者の血を多く求めている。だから今回も血さえ出れば命まで取るうとは思ってもいないのでしょうけど……」

ということはその輪入道が出る条件というのは……。

「そう、靈感がある者が道路に立ったままだと出る可能性があるわ。そして、車を通った時」

なるほど……それらの条件が合えば、奴は出るということなのか。

「で、さすがに車に勝てないしね、少しばかり作戦を思いついたんだけど……」

姉が僕と燕にゴニョゴニョと話してくるが。

「そ、それって本当にうまくいくのか!？」

「さすがに不安ですぞ……」

僕ら二人は少し不安な作戦であった。

25話 警視の男（後書き）

おまたせしました。  
疲れました……。

## 26輪？ 暴走 輸入道

「……なあ、姉さん。本当に大丈夫なのか、これ」

僕は道路の真ん中で突っ立っていた。

靈感があるものに反応して輸入道が来るんだと踏んだ姉さんは、僕を囮にして呼び寄せようという魂胆だ。

しかし、それなら燕でもいいのだが、この後の作戦のためでもある。

「なーに、大丈夫、大丈夫。轆かれても、あんたなら大丈夫よ」

姉さんが笑って答えるが、その根拠はどこにあるんだ？

と、道の先を偵察しに行った燕が全速力で帰ってきた。

「樹殿！ トラックが来ますぞ！」

「来たか！」

僕はいざ避けれるように構えておくと、どうやらトラックが来たようだ。

「た、確かに燃えている」

靈感がないものには分からないだろうが、青い炎で燃えたタイヤを付けたトラックが僕に迫ってくる。

「まだだ……まだ引き寄せないと」

早く避ければ逃がしてしまおう。

ぎりぎりまで寄せ付けて。

「樹！」

姉が叫んだ瞬間に僕は呪文を唱える。

「陣！」

姉の作戦はシンプルだった、迫ってきた車やトラックを前で設置していたお札を陣で縛ること。

が、相手はトラックだ。さすがに1枚や2枚では足りなく、手元に残っていたお札を相当使い込んでしまっていた。

トラックはキキッとブレーキをかけたような音が鳴るも、まだ僕に迫ってくる。

「止まれ止まれ！」

今変に動けば陣の詠唱は止まってしまふ。

ただ目の前のトラックが止まるのを待つのみ……。

「ちっ、だめか！」

やはり相手はトラックだ、いくらお札が何枚もあるからといって、何れものトラックを止めるのは至難。

「樹殿！」

そこに僕とトラックの間に入ったのが燕だった。

燕は鬼切りを鞘ごと、トラックに押し付ける。

「くっおおおおお！！！」

なんとかトラックを止めることに成功したようだ……だが、まだ戦いはこれからだ。

「来るぞ！ 樹殿！」

トラックの1つのタイヤが勝手にはずれ、転がってきたのはタイヤの輪の中心に男の顔が出ている……こいつが輸入道だ！

「小僧！ よくもワシの走りを止めよつたな！」

輸入道はどうやら怒っている。こいつは走り屋か？

僕はすぐに陣の札を貼り付けようとするも……

「甘いわ！」

いきなり青い炎を上げた輸入道はお札を焼き焦がした。

「なるほど、貴様らが紅か。ワシに着いてくれるか！？」

そういった、輸入道はブルンブルンと音を立て、道路を走り去っていった。

「なっ！？ 逃げた！？」

まさか、逃げられるとは思ってなかった。

さて……どうしたものか。

そっぴや、姉さんの姿が見えない。

「おーい！」

姉さんが呼ぶ声が聞こえると、パトカーがやってきていた。

「樹！ 乗りな！」

そっぴやって運転席の窓から顔を出したのは清水警視、なるほど姉さんは呼びに行っていたのか。

「そっぴやのことよ、早く乗りなさい！」

僕は助手席に、燕は後部座席にへと座り、さあ行くこととした瞬間

清水さんは発進しない。

「ど、どうしたんですか！？」

まさか何かのエンジントラブルか！？

と、清水警視は僕の肩をポンポンと叩いた。

「シートベルトしめろ」

……今そっぴやするときかよ！？

みなさんも交通ルールは守りましょう。

無事シートベルトをはめて発進すると、清水さんはパトカーのサイレンを付ける。

「樹、燕！ 少し飛ばすぞ！」

清水さんは眼を変えパトカーを動かす。

「キキッー！！！」

パトカーがまさかのドリフト走行。

本当にこの人、警察官か！？

「見えたわ！ 輪入道よ！」

大通りに出ると、タイヤだけの輪入道はまるでバイクのようなスピ

ードで走っているのを目の前に見えた。

「このままだと歩行者にぶつかる可能性があるな、奴を誘導しよう」  
清水さんはパトカーをなおも猛スピードで輸入道に迫る。

「確か、この近くに工事中の道路があるはずだ。樹！ 窓から奴に向かつて臨を投げ、左に行くよう動かせ！」

清水さんは猛スピードで輸入道の右隣に着く。

「臨！」

僕は輸入道の顔に向かって臨の札を投げつける。

「くっ！ こしゃくな！」

それを察知した輸入道はすぐに避けるが、清水さんの狙い通り左に行った。

「つかまっとけ！」

ハンドルを思いっきり切り、パトカーを輸入道に横からぶつける。

「キヤアッ！」

あまりの衝撃で姉さんの小さな悲鳴が聞こえた。

ごろごろ転がっていった輸入道はそのまま道路の舗装工事をしてい  
たと思われる場所に突っ込んでいった。

「ガシャーン！」

とすごい音が鳴り出し、工事現場の人たちは何が起きたのかと出て  
きた。

すぐに近くに止まり、僕たちは降りることにすると燕は……。

「ヒレホレロ……」

「いかん、伸びてる」

燕は後部座席で車酔いしているようなので置いていくことにしよう。

「急ぎましよう樹」

姉は僕の右肩の定位置にいき、先に行った清水さんを追う。

「樹、こつちだ！」

清水さんに呼ばれて、工事現場に入ってみると、固まりきってないアスファルトに沈んでいくタイヤがあった。

「ちっ……違うものに憑依しやがったな」

輸入道は輪状のものであれば、何にでも憑依できる。恐らくアスファルトにハマる前、トラックのタイヤから抜け出したのだろう。

ゴロゴロ……。

「なんだ……何か揺れる気がしないか？」

確かに言われてみれば、何か地面が揺れている……。

「二人とも！ 後ろ！」

姉さんの声が聞こえ、後ろ振り返ってみると巨大なローラーを付けた車が僕らに迫っていた。

「ロードローラーだと!？」

「ハハハハ！ 押しつぶされるがいい！」

どうやら輸入道はアスファルトを押し固めるのに使うと思われるロードローラーに憑依したようだ。

「逃げるぞ樹！」

清水さんに引つ張られ、僕らは後ろへと逃げる。

「まだあいつは足が遅いが、このままだと厄介だな」

ロードローラーはあらゆるものを構わず潰し、迫る迫る。

「樹！ お札はあと何枚だ！」

手元のお札を確認すると、枚数は5枚。

「全部貸せ！」

僕は清水さんにお札を全て渡すと、振り返りロードローラーの前に立った。

「たった5枚だが……充分だ！」

「清水さん！ あぶない！」

ロードローラーは隙ありと思っばかり、清水さんに突っ込むが。

「甘いな……」

さきほど渡したお札が光りながら清水さんの手を覆い、その手でローラーを止めていた。

「な、なんだ!? その手は!」

あれは見たことがある術だが……いや、まさか。

「樹は分かっていたわね?」

姉はもちろん知っているようだが、その反応だと、まさかアレなのか?

「これは……俺の在<sup>ざい</sup>。籠手の在月、月拳<sup>げっけん</sup>だ」

清水さんがつけた赤い籠手は先ほどのお札で作ったものだったようだ。

ギリギリとローラーはなおも動かそうとしているが、清水さんは左手だけでローラーを押さえ始めた。

「そして、これが俺の臨だ!」

右手を上げ、ローラーに思いっきり拳を叩きつける。

ドスンッとローラーが叩かれると、ピシピシッと亀裂が入りそのままローラーは崩れはじめた。

「な、なんだとおおお!」

憑依していた輸入道もろとも、そのままガレキとなっていく。

「す、すげえ……」

僕はその光景にただすごいとしかいえなかった。

「あれが剛拳の楽浪と言われた男よ。まったく、すさまじい力だわ」

ことが終わり、清水さんの籠手は消えていく。

「久々に使うとやはり痛いな」

どうやら少し拳に血が出ているようだ、それだけの力を使うということなのだろう。

「大丈夫ですか! 清水さん」

「大丈夫、それよりこの状況をどう報告するか」

回りを見てみると、確かに工事現場はひどい有様だった。

「ロードローラー壊しちまったしなあ。しょうがねえこれも税金で……」

こんなことで税金が使われるのかよ……。

ひとまず今回のことが終わったかに見えたが……。

「きゃ、キヤアアアア」

この悲鳴は燕!?

すぐに僕らはパトカーに戻ると……。

「わ、輸入道が……」

信じられない光景を見た……。

輸入道が憑いたタイヤの車が……そこらじゅうにいる。

「な、なによこれ!？」

「くっ、やはり誠治の奴か!」

やはり何か仕掛けていたようだが、まさかこんなこととは。

それはさておき燕は。

「ぱ、パトカーが回ってる」

4個全てのタイヤに輸入道が憑いたパトカーは喧嘩するかのよう  
にグルグル回っていた。

「こっちだ、こっちへいくんじゃ!」

「いや、こっちじゃ!」

本当に方向での喧嘩のようだ。

「誠治! 姿を見せる!」

清水さんは叫ぶと、車の上に立っている人影が。

「久しぶりだな、楽浪」

赤いコートを着た男。

その顔を見た瞬間に僕は信じられなかった。

「お、親父!?」

親父の容姿にそっくりな人物、だが左目には刀で斬られたような傷跡がある。

「兄さんの息子、君が樹君だな」

ということとは、こいつが。

「そう、奴が紅誠治。おじいちゃんを殺した、紅を汚した者よ!」  
姉が誠治をにらみつける。

「叔父に対する口の聞き方じゃないな綾香」

双子とは聞いていたが……こいつもそっくりだとは思わなかった。

「これはどうということだ誠治!」

清水さんが誠治に問う。

「なに、これはただの実験だ。霊力の血を使い、妖怪を増殖させるな」

妖怪を増殖!?

すると、この輸入道の大群も。

「そうだ、この輸入道は実験結果」

なんて気味の悪い実験だろうか……。

「貴様、何するつもりだ」

「戦……とでも言っておくか」

戦　まさかこの妖怪たちを……!

その時、シュツともう一人の影が車の上に乗った。

「旦那、失敗ですぜ」

それは間違いなくあの時のスーツを着た男。  
羅刹らせつだ。

「そうか……では、ここは引かせてもらおう」

「ま、待て!」

誠治が引こうとしたので、僕はそれを呼び止めた。

「なぜ紅に恨みを持つ!」

「私を認めなかった者たちへの復讐だ。では、私も問おう」  
逆に誠治に質問される側となってしまった。

「樹よ、お前はいつ生まれた？」  
「なっ？ 僕がいつ生まれた？」

「戯言よ、樹。聞き流しなさい」

姉は僕に忠告するが……なんだその意味は？

「旦那、行きやしよう」

地上に暗雲のようなものが急に現れ、誠治と羅刹はそこに入っていく。

「あれは……魔界の入り口か。ちっ、あれでは追いかけれんな」  
清水さんは悔しがっていると、暴れるに暴れまくっていた輸入道たちはピタリと動きが止まった。

「な、なんだ？」

と、ボンツという音と共に輸入道が憑いていたタイヤは普通のものに戻っていった。

グルグル回っていたパトカーも動きが止まる。

「っ、燕！」

パトカーの窓から燕の様子を見ていると……。

「も、もうだめだ……地が回るう」

……ああ、ひどいことになってる。

「ひとまず、交通事故の真相は解決したが」

帰り、清水さんは燕がひどい状態になっていることもあるのでパトカーで家まで送ってくれることになった。

「誠治め……まさか妖怪を物のように扱うなんて」

姉は怒っているのだが……誠治が最後に言った言葉が頭から離れない。

『お前はいつ生まれた？』

『どういうことだ……僕は15年前の2月3日に生まれたんじゃないのか？』

確かに……僕は生まれたときの写真が見たことないが。そのわけは前に正輝にも話したはずだ。

考えたくもない……あいつの言うことは戯言だ。

僕はそのことを胸に収めておくことにした。

26輪？ 暴走 輸入道（後書き）

おっちゃんかっこよす。

お待たせしました、26話です。

ちなみに話が輪になってますが、もちろんわざとです。

## 27話 綾香のスパルタ教室

輸入道の一件から数日がたったある日、学校にはかつての活気が戻ってきた。

それもそのはず交通事故はぱったりと止み、怪我をした奴も学校に登校するほど回復したのだ。

だが今、学校には忘れてはならない高校生のイベントがある。

「この前も言ったが、もうすぐ定期試験だからな！　しっかり勉強してこいよ！」

秋本先生がそういつて授業を締めくくる。

そう……定期試験だ。

だが、僕にとってはさほど問題なことでもない。

勉強はこれでもまあまあできるほうだし、得意不得意もあるわけではない。

それより僕には頭をかかえる悩みがあるわけだが……。

「樹、お前も定期試験の悩みか……？」

いつもより暗い声をした正輝が話しかけてきた。

まあこいつにとって試験やテストというものは悪夢のようなものだろう。

たいてい中学生時代も毎回こんなことで悩んでいたが、問題なのは僕たちは高校生だということだ。

「高校生の定期試験って……あまりに出来が悪いと留年されるんだろっ？」

その通り、高校生というものには単位を取らないと留年というものが付きまってくる。

この正輝にとってはまさに命がけなのだ。  
まあ、それでも30点以上取れば、まずセーフなのだが……。

「正輝殿もその悩みか……実は私も英語のテストがな……」  
「どうやら同じような悩みを抱えた者がもう一人、燕がいたようだ……」

「お前らは……僕が悩んでいるのはそんなことじゃ……」  
と僕の悩みを言おうとした瞬間、いつもの右肩にいる奴に邪魔された。

「本当に定期試験って嫌よねえ」

「姉さん……明らかにわざとだろ」

この姉は最近、パツと姿を消したと思うと、パツと急に現れるようになった。

その気配が僕にもだんだん分からないものになってきているのだが……。

「おお、綾香殿。ぜひ英語の勉強を伝授してくださらないか！」

「お、姉様いるの!? 俺も俺も」

「どうやら二人して、姉に勉強を教えてもらいたいそうだが いや、二人ともやめておけ。」

なぜ僕が勉強できたのか訳がすぐに分かると思うが……。

「ふふふ、二人して私のスパルタ教育を受けたいと？」

姉はどこから出したのか分からないムチを持ち始めた。

そう……姉はかなりのスパルタなのだ。

「えっ……あ、綾香殿!? 私はやはりやめて」

「遅い！」

燕が断ろうとするのも束の間、姉のムチに捕まってしまった。

「な、なんか燕ちゃんが捕まってる!？」

どうやら正輝にはムチが見えてないみたいだが、何かに捕まる燕に気付いたようだ。

「何か嫌な予感が」

「あんたも逃がすか！」

姉の2本目のムチが正輝に目掛けて飛ぶ。

「な、なんかに捕まった!?!?」

あーあ……二人ともつかまっちゃったよ。

「ようし、このまま図書室にレッツラゴーよ！」

姉はムチで引きずった二人を無理やり図書室に連行しはじめていった。

「あんたらはまず席に座って教科書開く! あとノートも開く！」

二人は図書室の机に座らされ、鞆が上から降ってくる。

渋々、二人が教科書を開いた所で僕はそこを離れようとした。

「さて……僕はかえる……って、グアツ！」

僕の腕にはいつのまにかムチが巻きついてた……。

「あんたも丁度いいから徐々に勉強見てあげるわよ」

笑顔で姉は答えたが……。

「い、いや僕はまた違う機会に」

「逃げるな! ポチッ」

ムチを振りほどこうとした瞬間に、姉はムチの手元にあるスイッチを押した。

「そ、それは……うあああああしびれれるるるる!?!?!?」  
ムチからビリビリと電流が流れてきた。

「ホホホッ ザ〇とは違うのよ! ○クとは！」

この姉、まさかそのアニメを見始めたとは!

ということ僕も姉に勉強を見てもらうことになってしまった。

「とりあえず、まずあんたたちの実力を見たいわね。それじゃ、すぐその本棚にある英語の問題集を解いてみなさい」

「ね、姉さん！？ それ超有名難関大学の参考書！」

「うるさい！！ ポチッ」

「ぎゃ、ギヤアアアアアア」

そっだ……口答えしたものには容赦なく、スパルタが飛んでくるのだった。

「あ、綾香殿。もう少し簡単な問題でなければ……」

「ふーむ、確かにこれじゃあ難しいわね。じゃあもう少し簡単な問題集を」

おい、さっきの僕の電撃ムチはなんだったんだ。

「なあなああ？」

と、正輝が話しかけてきた。

「俺、姉様の声が分からないから、教えてもらおうの無理だよな？」

そっか……綾香は靈感あるとして、正輝には皆無なのだ。

確かにこれじゃあ教えてもらおうことなどできないはず……。

「仕方ないわね……考えがあるから、少し待ってなさい」

そっうって図書室から出ていった。

「考えて……なんか嫌な予感しかしない」

数分後、図書室のドアがガラツと開く。

姉が戻ってきたのかと思い、その方向を見てみると、いたのは……

秋本先生？

「あ、アッキーモだ。どうしたんですか、図書室になんて」

正輝が話しかけるも無視して、机に座る。

「ア、アツキーモ？」

様子がおかしい いや、もしかして。

秋本先生はガサツと後ろから取り出したのは……間違いない。

「ムチだ」

ビシバシッと正輝を叩く音が響いた。

なるほど、確かに秋本先生に乗り移れば姿も声も見えるわけだ。

「今からワタクシへの返事には全て前と後ろにサーを付けるように  
！」

「さ、サーイエツサー」

「さーいえつさー？」

正樹と燕は状況がよくわかったのか分からないかで返事をした。

「さて、姉さん。いつからフルメタルジャケット○なんて……」

「サーを付けるよ！ ウジ虫！」

そして、またもや電撃ムチが僕に飛んできた。

「かなりのタイムロスをしたぞ、ウジ虫ども！ これから問題集の  
テストを開始する！ はじめ！」

体育のタイム測定にはかるであろうストップウォッチを取り出し、  
いきなりスタートさせる。

「さ、サーこの問題集のどこからどこまでやればいいのですか サ  
ー！」

正樹は質問するが……それは愚問だぞ、正樹。

「くだらねえ質問はするな！ 全部だ！」

ああ、燕と正樹が固まってる。

姉の授業はいつもこう、とにかく時間をある程度取り、どこまでで  
きるかというものを見るためだ。

よって正答率はあんま関係なかったりする。

だが、これが功をなしたのか、僕の成績は案外良かったりするのも  
事実だ。

「よし、終わりだ！」

時間はたったの30分だった、二人を見るがやはり3ページか4ページかでボロボロだった。

もちろん答えもボロボロだったが……。

「よし、できなかったところは復讐してやる心がけで復習しろよ！」と、寒い親父ギャグを飛ばすだけで、そんなに怒らないようだ。

「そこ！ 寒いって思うな！ ポチッ」

「ちょ、ナンデバレタアアアギャアアアア」

「ね、姉さん。もっと効率のいい勉強方法ってないの？」

確かに復習することは大事だが、定期試験はもうすぐだ。

そんなことをやってられない。

「仕方ないわね……待ってなさい」

姉が乗り移った秋本先生ともどもは図書室から出て行った。

「樹殿、また私も嫌な予感がするのだが」

うん、あながち間違いではないと思ってる。

「はい、連れてきたわ」

また入ってくると、どうやら秋本先生もとい姉は見知らぬ男子生徒を連れてきていた。

いや、どうもその子の様子がおかしいが……。

「なになに？ なんか持ってきたの？」

どうやら正樹には見えていないということ。

「この子は優等生だったんだけど大学受験で失敗して自殺しちゃった子よ。大丈夫、高校レベルなら完璧だから！」

やはり幽霊だった。

「そんなの連れてきてどうするんだよ！？」

「ふふふ、これを……正樹君に」

おいおい、待て。  
「憑依!!」

相変わらずめっちゃくちゃなことをしでかしてくれた。

姉は正樹にさきほどの幽霊を憑依させてしまったのだ。

それから正樹は先ほどの超有名難関大学の参考書を手に取り勉強している……。

「あ、綾香殿？ やはり私はまじめに勉強するのが……」

「あらら、別にいいのよ？ 遠慮しなくても……まだ自殺した子ならいっぱい……」

「陣!!」

とりあえず姉が暴走してきたので、陣で縛っておいた。

「燕、英語の勉強は僕が教えるから……まずは正樹をどうにかしないとな」

とりあえず無理やり憑依から解除してしまうと人体に影響がでる場合が多い。

ここは説得してみよう。

「あのう？ お名前はなんとー？」

「一緒に懸命に勉強している正樹に話しかけてみても、何も応答はしない。」

「おーい!! 名前はなんだー!!」  
が、相変わらず無視。

しかし、こちらにも考えがある。

その参考書を取り上げてみると……。

「きさまー!! 何するんだ!! 僕には時間がないんだ!!」  
いかん、やはり正樹ではない。

「とりあえず名前を聞こうか？」

「ぐっ、市川勉いちかわ つとむだ」

なるほど、市川勉君か。確かに勉強できそうな名前だが。

「なあ？　なんで成仏しないんだ。君って結構ここに昔からいそう  
だろ？」

いちおうこの学校には幽霊をたくさん見ているが、確かこの子をち  
よくちよく見ている気がした。

「僕が死んだのは今から30年前だ。成仏できない理由は一つ……  
バカなのに大学行く奴だ！」

確かに今からそのくらい前だと、受験戦争という時代だ。

この子にとってはバカな奴が大学行くのが信じられないのだろうが  
……時代も変わったからなあ。

「そこで僕は少しでもバカな奴を減らす為に勉強を教えるのだ  
！」

ああ、こいつは良い霊だったか……。

「樹殿？　しばらく正樹殿にはこのままの方が」

「本人為にもなるし、そうだな」

とりあえず、こいつはこのままにさせることにしよう。

その結果が後に大変なことになるなんて思っても見なかった。

## 27話 綾香のスパルタ教室（後書き）

大変、お待たせしました。

12月です。寒いです。

自分の周りにもインフルが流行ってきているので、みなさんも気を付けて！

## 28話 勉強できれば良いってもんじゃねえ

正樹に市川勉という霊が取り憑いてから、次の日の朝

「うおおおおおおおッ！」

この変な唸り声を上げて机に鉛筆を押し付けながら参考書の問題を解いている人物が僕のすぐ傍にいる。

そう信じれないかもしれないが、そいつが正樹だ。

クラスのみんなも、その光景を目の当たりにし不自然な顔で見ている。

「お、おい正樹？ 少し静かにしたらどうだ？」

一人のクラス男子生徒が話しかけるも無視だ。

いや、むしろ

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

声が大きくなってた。

彼には市川勉という大学受験に失敗し自殺したという霊が憑いているはずなのだが……。

「あんな勉強すれば、大学は合格できるものではないのだろうか？」

隣にいる燕が話しかけてきたが、僕も不思議に思っていたことだ。

まあ人それぞれに事情があったのだろう。

受験当日に大熱になっちゃたりとか、電車の事故で大学まで行けなかったりとか。

「でも、一回失敗しても他の大学行くとか、浪人したりするよなあ。受験戦争と呼ばれる時代なら、そのようなことも珍しくないのだが。」

「確かに不思議よねえ」

「あいかわらず、いきなり唐突に現れるのやめてください姉さん」

右肩でまた唐突に話に割り込んでくる物体 姉の綾香がいた。

まったく、この姉は自分が市川勉を連れてきたくせに。

「綾香殿はよく知らないのですか？ あの霊のこと」

「私もたまたまあの子が浮いてたから連れてきただけだし、よく知らないわ、ただ受験を苦しんだというぐらいで……」

「うおおおおおおおおおお！！！」

静かな教室で正樹の唸り声だけが響いていたが

「キーンコーンカーンコーン」

チャイムが鳴ったようだ。

さてHRの時間になったら、この状況を秋本先生はどういう態度になるだろうか……。

内心、僕は少しワクワクな状態である。

「おーす！ 授業始めるぞ！」

「……」

秋本先生が教室に入ってくるも、みんなは静かになっていた。

あ、あれ？ さっきの唸り声は？

「なんだー？ 元気ないなー。で、内藤はどうした？」

クラスのみんなが一斉に正樹を見ると 熟睡している……？

「おいおい、なんだ内藤は寝不足か！？」

どうしたのだろうか、まるで糸が切れたのように眠っている。

まさか憑依が切れたのだろうか？

「内藤！ 起きろ！」

秋本先生が無理やり起こすも

「むにゅーっ」

だめだ、完全に眠ってやがる。

「あれは正樹君の頭のコンピューターがオーバーヒートしちゃったのかしらね」

なるほど……姉さんがボソツと話しかけてきたが、正樹の頭なら仕方ないことだろう。

「まったく、テストも近いというのに。いいか、高校生のテストは進級にも関わってくるからな。内藤みたいに授業中も居眠りしないように」

HRが終了し授業が始まったも眠ったままだった。

「正樹殿、先生殿が見ているぞ」

燕が正樹に教えてあげていても結局は

「すうー」

いびきを出しながら眠っていた。

「さすがにこのままじゃダメね」

どうやら姉さんも心配しているようだ。

「キーンコーンカーンコーン」

昼休みに入るチャイムが鳴り響いた瞬間。

「ムクツ」

「ま、正樹殿が!？」

燕が騒いだのを聞き、正樹を見ると突然起き出していた。

そして、またもや参考書を開き……

「うおおおおおおおっつ!?!」

叫び始めた……。

「い、市川君が憑いたのか」

どうやら授業以外では憑くようなシステムになっているようだ。

しかし、このままでは

「おーい、樹と燕ちゃん!」

聞き覚えのある声で呼ばれ、教室のドアを見ると、結衣と美香さんが立っていた。

「また弁当作ってきたんだけど、食べに行かないー？」  
と、また巨大な弁当箱だな、おい。

「いちおう私も手伝って、みんなの分も作ったんですよ。良かったら正樹さんもと思って……」

ほう、美香さんが手伝ってくれたのなら味の保障はあるな。

が、正樹は無視して熱心に参考書の問題を解いていた……。

「どうしたの正樹？ いつもなら女の子が作ってくれた弁当なら飛んで喜ぶはずなのに」

やはり結衣自身も正樹の心配をしているようだ。

すると突然、正樹の口が開き

「私は少しこの参考書を終わらせないといけないのでお気になさらないで結構」

その答えに僕たち一同は目を開いた。

「ね、ねえ。正樹は変なものでも食べたの？」

結衣は僕に近寄りコソコソ話しかけてくるが、まあ似たようなものだ。

「いや、もうテストが始まるだろ？ だからテスト勉強するんだって……」

「でも、あれ大学受験用の参考書でしょ？ いくらなんでもそんな問題なんて……」

まあまったくもってその通りなんだが……。

美香さんはどうやら何かに気付いたらしく、じっと僕を見つめている。

僕もアイコンタクトで美香さんになづいておくと、どうやら納得したようだった。

「たまには息抜きも必要だろ！ 行こうぜ！」

僕は無理やり、正樹の腕を引っ張って、いつもの屋上へと行くことにした。

「相変わらず美香さんの料理は素晴らしいなあ」

あまりにも豪華な弁当だ。

というか、もはや何のパーティセットだこれ。

「うつむ、相変わらずのお手前。私も美香殿に料理を習うべきか」  
「樹さんと燕ちゃんは何が美味しかったです?」

「ふむ、美香さんにそんな質問されてしまったが……。」

「私はやはりこのから揚げだな。みぞれ風にするとはさすが」  
確かに僕もそれを見て「みぞれ風から揚げ! そういうのもあるのか」

と感心してしまった。だが、僕はこの……

「せっかくだから僕はこのハンバーグを選ばせ!」

そう、中にチーズが入っている、このハンバーグだ。

「えっ……それは」

ん……?

「それ、私がつった奴よ」

「なん……だと……?」

ありえないことに結衣がつったものだった。

「そ、そんな……う、うそだああああ」

「ちょ、失礼ね! 私もこれくらい作れるようになったのよ!」

くっ、まさか結衣と美香さんが作ったものの違いを区別できなくなるとは不覚だ。

「正樹君はどうですか?」

美香さんは何か問題集を読みながら食べている正樹に話を振るが……

…。

「食べ物というものは、まずかろうが美味しかろうが摂取できれば関係ありません」

うわ……冷たい反応。

「さっきから一体どうしたのよ、正樹!」

その反応にさすがの結衣も少し不信感を覚えたようだ。

「いえ、しかしもうすぐテストです。こんなことをノンキにやって

いる、あなたたちの信じれないのですが」

「……私、先に教室行くわ」

結衣は静かに怒り、弁当を早々に片付け教室に戻っていった。

「それでは私も問題を解く途中ですので」

正樹もそのあとすぐに自分の教室へと向かう。

残された僕らはなんとなく気まづくなっていた。

そんな中で美香さんが口を開く。

「樹さん、やはり正樹さんに何かありましたね」

やはり美香さんは気付いていたようだ。

「ああ、それはな……」

「私が説明するわね」

またいきなりだな、姉さん。

「実はかくかくしかじか（前話参照）よ」

うわぁ……超いいかげんに略した。

「なるほど……つまり受験で失敗した霊が憑いたというわけですね」

「そうよ、本当は燕ちゃんにも何か憑けるつもりだったんだけどね  
え」

「いや、私は全力で遠慮させてもらっぞ！」

燕は両手に思いつきり手を振っている。

「まあその時になんとかすれば良かったんだけど、たいしてその霊は悪い奴じゃなそうだったからね」

「うむ、勉強に対しては信念がある者だ」

だが美香さんの顔は少し不安な顔をしていた。

「ん？ どうしたの」

「い、いえ。ただ市川勉さんって方でしたよね。少し聞き覚えのあったかなという名前だったから」

「まあたいていありそうな名前よ、人違いじゃないのかしら」

姉さんの言うとおり、そんなあまり珍しい名前でもない。同姓同名

の人違いであろう。

「樹殿、もうすぐ昼休みが終わるぞ」

「おう、それじゃあ教室に戻るか」

教室に丁度戻ると、チャイムが鳴り響いている。

どうやらまた正樹は眠りだしている。

「まったく……こいつは授業ちゃんと聞いて無いと意味ないだろう  
っちゅうに」

と、正樹の顔をチラッと見てみた

「青白いな、おい」

正樹の顔はいつもより元気がなく、気のせいかまるで人が死ぬ直前の顔だった。

「姉さん、正樹がこの調子だとテスト中に休むんじゃないか？」

「ううむ、まあその時はその時ねえ」

んな無責任な。

「さてと、今日の授業もようやく終わったな」

いつものように正樹と帰ろうと隣を見ているが、帰り支度もしない。

「なあ、正樹。残りは家に帰ってから？」

「気にしないで結構」

どうやら余計なおせっかいのようだ。

「わかったよ、じゃあ燕帰るか」

「またのう、正樹殿」

テストも近いので、部活動は現在活動停止していることもあり、放課後に残っている生徒はほとんどいなかった。

それに学校で勉強するよりかは家で勉強するのというのが多いようだ。

「さて燕、家に帰ったら英語教えてやるからな」

「おう、頼りにしておるぞ樹殿」

と、燕と話しながら玄関に着いた時

「樹君！」

聞き覚えのある声に後ろからかけられた。

「美香さん、どうしたの？」

後ろには美香さんが息を切らしながら立っている。

どうやら僕を探していたのだろうか？

「今思い出したんだけど、市川勉さんってお父様の先輩に当たる人で……」

「なるほど、美香さんのお父さんもこの学校の出身なのか」

「はい、それで市川勉さんが亡くなった原因というのが……」

「な、なんだと……？」

「急ぐぞ樹殿！」

美香さんの言葉を聞き、急いで教室へと戻った。

まさかとは思ったが、あの時の正樹の顔は気のせいではなかった。

「市川勉さんが亡くなった原因、それは勉強のしすぎによる過労死です」

勉強のしすぎで過労死の量を、一般人より低い正樹の脳みそでやっ  
たら……！

「すぐ死ぬな……」

燕の言うとおり、間違いなくすぐ死ぬ。

「まったく、ちゃんと霊は選んで連れてこいよ姉さん！」

「また私のせいにしちゃって」

「あんたのせいだああああ！！！！」

この姉は早く成仏させたほうがいいのだろうか。

「ガラッ」

教室のドアを開けると、そこには正樹の姿しかなかった。急いで詰めより、参考書を取り上げる。

「な、何をする！」

「市川勉！ これ以上やったら正樹の脳みそは死ぬぞ！」

「それが関係あるか！ 私は勉強できればそれでいい！」

「貴様！」

僕はお札を取り出し、正樹に向かって構えた。

「いいのかい、そんなことをして……」

「なっ、樹殿！ 離れる！」

燕が叫んだ瞬間に正樹は何かを振り上げた。

「痛っ」

僕の腕に切れたような痛みが走った。

「近づくなよ、こいつの命がどうなってもいいのか？」

市川が正樹の首下にカッターを突きつけていた。

どうやら、先ほど振ったのはカッターのようだ。

「さあ、参考書を返せ」

「断る！」

「ならば仕方ないな……お前のせいだぞ」

市川はカッターを首に突こうとした瞬間。

「キーンコーンカーンコーン」

この時間にはありえないチャイムの音が鳴り響いた。

「カシャン」

カッターが落ちる音が聞こえた。

そして、正樹は立ったまま寝ている。

「な、一体どうして」

僕はチャイムの音が鳴るスピーカーを見てみると……そこには姉さんがいた。

「そいつ、いつもチャイムの音で眠っているのを見てね。もしかしてと思って、少し細工してたのよ」

そういえば、いつもこいつは授業中寝ていた。どうやら、チャイムの音が切り替えのポイントだったのだろう。

「樹！ ほつとすんな！」

と、そうだった。

「陣！」

僕は正樹に陣の札を貼り付け、動けなくさせ、除霊用の塩を正樹に振りまく。

「ぐ、ぐわああああ」

苦しみながら、正樹から市川勉の霊が出てきていた。

「くそおおお、このチャイム子守唄病が治れば受験失敗しなかったのに！！」

おい、なんだその病気は。

「これから先、この子のためにはならんぞ！ 勉強するからこそ良い大学に入り、良い将来が待っているのに！！」

市川は苦しみながらも、僕たちに訴えかけている。

「勉強して良い大学は行って、良い将来が築けるですって？ 笑ら

つちゃうわね、死んだら何の意味もないのよ。勉強が全てじゃないのよ、時には息抜きに休むことも遊ぶことも必要なんだから」

「姉さんも同じなのか……」

一生懸命に勉強しても、将来がなかった姉にとってみれば、市川と姉は同じ……。

「同じだと……違うだろ？ その女は……」

「えっ？」

市川は何かを言いかけた途端に、姉は叫んだ。

「燕ちゃん！」

「鬼切り！」

事前に刀を構えていた燕は市川を切り捨て、そのまま市川は白く光り、浄化されていった。

「はあ……まったくとんだ厄介者を持ち込んでくれたよ姉さんは」

「綾香殿、さすがにこれでは正樹殿に悪いのでは」

「ははは、そ、そうねえ」

姉さんはバツの悪そうな顔をして、正樹に謝ろうと近づくが。

「あ……」

「くかーっ」

正樹は今までの疲れから、市川を除霊したあとでも立っただま爆睡していた。

テスト返却日。

「ふう、ようやく終わったな、テスト」

正樹の事件があつてからも早数日後。

なんとかテストは全て無事に終わり、みんなのテストが返却されつつあつた。

「ああ、やつぱ俺はだめだわー、なんかテスト中に意識なかつたし」  
正樹はどうやら自信がないようだ、まあ市川の時の猛勉強の疲れがあるのだろう無理もない。

「樹殿！ なんとか英語40点は取れたぞ！」

「おお、大きな進歩だな」

燕が返されたなか、正樹のテスト返却の順番がやってきた。

「なんかアッキーモの視線が熱いんだが……」

アッキーモは正樹を本当にじつと冷ややかな目で見つめている。

「こりやだめだったんだな」

そこの教室にいる誰もがみんな思っていた。

「内藤、お前カンニングしてないよな？」



28話 勉強できれば良いってもんじゃねえ(後書き)

おまたせ28話。

ちなみに樹の平均点は80点ぐらいです。

## 29話 姉さんと綾香の一騎打ち

休日、紅神社の朝はいつも早い。

いつものように神社回りの掃除をし、その後は裏の林で燕と稽古をしている。

それが始まった原因は僕が在月という刀のような武器の術を覚えてしまったからだ。

というのも、僕は札を扱うことは容易だが、剣術がどうも上手くない。

それを見た親父が言った事が燕に剣術の稽古を付けてもらえということだった。

「ヤアアア!!」

「甘い!」

燕に向かって竹刀を思いつきり叩きつけようとするが、いとも簡単にはじき返されてしまった。

何回もあの手この手で燕に挑んでいるが、一本も決めることができない。

なぜこうも簡単に攻撃をはじき返せるのか不思議でしょうがなかった。

「樹殿」

竹刀をお互い構えていると、唐突に燕が話しかけてきた。

「樹殿はなんとというか……剣の振りが正直過ぎです」

「なんだよそれ……剣に正直も嘘もあるのか」

竹刀を構えていた燕はその構えを解き、僕にまっすぐ視線を向いた。

「剣術というのは心です。樹殿には失礼ですが、手が見え見えなところがあります」

手が見え見えて……これでも色々考えてやってるんだが。

「それよ、それ」

また右肩から話しかけてきた物体、もうお決まりの登場シーンになった姉さんだ。

「あんたの考えって結構分かりやすいのよ。確かにお札の戦闘っていうのはトリッキーなだけに頭脳戦ではあるわ。でも、こういう単純な戦闘というのは考えちゃダメなの」

「さすが綾香殿です」

どうやら燕も綾香と同意見のようだ。

「てか姉さんは剣術なんてできるのかよ」

そんなえらそうなことを言うからにはやっているのかと思った、まあどうせ姉さんのことだ。

『やってるわけないでしょ』

とか言うに決まっている。

「言っておくけど、剣道は有段者よ？」

「なん…だと…？」

ああ、そういえば……剣道部顧問の秋本先生と親友だったのか、その付き合いがあれば強いだろうな。

と、それを聞いて燕が目を光らせた。

「綾香殿！ ぜひと私と勝負してくださいさらないか」

ああ侍魂に火をつけちゃったようだ。

「ふうむ、しょうがないわねえ。じゃあ樹、よく見ておくのよ」

「さて……母さん、お茶くれ」

「はい、どうぞ。でも楽しみねえ、娘の姿わかんないけど」

どっから嗅ぎ付けてきたのか、両親ともに揃って燕と綾香の決闘を見に来ていた。

「ご丁寧にシートやお茶まで持ってきてやがって。

「てか親父！ 今社務所誰もいねえじゃねえかよ！」

「ああん？ どうせこんな朝早くの休日にこんな薄気味の悪い神社訪ねる奴なんていないって」

それはそれで神主としてどうなんだ……この親父。

竹刀を持った二人がお互いの眼を見て対峙している。

「なんか盛り上がりすぎてるけど……樹も本当の目的忘れてないのかね」

「ううむ、まあ仕方なかるう。それより綾香殿、本当に本気で行ってもいいとは？」

「まあそうしないと樹にとって意味ないでしょうし、最近私が下に見られてるしね」

「では……本気で行って後悔させぬように」

その言葉の瞬間に燕が一瞬にして消えた。

僕はその速さを目で捉えることはできなかったが、親父はにこやかにそれを見て、姉さんはニヤリとした。

「こいつら見えているのか？」

とっさに姉さんは背中に竹刀を向ける。

「バシンッ！」

と竹刀と竹刀の強く当たった音が聞こえた。

「い、いつのまに姉さんの後ろに回ったんだ燕は」

姉さんの後ろには、燕の姿があった。

しかし見えなくなって一瞬の出来事だ、しかしそれ見極めた姉さんも姉さんだ。

「まったくこういう攻撃はたいてい後ろから攻撃してくるのが定石なんだが、パターン変えなさい」

ああ、漫画の影響で分かったのか。

「さすがです。ですが綾香殿、後ろを取ればもう私の勝ちですよ」

「なるほどねえ、でも……！」

姉さんは直後に高くバク宙をし、燕への後ろへと回った。

「くっ！」

それを反応して、燕は後ろを取られまいと向きなおす。

「まさかそのようなことをやるとは……！」

いや、それは姉さんが幽霊だからという理由じゃないだろうか。

「やるなあ綾香は〜」

「まあまあ、まあ私は見えませんがすごいですね」

両親はお茶を飲みながら優雅に見えている。

まったくこの夫婦は何しにきたんだ。

「んじゃ、次は私の番よ」

姉さんは竹刀を上にして右手で持ち、残った左手の指を刃の先に置いている。

な、なんか昔見たことある構えだな。

「まさか……！ あの技を！？」

親父はその様子を見て立ち上がり、持っていたお茶をこぼした。

「お父さん、お茶がもつたいない！」

母さんはそれに怒った。

「ふっ、確かにこのまま行けば牙突〇式をするところね」

いや、伏字になってねえから姉さん。

「でも、時代は変わったのよ。今は持っているのは竹刀……そして突技といえば！」

な、なんだ？ そんな漫画があつたか……？

「何か妙な構えだが……隙有り！」

シビレを切らしたのか、燕はそのまま一直線に竹刀を振ろうとするが。

「隙有り？ これは余裕というもんよ！」

そして、信じれないだろうが何か炎が周りに浮かび上がった。

「えっ？ ええええ！？」

燕はたじろいでいるが、それは姉さんが幽霊になって習得した幻術というものだ。

別にそう見えているだけであって、本当の炎ではない。

「まさか……シオの技の方だというのか！？」

ノリノリな親父はヨソに綾香はニヤリとしている。

「ふ、今はこつちよ……アトミックファイヤーブレード！！！」  
う、うわあまたマイナーな技があ。

「た、ただの突きではないかあああ！？」

燕の言うとおり、ただの突きなんだよな……。

「くっ、このままでは当たる」

姉さんの竹刀はあと数センチにまで迫ってきていた、あの距離では回避は無理であろう。

僕も親父もそれを見て姉さんの勝利を確信したが。

「ならば……！」

燕はなんと持っていた竹刀を縦に構えたのだ。

そして、姉さんの竹刀が当たる直前にそれを横に振りはじめた。

「えっ？」

それをされて驚いたのは姉さんのほうだ。

しかし、燕は動きを止めずにそのまま竹刀を回転しながら下に持っていて腰をかがめた。

「燕！」

燕は叫びながら、刃を振り上げる。

「返し！」

その光景はまるで宙を舞う、まさに『燕』のようだった。

「ゲエツ」

その竹刀を直に入った姉さんはそのまま吹っ飛ばされてしまった。

「あははは、さすが燕ちゃんには綾香も敵わないか！」

親父は笑って、吹っ飛ばされて倒れた姉さんを起こした。

「やっぱり強いわあ、まさか伝説の技を拝めるとは思っても見なかった」

姉さんも負けたのにその顔は悔しがっていない。

「それで樹は何か分かった？」

「えっ？ ええと……」

分かったことだと？ 分かったのは姉さんが僕の漫画を読みまくっていたということぐらいしか……。

「あっ」

先ほどの『燕返し』の技を見て思ったことは一つあった。

そして、それは僕の剣が正直という理由も分かった。

燕は姉さんが隙があったと思われるときに剣を振ろうとしたが、途中で即座に止めた。

もし僕ならそれをそのまま振っていたことであろう。

そして、何が出るのかを相手の動きをよく見て対応していた。

「というか、そんなすぐ行動できたのって」

燕はジツと見つめてみる。

「気がついたようですね。そう、反射的にその行動になるような修行を多く積みました」

姉さんが言っていた考えるな、感じるというのはそのことから来ているのか。

「ふう、まあいちおう樹にも分かったみたいね」

姉さんは服に付いた土を払いのけ、僕の右肩に止まった。

「しかし、綾香殿。手を抜いたではありませんか？」

なん……だと……？

「あらら、何のことかしら」

「わざとらしいですよ、姉さん」

また何か隠し事をしているようだ。

「よし決闘は終わりみたいね。私はお昼の支度しないと、お父さん、シートをお願いね」

母さんはそのままお茶セットを片付け、そのまま家に戻っていった。「しかし、姉さん。るろう〇って僕持ってなかった気がするけど」「そりゃ私が生きてた頃はタイムリーな漫画だったのよ、漫画なら父さんが持っているはずよ?」

ああ、だからノリノリだったわけだな。

「そういえば宗治殿が姿が見えないが……?」「いきなり消えやがった……シートもそのままだし。」

「あれなんか貼ってあるわよ?」

シートに何か書かれている紙が貼ってあることに気がついた姉さんはそれを取った。

「なになに、仕事の依頼が入った。シートを片付けたあと、すぐに社まで来るように……だって」

あのバカ親父、やっぱ社務所空けたままはだめじゃないか。

「あ、続きが書いてある……依頼主はいつもの紫ババアだって……」

……大空おばさんかよ。

29話 姉さんと綾香の一騎打ち（後書き）

アトミックファイヤーブレードの元ネタは  
バンオーブレードです。

### 30話 紫ババア再び

シートを片付けた僕は早速、袍に着替え社へと向かう。

姉さんは先に行くといって別れたので、もう着いているはずだろう。家から社まで急ぎ足で行くと。

「樹殿ー」

社に向かう途中、燕に後ろから声をかけられた。

「どうやら、あとを追ってきたようだ。」

「どうしたんだ燕。これから大空おばさんに会わないといけないんだけど」

「それが綾香殿から私にも来いと言われて」

また燕なしじや困難な依頼なのだろうか？

「で、姉さんは？」

「ああ、今……樹殿の後ろに」

首だけ後ろの方を見ると

「プニッ」

人差し指を伸ばしていた姉さんにほっぺをつつかれた。

「やーい、ひっかかったー」

やることが小学生だぞ……。

「とりあえず急ぎましようぞ、樹殿」

「ああ」

余計な時間がかかってしまった、全速で社に向かうことにする。

「やっと来たか」

社の中にはすでに親父と……大空零奈がすでにいた。

てか相変わらず、すごい胸元が開いた紫色のおばさんだな。

「お姉さんよ？ 病院の件以来ね、樹君」

だからなんで考えていることが分かるんだと。

「燕ちゃんも来たか、さてとお前たち座りなさい」

僕たちは座ると、大空がこちらをジッと見てくる。

「な、なんですか？」

「いえ、ただ前の気と違う気が混じってるみたいだから」

ニコリとした、その笑顔はどことなく不気味だ。

「宗治、あなたは感じてなかったの？」

大空は親父に尋ねてたがムスツとした表情で無言だった。

「まあいいわ。依頼ヒジネスの話を始めましょう。といっても、これはあなた達にも関係する事なんだけど」

「また自分の依頼を押し付けろんじゃないんですか」

いつもこの大空お婆……お姉さんの依頼というのは自分が霊媒師として依頼された仕事が困難な場合、代わりに紅神社が請け負うという物である。

「そうね……確かに自分の依頼でもあるけど……」

どうやら何か渋っているようだ。

「いい加減、普通に言ったらどうだ」

シビレを切らした親父が少しイラつきながら大空に話す。

「分かったわ、みんなよく聞いてね。紅誠治の居場所アシトを突き止めたわ。そこで誠治の暗殺作戦をしようと思うの」

「誠治の居場所が分かったというのですか！」

それを即座に聞いて、燕が真っ先に立ち上がった。

「落ち着きなさい、燕ちゃん。これは極秘裏にやらないといけないんだから」

大空が燕ちゃんをなだめさせるが、極秘裏というのはどういうことだ。

それに誠治の居所をつかめたなんて、なんてうさんくさいんだ。

「いい？ まだ確かじゃないけど、紅家の誰かに誠治に対して密告しているものがあるわ」

それって、つまり。

「そう、スパイということだ」

親父は考え込みながら、静かに言う。

「零奈、その情報をいい加減に誰から聞いた」

親父はどうやらその質問をしつこく聞いたようだが、大空は口に指を当てて

「禁則事項ですっ」

と言った。

待て、なぜそのネタをババアが知ってる。

「で、やるかやらないかどうするんですか親父」

こんな大事な依頼は親父に来たものだ、親父が決定するのに限る。しかし

「私はあなたの意見が聞きたいな、樹君？」

上目遣いで僕をこの紫ババアが見てきた。

「お、親父。どうするんだ」

「お前に任せる」

親父も最後は僕に投げやりだし……。

すると、スツと立ち上がり燕が僕に近づいてきた。

「樹殿、私からも頼む。誠治を討ってくれまいか」

「ちよ、燕。顔近いから」

だが、その顔はいつになく真剣な表情だった。

「燕、どうして誠治にそんなこだわるんだ」

先ほどもそうが、名前を聞いただけで立ち上がったたり、前にも同じようなことが何回もあった気がする。それは自分の使命とかは関係なしに、何か恨みのような念が感じられる。

燕は座り直して、顔を下に向きながら語った。

「私の母上は……紅誠治に殺されたのです」

また衝撃的な発言だった。

「どうか、そんなことは初耳だ。」

「今から3年前、誠治は鬼切の里に突如として現われ、私たちに襲いかかりました」

「あの事件か……。多くの若い鬼切の侍が亡くなったと聞いたが」  
親父はどうやら知っていたようだが、僕としてはそんな事件を聞いたこともない。

「それはあんた、ずっと生死さまよっていた最中だからよ」  
声をかけてきたのは、いつもの右肩の人物。

「ご存知の通り『綾香』姉さんだ。」

「ああ、あの時のことか」

思い出したくもない、あの中学生時の事件、僕はそれが起きたあとに1週間ほどの昏睡状態が続いてた時期があった。

「あの時、多くの鬼切り達は誠治に挑みましたが、誠治の操る妖怪や鬼にことごとく負け……。そして、最後は母上さえも誠治に挑み負けました」

母親が誠治に挑んだ？ 確か燕の父親は生きているが。

「私の母上は鬼切り直系の一族です。その為、責任からか母上は父上の反対を押し切り、里に残りました」

「父親は婿養子ってことね。ということは、燕ちゃんは」  
姉さんは何かに気付いたようだ。

「そう、長女である私は18を迎えた時、里の責任を負わなければなりません」

つまり、鬼切りの代表になるっていうことなのか。

しかし、なぜ紅誠治は鬼切りの里を襲うことになったのだろうか。

「魔界の扉を開く鍵ね」

大空がボソツと言う。

「まさか、本当にあつたのか！」

親父は驚き、大声を上げるが、魔界の扉を開く鍵とは……？

「そう、誠治の目当てはその鍵でした。鬼切りの一族は紅家に、その鍵のことは内密にしておりました。間違いなく紅家はその鍵の存在を知れば、自分たちの管理化にするはず。しかし、私たち一族はそれを守るこそが『生きがい』だったのです」

「だが誠治に取られた……それを取り戻すことが最終的な目的なんだな」

生きがいを取られた武士に明日はない。

そして、それを次になる里の代表には、それが使命だというわけか。

「分かったよ……依頼を受けよう」

その言葉を言うと同時に燕はうれしそうな表情をする。

「かたじけない樹殿！ その為にはどんなことだってしますぞ！」  
ど、どんなことだって……。

「フラグが立つたわね樹に」

姉さん黙れ。

「いや、とつくに立ってたと思うぞ」

親父も黙れ。

「ちなみに私のルートもあるわよ？」

紫ババアは死ね。

「だけど、暗殺とまでは至らずとも最終目標はその鍵の奪取と誠治の捕縛だ。奴を生きたまま捕まえたい」

親父はそれを付け加え、大空に了承を伺った。

「それは兄として？」

「いや、紅神社、神主としてだ」

「分かったわ、それでいいでしょう」

大空はなぜか胸元の奥から紙を取り出して、畳に広げた。

「これは……地図？」

どうみても、この近辺の地図だ。

「印が付いてあるけど、これは何の印なの？」

見ると、地図には所どころに点のような印がマーキングされている。

「誠治の居場所アシトは魔界。それは先ほどの言った鍵を使って、自由に魔界を出入りできるのよ。だけど、その鍵を使わずにして入れる方法がある。それがこの点が書かれた場所ポイントよ」

大空は指である一つのポイントを指す。

「このポイントには『歪み』というものが生じやすいの。ある一定の時刻になると、自動的に開くところもあるんだけど、そんなことを誠治は把握済みだわ。だから、あいつが予想していない時に奇襲するのよ」

しかし、そんな勝手に入る方法が……。

「前回、依頼した時に私ワタクシは何をしたと思う？」

……異界化か！

「そう、異界化を使えば、歪みと歪みがぶつかり合い、魔界への道ロードが開く……はず」

「はず……だと？」

おい、はずってなんだ。

「そりゃ、そんなことを試せるわけではないじゃない？ それに誠治にもバレかねないし」

まあ、そうだが……。

「安全性には問題はないんだろうな」

「そこは大空零奈として保障するわ」

心配だ……前回は結構大丈夫じゃなかったような気がするし。

「樹……男は度胸、なんでも試してみるもんさ」

姉さん、それも前回聞いて散々な目にあった。

「ということ決定ね。それよりお腹空いたわあ」

「お前は真剣なんだが、真剣じゃないのかどっちかにしろ、それだからお前は……ブルブルブル」

親父が怒る途中で、いきなり震えだした。

どうやら携帯の着信がマナーモードで震えたようだ。

「と、すまない電話だ。て、母さんからか」

ということとは昼飯ができたという合図だろう。

「あら！ 美月ちゃん!？」

それを聞いた大空は真っ先に親父の携帯を取り上げ、通話ボタンを押した。

「久しぶりいー美月ちゃんー。そうそう、あなたの旦那が若いとき以来ねえ。えっ、それは悪いわあ、でもせつかくだからお言葉に甘えて」

なんか母さんと仲良いとは初めて知った……。

「なあ、親父。昔何かあったの？」

「男にはな……話したくない過去ってものもあるもんだ」  
本当に何があったんだ。

「それじゃあ、またあとでね」

このババアは勝手に出て、勝手に切った……。

「そういうわけだから、私も昼ごはん、ご馳走になるわ」

一同「ハア!？」

このババア……どうしてくれよう。



### 30話 紫ババア再び（後書き）

30話ということで核心へと近づけました。  
大空ババアはルー語に近い感じですよ。  
ああ書きたい、宗治の過去が書きたい。  
でも、それはオハライ終わってからだな。

### 31話 モンスターハント

「やっぱり美味しいわあ、美月ちゃんのお料理は」

この家に入りこんで、家の昼飯を一緒になつて食つてる人物、大空零奈（通称、紫ババア）はいつもうちがお得意様としている霊媒師。

しかし、なぜこんな家の昼飯を食つてるかというと。

「昔を思い出しますね、零奈ちゃん。あつ、これお茶ね」

うちの母さんと知り合いだからということだ。

「てか、なんで誰もツツコまないんだよ！ 親父も！」

姉さんも燕、よりによって親父でさえも平然と昼飯を食べている。

「いまさらツツコんだところで、あとが疲れるぞ樹」

ああもう諦めたのか、この親父は。

「そうよお、樹君。私と宗治と美月ちゃんたちの関係は今に始まったことじゃないんだから」

「口にご飯粒付いてますよ、紫ババア」

この関係を昔から続けていたとは、なんて苦労をしているんだ親父は。

「樹殿、余計な疲労は控えておいたほうがよからう」

「そうそう、ご飯を食べないと戦はできないのよ」

燕と姉さんはこれからの依頼の仕事の為に考えているようだ。

そう、僕たちはこれから紅誠治を捕らえに行く。

その為には魔界に入るという前代未聞のことをやってのけた上で開始するという方法だ。

「ふう、美味しかったわ。さて、お茶も飲んだことだし」

お茶を飲み終わった大空は胸から魔界に繋がるポイントが書かれた地図を取り出してテーブルに広げた。

「さて作戦会議よ」  
いや、まずは食器を片付けようよ。

「食器も片付けたことだし、作戦決行の時間は魔界への歪みが発生する逢魔時おっまかときにやるうと思うわ」

『逢魔時って何時だっけ……』

僕は少しピンと来ない顔をしていると、親父はそれに気付いたようだ。

「なんだ樹、御被い家業するなら知ってないとダメだぞ」

「ちよつと忘れただけだ。で、何時だっけ……」

「逢魔時とは霊や妖怪に逢いやすい時間と言われ酉の刻、つまり現在で言う18時頃のことだ」

18時ということは……夕暮れ時か。

「あれ、丑の刻とはまた違うんだっけ父さん」

姉さんが僕の右肩に捕まって、親父との会話に割り込んできた。

「なんだ綾香まで。丑の刻というのは2時頃のことだな、あれは霊や妖怪が本領発揮しやすい時間だ」

「それじゃあ、その時間に行った方がいいんじゃない？ 霊力もパワーアップするし、歪みも発生するでしょ？」

言われてみれば確かに霊と近い力を持つ僕たちも同じ条件だが。

「そんなことしてみたら誠治の奴だって同じだ」

ああ、それもそうか。

「そうよ、それになにより」

大空も話しに入って来たが

「寝不足は美容の敵でしょ？」

「もうお前しゃべるな」

親父が厳しい一言を言って場を流す。

「脱線が過ぎたな。それで多くのポイントがあるようだが、どこの

ポイントに行くんだ？」

「あんまり人目が付かないところ、この公園にしようと思うわ」  
この公園は前に河童と戦った場所だ。

「なるほど……あそこであの札が出てきたのは伏せ線だったわけね」  
姉さんがブツブツ言っているがスルーしよう。

「しかし、帰りはどうするの？ 魔界の内部で歪みは生じないの  
では」

燕は確かな質問をすると、大空は「フフン」と手を打ってあるよう  
だ。

「魔界が普通の人間と霊が入っても大丈夫な時間はせいぜい1時間  
程度よ、それ以上居たら魔物化しちゃうから」

ま、魔物化？ 大丈夫なのか……。

「残念だけど魔界の扉を開いているのは長くないと思うわ。その為、  
私は外で待機して1時間立ったらまた魔界のゲートを開く。大丈夫、  
歪みは多少小さくなってるけど発生はしているから」

不安だ……。

「良い？ この作戦のタイムリミットは1時間。それ以上いてはい  
けないわ。その時は作戦中断して何が何でも魔界に出た場所に戻っ  
てくること」

「危険が多いミッションなわけね。逆に燃えてくるわ」  
姉さんだけだ、燃えてるのは。

18時になる手前 公園にて。

「本当に誰もいないな」

この時間、さすがに子供たちの門限は過ぎているのであろう。

「ああ、あれよあれ」

大空が指を差した先には砂場であるが、その上には確かに曲がりく  
ねっているような空間がある。

「あれが歪み……」

燕は息を呑み、刀の鞘を握った手をグツとしているのが見えた。

「あんまり時間はかけられないわ、早速だけど異界化の結界を準備するわよ」

大空はなにやらドクロマークが書かれた本を取り出して、何か呪文のようなものを唱え始める。

「ドクラマグラ〜ヒレホレヒーエターナルフォーสบリザードー」  
待て。誰か死ぬぞ、その呪文。

その呪文が唱え終わると、信じれないことに歪みがもう一つ発生し、魔界への歪みと融合し始めた。

融合を終えた歪みは、向こうに何か別の土地が見える空間へと変わった。

「どうやら成功のようね。さて、誰から入る？」

大空は少し満足そうにこちらを見る。

「俺から行く」

そういつて親父は真っ先にその空間へと走りこんだ。

親父は中に入り何事もないことが分かった、向こう側からこちらに手を振ってきた。

「姉さん、燕！ 行こう！」

僕たちは意を決して、魔界へと踏み込んだ。

「ここは……」

魔界はどこまでも続く薄暗い景色に、あるものは青白い土。

「なんかいかにも気味悪い場所ね」

姉さんの言うとおり、気味が悪い。

「いい？ 何度も言うようだけどタイムリミットは今から1時間。誠治はこの近辺にいるはずよ」

大空は歪みの向こうから話しかけてきた。

時間は丁度18時、ということは19時までか。

「ああ、それと言い忘れたてけど」

ん？

「魔物もいると思うから気をつけてね」

「ちよ、待て!？」

「バイバイ」

大空は手を振って、何の躊躇もせずには出口を閉めた。

「まあみんなで倒せばいいだけだ、魔物なぞな」

親父の言う通り、確かに今のメンバーなら負けはしない。

「しかし、樹殿。この広大な土地で誠治は見つかるのだろうか」

「燕の言う通りだな……向こうから来てくれたら探す手間も省けるんだけど」

何か良い手はないか……僕は考えていると姉さんがポンと手を叩いて何かを思いついたようだ。

「私に任せて」

なんだろう、すごい嫌な予感がする。

「さすが綾香だ。やってみろ」

この親父の娘バカは!？」

「くれないーせいじー! 出てこいやあ!？」

うわあ……あの人の真似をしながら大声で叫びやがった。

しかし、叫んだあとでも何も起ころうとしなかった。

「やっぱダメみたいね」

そんなことで現れるんだったら苦勞はしない。

「む、何か揺れを感じないか？」

「ん？」

燕は何かいち早く察知して、耳を澄ます。

まさか本当に誠治が来たというのだろうか。

「ドスドスドスッ」

確かに揺れと何かの足音が聞こえる。

足音が鳴る方向を見てみると

「なんだあれは……」

そこで見たのは巨体で羽の生えたトカゲ。

「あ、あれは……ドラゴンだあああ!？」

「シギャー……」

ドラゴンは火を噴きながら雄たけびを上げる。

「なるほど、魔物とはどういうものかと思ったが、ああいうのもいるのか」

親父、関心してる場合じゃない。

「樹、何をビビッてる」

「そうよ、私たちに敵はいないわよ」

しかし、なんてデカさだ。

見た目だけでも10mの大きさはあるんじゃないだろうか。

「ふっ、モンスター狩りのプロの技を見せるときが来たようね!」

姉さん、まさかあのゲームもやってたのか……?

「今のパーティーじゃ、太刀とガンナー3人だからバランス悪いわね」

太刀は燕と分かるが、なぜ僕らがガンナーになるんだ。

「仕方がない! 俺が双剣にするか……在!」

だから、なんで親父もノリノリなんだよ!?

「双在月、よし! 燕ちゃん、まずはあの尻尾を部位破壊だ!」

「承知!」

親父と燕は尻尾に向かい斬りかかる。

ドラゴンはそれに気付き、親父と燕に尻尾を振り回したが、なぜか前転をして回避している。

「私たちは援護よ、樹。どんどん札を投げるのよ」

「もうどうでもいいや、臨!」

僕も諦めてドラゴンに向かい札を投げつける。

すると僕たちの攻撃にも気付いたのか、ドラゴンはこちらに猛突進を仕掛けてきた。

「やばい! 避けきれない!？」

反応が遅れ、ドラゴンの突進を避けるタイミングを逃してしまった。  
このままでは、確実に死が……。

「グオオオオオオ」

ドラゴンは目の前で、固まっていた。

「ふふふ、シビレ罠の成功よ」

いや、どうみても前の札で陣をただけだろう。

「よし、邪魔な尻尾は斬っておいたぞ！」

親父たちの方も、あんまり必要とは思えない部位破壊を成功したようだ。

「ここで私の大技よ！」

姉さんは懐から、どこに入っていたんだと思われる大きなタル状なものを取り出す。

「これが紅特製大タル爆弾！ くらええええ」

それを固まっていたドラゴンの目の前に置き、そこらへんの石ころを爆弾に当てた。

「シ、シギヤアアアアアア！」

ドラゴンはすさまじい爆発と共に息を絶えた。

「討伐成功！」

だめだ、もうこいつら御被いじゃねえ。

「さあ剥ぎ取りよ！」

「もう姉さんいいから！ てか、親父も燕も剥ぎ取ろうとすんな！」

「こいつの素材で新しい武器が加工可能に！」

「剥ぎ取っても現実に加工はできないから！」

こいつら……目的を忘れてる。

「まったく騒がしいと思えば、あんたたちですか」

不意に僕たちの後ろから、聞き覚えのある声がした。

「この声……」

後ろを振り向くと、間違いない。

あの時、僕たちに罠の依頼をしたスーツの男が少し丘になったとこ

るから眺めていた。

「お主は羅刹らせつ！」

燕は鬼切りを抜き出し、真っ向から羅刹に向かって丘を登る。

「ガキンツ！」

鬼切りと羅刹のするどい爪が当たり、激しく火花が散った。

「あなたはあの時の鬼切りの娘ですか。まさか、こんなところで会えるとは」

燕と羅刹はいがみ合ったまま、一步も引かないで刀と爪をギリギリを押し付けている。

「やはりあの時に斬っておくべきだったが……それより誠治はどこにいる！？」

燕が叫んだ瞬間、燕の後ろに一瞬で人影が現れた。

「私を呼んだかな、鬼切りの娘」

それはヤツ、紅誠治だ。

「誠治！！！」

燕は羅刹の爪を一瞬引いたあとに押し、羅刹をよろけさせながら右回転して後ろの誠治に刃を振る

「キンツ！」

誠治の右首にもう少しで刃が届きそうなところで、誠治は1枚の臨の札で首下ぎりぎりの所、攻撃を防いだ。

「な、なに！？」

燕が驚くのも束の間、誠治は残った左手に4枚のお札を持って、燕に切りつける。

「くっ！」

急所を逃れたものを、左肩を斬られてしまい丘から転げ落ちた。

「大丈夫か！ 燕」

僕は駆け寄り燕の傷を確かめ、ハンカチを燕の左肩に巻きつけた。

「止血の代わりだ。たくっ、お前は最初から無茶しすぎなんだよ」

「すまん、樹殿」

僕は燕の応急処置が終わったあと誠治に向きを直す。

「まさか貴様らが魔界に来るとはな、大空零奈の協力の下ということかな」

！？ こいつ知っているのか。

「旦那、ここは逃げた方が？ あいつがいますぜ」

羅刹は誠治に話すが、あいつというのは隣の親父のことであろう。

「誠治、いい加減にそろそろやめにしないか、今なら命まで取ろうとは思ってない」

親父は丘の上にいる誠治に語りかけるが。

「兄さん、もう遅いですよ。あの時、私に神主の件を譲っていれば

……」

「お前は勘違いしている、紅神社の神主は力があるだけじゃなれないことを」

「やはり兄さんとは分かりあえないようだ」

誠治は丘から僕たちの所に降りてきた。

そして、札を両手に構える。

「お前には少し説教が必要か」

親父も同じように札を構えた。

「臨！」「臨！」

両者の札が空中を飛び交う。

### 31話 モンスターハント（後書き）

まさかのモンハ○ネタ。

たぶんあの時のドラゴンはレウスだったんだと思う。

おまけ2 友人レポート（前書き）

本編とは関係ありません。

## おまけ2 友人レポート

さて、またやって参りました。

正樹の！ オハライ〜リポート！

というわけで、クリスマスということで本編からはずれましてレポートしていくぜ。

今回のレポートは目青高校の生徒たちだ！

「さて、まず最初はこの人！ ヒロインのはずなのに出演が少ない岬結衣ちゃんだ」

「はあ……ほんと出演少ないわよ」

どうやら作者はこれから中心になっていくから、出演少なくしているらしいぜ。

「で、結衣ちゃんとは樹と同じで小学生からの付き合いだけど、樹とは幼稚園からなんでしょ？」

「んーまあねえ。お母さんがよく樹のお母さんと仲良かったから必然的に樹とは一緒だったわ」

ああーあるある。ということは……。

「それじゃあよくあるパターンで、大きくなったら結婚するーみたいなこと言ってたわけ？」

「……今なら消したい記憶の一つだわ」  
「やっぱりあったんだ。」

「じゃあ、結衣ちゃんもういいよ」

「これだけ！？ なんかないの！ おたよりとかさ！」

「おたよりされるほど、出演がないんじゃないか結衣ちゃんは！」

結衣ちゃんは追い出しておいて次をご紹介。

「実はこっちがヒロインじゃないのか？ 伊藤美香ちゃんだ！」

「なんか結衣ちゃん、外で泣いてたけど……」

「いいの、いいの。さて美香ちゃんにはいつぱいのおたよりが届いております」

まあ、おたよりより俺自身の質問ばかりなんだけどね。

「それで美香ちゃんの霊感はどれくらいあるの？ という質問」

「樹君ほどではありませんが、霊がいるのを感じる程度です。霊の顔の表情までは分かりませんが形だけが影みたいに見える程度ですよ。」

ちなみに作者もこれと同じくらいらしいぜ。

「じゃあ綾香姉さまもそれで分かったわけか」

「ああいえ、樹君のお姉さんは普通に表情まで見えるんです。普通の霊とは違うんですかね」

おやおや、ここで先の物語のヒントが……。

「なるほど、それでは次の質問、美香さんの特技はどのくらいあるの？」

「特技ほどということではありませんが、英語、水泳、ピアノ、バイオリンほどはやっておりました」

「さすがお嬢様……」

「私はその辺にして、正樹さんのことを聞けませんか」

「お、俺！？ ええ、しゃべることがあまりないな」

「というわけで続きましては正樹さんの質問コーナー、伊藤美香が代わりまして質問します」

「お手柔らかに」

「ええと、第一の質問……樹さんと正樹さんではどちらが攻めと受け……」

「ストップ！ ストップ！？ なんじゃその質問は！」

「某神社の美人巫女の霊さんからおたよりでした」

「次だ、次いこ！」

「続いての質問、宗治と誠治、そついうのもあるのか」

「質問じゃねえ！ ええい、もう貸せ！」

正樹はおたよりBOXを美香から取り上げて、自分でおたよりを読む。

「ええと、正樹は結衣と美香どちらを選びますかと……なんかこの筆跡、どうみてもアイツ（樹）だよな。とりあえず本人の目の前だけど、断然に美香ちゃんだな！」

「あ、ありがとうございます」

「なに、その微妙な顔。まあ結衣ちゃんを選んだら三角どころか四角になりそうだから」

「三角って、あと樹さんと結衣ちゃんは分かるとして、あともう一人というのは？」

「ああー、まあ中学生時代にちょっとね。まあ樹もそれを引きずっているんだろっな」

「気になりますね……」

「ええ、あまり良い話じゃないし、このことは樹本人から聞いたほうがいいっしょ、今でも話すと怒るからアイツ」

「さて次の質問は……結衣と美香、それもイイ。だから、質問を送れ!!」

「ちなみにこのお便りも某神社の美人巫女の霊さんからでした」

なんか余計なおたよりが混じっていたが……気になる点が少しだけありました。

さて、書いて投稿するときはクリスマスですが、俺にはクリスマスなんてものはありませんのであしからず。

## おまけ2 友人レポート（後書き）

本編は2話まとめて書いているので投稿は来年になりそうです。  
ちなみに質問コーナーのおたよりは募集しておりませんので、あし  
からず。

### 32話 決戦

「臨!」「臨!」

宗治と誠治が投げた札は空中でぶつかり合い、はじき飛ぶ。

「樹、誠治は俺と燕ちゃんや。お前は綾香とあの鬼をやれ!」  
親父は僕たちに命令をした後、誠治に突っ込んでいく。

「ガキンツ!」

親父の持っていた双在月の二刀共、誠治がぎりぎりで発動した右手の4枚の札の臨で止められた。

「いきなり双在月を発動させるとは、なるほど短期決戦ということか兄さん」

誠治はニヤついているが、その背後から燕が切り込みにかかる。

「母の仇!」

しかし、左手に持っていた札の臨で鬼切りの刀も止められてしまった。

僕と姉さんはそれを横目で見ながら、羅刹に立ち向かう。

「なるほど、私の相手は二人ということですか。本当ならあの鬼切りの娘とまた手合わせしたかったんですがね」

羅刹は少し残念そうに僕たちを見下し始めた。

「それはお生憎様。でも、私たち姉弟はたぶん歴代最強の御被い師よ」

またこの姉はいい加減なことを……。

「それは楽しみで。じゃあ、その力……存分に見せてくれ!」

羅刹はするどい爪をチラつかせながら、こちらに疾走で走りこんでくる。

「臨!」

片手の爪を臨で止めるが、残る手を羅刹は僕に振りかざす。

「陣!」

それをすかさずに姉さんは陣で縛った。

それに気付くと羅刹は一旦離れ、陣を貼られた札をいとも簡単に普通に剥がした。

「確かに九字護身法の陣縛りは厄介な術。だがそれは幽霊に対しての話。あつしみたいな鬼には一時的に止めるものでしかない！」

僕はそれを始めて聞いて少々焦ったが、姉さんはどうやら知っている顔であった。

「それじゃ次はこっちからよ。樹、アレ行くわよアレ！」  
いや、アレと言われても分からないが……。

姉さんは多くの札を取り出して、両手に持つ。

「在！」

両手の札は形を変え、姉さんの手には白い刀が握られていた。

「在月！」

なるほど、僕にもそれをしるということなのだろう。

僕も大量の札を取り出して、姉と同じように術を行う。

「在！」

「……………」

しかし、札は何も起きない。

「在！ 在！！ ザイーー！！！」

何度も懸命に叫ぶがやはり、うんともすんともない。

「あ、あんた在月ができるようになったんじゃないの？」

確かにあの時はできたはずだが……なぜか今はできない。

「とんだ茶番か……仕方ない、その女の方だけ相手をしよう」

羅刹は僕に目を向けずに、姉さんに飛び掛る。

「臨！」

在月の真空の刃は鋭く羅刹に向かっていくが、爪で弾き飛ばしてしまった。

「キーン！」

爪と在月のぶつかる音はまるで鉄と鉄がぶつかるように響く。

「なんて爪の硬さなんだ、あいつ」

確かに羅刹の爪は鋭いが、所詮は爪だと思っていた。

強化されているはずの真空の臨を弾き飛ばすほどとは想定外である。

「しかし、これではあの小僧の存在が分からんね！ 在月もできないような小僧に！」

両手の爪で何度も何度も姉さんの在月にぶつけていきながら、姉に問いかける。

「それじゃあ誠治は簡単に在月ができるといえるのかしら？ 父さんから聞けば、紅神社にいた最後まで在月ができなかったと聞いたけど」

まさか誠治も在月ができないのか！？

「ははは、確かに普通の在月は旦那はできませんね」

羅刹の言葉は引っかかる口調で言う、それはまるで普通ではない在月ができると思わせる言葉だ。

「まあ見ている二人とも、旦那の力を」

「やれやれ、2対1とは。仕方ない、私も本気を見せなくてはならないと」

未だにジリジリと親父と燕の二人の攻撃を止めている誠治はしゃべった。

すると、攻撃を止めていた札を手放し足蹴りを決め、親父と燕をひるませる。

そして、なにやら懐から1枚、札を取り出した……あれは普通の九字護身法の札ではない。

「それは……！ 燕ちゃん、離れろ！」

親父の呼びかけに親父と燕は誠治から即座に離れた。

そう、それは間違いない。あの妖怪を封じ込めた呪符だ。

「在！」

誠治が叫ぶと札は黒く燃え上がり、黒い炎が誠治を包んだ。

「そ、宗治殿！ これは一体！？」

燕が驚いているのも束の間、黒い炎は誠治の両手に集まってきた。

炎から出てくると、そこには両手に黒い刀が握られた誠治がいた。

「それは……双妖月そうちゅうげつだと!？」

形は親父の持つている双在月に似ているが、色は漆黒、そして禍々しい妖気が出ている。

「その通りだ兄さん。私は完成させた、紅神社十一代目の神主が生涯を費やしてもなお完成することはできなかった術を。妖月の力、とくと見るがいい!」

「あの十一代目か!？」

親父から十一代目という叫びが聞こえたが、まさかあの呪われた十一代目のことだろうか。

紅神社は何代にも渡って神主が引き継がれてきたが、十一代目というのはとても問題児だったと聞く。

神社にある妖怪たちを封じ込めた呪符も、その十一代目が集めたものらしい。

「十一代目の力……くっ、あのままじゃ父さん達がやばいわよ樹姉さんも焦るように僕を促す。

「ずいぶんと余裕ですな、女。今相手しているのは、この羅刹だということをお忘れなでもいい!」

羅刹は姉さんに爪をグイグイと押し、在月で防いでいるのを押し倒そうとしていた。

僕はすぐに臨を投げて姉さんを助けようとするが

「ザシュッ」

いとも簡単に片方の手の爪で札を切られてしまった。

「小僧じゃ、この羅刹の相手にはならんぞ!」

悔しいが、今の状態では勝てないのは確かだった。

しかし、あの時の力がいつどういいう条件で出るのかも分からない。

僕はふと親父の方を見てみると

2対1という状況の中で誠治は笑みを浮かべていた。

「臨、臨！」

親父は双在月で2つ真空の刃を出すも、ことごとく真空は双妖月の炎によってかき消されてしまう。

「ヤアアアアアア！」

それにもなつて燕も誠治に挑んでいくが

「邪魔だ！」

黒い炎が燕の前を焼き、行く手を遮る。

「くつ、宗治殿！ なんなのですか、あの武器は！？」

「本人に聞いたらどうだ、本人に」

燕は親父に質問しても答えたくない様子だったので、仕方なく誠治の方に向きなおす。

「まったく相変わらずの投げやりで。いいだろう、この武器『妖月』について説明するか」

この妖月は紅神社十一代目神主、紅彰人くれないあきとが今までの妖怪たちを封じ込めた呪符をどうにかして紅九字護身法のように使えないと編み出そうとしたもの。しかし、開発する直前に彼は紅家暗部によって暗殺されたがね。私はその内容をまとめた書物を見て、この技を引き継いだのだ。

「力があるのに使わないなど、まったく紅家はバカばかりだ」  
誠治はため息をついた。

「バカはお前だ。妖怪を力として使うものなら、その瞬間に人間をやめることになるぞ」

「バカは兄さんだ。紅家は人間だと言えるのか？ もう少し自分の家の歴史を調べたらどうだ？」

紅家の歴史？ そういえば、僕もよく調べたことはない。

「戯言を。それでこの妖月の炎は鬼火と言ったところか？」  
「さすが正解だ、これの基となる呪符は鬼火。最もこれ以上の力を  
持つ妖怪を使いたかったんだが、妖月を制御しきれなくなるんでね」  
鬼火？ まさか妖怪の力を自在に操ることができる術だというのだ  
ろうか。

「いかがかな？ 旦那の力は」  
親父たちの様子を見ていた僕に羅刹は語った。

「妖怪の力を使うなんて間違っている！ そんなのは僕たち紅家が  
やることじゃない！」

僕が反論すると、羅刹は不気味な顔でクククツと笑った。

「なるほどね……まあいいだろう。さて、まずはこの女を片付けな  
ければ」

羅刹の爪はまだ姉さんの在月とギリギリつばぜり合いをしていた。

「樹！ ここは私が一人でやるわ！ あんたは父さんのところに行  
きなさい！」

姉さんが必死に僕へと伝えた。

「それは死亡フラグというものだよ、女」

「あいにく私はもう死んでいるのよ、鬼」

まるで生死をかけているか分からない二人の会話を聞きながら、そ  
の言葉通りに親父たちのところへと向かった。

「親父、燕！」

「樹殿！？」

僕は黒い炎と戦っていた親父たちの元へと駆けつける。

「樹、お前はあっちの羅刹をやれと言っただろうが！」

親父は僕に怒りをあらわにした。

「こんなところで親子喧嘩か？ 兄さん。まあいい、まとめて相手  
をしよう」

誠治は双妖月を振ると黒い炎が僕たちの周りを囲んだので逃げ場も

無くなった。

「ちつ仕方ない。樹、邪魔だけはするなよ」  
もちろんそのつもりはない。

しかし、彼、誠治は圧倒的な力の差が開いている。  
とてもじゃないが、このままでは勝てない。

それになにより気になってるのがタイムリミットだ。

腕時計をチラ見すると、あと30分ほどという状況。

「時間もないし、あんなの持っているのに勝てるのか……」  
もし勝つとしたら一つ、隙を見て一撃で仕留めるぐらいのことだ。

「3人……そうか、あの必殺技が可能かもしれないな」  
親父が何か良い案を思いついたようだ。

「樹殿、私は何か嫌な予感がしないのだが……」  
うん、燕。その勘は決して間違っていないと思うぞ。

「ありやりや黒い炎に囲まれたな。あちらが心配じゃないのかな？」  
女

いまだにその様子をつばぜり合いをしながら、羅刹と綾香は見ていた。

「あんなところで死なないわよ、あいつらは。それよりこれで……」  
綾香は在月を片手で抑えて、懐からもう一枚の札を取り出した。

「これで本気を出せるわ……!!」  
在月の真ん中に札を置くと、札が羅刹の方向に飛び出した。

「なっ!?!」

あまりの一瞬のことだったが、羅刹はすんでのところで避け離れた。  
「女、あんな至近距離でのスピードを投げるとは不可能なはずだ。  
何をした!?!」

「別に……ただこれが、私の在月の真の力って言ったところよ」  
綾香の在月はだんだんと曲がっていき始めた。  
それはまるで弓のように……。

「まさか、本当の武器は弓だともいうのか!?!」

「そう、本当はこの武器、誰にも知られたくないのよ。特に家族には。ついでだからこの武器の名前も教えてあげるわ」

かげんありじき  
下弦在月

「だが、弓といったところで当たらなければどうということはない！」

羅刹は目に止まらない速さで、綾香に近づこうとしたが

「見え見えよ、完全にね」

綾香の弓は完璧に羅刹を捕らえていた。

「なっ、なんだとおおお!？」

「腕1本もらつていくわよ。臨!」

綾香は札を矢に見たて弓を射る。

その言葉通りに羅刹の左腕は切られた。

「くっ、貴様……なぜ見えた？」

左腕の切られた部分を押さえながら羅刹はうずくまって苦しそうに綾香に問う。

「言ったでしょ、誰にも見られたくないって。弓を在月として使うものには特殊の力があるのよ、かつてのおばあ様のように」

綾香はうずくまっている羅刹を見下ろしながら答えた。

「そ、その眼は!？」

綾香の眼を見た瞬間、羅刹は飛び上がり、どこかに消えてしまったようだ。

「まったく……手間かけさせんじやないわよ。それより樹たちは!？」

黒い炎がもう静まっていたので、樹たちと誠治の様子を見るために後ろを振り向くと

「た、樹!?!?!」

綾香は信じられないものを見た。



### 32話 決戦（後書き）

あけましておめでとございます、鬼の子です。  
寒いですねえ、書いてるときに指がプルプル震えてました。

### 33話 変貌

「それで良い案ってなんなんだ親父」

黒い炎に囲まれている僕は燕は親父が考えた良い案を聞いていた。

「まず俺が……前に出る。この黒い炎避けと誠治への第一の攻撃になるさ」

「しかし、見た限り宗治殿の双在月では誠治が持っている双妖月の一刀分の力です」

「んなことは分かっているよ燕ちゃん。確かに今のままで双在月の斬撃を片方ずつ喰らわせようとすれば、双妖月によって折られてしまっただろう」

なるほど、そこで燕か。

「私ともう一刀の双妖月を止めるのですね」

燕も察したようだ。

「その通り、燕ちゃんが俺の後ろに付いてくれ」

確かにそ二刀の妖月を持った相手なら二刀とも攻撃を止めることができるはず。

しかし、このままでは決定打の一撃がない。

「そこでお前の役目だ樹」

「僕が？」

「ああ、お前が最後の一撃として陣をしる。いいか？ 絶対に臨むかで殺すんじゃないぞ」

あくまで親父と誠治は話し合いで決着をつけるつもりなのだろうか。確かにその作戦なら、間違いなく陣縛りは成功するであろう。

しかし、この技はどこかで見たことのあるような作戦だが……。

「話し合いは終わりか？」

黒い炎が囲まれた遠くの方で僕たちを誠治は見ていた。

「ああ、待っててくださいありがとうございます。でも時間もねえし、そろそろ終

わりにしようか！」

「そうだな。魔界に居続けた人間と霊は1時間ばかりで魔物と化す。私もその例外ではない」

やはり誠治の方もそれは同じだということか。

「行くぞ！」

親父の掛け声と共に、先頭から親父、燕、僕という順番で列となり誠治に挑んだ。

「鬼火よ、焼き払え！」

誠治は双妖月を振ると、黒い炎が燃え上がり親父に向かってきた。

「列れい！」

親父は双在月を交差にして列をし、黒い炎からなんとか僕たちを防御していた。

「なんとかたどり着きましたぞ！」

燕の言うとおり、黒い炎から避けられ誠治にすぐ近くまで来た。

「うおりやややや！」

親父の双在月は二刀まとめて誠治に振る。

「甘い！」

誠治の双妖月は一刀でそれを受け止め、二刀目の双妖月で親父を斬ろうとしたところ。

「させるか！」

燕の鬼切りでもう二刀目を止めた。

「なるほど、しかしこれでは先ほどと同じだぞ？」

このままでは黒い炎を間近で発動させられ焼かれるだろう。

「フッ」

親父は静かに笑った。

「何を笑っている兄さん？」

「この作戦名は……『紅流ジェットストリームアタック』なんだよ！」

ああ通りで見たことのある技だと思ったら、黒い三連〇の……。後ろで待機していた僕はそこですかさずに誠治の真上に飛ぶ。

「これで終わりだ誠治！ 陣！」

僕は2枚のお札を手にとつて、陣を貼り付けようとする。

誠治は二刀の妖月を親父たちの攻撃を防御するのに使っている為、ガラ空きだ。

この距離では反撃の術もない。

『勝った』

その核心をすると、お札を誠治に近づける。

「無駄だ……者しゃ」

僕が札を貼り付けたのは……双妖月を持った誠治の……偽者だった。

「者だと!？」

親父が叫ぶ。

「終わりだ、樹」

すぐ近くにいた本物の誠治が懐から何かを取り出して、僕の心臓部分に突き刺した。

「グハッ！」

胸を見ると突き刺さっていたのは短刀だった。

そのまま誠治は僕に突き刺された短刀を持ち宙にへと浮かせた。

「どうだ？ 魔界の扉を開く鍵の痛さは」

上目で僕をニヤついた顔の誠治が見る。

鬼切り一族が守っていた鍵というのはこの短刀ということなのだろ  
う。

「樹殿！」

燕が叫び、偽者の誠治から本物に鬼切りを突き刺そうとした。

「おっと」

あろうことか誠治は燕に僕を向ける。

「なっ!？」

「グアアアア！」

燕はそのまま鬼切りで僕の背中を突き刺した。

「た、樹殿!！」

周りの黒い炎は無くなっている。

「樹！」

「樹殿！」

「たつ……」

色々な方向から僕を呼ぶ声が聞こえてきたが、段々とその声は小さくなっていく。

そして僕の心臓の鼓動が止まっていくのが分かった。

「誠治！ 貴様ああああ！」

燕は鬼切りを樹から引き抜き、誠治にへと矛先を向ける。

「樹をやったのはお前だろ、鬼切りの娘よ」

「だまれえええええ！」

燕は鬼切りを誠治に突き刺そうするが、誠治はお札を取り出し

「陣！」

陣を燕に貼り付けた。

「くっ、動けん」

燕はそのまま陣によって縛られた。

「誠治！」

それを見ていた宗治は偽者の誠治から離れようとするが

「無駄だ兄さん。鬼火の力よ、その火を爆塵に成せ！」

誠治がその言葉を言うと、偽者が持っていた双妖月は爆発する。

「なんだと!？」

宗治はそのまま爆発に巻き込まれ、燃え盛る炎の身体を地面に転げまわった。

誠治は樹に突き刺していた短刀を抜き取り、その亡骸を放り投げて宗治の所に向かう。

重度のやけどを負った宗治にもはや動ける力はなかった。

「ようやくだ兄さん、これで復讐が果たせる」

虫の息で仰向けになった宗治を誠治は哀れそうな目で見ていた。

「哀れだな。父が兄に神主を引き継がせると言わなければ、こんな

ことにならなかつたものを。だが、安心しろ。すぐに父と息子のもとに送つてやる」

誠治は宗治を短刀で突き刺そうとする。

「グシャ」

肉に刺さつた音がその瞬間聞こえた。

しかし、それは宗治を突き刺した音ではない。

誠治の短刀を持っていた手を見ると、お札が突き刺さっていた。

「こ、これは!?!」

誠治を周りを見回すと、そこにいたのは弓を持った綾香であつた。

「よくも、樹を……私の弟を!」

綾香は札の矢を誠治に何発も放つ。

「くっ、下弦在月だと!?! まさか母さんの技を使える者が!」

誠治はお札を広げ「列」と防御をし、綾香の矢を逃れる。

「甘いわよ! 皆!」

綾香は何枚かの札を一边にまとめて下弦在月で発射すると、それらはあらゆる方向に行き誠治にへと向かつていった。

「ちっ、仕方ない。使いたくなかつたが……」

誠治は懐から札を取り出していった。

それは間違ひなく妖怪を封じ込めている呪符である。

「妖月・かまいたち!」

誠治の手元には風を帯びた黒い刀・妖月があつた。

「疾風の刃よ、我を守れ!」

黒い刀から出る風は誠治の身を守るように現れ、綾香の札は全て斬られていった。

「くっ、まさか妖怪かまいたちの力まで使えるなんて」

「どうした先ほどの威勢は!?!」

「まだまだ!」

一体どのくらいの時が立っているのだろう。

僕の目の前はまたあの時に似ている暗闇がある。

「おい、いるんだろ？」

僕はその暗闇に向かって叫んだ。

どうせまたあいつのいるのだろうと核心していたからだ。

「まったく、また来るのが早い相棒」

暗闇がいきなりぬつと現れたのは僕と同じ外見をした人物。

「早速だけど、時間がないんだ。また力を貸してほしい」

僕はそいつに頼むと、考え込んだ。

「……そいつは無理な話だ」

「なんだと？」

確か前もこんな致命傷を負ったのに生きていたのだ、それがいきなり無理な話とは。

「いいか相棒？ お前はあの誠治に突き刺されたあとなら復活はできたんだ」

ん……確かあのあとに。

「そう、燕に鬼切りで刺された。それが問題だ」

どういうことだ、なぜ鬼切りに刺されたのが問題なのだろうか。

「悩んでるな相棒。いいだろう教えてやる。鬼切りというのは本来鬼に備わっている超再生能力機能を遮断させる力がある」

超再生機能……？

「ああ、つまり怪我をしてもすぐ治るっていうやつさ。覚えはあるだろう」

「ちよつと待て……それじゃ、僕は……」

「そう、鬼つてことさ」

鬼……鬼！？

「ちょ、待て！？ 僕が鬼つてどういうことだ！？」

「まあその話はお前の家族から聞けよ、僕から話すことじゃない」  
その言葉に反論しかけたが、こんなことをしている場合ではなかった。

「そつだ、今は生き返ることを考える。まあ今のお前の残機はゼロ

「だけどな」

「なにか……なにか方法は。」

「あることはある」

「!？」

「だけど、これで後悔しても知らないぞ？」

しかし、僕の答えは決まっていた。

「やってくれ」

そいつは無言で僕の前に手を差し出した。

なんとなく、それが握手を求めるかのようにだったので手を取ってみる。

「……じゃあ交代だ」

そいつがニヤツと笑う表情が見え、一瞬で暗闇が僕を覆った。

「くっ、臨！」

「無駄だ！ かまいたち！」

綾香の札の矢が放たれるも、すぐに誠治の妖月によって斬られていった。

「時間がないわね。なんとか、誠治の持っている短刀だけでも取り戻すことができれば」

時間はあと10分といったところ。

しかし、このままでは埒が明かない。

燕は遠くの方で陣で縛られているだけだが、宗治の方はほっとけば命が無いと思える重症だ。

「樹がいれば……」

樹の方を綾香は見ると、そこには転がっているはずの樹がいなかった。

「!？」

「余所見をしているぞ綾香」

「しまったっ！」



無数の札は形を変え、何本もの紅い在月になっていた。

「夢幻札を在に変えるだど!? 聞いたことがないぞ、こんな技!」  
そして、樹はその内2本を手に取り誠治に走っていく。

「くっ」

カキンツと樹の紅在月を妖月によって防いでいくが、どうやら紅在月でも妖月の靈力に勝てないのか折られてしまっている。

「所詮は在月というわけか!」

誠治は笑っているが、樹はすぐに次の在月が握られていた。

「貴様!」

何本も、何本も……紅在月が折られようが、次の紅在月がすぐ手元にある。

それを続けていく内、段々と誠治には疲労の顔が見えた。

「はあ……時間までもうないな。ここは一旦退かせてもらおう」

誠治は先ほどの短刀魔界の扉を開く鍵を出すと、それを空中に斬る。

すると、そこから現実の世界へと繋がる穴が現れた。

その瞬間を綾香は見過ごさなかった。

すぐに誠治の手に矢を放つ。

「クッ、綾香め。一体何回、手を狙えば気が済むのだ」

誠治の手には札が突き刺さり、そのまま短刀を落としてしまった。

すぐそこには樹の攻撃が迫っていた為、仕方なくそのまま穴へと入る。

「化け物が!」

誠治は捨て台詞を残して、穴と一緒に消えていった。

「……」

樹の姿をしたものは誠治が消えたことに驚いたが、すぐに綾香たちがいたのを見つけ矛先を変えた。

「まさか……樹! 私がわからないの!？」

綾香は叫ぶも、樹は綾香に向かって紅在月を投げつけた。

「樹！」

それを避けるも第二波もすぐに来る。

「臨！」

臨で相殺すると、すぐ樹は近づいてきた。

「このままじゃ……」

そう綾香が思った瞬間に綾香の後ろに急に穴が現れ、引つ張る手が現れる。

「キヤツ！？」

引つ張った手の犯人は大空零奈であった。

「綾香殿！」

そして、そこには陣で縛られていたはずの燕

「……」

虫の息だった宗治もいたのだ。

「まったく時間になってもこないと思って探せば、こんなことになっているとはねえ」

すぐに穴向こうの樹を見るが、なぜか立ち止まっている。

「樹！　すぐにこっちに来なさい！」

綾香が呼びかけようと、手を差し出すも大空零奈はそれを止める。

「だめよ、綾香ちゃん。彼はもう人間には戻れないわ」

「！？」

「彼はもう『鬼』になってしまったのよ。残念だけど……もう助けられない」

「それでも樹は！　樹は私が助けないと！」

「大空殿、私からも頼みます！」

燕と綾香の二人は大空零奈に頼むが、急に樹の方向へと手を向けた。

「見てみなさい、樹君を」

樹はもう後ろを向いていた。

「彼はもう諦めた……行きましょう。まだ誠治は死んでいないわ」

「た、樹……」

綾香は叫ぶも、大空零奈は穴を無理やり閉めた。



33話 変貌（後書き）

ああ、ついに変わっちゃったよ。

次でいよいよ魔界編は終了できるといいなあ。

### 34話 樹の秘密

「……………」  
綾香、燕、大空零奈の3人は虫の息だった宗治を病院に運んだ後、紅神社の社で沈黙していた。

「色々なことが重なって混乱してる顔ね、二人とも」  
その沈黙を破ったのは大空零奈だった。

誠治のこと、魔界を開く扉の鍵のこと、そして何よりは樹が『鬼』だったということ。

「私は、私は今でも信じられません。樹殿が鬼だったなど……………」  
どうやら燕がその中で一番シヨックが大きかったようだ。  
しかし、燕はどうも引つかかっていることがあった。

『綾香と大空は樹の正体を知っている』口調だからだ。

「お二人共、実は樹殿のことは初めから存じてあったのだろうか？」  
燕は率直に聞いてみた。

「私からは何も言えないわね。これは紅家の問題でもあるし」  
大空零奈はしゃべらないようすの為に燕の視線は綾香に向く。

「はあ……………分かったわ。部外者に話すと父さんに怒られちゃいそう  
だけど……………」

「父さんと誠治が争った事の発端は知っているわよね？」

「もちろん。その時に誠治は自分の父を刺し、再封印の邪魔をした  
ということは知っております。結局は自己犠牲の上で封印は成功し  
たようですが」

燕は自信満々で答えたが、綾香は下にうつむいている。

「綾香殿、どこかお身体に問題が？」

その状況に少し燕は心配していた。

「大丈夫よ、幽霊は病気にはならないから。それで、もしその封印

が失敗していたということだったら……どうする？」

「!?!」

驚愕するのも無理はなかった、紅家が封印している鬼　　というのは鬼の中でも最強最悪と呼ばれるもの。

その名は『紅鬼』（こうき）

鬼切り一族に縁のある頼光四天王でさえ、討伐することは敵わなかったという。

仕方なく紅家が封印したとあるが、その封印が失敗していたとすると……。

「し、しかし……それが樹殿と何の関係が？」

燕は少々冷や汗をかいているが、話の本題を戻そうとした。

「この話には続きがあつてね。父さんは誠治を撃退したあと、紅の鬼を封印した扉を調べたらしいの」

「？」

燕には何か違和感を覚えた。それはとてつもなく嫌な違和感。

「扉には割れ目があつた……そして、小さい手がその隙間から見えていた。父には少し恐怖心があつたわ、けれど好奇心と自分の父が生きているかもしれない期待もあつてか、その手を引っ張る。出てきたものは　赤ん坊だった」

「ま、まさか……それは」

「そう、その赤ん坊こそが……樹」

「し、しかし。それでは樹殿が本当に鬼だなんて……」

「……実は樹が鬼になったのは初めてじゃないの」

綾香の目には……涙がたまっていた。

「綾香ちゃん、まだ話すべきことじゃないわ。これは樹君に聞かせるべきものでしょ？」

大空零奈が綾香の背中を撫でる。

「辛い過去だったのよ、燕ちゃん。これくらいで許してあげて……でも、間違いなく言えること、それはあの鬼の力が『紅鬼』だとい

うこと」

「しかし、初めて鬼の力が出たのはでないということとは前のように静まるということも……?」

燕は少し嬉しそうに解釈したが　大空零奈は釘を刺すように言った。

「確かに戻ることは戻るでしょう。でも、今の状況で戻ったときは彼の最後になるわよ」

魔界

「ガアアアアアアア」

何体もの異形な魔物たちの前に樹が立っていた。

「ギアアアアアアアス」

魔物たちは雄叫びを上げる。

しかし、樹は右足を一步前にドスンツと出すと

「グアアアアアアアアアアア!」

負けじと雄叫びを出した。

その声に魔物たちでさえも驚いている。

「シュツ　」

その驚いたときをチャンスとばかりに樹は飛び上がる。

それを見た魔物たちも羽を使い飛び上がるうとするが、なぜか飛べなかった。

「　!??」

魔物たちの足元にはすでに無限の札でできる『夢幻陣』むげんじんで縛られていたのだ。

魔物は何が起こっているのか検討もつかずに慌てているの様子を見ながら、樹は空中で手を構えた。

「　臨!」

その瞬間に無限の札は鋭い刃物のようになり、魔物たちを足から切り刻んでいく。

「ギヤアアアアアアッス！」

激しい断末魔がどこからも聞こえてくるが、その声を聞いて樹は笑っていた。

血の雨を浴び、真っ赤になった樹の体　その姿はまさに『紅の鬼』  
「ボタンッ」

しかし急に樹は血だまりに倒れこんだ。

「いい加減、僕の身体を返してくれないか？」

倒れたまま、僕はもう一人の自分に向けて言葉を発する。

僕の意識は戻っていた。

しかし、手足は思ったように言うことは聞いてくれない。

「おはよう相棒。もう少して誠治を倒せたんだけどね」

もう一人の自分が僕の口を使って発する。

「誠治は倒したいと言ったが、姉さん達まで手を出すとは聞いてないぞ！」

「まあいいじゃない、いちおう諦めたんだしさ」

その時の意識は朦朧としていたが、姉さんと戦うときの様子は感じられた。

間違いなく、姉さんを殺そうとした戦い方だ。

それはまるで恨みがこもったような。

「ところで、いつまでこうしている気だ？　相棒」

魔物の血が髪の毛に浸透していつているのは確かに気色悪いが、どうにもこうにも、もう一人の自分が僕の身体を譲ろうとしないのだ。

「だから返してくれと言っているんだ」

僕はもう一度、もう一人の自分に言う。

「フフフッ」

すると　あろうことが笑っていた。

「相棒、僕が『鬼』だったことは気付いているんだろ？」

あの時、こいつは僕が鬼だと言った。しかし、正真正銘、僕は人間である。

ということはいいつの意思が鬼だということなのだろう。

そして、あの計り知れない力でそれは確信した。

「だったら、なおさらだ。このまま僕にゆだねておいた方がいいぞ」  
「どうやらこいつは僕に身体を譲る気はないらしい。」

「だけど、お前はそのまま魔物たちを殺していくだけだろ？ いい  
加減に僕は現世に帰りたいんでね」

その言葉を言うと、またこいつは「フッフッフ」と気味悪く笑う。

「分かった分かった。そこまで言うのなら、返してやるよ」  
「どうやら、こいつも諦めてくれたらしい。」

一瞬で僕の手足は動き、血だまりのところから起き上がった。

「ふう、これでなんとか自由に……っ!？」

一旦立ち上がったと思ったら、僕は何かに押しつぶされるような感覚に陥り、はいつくばってしまった。

「な、なんだこれは……」

紅い血に反射した僕の顔はとても衰えてみている。

そして、ふと大空などに聞いた言葉を思い出した。

『タイムリミットは1時間』

僕はそのまま時計を見る…… 約束の時間からもう…… 5時間は過ぎていた。

「あいつめ……これを知ってて!!」

もう一人の自分は人間の僕だからこそ、魔物化するということを知っててやったのだ。

ふと、頭の中で声がした。

「どうだ、苦しいだろう？ 苦しさから開放されるには僕に入れ替わるしかないぞ？」

なるほど、そうしてまた僕から入れ替わることをお願いするということを考えていたのだろう。

しかし、そうはいかない……ここで魔物化しようが鬼になろうが同じことだからだ。

「まあお前みたいなのはバカはそういうことをやるだろうな……でもな、血の臭いに誘われて大勢のお客様が来るみたいだぞ？」  
僕はなんとか頭を持ち上げ、周りを見る。

そこには大勢のお客様　もとい魔物たちが僕を囲んで見ていた。原因はこの血だまりの臭いだったのだ。

「ほらほら、どうする？　もう鬼になるかしないぞ？」  
それでも諦めたくはなかった。

そんなものになるなら、僕はここで死んでもいいと思ったからだ。  
「バカな奴だ」

その言葉を聞こえたが最後、魔物が迫り来る中で僕は気絶してしま  
った。

「樹！」

遠く懐かしい知り合いの声が聞こえる。

「樹！　聞いているのかよ!？」

僕の肩にそいつは手を置いて、僕を揺らす。

「ちょ、分かってるよ。ちゃんと聞いているって!」

あまりの急に揺らされたので、少し気分が悪くなってしまった。

僕は肩をゆすられた人物を必死で思い出す。

そうだ、彼は……なかむらしゅうじ中村修二。

幼馴染の一人であり、中学になってからも正樹や結衣と共に一緒だ  
った。

「それで樹、この前の妖怪退治ってどういったことだったんだよ？」  
こいつは少し……いや大のオカルトマニアだった。

その為、僕の正体がちょっとしたこと正樹と一緒にバレたあと、  
しつこく僕を追い回していたのだ。

「修二、お前ちょっとは樹の身になってやれよ。まあ俺も新聞のネ  
タにしたいんだけどさ」

正樹が助け舟を出しているのか、一緒になって僕を問いただそうとし

ているの分らないこと言っている。

「だめだ、本来なら紅家の御被いはバレちゃいけないものなんだ。バレただけでも論外なのに……ちゃんとした御被い現場を見せろってそんな無茶なことを……」

その為に僕を正樹と修二はストーカーじみたほど付いて来てるのである。

すると突然、目の前に気配がした。

「あんた、また厄介ごとかなんかじゃないわよね？」

「うわ、姉さん!？」

いきなり声をかけてきたのは高校の制服を来た女子。

「あ、綾香姉さん、ちわつす」

「ういーす」

正樹と修二があいさつする、この人は高校3年になった僕の姉さん、紅綾香だ。

「まったくこれを父さんが聞いたらどうなることやら……」

姉さんは頭を抱えて悩んでいるところを見て、修二は

「大丈夫ですよ、僕は口が堅いですから、まあ正樹はすぐしゃべっ

ちやいますけど」

そんなことを言った。

「分かったわ。この件は樹に任せるから、自分でケリをつけなさい

? いいわね」

姉さんは少し命令口調に僕に言った。

自分でケリをつける……ということは御被い現場を実際に見せなくてはいけないということなのだろうか。

僕は仕方なしに日が落ちるのを待ち、二人を連れて街へと繰り出した。

「一体どんなのを御被いするん？」

興味ありげに修二は聞いてくる。

「最近噂になっっている都市伝説って奴を調べるだけさ。首なしライ

ダーとか口裂け女とかそういう類の」

仕事としての依頼ではないが、こうして噂を確かめるのも紅神社の古来からの仕事だ。

未然に怪事件を防げれば、それに越したことはない。ちなみに親父は商売にならないからと言って、わざとやらないでいるので僕が独断でやっているのである。

「そついや女兒の連続殺人事件って何か聞いたことあるな」

正樹は懐にいつも隠し持っている新聞の切れ端を集めたメモ帳を調べながら、それを伝える。

「決まりだな！ んじゃ早速それを確かめに行こうぜ！」

「ちよ、修二！ 勝手に決めるな！」

修二は勘違いしているが、ただの殺人事件は僕とは関係がない。そついった類は警察にいる清水警視に頼むのがほとんどだ。

「こうしちゃんらないぞ。樹、正樹！ 全力疾走だ！」

「おー」

正樹はノリノリで修二と走り出す。

「おい、少し待て！」

僕は二人を止めようとすると、突然立ち止まった。

「わ、いきなり止まるなよ!？」

寸前で二人にぶつかりそうになったところを止まると、修二がヒラリとこちらに向いた。

「わりい樹！ 俺、用事できたからちよつと行くわ！」

いきなりこんなことを言い出した。

「用事ってなんだよ、またいきなり」

僕は少し怒りながら問いだすと、正樹が止めに入ってくる。

「まあまあ、樹もそのほうが仕事がやりやすいだろう？」

怪しい……絶対この二人、何か隠している。

しかし、正樹もそうだが仕事の邪魔になるのは確かだ。

「分かったよ。んじゃ、またな」

「すまんな樹！」

修二は走りながら、手を振って去っていった。  
正樹が少しニヤニヤしているのは気のせいだろうか。

噂を確かめるといっても、ただそこらへんを巡回するだけである。  
学校近く、公園、住宅街を回るが異常は見当たらない。

「ふうむ、事件の臭いは何もないな」

正樹が少し残念そうにしている。

「当たり前だ、事件なんて無いに越したことはないだろ。さて暗くなってきたし、そろそろ帰るか」

僕たちは中学生だ。あまり遅くなると補導しかれない。

正樹の家とは近いので途中まで一緒に帰ると、先に見覚えのある女性僕たちに気付いて寄って来た。

「あれ？ あの人は」

「樹君！」

声をかけてきたのは岬結衣のお母さんだった。

しかし、ゼーハーと息が荒いし、少し顔が赤くなっている。

「こんばんわ、どうしたんですか？ そんなに慌てて」

「樹君、結衣見なかつた!？」

結衣？ そういえば今日は会ってない。

「いえ、会ってませんけど？」

「そう……あの子におつかい頼んだんだけど、なかなか帰ってこなくて。ほら、最近物騒な事件が起きてるから」

結衣のことだから、タイムセールになるまで粘っているのかもしれないと考えたが、正樹を見ると少し青白い顔になっている。

「どうした？ 正樹」

「あ、俺……結衣ちゃん見たわ」

まさか、どこかで通りすがったのだろうか。

「それで……修二も見かけたから追いかけて行っちゃって」

あの時か!？

「あのバカ、結衣を連れまわしているな。おばさん、僕が連れ戻してきますから家に戻っててください」

その言葉聞いてか、結衣のお母さんはホッと「頼むわね樹君」と家に帰って行った。

「さて……正樹。すぐに修二を追うぞ」

「合点承知！」

僕たちは心当たりのある場所に走って向かった。

### 34話 樹の秘密（後書き）

うわ、おわんね。

とりあえず、樹がいきなりわかってしまいました。が何となく想像はできたよね。

しかし、まあそれだけじゃないので。

ようやく修二に出番が回ってきました。樹の過去回想編。ちなみに姉ちゃんも生きてます。

### 35話 樹の秘密2

ある男が買い物袋を持った女の子　岬結衣をコソコソと物陰で見ている。

「樹には悪いことをしたが、恋の方が大事だからな」

この男は中村修二。

大のオカルト好きである修二は樹の御被い稼業を知り、あとを付けまわそうとした矢先に幼馴染の岬結衣のあとを追っていた。

「結衣が樹のことが好きなのは分かっているが、男修二……それで諦めるわけにはいかない」

声をかけるタイミングを見るために物陰で見ているが、どうも恥ずかしさで踏み切れない。

「なにか、なにかグツトタイミングがあれば！」

すると、結衣の買い物袋からネギが落ちそうになっているのに気付いた。

「落ちろ……落ちろ！　ネギ！」

まるで念力をするかのように手で気を送っていると、奇跡的に

「バサッ」とネギが落ちた。

「いまだ！」

運がいいのか結衣は後ろに落ちたネギを気付かずに去ろうとしている。

すぐに修二は駆け寄って、落ちたネギを掴みにかかろうとすると

「お嬢さん」

結衣の目の前から渋い男性の声が聞こえた。

「えっ？　なんですか」

結衣が応答したところ、その男性を試してみる。

「あ、赤いマント？」

まるで血のように赤くて長いマントを着た紳士的な男性であった。

「ちょっとお尋ねしたいんだが」  
男は結衣に少し近寄る。このようすだと道が聞きたいのかなんかだろう。

しかし、男性はあろうことがありえないものをポケットから取り出した。

「赤はお好きかい？」

それは……血が滴ったナイフだった。

まるでさつき何か切ったように血は地面にポタポタ落ちている。

「きゃ、きゃあああああ！」

結衣はそれを見るなり悲鳴を上げたが、その場を動かない。いや、動けなかったのだろう。

赤いマントの男はそのナイフを上へ上げ、結衣に一突きしようとしたところ修二はすぐに駆け寄り、回避した。

「まさか……お前が連続幼女殺人事件の！」

修二は確信した。

「しゅ、修二？」

「大丈夫か、結衣！」

腰を抜かしているのか、結衣は立つのもやっとの状態である。

「支えるから、こっから逃げるぞ！」

修二は結衣を少し抱えながら、走ろうとしたところ赤いマントの男は怒ってそれを追おうとした。

「ちい、これでもくらえ！」

スーツと修二は何かポケットからスプレーを取り出し、それを赤いマントの男に振りかける。

「目がああああ目がああああ」

どうやらそのスプレーの正体は催涙スプレーだったようだ。

「樹にいたずらしようとして買ってあって良かったぜ」

すぐに修二たちは走り出す。

正樹から話を聞いた僕、樹は修二と結衣のあとを追っていった。

「ええと、確かこのへんだった気が……」

結衣を見た修二が追った場所に行くも、誰もいない。  
どうやらこの辺らしいが……。

「ピチャッ」

何か足に水たまりのような感触がある。

しかし、雨は振った覚えはない……。

下を見るとそこには……血！？

「おい、これって……」

「何かあったのかは間違いないな」

その血は一滴一滴、まるで道を案内するかのようにつながっているのが分かった。

「正樹、お前は僕の神社に行って、親父か姉を呼んでくれ」

さすがに結衣や修二までいたとなれば、正樹まで守れる自信はなかった。

僕は正樹を神社へ行けと、遠まわしに来るなという。

「で、でも……」

しかし、どうやら正樹は察して無いようだ。

僕は少々怒りながら「足手まといだから来るなっていったんだ！」

正樹はビクツと肩を震わせるが「わ、わかった」と駆けていく。

少し言い過ぎたと思ったが、そんなことをしている場合ではなく、すぐに血の跡を追った。

修二と結衣は廃墟になったビルに入っていた。

「結衣、少しだから静かにしてくれよ」

結衣は無言でコクンとうなづく。

「なんなんだよ、あの変質者は……」

二人は座りながら、赤いマントの男が通り過ぎるのを待つ。

結衣を見ると、震えているようだ。

おもむろに修二は結衣の肩を寄せた。

「大丈夫だ、何があっても俺が守ってやるから」

「うん……」

しかし、廃墟ビルの入り口から「コッソ」と革靴の足音が聞こえた。  
「シッ」

修二は指を口に置いて静かにと結衣に指示をする。

「コッソコッソ」

革靴の音がうるちよろ歩き回る音が聞こえる。

二人は息を殺しながら、立ち去るのを待つが　　結衣の手元に、ある物が近づいてきた。

「えっ？」

結衣はふと手を見ると、そこにいたのは「チュウー」でかいネズミが上に乗っていた。

「キヤ、キヤアアアアアアー!!!」

「ゆ、結衣!？」

すぐに修二は結衣の手に乗ったネズミを払いのけるが、すでに遅かった。

「しゅ、修二……後ろ」

結衣は修二の後ろに指を差す。

そこにいたのは……赤いマントの男がニヤリとこちらに笑みを浮かべ、血だらけのナイフを構えていた。

「ゆ、結衣!　逃げろ!」

修二は結衣を突き飛ばす。

「しゅ、修二!」

ナイフは今にも修二の脳天を刺そうとした　　その時!

「臨!」

1枚のお札が赤いマントの男のナイフを飛ばした。

「か、間一髪……」

僕が飛ばした臨のお札はなんとか、ナイフを持った男に命中した。

「お、おせえよ樹」

腰を抜かしながら修二は俺にへへッと笑う。

「悪いけど、僕は守れるだけの力はない。結衣を連れて早く逃げろ」  
しかし修二の首は横に振る。

「奴の目的は結衣みたいだ。結衣は俺が命をかけてでも守るから、お前はここで戦ってる」

少し反論しようとしたが、それは一理ある。

このまま結衣たちを逃がしてここで戦おうと思つたら、この赤いマントの男をすぐに逃がしてしまうだろう。

「分かった。だけど、結衣……ちゃんと守れよ」

「分かってるて」

僕と修二はお互い拳をあわせ、そのあとにサムズアップをする。

これは小さい頃からの「幸運を」という合図だった。

僕は赤いマントの男の前に立つ。

恐らくは都市伝説「赤マント」だろう。

よく観察すると、見た目は普通の人間のようにだ。

とすると、ただの変質者なのか……それとも。

「まあいいや、臨！」

札を試しに投げるも、赤いマントは先ほど落としたナイフを拾い、札をスパツと切る。

「やつぱただの人間じゃないなこれは！」

いくらなんでも常人の反応ではなかった。

とすると……妖怪では見た目的にもありえない。

「こりやはじめて戦うな……悪魔つて奴を！」

この赤マントは人間が悪魔に憑かれた人物であると確信した。

うちの神社とはお門違いなのだが、ごく稀にこのような悪魔を祓う依頼が入ったこともある。

しかし、本来ならエクソシストと呼ばれる教会などの務めなのであるが、こうなつては仕方ない。

「いいか、悪魔というものは人の弱みに付け込み人を操る。夕チが

悪いのは鬼よりも簡単に人が操ることができるということだ。それは紅家のものでも例外ではない。戦うときは気をつけるよ」  
親父からの解説が思い浮かぶ。

「来るぞ！」

修二の言葉にハツとして、ナイフの突進が来るがすぐに避ける。

「これじゃあ攻撃もできねえか……ん？」

僕は避けながら考えていると、丁度いい生き物が足元にいた。

「そうか……こいつの力を借りれば！」

僕はすぐに足元にいた生き物に「兵」を貼った。

「いけえ！」

僕がお札を貼ったのはネズミだった。

狙い通り1匹のネズミは何十、いや何百を仲間を引き連れ赤マントを襲う。

「ぐ、ぐわあああああ！」

赤マントはネズミにかじりつかれ、苦しんでいる。

これでなんとか勝ったと思ったが

「バサッ」

男から赤マントがはずれる音が聞こえた。

「えっ？」

赤マントは宙に浮いていたのだ。

「まさか　こいつが正体か！　臨！」

僕はすぐに臨を投げる

「バサバサッ」

「んなばかな!？」

あるうことか赤マントがバサバサすると臨の札は勢いを無くして落ちた。

まるで赤マントは笑うかのように揺れ始め、僕に向かって突進してくる。

「チッ」



ではさっきの音はと修二を見ると　自分に羽織っていた赤マントを自分ごと胸に突き刺していた。

「愛の力っていうのは……偉大だよな！」

「しゅ、修二！」

結衣はその光景を見てか……気絶してしまった。

修二はその言葉を最後にこちらを向き笑顔で……倒れた。

なんとか僕は這いずり、修二の元に来た。

「諦めるんじゃないやねえ修二。僕より大したことない傷なんだからよ……」

「いや……自分でやったものだ。どのくらいの傷なのかは知っている。いいか樹、約束だぞ。あの子にはお前からは恋をしない。あと、なんかあつたら化けて出てやるからな」

その言葉を最後にガクツと修二は……息を絶えた。

「しゅ、修二……！」

僕は泣き叫ぶ……と、修二に胸に突き刺さっていたナイフは自ら誰かに抜かれるように抜かれた。

「そうか……まだ悪魔本体がいるっていうわけか……！！」  
怒りのあまり僕は自分ではないような力が湧き上がって来るような感覚がする。

「そこから何があっただけ……」

魔界で仰向けになっていた僕は、そのあとに起こった出来事をよく覚えていない。

「ははは……どうやら僕の最後は魔物になるっていうわけか……」  
もう諦めることにすると、つらいことはつらいが気持的にはすこい楽になっていた。

「てっ！」

チクツと僕の右手に何かが刺さる。

僕はその手の方向を向くと……あつたのは誠治が残したあの抜き身の短刀だった。

「これは……魔界の扉を開く鍵！」

すぐにそれを取ろうとした　だめだその力は残されていない。

「でも……俺はまだ約束を守りきれてねえんだよおお！」

抜き身の短刀をヒョイツと振ると……小さい穴ができた。

「も、もう少し……大きく斬らないと」

なんとか立ち上がるうとするが……だめだ。

『ほら……もう時間がないぞ相棒』

僕の鬼が語りかけてくるが……それに返す気力はもうない。

「ドサツ」

僕はそのまま……倒れ、視界が狭くてなってきた。

誰かが僕を持ち上げるような感覚した。

「……」

しかし回りは静かだが、手に持っていた短刀を剥がされる。

「!?!」

そして、何か振るような音が聞こえた。

懸命に目を開けてみると、大きい穴……そしてその人物は……まるで

甲冑を着たように黒くゴツゴツした2mもあるような者だった。

少し驚愕したが……不思議と怖さはなかった。

僕のダランと垂れた手を持ち上げ……あろうことが。

拳を合わせ、その後にサムズアップをする。

「!?!?!」

この合図は……。

ポイツと大きい穴に僕は投げられ、また視界が急にせまくなってきた。

「ハッ!？」

僕が起きた時には見知らぬ誰かの立派な家だった。  
なぜか布団で寝ている。

「だ、誰の家だ……これ」

「ガサッ」

目の前にある障子がいきなり開いた。

それに少々驚くが、そこにいたのは……まさかの清水警視。

「し、清水警視!？」

「目が覚めたか! 樹!」

どうやら僕は助かってしまったようだ……。

### 35話 樹の秘密2（後書き）

またもや清水さん登場。

さて……樹を助けてくれたのは一体誰だったのか！

でも、またあの人出るにはまだまだ先なんだ！ごめん。

スピノフ 高校生・綾香（前書き）

綾香が主役です。

## スピンオフ 高校生・綾香

「ふあ、ふあーああ」

目青高校1年の秋、紅綾香は自分の机にもたれかかりながらあくびをかいた。

窓を見ると、猛暑も終わり木の葉も赤くなって来ている。

「別になんてこともない夏だったわね」

高校生の夏休みだろうが、綾香は神社の仕事の依頼が増えただけで何も変わらない。

しかし、一日中弟をいじめることができるという点は楽しかったが。

「どうやら何もなかったみたいね綾香」

話してきたのは少しおとなしめのロングヘアの女の子、林理香子はやしりかこだった。

「そりゃあんたみたいにピアノが上手ければ稽古とかで楽しいんだろうけど」

この林理香子はとてつもなくピアノが上手い。

夢はもちろんピアノリストになるそうだ。

「綾香も趣味とか見つけたら？」

「趣味……ね」

趣味……趣味……樹をいじめることぐらいかしら。

「また弟君のこと考えてた？」

理香子のその発言には綾香もギクリという表情になる。

「まったく、いい加減にそのブラコンを治さないと彼氏もできないわよ。モテるんだから勿体無い」

確かに今までいろんな男が言い寄ってきた。

しかし、それは神社の仕事を勤めている時にたまたま巫女姿を見せしてしまったので、それに釣られた奴らばかりだからだ。

「どうせ巫女さん萌えとか思ってるんでしょ……あいつら」

「えっ？ 萌え？」

「あ、こつちの話。でも私に今から趣味なんて……部活動にも参加していないし」

理香子は仕方なしとためいきをつく。

「しょうがない……放課後に付いて来て。案内させたい場所があるから」

無理やり約束させられてしまった。

たまに理香子は強引なところがある、しかしそれは本当に友達のことを思っているのだから悪気はない。その為、綾香はいつもその強引さに断れないでいる。

「綾香！ 行くわよ！」

「ちよ、痛いって」

理香子は授業が終わると同時に綾香の腕をつかみ、教室を出た。

「どこまで行くのよ理香子」

階段を降り、体育館の方へと目指している気がする。

体育館の方ではバレーボール部が練習をしているようだ。

まさか、バレーでもやらせるつもりなのだろうか。

「てっ、あれ？」

理香子の引っ張る腕は急に向きを変え、体育館の入り口から遠ざかった。

「ちよ、理香子!？」

「大丈夫、もうすぐ着くよ」

しかし、この方向は記憶が確かならば間違いはない。

「じゅうけんどうじょう？」

「そう、柔剣道場」

墨でのぶとく書いた字がデカデカと看板として出ている。

「えっ何？ ま、まさか!？」

『まさか理香子、柔道をさせて、それをいいことに寝技とかで、あ

んなことやこんなことを……』

「あ、綾香？」

「理香子……私はまだ百合というジャンルは……」  
すると突然、掛け声が聞こえてくる。

「ヤッー!!」

そのいきなりの迫力な声に少し驚いて立ちすくみしてしまった。

「お、今日もやってるやってる」

理香子は綾香の腕を放して、柔剣道場をのぞいた。

「すいませーん？」

首だけをのぞかせると、顧問であろうイカツイ先生がそれに気付く。

「ああ君はいつもの子か。もう少して練習も終わるだろうから待っているといい」

綾香も少し興味ありげに中を覗くと。

「ヤッー！ メーン!!」

それは剣道で面に一発、竹刀を当てている最中であった。

「す、すごい」

綾香は竹刀が当たる瞬間、身体がゾクツという感覚がした。

これは霊能力者が力を出したときの感覚に似ている。

「お、綾香先生も感動していますね」

さきほどの一言を理香子はからかってくる。

しかし、剣道をしている者は全員男だらけだ。

こんなムサイ中で剣道をさせるつもりだろうか。

むしろ貞操の危機というものが綾香によぎる。

「ドゥーウー!!」

そういえば、先ほどから勝っている人が戦い続けている。

つまり勝ち抜き戦ということなのだろうか。

「終わり！ 全員勝ち」

顧問がそれを終わらせる。

つまりあの一人がそこにいる全員の男子に勝てたということなのだろうか。

綾香は少しその人に興味を持った。  
静かにその面を脱ごうとしている。しかし、面を取って出てきたのは。

「お、女の子!？」

まさかの女の子だった。

そして、不思議なことにこの子には見覚えがある。

「あ、沙織ー」

理香子はその子に向かって手を振った。

そっだ、この子は同じクラスの秋本沙織あきもと さおりとかいう子だった。

あまり話したことはないのだが、確か男まさりな口調だった気がする。

「おう、理香子と 紅さんか？」

どうやら綾香がいるのに不思議とこちらを見ている。

「実はここにいる綾香に剣道を教えたくてね、ちよっと手ほどきをしてくれない？」

「な、なに勝手に言ってるの理香子!？」

予想はしていたが、まったくやってもらえないド素人を、こんなムサイ男たちに全勝を上げた女子に教わるなんてどうにかしている。

「私はいいんだが……」

秋本沙織はチラッと顧問の先生の方に向いた。

『頼むよ先生……断って断って』

先生に恨むような目つきで診ていると、それを先生は感じ取ったようだ。

そして、コクンとうなづく。

『良かった……』

と思っていたのは束の間。

「いいだろう秋本。たまには女子同士で剣道をさせないとな」

まさか先生は綾香の視線が、逆の意味で感じ取ってしまったようだ。

「仕方ない……紅さん、こっちに来て」

「えっ? えっ? えー!?!?」

秋本沙織に手を引っ張られ、更衣室と連れて行かれた。

「……バレー部の更衣室？」

なぜか綾香が来たのはバレー部の更衣室であった。

「ああ、剣道部は私以外男子部員だからね。更衣室もないから、バレー部に一部借りてるんだ」

なるほど……確かに男子更衣室に女子部員なんて入れない。

それこそ18禁物になりそうだ。

「紅さん、まさか変なこと考えて無い？」

ギクリと綾香は表情を変えたが、すぐに

「い、いや、なんでも無いよー」

「そう……」

中に入ると、さすが女子の更衣室だけ清潔に保っている。

「はい、そこに座ってて」

「ええと……私、本当に剣道なんてやったことないんだけど」

「分かってる分かっている、理香子に言われて来たんでしょ？」

どうやら秋本沙織は分かっているようだ。

気がつくとも手馴れた様子で、胴やら何やら装着されている。

「そういえば、紅さんってあの紅神社のところの？」

確かに紅なんて名前はそんなに無い。

近くに同じような名前のある神社があればその関係者だと分かるだろう。

「ええ、いちおう巫女とかやったりもしてるけど」

「それじゃあ御被いとかも？」

綾香は少しこわばった顔をしたが、普通の神社でも御被いなんてのはよくやることだ。

紅神社みたいにアグレッシブな御被いはそう多くはない。

「いちおうやるけど……なんか悩み事でも？」

「いえ、まあ聞いてみただけだから」

防具が装着終わると、綾香たちは急いで柔剣道場に戻った。

どうやら他のみんなは今か今かと待つて座っている。

「本当は初心者がいきなり防具付けちゃいけないんだけど」

秋本沙織がちょっとにごすが、まあ仕方なしと竹刀を構える。

「いちおうルールは分かるね？ それじゃあ自由に打つてみて」

確か剣道は竹刀の先つぼの方面、胴、籠手を狙う気がした。

喉もあるのだが、さすがに女子相手にはするべきではないだろう。

「ヤー！」

掛け声をして、一面を叩き込んでみる。

「バシーンツ」と爽快の音が道場に響いた。

「なかなか筋がいい」

どうやら秋本沙織も驚いているようだ。

「それじゃあ胴とかも狙つてみて」

指示をされたとおりに綾香は胴を打つてみる。

「バシーンツ」

またもや爽快の音が響いた。

「あなた、本当に初心者？」

不意にそんなことを聞かれた。

「綾香は運動神経いいから、何でもできるんだよー」

座っていた理香子が代わりに答える。

まあ紅神社のアグレシブな御被いのお陰で運動神経は良くなさざる負えない。

「そう……それじゃあ私と本気の勝負をしよう！」

秋本沙織はどうやらやる気になってしまったようだ。

「勝負は2本取つたら勝ち。審判は先生と、その男子2人やつて」

すかさず先生が真ん中に立ち、男子生徒2名が脇に立った。

その指示する手馴れた様子から、先生も逆らえないようだ。

「まあ……練習だからな。それでは始め！」

先生が始まりの合図をすると、突然秋本沙織の雰囲気が変わる。

「……………ヤアー！！」

『これは……………！？』

綾香は普段馴れているものと同じ感じが伝わる。

「ハアツ！」

「バシンツ」とお互いの竹刀がぶつかる音が響く。

綾香と秋本沙織は鏝迫り合いをしていた。

その姿に周囲のみんなは「おー」と感動している。

「さすが！ でもこれは耐えられる！？」

竹刀を一度放し、直後に面へと振ってきた。

綾香はすかさずぎりぎりのところで避ける。

「やっぱり初心者動きじゃない」

確かに綾香は剣道初心者ではない。

しかし……………実戦経験は豊富だった。

「ドゥー！」

またもや秋本沙織が面をしてこようとしたので、その隙に胴へと打つ。

「バシンツ」

見事に綺麗に決まった。

審判3人全員も納得の1本のようだ。

「あはは……………まさかここまでとは綾香」

理香子は少しニガ笑いをしている。

そりゃそうだ、さっきまで男子相手に猛威を奮っていた子を初心者相手に負けてしまったのだ。

友達としては気分が良いものではないんだろう。

「……………」

無言のまま秋本沙織は面を脱ぐ。

「秋本、あと1本残っているぞ」

先生の問いかけも無視して、無言で道場から出てしまった。

「ちよ、秋本さん！」

綾香も急いで、そのあとを追ってしまった。

着いたのは学校の屋上。

胴着を着けたまま、秋本沙織は空を見ていた。

「秋本さん……なんていつたら言えばいいか」

綾香は気まずそうに話しかけると、秋本は振り向き少し涙目に流れながらも少し笑った。

「ごめん、同年代の女の子に負けたことなかったから動転しちゃって」

エリートが急に挫折するとどん底みたいになるように、秋本にとってそれは同じことなのだろう。

綾香は少し悪いことをしたと反省するが

「謝らないで綾香さん、むしろ謝るのこちらでお礼を言いたいぐらい。だって、私の目標ができたわけだから」

それを止められてしまった。

綾香は先ほどの試合で気になった点を言ってみることにする。

「秋本さんって、少し靈感とかあるでしょ？」

秋本の目が少し丸くなると、すぐに聞き返す。

「巫女さんって、そんなところまで分かるの？ 実はちょっと見えないものを見たりとかは」

やはり、先ほどの霊力を感じたのは気のせいではなかった。

しかも相当強い方の部類だと感じる。

間違いなくこれは……。

「実はね今まで紅さんのこと知らなくて……勉強もできるし、体力抜群で、といっても何もしてないからちよっと気に入ってたんだ」

何もしてない……というよりかできないほど忙しいというほうでもあるんだけど。

「でもよく知りもしないのに……それで得意な剣道でちょっとボコボコにしてやろうと」  
要約すると……あいつちよつと調子に乗ってね？ ボコすかという不良学生のような流れだったのだろう。

「……それじゃあ今からでも私をボコボコにする？」  
綾香は急にお札を秋本沙織に貼り付けた。  
秋本は少し驚いたが……あろうことがすぐに気絶してしまう。

「まさかとは思ったけど、こんなところまでいたとはね……鬼」  
秋本沙織の影から出てきたのは角が1本、ニヨキツと生えてくる。  
「そんなタケノコみたいな真似しないで出てきなさいよ！ 引っこ抜くわよ！」

あわてたように角の正体が出てきたのは身体が小さい鬼だった。  
「やっぱ小鬼ね……靈感のある子をイライラさせて霊力を出させ、それを吸ってみたいだけ」  
綾香はポケットに入ったお札を取り出す。

「クラスメイトを鬼にはさせないわよ。臨！」  
見事1枚の札で小鬼を真つ二つに切り裂く。

「ガチャッ！」  
屋上のドアが開かれ、チラツとのぞかせたのは理香子だった。  
「もう探したよー、こんなところにいるなんてー」  
どうやら全力で綾香たちのことを探していたようだ。

「てっ、なんで沙織が気絶してんの？」  
そっぴえば札を貼り付けたままだった。  
すぐに取り外して、肩を持つ。

「ええと、なんかアノ日みたいだから保健室運ぶわよ！」  
「ああ……」

とりあえずむちゃくちゃ言い訳をしたが、理香子は納得してくれたようだ。

「あれ……ここは？」

保健室のベットに寝かしていた秋本沙織が目を覚ました。

「急に倒れちゃってね……大丈夫？」

綾香がベットの近くのイスに座り問いかける。

「紅さん……そういえばなんか、スツとした気分」

小鬼といえども、鬼が着いていたのだ。

そうとう霊力が吸われてイライラしていたのだろう。

隣にいる理香子は少し顔が赤くなっているが、まだアノ日だと思っているのだろうか。

「とりあえず……顧問の先生にはもう休むと言ったから、今日  
はゆっくり休むといいよ、秋本さん」

「……沙織でいいよ、紅さん」

ふとそんなことを言う。

「分かった沙織。んじゃ、私も綾香って呼んで」

「分かった、綾香」

それが綾香と沙織の出会いだった。

「で、こんなことを聞いてどうするの二人とも？」

高校1年になった樹と正樹は今先生になっている沙織のことについて聞いてくる。

「どうしても正樹が、学生時代の秋本先生のことを聞きたいらしく  
て……」

「はあ……」

もうあれから長い年月が立った。

樹もこれから先私と同じような体験をするのだろうか。

いや、それとももつと過酷な運命になるのだろうか。

「で、姉さん。当時付き合っていた彼氏とかは？」

「ボコッ」

とりあえずはこのバカな弟をもっ少し見守ることだじやぶ。

スピノフ 高校生・綾香（後書き）

続きを書くころと思ったら、こっちを書いてしまったという流れ。  
ええと………すいません、次は時間がかかります。

スピノフ2 正樹の戦い(前書き)

物語とは関係ありません。

## スピンオフ2 正樹の戦い

樹たちが魔界に行っている頃、正樹もまた別なものと戦っていた。

「ピロロロロロ」

正樹の部屋で携帯の着信が鳴り響く。

「うお!? めずらし!」

今まで正樹は自分から電話をかけたことは何回かあるが、かかってくることは稀であった。

「樹か? それとも結衣ちゃんかな。いや、まさかの美香ちゃんか

!」

正樹はうれしそうに携帯の着信を確認すると……。

「……非通知?」

まさか時代遅れのワン切り電話かと思っただが、携帯の着信音はまだ鳴り響いている。

「男は度胸、なんでも試してみるもんだよな!」

おもしろいことあれば学校新聞のネタにしてしまおう そんな軽い

気持ちだった。

「……」

相手は無言、とりあえずこちらから話してみる。

「もしもしー? どなたですかー」

すると、電話の向こうから聞こえてきたのは、あのフレーズ。

「私、メリーさん」

しかし、正樹はすぐ発言した。

「俺、メリーサンタ! メリークリスマス!」

訳の分からないことをハイテンションに答えると、ガチャツと向こうから電話は切れた。

「ああ!! せっかくの女の子からの着信が! てか声がめっちゃかわえええ!」

なぜ彼がこんなにも怖がらないのか?

実は正樹……メリーさんの存在を知らなかったのである。

正樹は着信が切れたことに非常にがっかりとじていたが、またもや着信音が鳴る。

「バツ！」

すごいスピードで携帯の通話をボタンを押す。

「……ハヤッ」

一瞬ボソッと聞こえた気がしたが、そのまま相手はまたフレーズを言う。

「私、メリーさん……」

メリーさんは続けてお決まりのセリフを言おうとしたが、正樹はそれを許さなかった。

「あっ、メリーさん！？ さっきはごめんねえ、メリークリスマスなんて時期がじゃないよねーいや、俺も女の子の着信だと思つとテシジョン上がちゃってさあ。そういや、メリーさんって、名前からすると外国の方？ 日本語うまいよねー、もしかしてハーフとか？」

正樹はマシンガンのようにしゃべりまくる。

「……ガチャ、ツーツー」

またもや正樹は携帯を切られてしまった。

「し、しまったー、またいつもの癖があー」

正樹に電話がかかってこない理由、それは相手をしゃべらせずに会話するというなんとも迷惑なスキルのせいだった。

「ピロッ」

正樹は携帯で着信で震えると同時に通話ボタンを押していた。

それができたのも、もう一度来ると何か確信して携帯を手にとっていただからである。

「もしもし！」

相手の出方より早く正樹はしゃべっていた。

「……エツ？」

あまりの速さにメリーさんも困惑気味である。

「いやあ、ごめんねーさつきしゃべりっぱなしでー、そっち名前教えてくれたから、こっちも名前を教えるのも礼儀だよ。俺の名前は内藤正樹、もしよかったらマー君とか呼んじやって構わないぜ！」  
「……………」

ハッ！ と一瞬正樹はやってしまったと焦ったが、今回の電話は切らないでくれたようだ。

「私、メリーさん。今、あなたの街にいるの」  
「な、なんだって!？」

正樹はその言葉によるこんだ、なんせ外国人の女の子が自分の街にいるのだ。

「マジで!?! 何どこに住んでるの!?! ちょっと会おうよ!」  
「ガチャツーツー」

「またやってしまった……………」

正樹はそう思った。さすがにいきなり会おうなんて言われたら、誰でも引く。

「……………」

次はなかなか着信が来なかった。

「やっぱり怒ってるのかな……………さつきのことだけ謝りたいな。よし、謝ろう!」

正樹は携帯でリダイヤルボタンを押した。

「……………現在、この電話番号は使われておりません」

正樹は大ショックを受けた。

まさか先ほどのことで、電話番号を変えられたとは思ってもみなかったのである。

「く、だが……………せめて謝りたい!」

そう思った正樹はいても立ってもいられずに、外へと繰り出した。

「きつと、あの切れた時の音は公衆電話だ!」

ガチャツ、ツーツという音が聞こえた正樹は確信していた。

『きつと彼女は家出の少女で、たまたまあった公衆電話で自分の携帯にかけたのだろう。そう、これは運命に違いない!』  
彼の脳内ではそう解釈していたのだった。

ところどころ公衆電話がある場所に回っていく。

最近では携帯電話の主流化で公衆電話も少なくなってきたが、さすがに探すのは時間がかかる。

「どこだ…! どこだ!」

必死になって探していると、持っていた携帯が鳴り出した。

「!?!」

すぐに通話ボタンを押し、耳を傾ける。

「私、メリーさん」

「あ、メリーさん!? さっきはごめんね! さすがに会おうなんて言うのはどうかしてたよ。ちょっと謝りたくてさ、外まで出ちゃって。メリーさん、今どこにいんの?」

正樹は必死に謝る姿勢になった。

「今、あなたの家の前にいるの」

「な、なんだって!?!」

正樹は驚きを隠せなかった。

『まさか家出で困っているから、うちに!?! ええい、こつしちやいらねえ。男、正樹! そこは助けてやるのが男だろ!』

正樹は自分の家へと駆け出した。

「メリーさああーん、まってるよおー」

夜の住宅街を颯爽と駆け抜け、叫ぶ姿は異質なものであった。

「私、メリーさん。今あなたの部屋にいるの」

受話器からはまたなんとも信じられないことが聞こえてくる。

「ちよ、まさか俺の親たちに了承済み!? しかも俺の部屋に共同だとか! ダメ! そういうのはちゃんと付き合ってからで!」  
もはや正樹も何を言っているのか分からなくなってきた。

「あと……あともうすぐ」

もうすぐ……もうすぐで自分の家に着く。

そして、電話を耳に当てる。

「私、メリーさん。あなたがいなかったら、うちに帰るわ」

「そ、そんな！」

自分がいなかったことが不服だと思ってしまったのだろうと正樹は考えた。

『しかし、彼女にとって自分の家に帰るのであれば、それが一番いいのだろう。』

正樹は少し残念そうにしながらも、電話で対応をすぐに返した。

「メリーさん、俺はいつも君をどこからでも見守ってるよ」

「……」

しばらく無言だったが、一言の返事が返ってきた。

「……キモッ」

その夜、正樹は自分のベッドで静かに泣いた。

翌日

学校の噂で、メリーさんをストーカーする男という都市伝説が広まったのは言っまでも無い。

スピノフ2 正樹の戦い(後書き)

やだ……なにこれ……。

即興で書いてみた。

自分でなにこれと思った。

### 36話 謎の里

「し、清水警視!？」

目が覚めた直後、障子から出てきたのは清水警視であった。

見たところ甚平とラフな格好からか、この家は彼の家なのだろうか。

「一体、僕に何が……」

「聞きたいのは俺のほうだ! こんな山間に倒れていたんだからな、里の奴が気付かなかつたらどうなっていたことか」

清水警視は少し怒りながら心配してくれているようだ。

「すいません。それでこの場所は?」

普通は気になるであろう質問を投げかけると、清水警視の顔がこわばった。

「いいか樹? この場所は他言無用だ。もちろんお前の家族にもだ」

家族にも話してはいけない?

一体ここはどういった場所なのだろうか。

「そつえばさつき里って」

里ということはそれなりの住んでいる人々がいるのだろう。

「紅家には暗部というものがあるのは知っているな?」

突然、清水警視が別の話に切り出した。

「ええまあ、紅の名を汚したものを暗殺する集団のことですよね」

かつて紅神社神主11代目のように紅家にとって許し難い行為をした場合、暗部によって処罰される。

「その暗部の集団、紅流忍くれないりゅうの里だ」

「し、しのび!？」

話には聞いていたが、まさか本当に紅流の忍がいるとは思わなかった。

その名の通り、紅流の忍というのは紅流九字護身法を使う忍の集団

のこと……だと言われていた。

「その為、この場所も秘密だ」

しかし不思議でしょうがないことがある。

「どうして清水警視はここに？」

清水警視の普段の仕事は不可思議な事件を解決することが専門。

それならいる場所は警察署とかだ。

「なに昔の実家に里帰りつてところさ」

「さ、里帰りつて!？」

「ああ、俺は紅流の忍者だよ」

謎が多い人だと思ってみたら、まさかそんなことを。

「さて話は終わりにして……腹が減ったろ、なんか持ってきてやる」

そういつて清水警視は障子を開け、廊下へと出て行った。

僕は身体の様子を調べてみることにした。

「やはり鬼の力が……」

誠治に突かれていたはずの胸には目立った外傷もない。

「……そっぴゃ僕は誰かに助けられて」

よく覚えてはいない、まるで黒い甲冑のようなものを着た物体。

そして、見覚えのあるサイン。

「まさか……そんなことは」

僕は少し頭を抱えていると、障子がスッと小さく開いた。

「? 清水警視？」

障子に呼びかけても、出てくる様子ではない。

ところが片方の眼がこちらをジロリと見てきた。

「!？」

一瞬、その眼に寒気がしたが気のせいだろうか。

「だ、誰だ!？」

少し大声を出して話しかけると少し驚いたのだろうか、いそいそと障子を開け始めた。

「なっ!？」

しかし、そこにいたのは　おかつぱ頭で着物を着た小さい女の子。  
「……君、この子？」

話しかけると、無言でウンとうなづいた。

「そうか、じゃあ自己紹介しないと。僕は紅　樹、君の名前は？」  
「……」

無言のままだった、もしかしたら話すことができない子なのだろうか。

「そうか、じゃあ君は何歳なのかな」

これなら指を使って答えることができるだろう、そう期待していたのだが……。

「……」

指をじっと眺めて、何やら考えて込んでいる。

もしかして自分の歳を忘れてしまったのだろうか。

すると、3本の指を出した。

「そうか、3歳なのか」

と答えたら、首を横に振る。

「ん？」

すかさず、次は両手を出した。

しかし、グーのままでは指は立っていない。

「これは……0と0ってこと？」

そういうとコクリとうなづく。

まさかそんなはずは……それでは先ほどの歳を加算したら……。

「3、300歳？」

そういう風に言うと、女の子はにこやかな笑顔になった。

「からかっているのかな？」

その時、また障子がズバツと開く。

「いや、からかっただけじゃないさ」

どうやら障子を足で開けた清水警視の腕には大きなお皿があった。

「ほれ、栄養取るには焼肉が一番だ」

しかし、その精が付き過ぎるメニューより女の子のことが気になった。

「し、清水警視。この子が300歳っていつのは？」

「しかたねえな、ほらもうしゃべっていいぞ」

女の子はその言葉を聞いた途端、少しうれしそうに口を開いた。

「まったく、ようやく話せるようになったのじゃ」

「!!!？」

小さい女の子から出るとは思わないセリフが放たれる。

「申し遅れたな。妾の名は鬼の姫、鬼黄泉と申す」

「き、きよみちゃん？」

そう答えた瞬間、ドスツと僕に小さい女の子がやったとは思えないボディブローが決まった。

「痛ッ!!!」

「妾の方がお主より何倍もの年上なのじゃぞ、もう少し口をわきまえよ」

しかし、こんな小さい女の子が300歳？ それに鬼の姫とかどうとか……信じ難い。

「残念ながら本当だ樹」

「し、清水警視？」

清水警視が言うのであれば本当のことなのだろう。

「こいつは俺が小さい時からいてな。元々この里の長のところにいたんだが、なぜか俺の家に入り出してやがる」

「しかし鬼の姫なんてものがなぜ紅家の、しかも暗部の本拠地なんかに」

鬼と聞いたら紅家が黙ってはいない。

問答無用で狩られてしまっただろう。

「ああ、それはこいつが……」

清水警視が話そうとした瞬間に「ゲプツ」という音が聞こえた。

「……？」

鬼黄泉の様子を見てみると……焼肉が盛られていたはずの大皿を持つていた。

「ああつ！！ お前、僕の飯を！」

「ん？ ずっと食べてなかったからいらないかと思ったのじゃ」  
悲しいことに僕の食事はこいつに食われていた。

「……まあ、また作ってきてやるからよ」

そういつて清水警視はまた廊下へと立った。

布団のまま座っていると、鬼黄泉がジロジロと顔を見てくる。

「なに見てんだよ」

「いやな、知っているような顔なのじゃが……お主、どっかで会ったか？」

こんな変な幼女、会ったことあるはずがない。

「まさかな……」

僕の中の鬼を知っているとしてもいっうのだろうか。

「……お主、やはり妾と同族じゃな？」

「！？」

さすが鬼の姫と言ったところか、僕の中にいる奴も分かっているらしい。

「しかし、お主で似た奴の顔とすると……いや、まさか。この話は忘れてたもれ」

そういつて、ヒョイツと僕の腕を引っ張ってきた。

「もう身体は動けるのじゃろう？ 妾がこの里を案内してやろう」

清水警視が今料理しているので少し遠慮しようと思つたが

「なんじゃ……妾が直々に案内してやるというのに？」

起き上がるのを拒んだ僕はありえない力で腕を引っ張られていた。

「い、痛いから！ ていっかなんでありえない力あるんだよ！」

「言つたであろう！ 妾は鬼の姫である！」

仕方なく、僕は布団から立ち上がり外へと向かうことにした。

道中、鬼黄泉に対して気になる点があったのでたずねることにした。  
「なあ鬼の姫って言ったけど、鬼の象徴でもある角はどこにあるんだ？」

いくら一番力が弱い小鬼だろうと鬼には角がある。

角があるからこそ鬼と呼ばれる存在のようなものだ。

「なんじゃお主、まだ妾を疑っておるのか。鬼の角というのは妾ぐらいになると隠せるものなのじゃ」

か、隠せる？ 初めて聞いたぞ。

「まあそれに妾の角は他の鬼共とはちと違うものじゃからのう」

「また謎がある言い方だな」

本当にこの幼女は鬼なのか？ そんな疑問をまだ浮かべながら里の人達が集まっている場所についた。

「あ、鬼黄泉さまだ！」

里の住んでいるであろう子供達が鬼黄泉の前に集まってくる。

「小童共、今日も元気がいいな。ちゃんと親の言うことは聞いているか？」

「うん、鬼黄泉さまの言う通り、ちゃんと修行してました」

そういつて鬼黄泉は子供の頭を撫でる。

「そうだ、こいつを紹介してやらないとな。新しい妾の御付じゃ」

「お、御付じゃねえだろ！」

「なんじゃ妾のお気に入りの場所で倒れていたのを助けてやったというのに、妾が拾ったから妾の者に決まっておるう？」

な、なんだこのジャイアニズム。

「兄ちゃん、鬼黄泉さまの御付なのかー」

子供達がキラキラ目で見えてきたので、弁解しようとするも気が引けた。

「ほれ、次行くぞ次」

またもや強引に腕を引っ張られて、あちこちと連れまわされる。

その中で気になったのは忍者の修行場となるものに着いた。

「シユタツ」

臨の札を木の的に当てている者、兵の札を木に貼り動かす者、者の分身を練習している者など各個人が練習に励んでいる。

「あれ？」

気になった点は個人個人、一つの技を集中的に練習しているということだ。

「ふむ、気付きおったか。紅流の忍というのは九字護身法の内一つを極めろということになっておるのじゃ」

つまり臨をしたら、それだけを極めろってことか。

「その為にこの里には9人の師範がいたのじゃが……。まあ今は事情があつてな」

「事情？」

少し暗い言い方をした鬼黄泉だが、そこに修行者たちが集まってくる。

「鬼黄泉様、この者が倒れていたという？」

臨の札を練習していた者が聞いてくる。

「樹というらしい。そうじゃ、せつかくだからここに在る樹と実戦訓練でもしたらどうじゃ？」

修行者たちからは「おおーっ」という歓声を上げたが、不思議かその眼は何やら殺気が立っている。

「ちよ、こつちはまだ病み上がりだというのに」

そんなことをお構いなしに、修行者の一人が挑んできた。

「助次郎と申します。使うのは兵！ お相手お願いします！」

助次郎となる者はそういつて札を構えた。

「そ、そういえば札、札あつたけ！？」

ポケットを探ると、すでに何枚かの札が入っていた。

「安心しろ、妾が寝ているときに仕込んでおいた」

な、なんて用意がいい。

「こちらから行きますー！」

助次郎は地面に兵を貼り付ける。

しかし、その行動は無意味だ。兵というのは木や物などに意志を与えるというもの……その行動は。

「な、なんだってええ!？」

土からもりもり上がってきたのは、まるで土できた竜のようなものだった。

「言ったであろうお主、一つの術を極めていると」

「そ、それでもこれは反則だ!」

土の竜はこちらに突っ込んでくる。

すぐに僕は札を構え投げた。

「臨!」

「ドスドスッ」

臨の札が土の竜に突き刺さるも、まったく痛さも感じていない。

それはそうだ、奴らはただの物。痛さなど微塵も感じない。

「無駄ですよ! 私の土竜に物理攻撃など効きはしません」

そのことを聞いたからには、残るやり方は一つ。

「陣!」

厄介な土の竜を縛られれば、こちらの勝利は確実のはず。

しかし

「ズシャー」

まるでセメントのようなものを土の竜は吐き出した。

札はその重みで落ち、僕にも降りかかろうとしていた。

「バシャーンッ」

土でできた洪水は勢い良く当たり、土の山ができています。

「こらあ! 助次郎、やりすぎじゃ!」

「すいません鬼黄泉様、しかしこの程度で死ぬなんてことになれば紅家にいるべき存在ではありませんよ」

鬼黄泉はすぐに駆け寄ろうとしたが。

「シユイン!」

一瞬、赤い閃光が走った。

「な、なんだ？」

助次郎や他の修行者たちも何が起きたのか分からない。その瞬間、土竜に異変が起きた。

「ズサササッ」

「ど、どうした土竜！？ なぜ崩れ落ちるんだ」

土竜は崩れていくと、助次郎はあることに気がついた。

「貼られた札が……斬られている？」

すかさず、助次郎は向きを変える。

「まさかこんなところで、これを使うとは思っても見なかった」  
僕の手には紅在月がある。

とっさの出来事だったが、なんとか間に合ったようだ。

「さて、まだやるか！？」

紅在月を構えると、「待つんじゃ！」と止める声が聞こえた。

「鬼黄泉？」

「お主……まさか本当に」

### 36話 謎の里（後書き）

大変お待たせしました。

いやあ、PCのスペックが足りないのか、なかなか書くこともできなくて。

まあ話も思いついてなかったというのもありますが、また再開していきます。

やはりロリ成分がほしかったので、鬼黄泉ちゃんが登場しました。

### 37話 樹と鬼黄泉

「その紅在月……」

鬼黄泉は僕が持っている紅在月を指さしている。

「ああ、なぜか僕の在は赤くて。でも、いつもは出せなかったんだけど……今日はたまたまかな」

そのやりとりの中で、周りの外野がザワザワとし始めた。

「あの状況で札を斬るとは、人間業じゃないぞ……」

「紅神社というのはああいう人間ばかりなのか……？」

助次郎は一瞬の出来事に戸惑ったが、我に返ると2枚の札を地に投げる。

「ま、まだ勝負は終わっていませんよ！」

土から出てきたのはまたもや土の竜、しかも2体だった。

「行け！ 土竜！」

2体の土の竜が猛攻を仕掛けようとしたが。

「もう無駄だ、札が貼ってある場所は頭部だって分かっているんだから」

僕は紅在月を振る。

「臨！」

紅い真空の刃は一辺に2本の竜を頭部に当てると崩れ去っていった。

「そんな……」

助次郎はその光景にただ膝を落としていた。

「さて、これで次に挑む奴はいるか」

外野に言うたザワザワとしたが、どうやら誰もいないようだ。ただ一人を除いては。

「妾じゃ」

幼い小さい手が上がる。

「き、鬼黄泉？」

「お主の力、こんなものではなからう。お主に決闘を申し込む」  
さすがに鬼と言っているも気が引ける。

「こんな小さい子など……。」

「シュツ」

一瞬、何か頭の横を切った。

「パラパラッ」

見てみると、髪が少し切れている。

「……!?!」

「その顔は見えなかったようじゃな……。どうやらまだ開眼はしておらぬと」

開眼？ それよりさっきは何をしたのだろうか。

「ただの札じゃ。まあ鬼の力の速さで投げたからもう、もう少し力を落とすべきか」

先ほどまでいた小さい女の子とは違う、とてつもないオーラが伝わってくる。

「鬼の姫っていうのは本当なのか……。」

「小童共！ 怪我したくなければ離れていることじゃ！」

鬼黄泉の注意を聞くと、ワラワラと修行者たちはその場を立ち去ろうとする。

「ほれ、呆然とするな！」

先ほどとは変わり見えるような札になったが。

「シュツシュツシュツ」

数が異常だった。

「ほれほれほれ！ 臨マシガンじゃ！」

「ちっ、列！」

紅在月を盾に列を発動するも、受けたときの衝撃は大きい。

「なんじゃつまらんのう」

そう言いながらも続けて臨の嵐は飛んでくる。

「くっ、このままだとジリ貧だな」

いくら紅在月で作る列でも、これだけの数は防ぎきれない。

「何か手は　　そういえば」

もしかしたら、助次郎がやっていた術……できるかもしれない。  
片手で紅在月を持ちながら、ポッケにある札を取り出す。

「成功してくれよ！　兵！」

地面に札を置く。

「……」

しかし、何も起きない。

「何をしようと思えば……無駄じゃ、助次郎がやっていた兵はその術を極めて十数年かかるもの、思いつきでできるほどの代物ではないのじゃ」

鬼黄泉の言う通り、やはりそう上手くは行かないようだ。

「そろそろじゃな」

鬼黄泉は何かを予期していた。

すると

「パキンッ」

紅在月の刀身にはヒビが入っている。

「まだ不完全な物じゃったか」

やばい　このままじゃ。

「パキパキパキッ」

紅在月のヒビはさらに大きくなってきている。

「折れるッ！」

そう思った瞬間、心の中であの忌々しい声が聞こえてきた。

『やれやれ、相変わらぬのピンチだな相棒。仕方ねえ、力貸してやるよ』

力が出なかった手にいきなり力が湧いてきた。

「……兵！」

僕は心あらずに術を唱えた。

土からモリモリと出てきている……のは竜ではなく、巨人？

「！？」

大きい土の巨人が僕の代わりに臨の攻撃を受けている。

「な、なんじゃこやつ！」

「ウオオオオオオオオ」

土の巨人は咆哮をすると、拳を構えた。

「くっ、列！」

鬼黄泉に巨大な拳が放たれる。

「なんてバカ力じゃ！」

巨人は何度も何度も拳を打つ。

それはいくらなんでもやりすぎというほどに。

「や、やめる！　いくらなんでもやりすぎだ！」

僕は止めに入るが。

「ボコンッ」

主人である僕に対しても跳ね除けられた。

「このままじゃ鬼黄泉が！」

拳からは土煙が上がり、鬼黄泉ちゃんの姿は見えなくなっていた。

『なんだ？　あいつを倒しかつたんだろう、これでいいじゃないか』  
鬼の心はそう語っているが、無理やりにその声に耳を傾けるのをやめた。

「この！　臨！」

術を解除するには札を斬るしか方法はない、僕は先ほどの竜と同じように頭部に臨の刃を放つ。

「バシユッ」

しかし、刃は土の巨人の頭部を貫通しただけで何ともない。

「そんな……札は頭部じゃないのか」

続けて刃を繰り出そうと紅在月を構えると。  
あるはずの紅在月は無くなっていた。

「くっ、列で防御をし過ぎていたか」

『ああ無駄無駄、あいつの言うことは僕しか聞かないぜ相棒。なんだったら代わるかい？』

心でアイツがそう語ってくる。

「そうしたら暴れるんだらうお前は」

『あはは、バレたか』

これを狙ってアイツは兵をしたというわけか、しかし今は鬼黄泉を助けないと。

残った札を取り出し、土の巨人に投げる。

「陣！」

拳に張り付くと、どうやら少し動きが止まったようだ。

「この間に鬼黄泉を！」

急いで駆けつけると、鬼黄泉はボロボロな姿になっていた。

「大丈夫か！」

「何、これくらい妾はなんともない。それよりあやつを倒さなければ里が危険じゃ」

といつても弱点である札の場所が分からない。

「何か……手はないか」

「あることはあるのじゃ」

鬼黄泉がそんな発言をした。

「といつても、これにはお主の協力が必要不可欠じゃがな」

「分かった、協力でもなんでもするから教えてくれ」

鬼黄泉はやれやれと手を上げて、僕の左腕に掴んだ。

「これをするのは100年ぐらい前になるからもう」

あるうことが左腕に掴んでいた鬼黄泉の形が変わっていく。

「な、なんだ!?!」

いつの間に左腕には肩の部分に角が生え、手の甲には何やら穴が開いている。

「これは……籠手？」

途端に頭の中に声が聞こえてきた。

『そうじゃ。これが妾の正体、鬼の籠手じゃ』

鬼の籠手……? こんな鬼がいるなど聞いたこともなかった。

『おや、なんだ? 相棒の身体にちっちゃえ鬼がいるぞ』

『お主こそなんじゃ! 妾は鬼の姫であるぞ!』

分かったから……お前ら頭の中で喧嘩するな。

『とりあえず、その左手をあやつに向けてる』

僕は言われた通りに左手を向けると。

『ほれ、臨マシガンじゃ!』

手の甲の穴から信じれないほどのお札が飛び出した。

「!？」

土の巨人に大量の臨が降り注がれていく。

「確かにこれなら数撃ち当たるな」

勝てるのも時間の問題だった。

しかし

「ピタッ」

手の甲の穴からは何も出てこなくなった。

『すまん、札切れじゃ』

「っ、つかえねええ!!」

なんとか土の巨人はボロボロだったものの、すぐに再生しはじめた。

「これはまた絶体絶命のピンチって奴か」

消耗しきった僕たちに勝てる手段など残されていない。

どうする。

『アイール?』

「お前は黙ってる……」

土の巨人は復活しはじめたあと、こちらに歩き出した。

「樹!」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「とりゃあああああ!」

清水警視は己が持つ在、月拳を着けながら土の巨人の頭上にいた。

「これでもくらいやがれ! 臨!」

ズドンと巨人を真上から叩き潰した。

「無事か! 樹!」

エプロンを着けたままの清水警視がニコリとこちらを見ながら立っている。

「し、清水警視!」

「おい、まさかのその籠手は!？」

早くも清水警視は鬼黄泉の存在に気付いたようだ。

その瞬間に、籠手は変形しはじめて元の幼い女の子の鬼黄泉に戻る。

「うむ、まさかここで妾の力が使えるとは思わなかったのじゃ」

「何が力だよ！ 途中札切れで役に立ってないじゃねえか！」

「うるさい！ 元はといえばお主が変な兵の術であいつを出したからじゃろ！」

そのことを聞いた清水警視は敏感に反応した。

「あいつを兵で作っただと？ 樹がか？」

「すみません……色々あつて」

清水警視はためいきをつく。

「詳しい話はお前の親父から聞いたほうが早いな。さて家に帰るぞ、飯が冷める」

「わーい、飯じゃあ」

「だがお前はダメだ」

二人が喧嘩をしている時に頭の中の鬼が話しかけてきた。

『まったくんだ厄介な奴が増えたな相棒』

「お前が一番厄介者だけだな」

『おっと、その話はなしだぜ』

こいつ、一体何を考えているのだろうか。

37話 樹と鬼黄泉（後書き）

短いです。

そういや、この間に学校はどうしているのかは次回で分かります。

### 38話 いつもの光景

「ハムツ ハフハフ、ハフツ!!」

「もつと上品に食べよ! このガキ!」

清水警視の家に戻った僕らは食事をしていた。

しかし、そこで汚い食い方をしている鬼黄泉に清水警視は怒っている。

だが先ほど戦闘でのことは何だったのだろうか、鬼が籠手になるなんて聞いたことがない。

また普段は鬼黄泉には角が生えていないのに、その時には肩に角が生えていた。

「ふう、相変わらず楽浪の味付けはしつこいのう」

それを全て平らげて言うセリフであろうか。

「なんじゃ? お主、ぜんぜん食べてないではないか」

そう言つて、自分のお皿にまで手を伸ばそうとしてきたので「ペシッ」と手で払いのけた。

「それより清水さん、何者なんですか? この鬼黄泉つて子」

清水警視はヒゲを触りながら、神妙な顔でこちらを向いている。

「こいつは先代の忘れ形見みたいなものだ。先代の紅家が鬼を討伐した際のこと、鬼の体は封じることができたものを魂は抜け出してしまった。その時、紅の者が着けていた籠手に取り憑いたと聞いている」

紅家にそんなことがあったのは初耳だ。

たぶん、親父でさえも知らないんじゃないだろうか。

「この体は仮の姿じゃ、鬼の力は無くなったので角を形成することは敵わなかったがのう」

「でも、それじゃあこいつは悪い鬼なんじゃ!」

討伐されるほどの鬼だ、もしかしたらまだ何か考えているのではないか。

「いや、それはない」

清水警視はあっさり言う。

「先代の頃の紅家は鬼を絶対悪だとはつきりさせていてな、鬼という鬼なら構わずに被う組織だった。まあ今の長になるまでだがな。それに見ての通り、こいつが悪さをしたと考えられないだろ？」

確かに……このチビがそう考えることはない。

「妾は不思議なのはお主じゃ。妾の籠手は誰でも付けられなぬ」

「どういうことだ？」

あの籠手は誰でもできるわけじゃない？

確かに鬼黄泉もまさかできるとは思っていなかったと聞こえた気がした。

「鬼黄泉の籠手は元々紅の忍の長が使っていた品だ。だが、亡くなった後に誰もが着けようと思ってても、鬼黄泉が変化することはなかった」

「妾は鬼の力は波があつてな、それが上手く混ざり合うものには使えないのじゃ」

それがたまたま僕に合ってしまった……ということか。

「さてここで問題だ。俺に見られたなら、まだいいが他の里の奴に見せるなよ？」

「ど、どうしてです？」

清水警視より先に鬼黄泉の方が口を開いた。

「簡単なことじゃ。里の誰もが着けられなかった者が、こんな若造しかも紅家の者に着けられたのじゃ、恨みを買う奴は多かるう」

ちよつと疑問に思うことがある、どうもこの里の人間は紅家をよく思っていない輩が多い。

そんな心を読んだかのように清水警視が答える。

「この里の人間は紅家とは遠縁の者たちが無理やり連れてこられ

た場所だ」

「無理やり!？」

「戦国時代、紅家は多くの人に知られていた。ことが起きたのはある大名が紅家を戦で戦わせるといふ命が下された。もちろん紅家はそれを拒否しようとしたが、そうともなれば反逆の罪で一族は全滅する、かといって戦で力は使いたくない。そう考えたのが遠縁に当たる者たちだった」

なるほど……遠縁でも紅の血を引くものであれば、九字護身法は使うことができる。

つまり……戦の身代わり？

「だが、いくら紅の血を引いても遠縁、靈力は弱い。そこで大体の部分は忍術を取り入れ、九字護身方の内の一つだけをマスターするようになつたわけだ」

だから清水さんも、ここの他の人も紅という名じゃない。そして、紅家を恨んでいるのか。

「まあ今はご存知の通り、今は戦国時代も終わり、ここの忍は暗部として活動している。紅の名にふさわしくない者を葬るためにな」

「楽浪、そろそろこやつに家族に声を聞かせた方がいいのではないか？」

「そうだな」

鬼黄泉に促され、清水警視は電話を取った。

「さて、お主の中の鬼は元気にしておるか？」

鬼黄泉が聞いてきたが、そういえばアイツと話していた気がする。おかげで頭の中が混乱するかと思つたが。

「ああ、あいつが一体何なのか、いつからいたのか分からないけどな」

急に出てきたり、いなかったりで騒がしい奴でもあるが。

「あー、俺だ。誰だお前はー？ えっ、岬結衣？ 知らんな、家の奴に代われ」

「なっ！？ なぜ結衣がそこにいる！？」

僕は清水警視の持つている受話器を取った。

「結衣！？」

「ちよつと樹！？ あんた今どこでなにしてんの！？ インフルエ  
ンザだからって心配してお見舞いに来て見ればいないじゃない！」

……インフルエンザ？ いつから僕がそんな世間を騒がす病原体に  
かかったのだろうか。

「と、とりあえず親父に代わってくれ」

「分かったわよ」

なんとか結衣をなだめ、親父に代わってくれた。

「樹かー？ 生きてるかー？」

「すいません、なんとか生きてました」

どうやら親父は心配してない様子だ。

「意外とそうでもなかったりするぞ、あいつは」

清水警視は少しニヤけながらポソッとつぶやく。

「今は暗部の里にいるんだっけか、話はだいたい清水から聞いてい  
る」

どうやら事前に連絡はしてくれていたようだ。

「それよりインフルエンザっていうのはどういうことですか？」

なぜ僕がインフルになっっているのだろうか。

「いやな、もし発見された場合に学校の単位がやばくなっている恐  
れがあるだろ？ いちおう、それを悪いと思ったのか、紫ババアが  
手を回してくれてなあ。お客の医者に診断書書いてもらったらしい」  
ちよつと待て……それってやっちゃいけないことなんじゃないか。

「とりあえずあと3日は学校に来なくてもいいみたいだから、もう  
少しのんびりしてろ」

のんびりって……。

「おっと、押すなよ」

電話先の向こうでなにやら揉めている声がする。

「た、樹殿！！！」

ああ、この声は燕か。

「樹殿！ ご無事でしたか、私燕はなんとご心配したことやら！」

「あのう……燕？ とりあえず結衣が見てるんだろう？」

燕は泣き崩れている様子だと思うが、その光景を恐らく結衣は見ているのだろう。

「た、樹どのう……」

「とりあえず結衣に代われ」

泣いている燕は置いて、この状況を理解できていない結衣のことが心配だった。

「ねえ樹？ 燕ちゃん、ただごとじゃないくらい泣いているけど？」

また何かしてんの？」

「ま、まあな。とりあえず僕は元気だから」

「そう……分かった。無事そうならそれでいいから私は帰るね」

おや……何か物分りがいいな。

「付き合っている彼女を泣かしちゃいけないわよ……おじさんに代わるね」

「ちよ、お前は勘違いしてる！」

また何かの誤解が生まれてしまったようだ。

「……親父」

「なんだ樹」

どうやら親父に受話器は渡っていたようだ。

「そついや姉さんがどうしたんだ？」

さつきから声も聞こえてこない。

「ああー、たぶんそろそろ着くはずだぞ」

そろそろ着くつて……。

「ピ」

受話器から何かの機械音が鳴った。

「おや……FAXか？」

清水警視が取りに行こうとすると。

「ウーーーーー」

見覚えのあるシルエットがFAXの中から出てきている。

「たーっーきー!?!」

やはり、こいつは!?!?

「心配したぞおおおお、このやるつうつう!?!?!」

「ね、ねえささああん!?!」

姉さんがFAXの中から飛び出して跳び蹴りをかましてきた。

「まったく……またうるさい輩が増えたのじゃ」

### 38話 いつもの光景（後書き）

またもや短い。

インフルになるとだいたいの学校は1週間の休みがもらえます。もちろん医者診断書がないとできませんが……。

### 39話 一寸先は闇

「樹いいいいいい!」

姉さんは思いつきり僕に抱きついてくる。

「というか苦しい……」

「姉さん! 分かったから首苦しいから……ゲフッ」

「綾香そろそろやめてやれ、樹の顔が青くなってるぞ」

清水警視に言われてやつと僕は解放された。

「どうやら姉さんは清水警視がここにいることに驚いた様子。」

「し、清水さん? なんでここにいるんですか?」

「まあ……ここは俺の実家だからな」

しかし……まさか姉さんがFAXで送られてくるとは。

この要領をすれば……まさかコピー機能もできるのか? いや試したくないけど。

「樹、なんか失礼なこと考えてない?」

「いやいや、そついや親父は」

まだ話中だったことを思い出し受話器を取るが。

「ツーツーツー」

切られていた。

「あの親父……」

「まあまあ安否の報告はちゃんとしたんだから。それより樹」

「ん?」と姉さんの方を向くと。

「このちつちやいの何!?!」

姉さんは鬼黄泉を抱えていた。

「やめるー放すのじゃー!」

ああ見つかったか……。

「とりあえず姉さん、放してやりなさい」

「いやだー! 何、このかわいいのー!?!」

とって、鬼黄泉を抱きしめている。

「く、くうー姉弟揃って面倒な奴らじゃー」

鬼黄泉はお札を取り出して、姉さんに貼った。

「陣！」

コキンツと姉さんは固まっている。

「……………くつ、予想外だわ」

不覚だったな姉さん……………。

「いちおう挨拶はしておこうかのう。妾は鬼の姫、鬼黄泉じゃ」

「お、鬼の姫？ 樹、この子は冗談で言っているのかしら？」

はじめは僕もそう思ったが……………確かに鬼ということは間違いなかった。

「まあ同じような反応はもう飽きたのじゃ。とりあえず久々に力使ったのでな、寝るのじゃ」

鬼黄泉はごろんとそこで寝転ぶ。

「たくつ、自分の寝床に戻れつつの」

そういつて清水警視は鬼黄泉を抱え、部屋から出ていった。

「とりあえず樹、お札剥がしてくれる？」

姉さんから陣の札を取ると、肩をコキコキ鳴らした。

「ふう、確かにあんな小さい子が九字護身法を使えるとはね」

「それで姉さん、誠治はどうなったんですか？」

記憶をたどる限り、鬼になっていた僕はすんでのところで誠治を仕留められなかった。

「分からないわ。それから何の騒ぎも起きてないし、向こうも様子見るところでしょう」

「様子見か……………」

僕が少し考えていると、姉さんがじつと見てくる。

「ど、どうしたの姉さん？」

「いや、本当に樹なんだって。一体どうやって助かったの？ まさか魔界から脱出したなんて」

姉さんが不思議に思う通り、僕自身さえも不思議でしようがない。しかし断片的ではあるが、覚えてはいた。

「誠治が落とした短刀、魔界を開く鍵だっけ。あれがたまたま手元に落ちていて……」

「なるほどね、でもその短刀はどこに行っちゃったのよ」「  
そういえば……どうしたのだろうか。」

確か……

「あいつが持っていた？」

あの黒い甲冑のような巨人。

間違いない、たぶんあいつの手元にあるのだろう。

「ちよつと魔界に短刀を持っていかれるような奴がいたってこと？」「  
確かに信じられない、魔界にいた生物といえばドラゴンだったり、  
現世ではモンスターと呼ばれているものたちだ。どう考えても、あ  
いつらに人のような意志などはなかった。」

「ガラッ」

障子を開ける音が聞こえ、そちらを見ると清水警視が立っていた。

「魔界にて意志がある者がいたとすると、一つの可能生しかない。」

悪魔だ」

悪魔……？

「俺も専門職じゃないから詳しくないが、知り合いに悪魔被いがい  
てな。この世に舞い降りた悪魔を追い返すところが魔界なんだ」  
つまり魔界というのは悪魔の本拠地でもあるわけか。」

「短刀のことは諦めるしかなさそうね……。専門外の悪魔に持って  
いかれたんじゃ、手も足もでないわ」

紅神社はあくまで幽霊や妖怪、鬼退治などだ。悪魔と戦った時もある  
たが何分勉強不足で、どれも下級の悪魔だった。相手が上級の悪  
魔となると、専門の悪魔被い師を呼ばない限り追い返すこともでき  
ない。

「くよくよ考えても仕方が無いな。もう日が暮れるし、明日お前の  
街まで送ってやるよ」

どうやら今日も泊り込みになってしまったようだ。

清水警視が早くも寝始めたあと、姉と僕は居間でしばらくボーツと  
していた。

「姉さん？」

「な、何？ 樹」

急に話しかけたから、少し姉さんは肩をすくめた。

「いや気のせいだったら忘れてほしいんだけど、僕がああいう状態  
になっても驚かないみたいだったから」

ああいう状態、つまり僕の中にいる鬼が出てきたのを、不思議と姉  
さんは初めから知っていた風だった。

「当たり前、私はあんたの姉よ。あんた以上に知ってるんだから」  
僕の鬼に気付いていた？

「それじゃあ、僕がなぜ鬼なったことも？」

「……」

姉さんは途端に静かになった。

そして息を呑んで伝える。

「分かった教える。でもこれを聞いたとしても、あんたは私の姉だ  
し家族よ」

その言葉を聞いて、嫌な予感が少しした。

「ガラッ」

突然、障子が開けられる。

「妾もその話、聞くのじゃ」

どうやら鬼黄泉が起きたようだ。

それを見て姉さんは僕にチラッと視線で伺ったが、僕はそれにコク  
りとうなづいた。

「分かったわ。それじゃあ鬼黄泉ちゃんは私のヒザ」

「ま、待て！ なぜ妾がそなたのヒザに！？」

「ええい！ つべこべ言わず座らぬかい！」

姉さんは無理やり鬼黄泉をひきずり、ヒザに座らせた。

「ぐっ……」

最初はじたばたしたが、なぜ鬼黄泉はおとなしくなっていた。

「い、いいから早く話すのじゃ!」

まさか気に入ったのだろうか。

「……」

姉さんからの話はあながち予想していたものと変わっていなかった。

僕が得体の知れないものだという事。

鬼の力は『紅鬼』のものだということ。

僕が紅家の人間じゃなかったということ。

僕が暴走した時、紅家の人間に討たれること。

「樹…… さつきもいったけど、私にあんたの姉よ」

「姉さん…… ありがとう。大丈夫だ」

姉さんは心配してくれたのだろうか、こんなことで落ち込むほどヤ  
ワじゃない。

「僕は僕自身さ、たとえ僕の中に別の奴がいたとしてもね。もし…

…その時が来たら姉さんが僕を討ってくれ」

「その時がきたら…… ね」

もしかして姉さんが成仏できない理由って　。

「ちよいとよいか、二人とも」

姉さんのヒザに座っていた鬼黄泉が聞いてきた。

「お主に憑いた時、お主の鬼と会っていたのは知っておろう?」

ああ確かに、アイツと喧嘩していたのを思い出した。

「どうやら奴は落ち着くと急に寝始めたのじゃ。もしかしたら戦闘  
に反応して起きるのかもしれない」

そういえばアイツが話しかけてきたのは、いつも戦闘時のことだっ  
た。

「そういうことはじゃ。戦闘をなるべく避ければ、鬼の力に侵食す

ることなかるう」

「でもそういうことだと仕事ができなくなる……」  
これ以上侵食すると前みたいに暴走する、でも誠治が生きている今では戦闘にならないだとありえない。

「そうかつ……」

鬼黄泉がポンスと手を叩き思いついたようだ。

「どうしたの？ 鬼黄泉ちゃん？」

「いやなにこつちのことじゃ。それより明日は早く出るのじゃらう、二人とも寝たほうがいい」

何かまたよからぬことを考えてそうだが……。

次の日の早朝

5時頃に僕と姉さんは清水警視にたたき起こされていた。

「てめえら、とつとと起きろ！ 今出ないと道が混むぞ！」

そっぴええ今日は平日だった。

急いで起きて支度を済まし外に出ると、里の全員が清水警視の家の前にいた。

「な、なにごと？」

僕も驚いたが、姉さんも驚いていた。

すると里の子供が駆け寄ってきた。

これは飛びついてくるのかと身構えたら、子供が飛びついたのは清水警視の方だった。

「清水さん、おみやげ買ってきてねえー」

ああなるほど、これは清水警視のお見送りだったわけだ。

「まったく久々に家に帰るとこれだから、帰りにくいっていうのに」と清水警視は言っているが、テレているようだ。

不意に僕の肩をツンツンと叩かれた。

振り向くと、確か見覚えのある奴が

「ええと……君はスケベ郎？」

「助次郎です！ それはわざと間違えたでしょう！？」

「そうだ助次郎だ。確か昨日、相手した。」

「次会ったときは負けませんよ」

「そつちも腕を上げておけよ」

「清水さーん、早く戻ってこいよー！」

山を降りているがてら、里からはまだお見送りの声がしていた。

「清水さんはみんなに好かれてるんですね」

姉さんが僕の肩に乗りながら言う。

「んなことはないさ、長が亡くなってから俺を長代わりになっているみたいなものだ」

それでも清水警視のことだからそれだけ人望が厚いのだろう。

「そつちええば樹、鬼黄泉ちゃん見なかった？」

「鬼黄泉？」

朝慌てていたものだから、あいさつする暇もなかったが見かけなかった気がする。

「またどうせあいつのことだ、山で遊んでいるのだろう」

清水警視が言うとおおり、どっかで遊んでいるのだろう。

「残念ねー、また来て遊びに行こうかしら」

「おいおい今回は特別だが、いつも来るのは関係者以外はダメだぞ？ いちおう暗部なんだから」

その通り、紅家の暗部なのだから紅家に知られてはいけないのだ。

「さてと……山も下りたな」

山を降りるとすぐそこには駐車場のような場所に出て、車が1台泊まってあった。

しかし不思議なことに後部座席の方の窓が黒い。

「ああそうだ、決して移動中は景色とか見ようとするんじゃないぞ？ 知られちゃならねえんだから」

なるほど……そこまで徹底しているのか。

車は運転席と後部座席の間に仕切りがあり別の空間になっていた。

「あんまりお前ら寝てないだろ、これから長いからしばらく寝とけ」  
後部座席に乗った僕らは清水警視に言われた。

「なんか誘拐される気分ね」

姉さんは少し不快に思っているらしい。

「なげえ……」

車に乗って何時間立ったのだろうか。

一眠りしてもまだ付いていない。

景色が見えない分暇でしようがない。

姉さんも携帯をさわっているが。

「さすがね……電波妨害があるのか圏外だわ」  
この徹底振りでは少しまいてしまった。

すると突然

「キキーツ」

急ブレーキがかかり、僕の身体は少し浮いた。

「し、清水さん!？」

あわてて声をかけると

「……」

返事がない。

「様子がおかしいわね」

確かに何も返事がないに車が急ブレーキとは。

僕は恐る恐る、車のドアを開ける。

「……暗闇？」

目の前は真っ暗闇だった。

しかし夜とかではない、冷たい空気がヒヤリと頬で感じた。

そして、水がポツンと落ちる音。

「これは……トンネル？」

暗闇のトンネルになぜか僕らはいたのだ。

「し、清水さんは!？」

車の運転席を見ると、そこに清水さんはいない。

「じゃあ今まで一体誰が運転を!？」

車にはキーも刺さっていないので車を動かすこともできない。

嫌な予感がした僕はとりあえずここを出なくてはならない気がした。

「樹、とりあえず歩いて外に出るしかないわね」

姉さんの言うとおり僕は車が向いている方に歩き出すことにした。

「……………」

歩いて数分が立つただろうか。

結構な距離を歩いたはずだが、まだ出口は見えない。

「何か見えるわよ樹」

目の前には黒い少し大きな物体がある。

僕は少し駆け足でそれを確かめようとすると

「これは……………」

信じられないことにそこにあつたのは、僕らが乗っていた車だった。

「……………そんなこれじゃ出られないってわけ」

そしてコツンと、足に当たった感触がある。

「な、なんだ?」

それをヒョイツと拾い上げてみると

人間の頭の骨……………しゃれこうべがそこにあつた。

「た、樹!？」

姉さんも慌てていると、周りのそこら中にしゃれこうべがあつた。

「これは……………また何かに巻き込まれたな」

39話 一寸先は闇（後書き）

お待たせしました。

39話です。

飲み会とか飲み会とかやっていたらこんな時期に……申し訳ない。

## 40話 ウロヴオロスの輪

暗闇に眼が慣れてきた僕らは少し駆け足で出口ないかと歩き回った。

「なんなの？ そこら中に人の骨があるわよ」

あたりを見ると、何年も立っているであろう人の骨がそこらにある。

「また戻ってきたか」

僕らはまた車の会った場所まで戻ってきていた。

「本当にこれはトンネルなのかしら……？」

姉さんは壁をくまなく探ると、水のようなものが流れていることに気がついた。

「水……？」

しかし、姉さんは手で触ろうとしたが即座に何か違和感を感じた。

その液体は壁を伝って地面に落ちていた骨に当たるとジユウという焼けた音が聞こえたのだ。

「……樹！ 壁に触れちゃダメよ！」

突然、姉さんは叫びだす。

「ど、どうしたの姉さん？」

「これは……胃液よ」

胃液！？

「なるほどトンネルなんかじゃなくて、これは何かの生物ってわけね」

つまり僕らは車もろとも飲み込まれたってことか……。

「樹、札はある？」

そういえば昨日使っていたのが何枚か残っていた気がする。

「とりあえず斬ってみるか、臨！」

僕は壁を斬ろうとするが

「グニヤ」

臨の札は肉を斬ったようにめりこむだけで何も無い。

それどころか……

「ジュワッ」

傷ついた所から胃液が飛び出してきた。

「ウワッ!?!」

胃液は服の袖に飛んで、袖部分を溶かしてしまった。

「これじゃ斬ろうとするとするだけ危険ってことか……」

少し考えて車を見た。

「……そういや清水警視はどこいったんだ」

その頃、清水警視は

「……で、いきなり現れてなんなんだお前は」

清水警視はフードを着た者と対峙していた。

清水警視は樹たちを乗せた車でトンネルに差し掛かる途中、違和感に気付き車を降りたところ、樹たちの乗せた車だけが飲み込まれてしまったのだった。

「それになんなんだ、このトンネルに擬態した後丸くなっている物体は？」

清水警視の後ろには円になっている緑色の物体が置かれている。

「……」

しばらくそれを見ていたフードを着た者は地面にチョークで何かを書き始めた。

「まったく、なにやらおかしな奴が出たもんだな。それよりこいつをどうにかしないと　臨！」

清水警視は臨の札で緑色の物体を斬ってみた。

「カキンッ」

「なっ!?!」

まるで鉄の塊のような鈍い音が鳴り響いた。

「それなら！　在！」

ならばと札を多く出して月拳を発動させようとしますが

「ぬっ!?!　足が動かん！」

清水警視は足元を見ると、ゼリー状のものが足にまとわりついていた。

「な、なんじゃこりゃ!」

なんとか臨んでそのゼリー状のものを払おうとしても……

「こいつら斬っても復活しやがる!？」

しつこいぐらいに足元にまとわりつく。

「くっ、こいつはお前の仕業だつてわけかい!？」

清水警視はフードを着た者を見る。

「……そう、それは私が召喚したスライム」

「なっ?」

フードを着た者はその声付きからまだ若い女のようなだった。

「ついでにこの後ろのデカブツはなんなんだ?」

清水警視は親指で後ろに指を差す。

「それはウロヴオロス……。飲み込まれたら最後、出口は存在しない」

「出口はねえだと?」

スライム、ウロヴオロス、清水警視はその言葉を聞いたことがある。

「伝説の化け物って奴か……。さっきの地面に描いてたのは召喚の術式だったというわけか」

「……」

フードを着た者はまだだんまり黙った。

「愛想が無い奴だな。とりあえずお嬢さん、この化け物たちを戻してやってくれないかな」

「それはだめ……。誠治様のメイレイだから」

「誠治だと……!」

清水警視の顔つきが変わった。

「なら本気でやらないといけないようだな。お嬢さんだからって俺は手加減せんぞ」

「……」

清水警視は大量の札を取り出し、それを宙に投げる。

「在！」

右腕を上げると、札は舞いながら右腕に引っ付いていき籠手の形になっっていく。

「月拳！」

しかし、それを見たフードを着た者は平然としている。

「誠治様が言うにはあなたは肉弾戦しかできない。だからスライムで足止めをした」

その言葉を聞いて、清水警視はニヤリとした。

「そりゃ誠治は知らないだけだ。俺はちゃんと遠距離戦もできるっ  
てな」

清水警視は右腕を構えた。

「……！？ スライム！」

フードを着た者は何かに気づき、清水警視の足元からスライムを離させ、目の前に壁として立った。

「いい判断だ……皆！」

右腕を前に出すと、弾丸のような空気の弾が直線に放たれた。

「バシューンッ」

壁となったスライムたちは空気の弾を受け止めたものの飛び散ってしまった。

そして、先ほどの空気の弾による風圧でフードがはがれた。

「……！」

予想外のこと少し慌てたのだろうか、少々焦っている。

「やはり子供か。しかも……金髪？」

フードを着た者はあるうことが金髪の外国人少女であった。

「……誠治め、まさか変な趣味に目覚めたか？」

「ユルサナイ、誠治様の悪口は認めない」

その言葉に怒ったのか、スライムを再召喚した。

「ちっ、ここは早く片を付けて、後ろのデカブツをなんとかしたいんだが」

その頃、ウロヴオロスの中では。

「ギヤアアアア、こっちも胃液出てきた!」

「樹、もうちょっと端に寄りなさいよ! 私落ちちゃうでしょ!」  
ウロヴオロスの中では、いきなり胃液が溢れだして、波のように押し寄せてきた。

そこで車の上に退避したのだが、だんだんと胃液は上昇してくる。

「てか姉さんは死んでるし、浮けるからいいじゃないか!」

「あつ、そういえばそうね」

そんなことをしているとタイヤに付いた胃液はジュウと音を立て、ゴムが焼けるような臭いが広まる。

「うう臭いー、樹ーなんとかしなさいよ」

「なんとかって言われても……」

先ほど臨で傷をつけた箇所を見る

「いちおう傷は付くけど、分厚いわけか……」

胃液がドボドボと流れているが、それに混じって血のようなものが出ていることに気が付いた。

「在でやれるか……?」

しかし、札の枚数はかなり少ない。これでやったとしても一発程度、試しにすることはできない。

「何か、何か確実性があれば」

こういう時に役に立つ自らの中の鬼も出てこない。

胃液はどんどんとまた上昇していき、ついには車のトランクにまで達してしまった。

「樹、このままじゃ……」

「くっ、一か八かやるしかないのか」

しかし、どこからともなく聞こえたことのある声が響く。

「アッ、アチイイイイイのじゃあああ!」

トランクから飛び出してきたのは、まさかの鬼黄泉であった。

「お、鬼黄泉!?!」

「鬼黄泉ちゃん！」

どうやらなぜかトランクにいて、胃液に漬かってしまったらしい。

「まったくなんじゃこやつは……こつそり荷台で寝ていたところを」  
だが、この際ここに理由はどうでもよかった。

「鬼黄泉、すまないがあの時力を貸してくれ」

あの手を貸せば、ここで脱出できる。

「……残念じゃが、妾には手持ちの札はないぞ？」

なん……だと……？

「ああ、まあ一発分じゃ。一発分、お主が在をすればいい」

札が無いのに大丈夫なのだろうか、だがその賭けに乗るしか、この状況を打破することはできない。

「ああ、頼む！」

「承知じゃ！」

鬼黄泉はうなづくと同時に僕の左腕にピタツと張り付いた。

「樹、一体何をしてるの？」

そういえば姉さんは知らなかったのだった。

鬼黄泉はただの鬼ではない能力があることを。

「鬼黄泉！ ガントレットモードなのじゃ！」

そう叫ぶと同時に鬼黄泉の体は変化していき、肩部分に角が生えた籠手ができた。

「えっ、なにそれ!?!」

姉さんは驚いて興味深げにしているが、そんな暇はない。

「さあ在をするのじゃ！」

頭の中でそう響くと同時に札を構える。

「在！」

右手で放った札たちは形を作っていく、紅い刀となった。

「紅在月！」

「それを両手で持つのじゃ！」

鬼黄泉に言われるがままに、紅在月を両手で持つと不思議なことが起こった。

どんどんと紅在月が大きくなっていったのだ。

「くっ、重い……」

ついには刃渡りが2mもあるであろう巨大な刀となった。

「妾の内ではこれを斬鬼刀せんきとうと呼ぶのじゃが……やはり紅いからのう、少し名を変え紅鬼斬こうきざんとでも呼べばいいのじゃ」

僕は両手で持った大刀「紅鬼斬」を持ち、上段に構えた。

「頼む、やってくれよ！ 臨！」

紅鬼斬を下に振り下ろし、衝撃波を臨に変えた。

「まったく拉致があかねえな」

清水警視はまだフードを来ている少女が操るスライムに苦戦していた。

「皆！」

少女に向けて、空気の弾丸を放つも即座に少女を守るようにしてスライムが盾となり飛び散る。

そして、また復活していった。

「何度やっても無駄……それにそろそろウロヴォロスのご飯が終わる頃」

少女は無表情で淡々と言った。

「くっ、早く助けねえと……」

チラッと清水警視は後ろのウロヴォロスを見ると  少し割れ目ができるのに気がついた。

その割れ目はどんどんと大きくなっていく。

「……まさか！」

すぐに清水警視はそこから離れた。

「逃げる……？」

その様子を見た少女だが、すぐに違うと気がついた。

「そんな……」

「バシャアアアア！」

ウロヴオロスは真つ二つに割れ、胃液が洪水のように外へと出て行く。

僕達はどうにかして外へと出ることができた。

「樹！ 無事か！」

清水警視が外にいることが分かった。

そして、もう一人、見知らぬ人物……いや少女がいる。

またその子のすぐ近くの足元にはドロドロとした何かがあった。

「まさかウロヴオロスの肉厚を斬るとは予想外……それにスライムも胃液で溶けてしまったし」

「お前の負けだ、お嬢さん」

清水警視は構えるのをやめた。

「確かにこのままじゃ分が悪い……でも私は単なる足止めにすぎない」

「足止めだと!？」

『何か嫌な予感するのじゃ』

鬼黄泉が頭の中でボソツと言った。

「今頃、あなたの里は無くなっているかも」

「な、なに！」

清水警視は近寄ろうとしたが、すでに少女の足元には結界が張ってあった。

「清水楽浪、あなたにはこの借りを返さなければならぬ」

そう言い残して、少女は幻影のように消えていった。

「樹！」

清水警視は僕を呼ぶ。

「すぐに里へ戻るぞ！」

僕たちは里へと戻ることを決めた。

#### 40話 ウロヴオロスの輪（後書き）

お待たせしました40話です。

ウロヴオロスというのは尻尾に噛み付いた大蛇です。それで終わりが無いという意味をしたらしいですよ。

## 41話 燃えさかる里

僕たちは里へ車で向かっている。

「しかし、いいんですか？ 勝手に警察署からパトカー持ち出して清水さんの車は僕たちが閉じ込められていた物体に溶かされてしまったので里までの足がなかった。」

そこで清水警視は近くの警察署まで走って行き、パトカーに乗りながらやってきたのだ。

「これでも警視だ。警察手帳チラつかされたら、すんなり渡してくれたぞ」

隣の運転席の清水警視が自慢した。

本当にこの人は警視なのだろうか……確かにかなり上の階級なんだが。

「そんなことより里が心配よ。あの女の子が言っていた風には何か悪い予感するわ」

後ろの席で姉さんが前に出てくる。

「……………」

しかし、もう一人の人物がなぜだか黙っている。

「どうしたの、鬼黄泉ちゃん？」

姉が心配そうに話しかけると

「き、気持ち悪い……………のじゃ」

……………おい、やめろばか。

「そついや、こいつ車酔いするんだった！」

なぜここまで付いてきたんだ、こいつは。

「ふう……………生き返ったのじゃ」

すぐに道端で止まり、鬼黄泉の危機は救われた。

「しかし、なんで車のトランクにいたんだ」

確かに里で鬼黄泉を見かけることはなかった。  
つまり、僕たちに付いて行こうとしたわけだ。

「お主はこのまま鬼の力を使っていけば、鬼になると言ったじゃろう？」

「それと何が関係あるんだ」

「何、簡単なことじゃ。お主の鬼の力を使わず、妾の力を使えば鬼になることはないじゃろう」

そういえばあいつの声が聞こえなくなった気がする。

「力を使えば使うほど、鬼はお主の心を奪っていく。まあちょっとした救済処置じゃ」

こいつ……僕の為に付いてきたのか？

「鬼黄泉ちゃん……やさしいわぁ!!」

それを聞いていた姉さんが鬼黄泉を抱きしめた。

「べ、別に勘違いするでない。これは紅鬼を復活させない為じゃうわ……ツンデレ。」

「話は終わりでいいか？ さつさと里に戻るぞ」

車で待機していた清水警視が少しイラついている。

無理もない、自分の故郷が危機なのだ。

「ちっ、少し急ぐぞ」

そういうと、パトカーのサイレンを点灯した。

「お前ら、ちゃんと掴まってるよ！」

清水警視はアクセルを踏み、エンジンは唸りを上げる。

「し、清水警視！ 速度制限は!？」

「うるせえ！ その為のサイレンだ!」

めっちゃくちゃだ、この人は。

猛スピードで僕たちは里がある山の前に付くことができた。

「……樹、何か煙臭くない？」

姉さんに言われると、確かに何か焦げる臭いがする。

そして、よく見ると煙のようなモヤがあるではないか。

「くっ、樹！ 俺は先に行く！」

「妾もじゃ！」

清水警視と鬼黄泉は先に走って行った。

「何か嫌な予感するわね……樹、携帯貸しなさい」

姉さんに携帯渡すと、どこかに連絡をし始めた。

「……私です。ええ、里が危ないみたいなので……」

妙に姉さんの口調が敬語だ。

あんなにも敬語なのは親父ではない。

「……ふう、携帯返すわ」

パタンツと携帯を閉じ、僕に渡すと里へと向かおうとした。

「姉さん、一体どこに電話を？」

姉さんは見向きもせず「ちよっとした知り合いにね」と答える。

「そんなことより急ぎましょう。二人が心配だわ」

「う、うん！」

確かに先に行った二人や里のほうが心配だった。

僕たちは里へと向かうべく、山の中に入った。

「……だんだん煙が濃くなっている」

奥行くほど、モクモクと黒い煙が見え、コゲ臭さが漂っている。

「これは間違いなく火事ね。こんな場所で火事になったら大変だわ」

僕たちは急ぎ里へと向かう。

「あの坂を上れば！」

里が見えるはずだった……予想していた通りの光景だった。

「燃えている……」

木や家も……そして人が逃げ回っていた。

「これは一体、どこから火元が出ているんだ！」

僕は原因を探ろうと、周囲を調べようとすると。

上から何かが降ってくる気配がした。

「樹、あぶない！」

姉さんが僕を捕まえ、『ドスーンッ』と上から落ちてきたものを避ける。

「こ、これは？」

見ると、そこには少し大きい石の塊のようだが……燃えている。

「これは……まさか天火テンカ！？」

姉さんが見た瞬間にそう叫んだ。

天火？ 親父から聞いたような。

「なんか久々だな。天火テンカというのは鬼火の一種だ。鬼火っていうのはつまり人魂みたいなもの、普通では害をなすことはないんだが、こいつは違う。まるで隕石のように降ってきて火事を起こしたり、病気を運んだりすると言われている」

「しかし、なんでそんな物が？」

疑問に思っていると、姉さんはすぐに答えがわかっていたようだ。

「こんなことをする奴は一人しかいないでしょ」

……紅誠治！

「でも、大丈夫。こいつならちゃんとした対処法があるわ」

「本当か、姉さん！」

めずらしい……それならすぐにその対処法とやらを。

「あ、樹？ 鉦鼓しやうこなんてもってない？」

鉦鼓……？

「ああ、雅楽がしやくで使われる金属の打楽器よ。ほら、神社で見たでしょ？」

ああ、確かに家の倉庫にそのような楽器が……てっ。

「あんな大きいもの、こんなときに持つてるわけないだろ！？」

「何よ、使えないわね」

めちゃくちゃだ、この人は。

『ゴロゴロゴロ』

「ん？」

そこで何か転がるような音が聞こえてきた。

「姉さん、腹でも減った？」

「違うわよ……樹、逃げるわよ！」

「えっ？」

姉さんが猛ダッシュで逃げたので、後ろを振り返ると

「な、なんじゃあああ！！？」

先ほどの石の塊が大群となって、こちらに転がりこんで来た。

「な、なにあれ！？」

「奴らは人魂と同じ、つまり意思があるってことよ！」

つまりあれは故意にこちらに転がってきているというわけだ。

「樹、とりあえず二手に分かれましょう！」

「分かった！」

姉さんの提案を受け、一斉に別々の方向へと分かれた。  
が

「な、なんで僕だけえええ！！！？」

姉さんの方には行かず、全ての石が自分の方へとやってきたのだ。

「なるほど……私は死んでるからか」

一人で納得しているかに見えた姉さんはそのまま遠ざかっていく。

「くっ、このままじゃ」

いつかは行き止まりにぶつかってアウトだ。

札を取り出し、後ろに向かって投げる。

「臨！」

臨の札が石に当たったと思った次の瞬間

『ボッ』

燃えて灰になり消えていった……。

「おいおい、打開策がないじゃないか」

少しだが、息が切れてきた。

このままでは体力のほうもたない。

「何か……ウワッ!？」

考えていると、足元には少し石が出ているところにつまづいてしまった。

「イテテッ」

なんとか立ち上がるうとするも、後ろから『ゴロゴロ』と燃えた石が急接近してくることが分かる。

「間に合わなっ

」

『スシャーッッ』

転んだすぐ後ろで、何か大きな物音と地響きがした。

「あれは……!」

前に戦った土の竜がそこにいた。

「これは、あの時の!」

そして、横に『ズサッ』と人影が現れた。

「まったく、とんだドジですね」

「お、お前は

」

「スケコマシ!」

「違います! 助次郎です! またスケしか合っていないじゃないですか!」

そうだ、助次郎だ。

「里の人を非難させるのに時間がかかりました。あなたは昨日の訓練場の方に」

「待て、一体なにがあつたんだ!？」

助次郎を見ると、少し怪我をしていることに気付く。

「里をまとめる九字衆くじしゅうの一部が裏切りました……」

「九字衆!？」

「この里の忍は一つの護身法を極めると言いました。その技を最高まで極めた者たち、それが九字衆です」

この助次郎が持つ術だけでもすごいというのに、それ以上の奴らが

いるということなのだろうか。

「楽浪様と鬼黄泉様は先に向かっています。ここは私が食い止めますから」

「分かった!」

急いで、昨日の場所行つた訓練場へと向かう。

「まさか……お前らが裏切るとわな」

清水楽浪と鬼黄泉の前には3人の人影があつた。

「臨の霧雨、者の伊吹、鬪の斎蔵」

鬼黄泉が一人ひとりの名を呼ぶ。

「お許してください、楽浪様。私たちがこうしなければ紅の呪縛から解くことができないのです」

その中で唯一の女性、者の伊吹が楽浪に告げた。

「てめえら、どこの誰にそそのかされやがったんだ?」

「紅の誠治だ、楽浪よ」

清水楽浪よりも少し老いた人物、鬪の斎蔵が答えた。

「霧雨! お主も裏切るのか!？」

鬼黄泉が長髪の男、臨の霧雨に声をかける。

「……」

しかし、その問いに霧雨は無言のままだった。

「誠治様は私たちにこうおっしゃいました。今こそ、先祖代々の復讐をするとき……。そして、まずはこの忌まわしき紅家が作つた里を焼くこと」

「伊吹め、まさか本当にそんな話を乗つたのか?」

「確かに私も少しためらいました。なにせ自分の故郷を焼くのですから……しかし、楽浪様。あなたはここ最近、誰をかくまっていますか?」

清水楽浪は頭を抑えて「しまったなあ」とつぶやいた。

「楽浪、ワシらは紅家を恨んでいると言つたであろう? あの事件

があつた時からな」

「じじい、あれはもう事が済んだはずだろう」

「楽浪様、できればあなたも私たちと共に戦つてほしかったのですが」

「やるわけないだろ？」

「ですよね……仕方ない。行きなさい霧雨」

霧雨は即座に楽浪のところに来て、臨の札を構えた。

「相変わらず、すばっしこい奴だな！」

清水楽浪は霧雨が切りつけようとしたところで、臨の札をグシャツと押しつぶした。

「……!？」

それに霧雨は驚き、少し離れた。

「まったく、お主は無茶をするな」

鬼黄泉が心配そうに清水楽浪の手を見た。

「それほどでもない」

霧雨はまた臨の札を構え、二人に投げつける。

「とと、列！」

列の札を前に出して、臨はガキンツと跳ね除けた。

「甘いぞ！」

『バキンツ』と列の札に拳が入れられ、あろうことか列の防御壁は割られた。

「じじい！」

拳の犯人は鬨の斎蔵であつた。

「まったく、弟子を鍛えなおすのには丁度良い！」

すぐに二発目の拳が直接、清水楽浪にへと向けられる。

「しばしの間、眠っておれ！」

「臨！」

斎蔵の腕には臨の札が突き刺さっていた。

「間一髪でしたね、清水警視」  
僕はなんとか清水警視の危機に間に合ったようだった。

41話 燃えさかる里（後書き）

お待たせしました。久々の妖怪ができました……。

## 42話 開眼

「ほう、お前が紅の小僧か」

斎蔵は腕に突き刺さった臨の札を軽く抜き取り、地面に投げ捨てた。

「清水警視！ これは一体？」

清水警視に呼びかけると、片手を出して僕に「待て」というように手を出した。

「手を出すな樹。これはうちの里のバカたちが起こしたことだ。この里の責任として俺が片付ける」

「そ、そんな」

里の責任？ そういえば、見知らぬ3人がそこにいる。すると、その一人だった女性がこちらにおじぎをした。

「お初目にかかるわ紅。私は者を極めた九字衆の一人、伊吹」

伊吹といわれる女性の挨拶が終わると、先ほど腕に臨を突き刺した男は腕組をし、こちらをジロリと見た。

「ワシは鬪の斎蔵」

だが、あともう一人の男は黙っている。

と、いつの間にか僕の足元にクイクイツとズボンを引っ張る感触があった。

「あやつは臨の霧雨じゃ。気をつけろ、あやつ腕は妾が一番知っておる」

鬼黄泉がそうやって僕に説明をした。

「鬼黄泉、これは一体どういうことだ。九字衆ってこの里の者なんだろ？」

「それはじゃな……」

「それは私が説明をしましょう、紅」

先ほど女性、伊吹が話に乗り出してきた。

「この里ができた理由はご存知だとは思いますが、紅家の遠縁に当

たるものが無理やりと忍をやらされたのが事の始まりでした。確かに私たちより前の先祖たちは紅家に対して、恨みを持つものが多くいたことは事実です。しかし、私たちの世代にはそんなものでそれを恨むものはいませんでした……あのことが起きるまでは」

「あのこと？」

僕はその時なにが起きたのか分からなかった。実際、この里のことでも噂程度でしか知らなかったのだから。

「そうでしょうね……あなたはまだ生まれていない時のことです。

この里の一人にそのことをまだ恨み持つものがいたのです……。その名は清水剛助しみずこうすけ」

「……清水？ まさか！？」

ふと清水警視を見ると唇をかみ締めていた。

そして、僕に対して口を開く。

「そうだ、清水剛助は俺の親父だ」

「そんな……」

清水警視は紅家に相当の恨みを持っていたということになるのか？

「いえ、あなたの考えているようなことはありませんよ紅。むしろ、それとは逆です。なぜなら」

『清水剛助を殺したのはそこにいる清水楽浪なのですから』

「えっ……」

と、さっきまでそこにいた斎蔵はいつの間にか伊吹のところに戻っている。

「細かい話はよせ伊吹。問題はそこじゃない」

「そうでしたね。紅、一つ問題を出しましょう」

問題……？

「この里にいたのは相当の年寄りたちと……大勢の子供たちを目に

したはずです」

鬼黄泉が突然、「ハッ」とその質問を意図が分かり、「よせ！」と慌てて止めようとした。

「……紅家は殺したんですよ。剛肋に少しでも加担した、あの子の親たちを……」

「ウソ……だろ？ そうだろ鬼黄泉」

鬼黄泉を見るも顔がうつむいている。

「事実だ樹。俺は親父を殺し、紅家は里にいる子供たち……そして、霧雨と伊吹の親をも殺した」

清水警視が代わりに答えた。

「だがな、なおさらにここにいる知らなかった樹は関係がない。お前らに恨みあるのはこの俺だけだ」

「そもいけません。そこで前に訪れた誠治様に言われたのです。

紅樹を捕らえれば 紅家を滅亡させるのに手を貸すと」

誠治……やはりここにも手を出していたか。

「清水警視、どうやらこれは僕の問題でもあるようだ」

「樹!？」

僕は札を構える。

「誠治は親父の弟。つまり僕の叔父だ。そして紅家の話が出てきたら、将来の神主の僕にも責任が回ってくるだろ？」

「こちらは好都合ですよ紅。逃げるとなれば厄介ですから……行きなさい霧雨」

伊吹はそう霧雨に命ずると、札を構えてこちらに走ってきた。

「樹、逃げるのじゃ！ お主でもあやつの方が上手じゃ!」

鬼黄泉がそう言うが、この距離からは間に合わない。

「……臨」

霧雨は札を構え斬りつけようとしてくる。

「臨!」

同じく臨で、その攻撃を受け止める。

「ジリジリ……」と刃物のようなものが擦れる音が聞こえる。

「く、霧雨！」

鬼黄泉は霧雨に駆け寄ろうとするが。

「あなたの相手はこちらですよ。鬼黄泉様」

あるうことが横に、向こうにいるはずの伊吹がいた。

そして、躊躇無く鬼黄泉に蹴りを入れる。

「ギャーッ」

「鬼黄泉!!!」

蹴りを入れられた鬼黄泉は身体ごと飛んでいった。

しかし、そんなはずは確かに向こうには伊吹がもう一人……。

「ボンッ」

先ほどまで横にいた伊吹が突然煙のように消える。

「気をつける樹。伊吹の者は自らの意思で動かせるほどだ！」

清水警視が呼びかける通り者は本来、自分の影を実体化するようなもの。

なので、自由の動かせるなんて話は聞いたことがない。

「……考え事は終わりか」

いきなり臨同士、受け止めていた霧雨が喋った。

「お前、普通に喋るのかよ」

霧雨は数歩後ろに下がり、懐から札を何枚か抜き出し一斉に投げた。

「なっ!?!」

あるうことが、その札たちは霧雨の周りに浮かんでいる。

「臨」

バツと手を前に出し、あたかも行けというように札に命令すると一

斉にその札はこちら目掛けて飛んできた。

「くっ、列！」

僕はすかさず札を目の前に広げ、列で防ぐ。

「……皆」

しかし、霧雨が途中で術を唱えた。

「チツ」

瞬間、僕に飛んできたはず臨の札が向きを変え真上から飛んでくる。すかさず真上に列の壁を向けるが

「樹！ 前だ！」

清水警視の声で前を見ると、すでに霧雨は札を構えていた。

「臨……」

シュツと軽く投げられた臨は僕の腹部に命中した。

「ウツ！」

しかし、なんとか耐え、真上から降ってくる臨の雨を列で耐えようとした。

「ウアアアアアアア！」

腹部に傷を負っているのがあるが、臨の雨はまるで土砂降りの雨のように重い。

「樹！」

それを見て、助けようとした清水警視が駆け寄ろうとするが

「敵は一人じゃないぞ、バカ弟子が」

斎蔵が清水警視の目の前に立つ。

「闘！」

斎蔵の拳が清水警視の頭に叩きつける。

「又ワツ」

地面にめくれ上がるほどに、清水警視は突っ伏した。

臨が刺された場所から血がポトポト出している。

このままでは出血多量で死ぬが、この手でそれを抑えれば頭上からの臨でミンチができれば。

鬼黄泉は未だに倒れて気絶しているようで、清水警視も地面に寝たままピクリとも動かない。

そして、姉さんもどこかに行ってしまったままで、こここの場所さえも分からないだろう。

また自分の中の鬼さえも出てこない。

『絶対絶命』

何度も体験した中、これほど脳裏でその四文字が過ぎることにはなかった。

「霧雨、そろそろ終わりにしてやりなさい」

伊吹がそういうと、霧雨は手に札を持った。

「……次は心臓を狙う」

ボソリと霧雨は怖いことを言い、札を構える。

『チカラガホシイカ？』

突然、ドスの聞いた声が聞こえた。

それは今までの鬼の声ではない。

もっと邪悪さを秘めた何かだ。

「ああ……なんだっていい貸してくれ」

そう答えると、突然目頭が鉄で焼かれたように熱くなった。

「ぐ、グアアアアアア！」

目を開け……目の前を見る。

かろうじて人や建物などは判別できるが　問題は全て赤色だった。

僕の頬に生暖かい雫が目から出た。

しかし、地面に落ちたのは涙ではない。

「血……！？」

「錯乱状態で血の涙でも流した……？　まあいい、霧雨やりなさい

！」

伊吹が再度、霧雨に命ずる。

「……臨！」

霧雨が投げた臨が向かってきた。

それを呆然と見ていると

「！？」

それはまるでテレビのスロー再生のように向かってくるのではないか。そして、上を見る

上にあつた無数の臨の雨もゆっくりと、スローモーションだ。

『これなら……!』

僕は列の壁を解く。

「……気でも狂ったか」

霧雨はまたボソつとしゃべるが、そうではない。

僕は無数の臨の札を……素手で取り始めた。

「なっ!?!」

札は枚数を重ねていき、手の平では収まらないほどの束になっていく。

そして、臨の雨の札を全て取り、最後に投げられた臨を束でキャッチした。

「……化け物か」

敵勢3人は驚きが隠せないようだ。

「伊吹! こいつは厄介だ、3人で力合わせな難しい!」

斎蔵が伊吹に呼びかけるが、伊吹はそれを無視して札を取り出す。

「者!」

伊吹が者を唱えると、伊吹の影が出てきた。

そして、伊吹の影が刀を持って僕に迫ってくる。

しかし、それは先ほどと同じことだ。またもや、その影がスロー再生で迫るだけである。

「無駄だ!」

影の首根っこを押さえ、地面に倒す。

「私の影が……」

『コロセコロセ』

またあの声が脳内で響く。

「クッ」

頭を押さえ、正気を保とうとするが、鈍器で叩かれたような痛みがする。

そこにまた霧雨が札を持って向かってこようとした。

『コロセ!』

すかさず先ほど取った札の束を霧雨に押し付ける。

「列!」

霧雨は壁にぶつかったように吹っ飛んだ。

「伊吹! ここは一旦退くぞ!」

気を失った霧雨を斎蔵が抱え、伊吹に呼びかけるが。

「ならば誠治様からいただいた、この呪符で」

伊吹はまた斎蔵を無視して、呪符を取り出した。

「あの呪符は!」

間違いない、誠治が使っていた妖怪を封じ込めている呪符だ。

呪符が放たれると同時に暗雲が広がっていった。

そして、突然落雷が目の前に落ちたではないか。

「ウワツ!?!」

その音と光に驚いて、尻餅をついた。落雷があった場所を確認すると、シユウと地面が焼けたところになにやら物体がいる。

「犬……?」

にしては異様にデカイ。

「伊吹、また余計なもんを呼びやがって! ワシは逃げるぞ!」

斎蔵は霧雨を連れて、どこかへと逃げてしまった。

「な、なんだこいつは?」

いや、何か……見たことがある。

確か、祖父の本で……。

「気をつけることですね紅。いくらあなたでも、こいつのスピードには追いつけませんよ」

追いつけない? いや、だが今の状態ならスローモーションのように

すると、突然バツと物体が動き出した。

「シュッ」

速い!?

瞬間、数センチの所にバーンと落雷が叩きつけられた。  
この技、そしてスピードは間違いない……。

「こいつは……ライオンユウ雷獣か!？」

## 42話 開眼（後書き）

樹「こ、この視界は……バーチャルオーイー!?」  
知ってる人には知っている、あんな感じの紅っぽい視界みたいです。

#### 43話 雷獣との激闘

小さい時、たまたま親父の部屋の本を盗み見たことがあった。かなりの年月が立っているのか、もうボロボロで紙も破けそうなほどになっている。

それでも子供的好奇心からか中を見てみると、たくさんの奇怪な絵が描いてあった。

その中で一つ気に入った絵がある。

その名は『ライジユウ雷獣』

虎のような体に鋭く長い爪。説明書きにはこう書いてあった。

「雷を操りし獣、その速さは閃光の如く」

僕の目の前にはその雷獣がいる。

「閃光の如く速い、さすがにこの眼でも追いつけないか」

雷獣は「ガールルツ」と唸り声を上げながら、こちらの出方を伺っているようだ。

僕は札を構え、雷獣の鋭い眼光を見る。

瞬間、ギロツとその眼が光った。

「く！」

バーンツとまた足元に落雷が叩きつけられた。

また雷獣に視点を戻すが、先ほどの場所にはすでにいない。

「しまった、フェイクか!？」

すでに雷獣は僕の真横にいる。なんとか回避をする体勢に持ち込めたが

「ガアアアアア！」

鋭い爪を持った腕を振り上げ、僕の肩をシュツとかすめた。

「うあ！」

爪のあとは深くはないはず……しかし、普通よりも数倍の痛さ、いや焼けるような痛みが広がる。

傷口を押さえると「シューッ」という焼ける音が聞こえた。

「爪にも雷の力が宿っているのかよ……」  
「どうやら火傷を負ったようだ。これでは迂闊に近づくこともできない。」

「それなら臨！」

手に持っていた札を雷獣へと投げつける。

「シギヤアアア！」

しかし、咆哮を叫ぶと札に雷が的確に当たり焼けていった。

「どうしましたか紅。先ほどの威勢は」

伊吹がその光景をあざ笑うかのように見ている。

「それでは私は一旦退きます。紅、運がよければまたお会いしましょう。」

「ま、待て！」

退却しようとした伊吹を止めようと、向かおうとするが

「バシッ！」

落雷がまた足元に叩きつけられた。

「分かったよ、お前の相手をすればいいんだろっ」

すでに遠くに行ってしまうた伊吹を諦め、雷獣に視線を向ける。

「グルルルッ」

唸りながら雷獣は移動し十分な距離を取った。

「こいつさつきも同じような距離じゃなかったか？」

つまりこいつは自分の間合いがあるということだろう。

それならば、その間合いを潰すのみ。

札を2枚取り出し1枚を雷獣へと投げつける。

「臨！」

「ガアアア！」

また雷獣の雷によって臨の札が撃ち落されてしまったが、それを見  
過して一気に近づく。

「臨、もらったあああ！」

もう一枚持っていた札で近距離で斬りつけようとしたが

「バシユツ」

激しい音が鳴り、手に持っていた臨の札がバチツと燃え上がった。

「えっ？」

その隙をつかれ雷獣が振り払うように腕で突き飛ばされた。

「うわあああああ！」

起き上がるうとするが、どういふことが立つことができない。

「く、身体がシビれて……」

雷獣が獲物をゆっくり捕まえるように、のそのそと歩いてくる。

「にげ、逃げないと」

しかし、まるで自分の身体ではないように動くことができない。

「シギヤアアアア！」

目の前で咆哮すると、上から落雷が落ちてくる。

「これまでか！」

「えっ？」

激しい音が聞こえたのだが、目の前に雷獣がいることには変わりな  
い。

しかし、身体には怪我も何もなかった。「シユウウ」と焼ける音が

聞こえ、周りを見てみると

「な、なんだこれは？」

たまたま僕の傍にあった札の束が燃えていた。

「これは……」

先ほど霧雨と戦っている時に回収した臨の札の束であった。

「そ、そうか」

どうして先ほどの臨の札が燃えたわけが分かった。

「電気は金属に反応しやすい」  
臨の札は性質の紙から刃物のような金属に変えることができる術だ。  
つまり雷に誘導されやすくなる。ということ

「利用できる」

身体の痺れがなんとか治った僕は懐から多くの札を取り出し、辺り一面にバラまく。

「前！」

それらの札に前の術を仕掛けておいた。

「ガルルル？」

雷獣はその不思議な行動に少し疑いがかっている。

「さて……反撃開始だ！」

奴には金属系となる臨はもちろん、在も使えない。

前みたいに兵を土に使う土の巨人を呼び出すことはできるが、そのあとが厄介だ。

それにあいつの行動は遅く、俊敏な雷獣には向いていないだろう。となれば、攻撃方法は一つしかない。

そう、素手のみだ。

「闘！」

札を自分の身体に貼り付ける。

「ウオオオオオオ！」

自分の限界まで筋力を上げなければ、奴にダメージを与えることはできない。

それに気になるのは奴の体に触れたときの痺れだ。

「それを耐えられるか……だな」

雷獣に真正面から近づいていく。

いきなりの行動に驚いたようだが、すぐに雷を発動させようとした

のが分かった。

「そこだ！ 臨！」

仕掛けておいた前の札が一齐に臨へと変わった。

「ガ！？」

案の定、雷の目標は……臨！

「くらえええ！」

右腕ストレートを雷獣の頭に一発殴りこむ。

「シギヤアアアア！」

「くつ、やはり痺れる」

奴の体には相当の電気が通っているようだ。静電気のバチバチという音が鳴っていた。

「ガアアア！」

怒った雷獣は腕を振り上げるが その動きはスローモーションに動いていた。

「遅いな」

なぜだか今この眼の状態なので簡単に避けることはできるが、すぐに雷獣は一定の距離をバックステップで取った。

「ちっ、やはり痺れる……」

ビリビリと先ほど奴の頭に殴った右腕が動かない。

後ろを振り向き、臨の枚数を確認するが

「ない……だと？」

まさかあの短時間であの量を消し炭にするとは思わなかった。

闘の限界時間までも残り少ない。その後は極度の筋肉痛によって行動も遅くなる。

その為、札もこれ以上使ってはられない。

「どうする……？」

ふと足元を見る。

靴？

そういえば正輝が小学生の頃言っていた。

「踏み切りつて線路通ってるけど感電しないだろ？ あれって靴の裏側がゴムだからだぜ」

確かにゴムというのは電気を通さないということは知っているが……。

いや、そんなわけはない。それだったら下駄の人なんかは毎回感電死するところだ。

だが十分なヒントになった。

「蹴りだ……」

運がいいことに僕の靴の底の素材はゴムだ。

ダツと一気に間合いを近づく。

「シギヤアアアア！」

また雷獣に頭に今度は右足の蹴りを入れる。

「ギヤアア！？」

蹴りの衝撃とその痛さで驚き、雷がバシンバシンと辺りに落とす。

「もういつちよ！」

次は左足で蹴ろうとしたが、慌てて雷獣が電撃を足に向けて放つが

「ガ！？」

ゴムが受け止めて電撃を相殺した。

その様子を見て驚いたのは雷獣のようだった。無理もない、昔にはゴムという素材はなかったのだから。

「2発目！」

ガンツと頭に蹴りが入り、次に連続で右足を食らわす。

「3発目！」

すぐに腕を振り上げ、振り払おうとしたが遅い。

それを避け、カウンターの蹴り。その後も蹴りの連続をしていく。ついには雷獣がひるみを見せたところを逃さなかった。

「とどめだ！」

渾身の右足の一撃を奴に入れる。

「とりゃああ！」

雷獣が吹っ飛び、舌を出したまま白目を向いて気絶した。

「勝った……」

さすがにあれだけの蹴りを食らわすと、股関節部分が少し痛む。

地べたに座り雷獣の姿をじっと眺めた。

「さつさとあいつらを追わないと……：：：：：：そういえば里の人たちの避難は上手くいったんだろうか。てか、清水警視と鬼黄泉は？」

倒れた二人のほうを見ると、どうやら息はしているが気絶しているみたいだ。

「良かった……」

ほっとしていると、先ほどまでの視界がだんだんと赤から正常に戻ってきた。

「くっ、眼があああ眼があああ」

その瞬間、まるで眼がエグリ取られるような痛みが広がっていった。「っは!？」

視界が完全に正常に戻るとその痛さからも解放された。

「さつきの眼はなんだったんだ……動きがみんなスローモーションに見えたし」

それにもうよく覚えてはいないが、今までの鬼とは違う何か語りかけてきた。

「まだなんか秘密があるのか？　僕は」

……考えていてもしょうがない。とりあえず二人を安全な場所まで連れていっ……

「シ、シギヤアアアア！」

動こうとした瞬間、気絶したはずの雷獣が飛びかかってきた。

「う、うわああああ!？」

雷獣は僕の体に覆いかぶさり、両腕を押さえつけられる。

「ガアアアアア!」

腕も動かすことはできない。足でもジタバタしても効いてはいない。

「ガアアアアア！」

雷獣の大きな口を広げ、牙から唾液がたらたらと垂れてくる。

「く、食われる」

この状況ではどうしようもない。

「本当、不運ばかりだな……僕は」

雷獣の頭がだんだんと近づいてくる。

「封滅……爆碎」

「バシャーッ」

激しい音と共に先ほどまでであったはずの雷獣の頭が粉々に飛び散っていた。

「……な、なんだ？」

雷獣がドスリと落ち、自分の身体の自由も利くようになっていた。起き上がり、後ろに人影を感じたほうを向いていみる。そこにはかなり年配な杖をついた老人がいた。

「危ないところじゃったな」

長いヒゲをワサワサとさわり、少し笑いながら言う。

「お、おじいさんは？」

そう、質問しようとしたところ。

「綾香キーッック!!」

見覚えのある蹴りが飛んできた。

「ね、姉さん!？」

この姉さんは今までどこいってたんだろうか。

「まったく、まずはお礼を先に言いなさいよ樹」

「ほほほ、まあそう言うな、綾香」

一体、この老人は何者なのだろうか？

「そういえば、まだ樹は知らなかったわね。この方こそ、紅家の最

強にして一族の長。紅元徳様よ！」

紅家の長老！？それがどうしてこんなところで姉さんと一緒に？  
それに姉さんは紅家にバレちゃいけないんじゃない？……。

「色々聞きたい話もあるであろう。じゃが、それはあとじゃ。まずはあそこで寝ている二人を清水の家に運ぶぞい」

本当に……何が起こっているんだ？

#### 43話 雷獣との激闘（後書き）

雷獣、個人的な好きな妖怪です。

まあイメージ的にポケモンのライコウっぽく見ていただければ。

次回、樹はいつになったら家に帰るの？でお会いしましょう。

#### 44話 一息

「里の方はあまり被害はありませんでしたね」

清水警視と鬼黄泉を清水家に運んだ僕は紅家の長、紅元徳とお茶を飲んでいた。

「うむ、皆も無事に避難させてようじゃし、天火は追い払ったからのう」

ズブツとお茶をすすりながら、ヒゲをワサワサとさわる。

「しかし、なぜ元徳様が……」

しかし突然、僕の右肩に手を置かれその質問を遮られた。

「おお、綾香。二人の様子はどうじゃった」

「ええ別にたいしたことはなかったわ。それよりその質問だけど」

綾香姉さんはチラツと紅元徳を見ると、ホホホツと笑うばかりだ。

「……まあ大したことはないわ。ただこの危機をいち早く元徳様に伝えただけ」

確か僕の携帯電話を借りた理由はこういうわけだったのか。

「だが、まさかあの共が裏切るとはのう……」

それは間違いないかあの時いた3人のことだ。

「霧雨、伊吹、そして斎蔵ね……」

確か九字衆とかいう集団だったと聞いた。

そういえば九字衆というからにはあとの6人がいるはずだ。

「他の九字衆はいないんですか？」

「……」

質問した途端、沈黙が流れた。

どうやら何か禁句を言ってしまったようだ。

瞬間、その空気を壊すように障子がガラツと開いた。

「九字衆はすでにあの3人以外死んだのさ」

その言葉を発したのは清水警視であった。

「清水さん！ もう大丈夫なんですか！？」

心配そうに話しかけると、笑顔で返され腕を上げる。

「ああ、もう大丈夫だ。鬼黄泉の奴ももうすぐ起きるだろうって…

…」

紅元徳に気がついた清水警視はすかさずひざまづく。

「申し訳ありません、元徳様。この里を任された者でありながら、このようなことをなさろうとは……これは私の責任です」

清水警視は頭を下げるが、お茶をズズツと飲みながらホホホツと笑うだけであった。

「ふむ、まあこの結果は紅家全体の問題だ。清水だけの責任ではない。そして、やはりこの件は誠治が関係しておるのじゃろう？」

あの伊吹とかいう女は誠治に賛同したと言っていた。そして、僕らが帰ろうとしたときに謎の少女に襲われたこと。誠治には居場所が知られていないと思っていたが、知れたとなると里にいたあの3人はグルと見て間違いなさそうだ。

「清水よ。今回の一件でまずは里の建て直しを十分に急げ」

「はっ！」

いくら被害があまりなかったものをまた奴らが襲ってこないとは限らない。

「でも大元を絶たないと状況は変わらないですよ、元徳様」

僕らは誠治の暗殺に失敗している。そして数日の間で不思議なほど力を付けてきた気がする。

「そのことに関してじゃが……」

「な、内通者！？」

紅元徳から語られたのは紅家に内通者、つまりスパイがいるようなのである。

「確かに紅家のごく一部しか知られてなかったし、この里の場所も知っていたわけだし……九字衆以外にも敵は多そうね」

「そこでじゃ、お前たちには今までどおり誠治の調査をお願いしたい。紅神社は紅家とはある意味独立した立場、奴らにも情報が行き渡りにくいはずじゃ」

そういうことなら仕方がない。元々誠治は紅家は2位で一番恨んでいるのは紅神社の神主である親父だ。紅家のことについては紅元徳と清水警視に任せておくほうがいいだろう。

ひと段落つくと、また障子がガラツと開く。

「腹減ったのじゃー!」

鬼黄泉が大声でこちらに怒鳴りつけた。

里の人もしばらくすると避難から戻ってきて里の復旧作業をはじめたようだ。

「あれ?」

どうやら包帯でグルグル巻きにされた人物が運び込まれている。

「……助次郎?」

「やっと間違えずに名前呼んでくれましたね」

そういえば、あのあと彼を置いて行ってしまったが、どうなったたのか心配だったのだ。

「思ったより元気そうだな!」

「どこがですか! 見ての通り全身大火傷で死ぬところでしたよ!」  
大声から察するにまだ元気だ。彼は無視しよう。

「ちよ、待ってくださいー!」

助次郎はそのまま里の人たちに運ばれていった。

「あれ……元徳様は?」

姉がキョロキョロと辺りを見回して紅元徳を探している。

「元徳なら歩いて帰りよったぞ。まったく昔からせつかちな奴でいかんのじゃ」

鬼黄泉はあきれた顔で言う。

「こら、元徳様、でしょ？」

「妾の方が年上なのじゃ！」

ようやくここで一息つけそうだ……。というか、僕はいつになつたら家に帰れるのだろうか。

そう思うと、ふっと肩の力が抜け、視界が真つ逆さまになる。

『バタンッ』

里のみんながその音の方へと目を向ける。

「樹！」

「で、まさか本当にインフルエンザになるとはね」

高熱で倒れた僕は救急車で搬送され里近くの病院に入院していた。

まさか学校に偽っていた病気が事実になってしまつとは……。

「インフルエンザの病欠期間はあと二日間しかないんだから、気合で治しなさいよ」

姉がリンゴを剥きながら、無茶なことを言ってくる。

「まったくこれだから人間は弱いのだ」

そういつて片っ端から姉が剥いたリンゴを食っていった。

「おい、何勝手に食ってんだよ」

「細かいことは気にするな。ハゲるのだ」

結局、鬼黄泉はこのまま僕たちについてくるそうだ。僕の内の鬼閉しては気が出ていないようだが、それよりも禍々しい何かを感じ取つたらしいとのこと。

間違いないあの時起こつた、紅い目のことだろう。

「もしかしたら、お主にはまた何か秘密が隠されてると思つてじゃ

な。興味がわいたんじゃ」

そんな秘密が隠されているのなら、とつくに知りたいたいの自分のはうなんだが。だが、あの時の戦闘に関しては、まったくの別次元な戦法だ。普通なら光速の異名を持つ雷獣に対して、堂々と戦うことはない。

だが、通常の鬼のように霊力が上がったわけではなく。ということ。は鬼とはまた違った何かなのかもしれない。

「樹、難しい顔をしてるわよ」  
姉が心配そうに顔を覗き込んでくる。

「なんでもない。それより姉さんはいいとして、鬼黄泉は面会謝絶だ。菌が移るぞ」

鬼もインフルエンザにはなるのだろうか……いや、バカは風邪が引かないともいうが。

「そうじゃな。確かにあれは辛かったのじゃ」  
そう言つて、邪魔するだけ邪魔して出て行った。

話から察するにどうやら鬼にもインフルエンザは効くようだ。また新しい発見をした気がする。

「そういえば樹、退院する頃には家族が迎えに来てくれると思うわ」  
「ん？」

なんだ、この調子だと姉さんは……。

「それじゃあ私は……あるアニメ見たいので帰る！」  
しまった、ここだと局が無くて見れないのか！？

「あつ、鬼黄泉ちゃんは置いておくから、なんかあったら言いなさいね」

「や、役に立たねえよ、姉さん！」

とんだことになってしまった気がする。

そして、この短い病院生活はまた波乱の幕開けであった。

44話 一息(後書き)

短い……だと……。

ごめん、次は長くします。

とりあえず長かった里編は終わりましたーキャホーイ！

## 45話 ぬらり

インフルエンザともなると感染を防ぐために、いろいろな医療器具に囲まれ、ビニールハウスのような部屋に入れられると聞いたが。

「見たところ全然大丈夫そうですね。倒れたのも疲労が原因といえるでしょうし、インフルエンザ自体はほぼ治りかけてますよ」

と、診療してくれた医者に言われたのだった。

つまりだ……僕はインフルエンザの中で戦っていたことになるのか？ そう思うと、何か熱が出そうで考えるのは止めた。だが、幸いかなんな堅苦しい部屋ではなく、普通の個人部屋に入ることとなった。

姉さんが帰ったあとはとにかく暇だった。面会謝絶の看板もあるし、今日は誰も来ないであろう。

一匹を除いては。

「ほれ、リンゴ食うのじゃ」

にゅっとベットの横から手が出てくる。しかし、持っているものはどうみてもリンゴではなく、リンゴの芯だ。

「身をよこせよ、身を」

「すまん、腹が減っていたのじゃ」

シャリシャリと音を立てながら、鬼黄泉が美味しそうに身の方を食べていた。

どうやらいつのまにか、この部屋に戻っていたようだ。

「もうリンゴはいい。けど、本当に付いてくるのか鬼黄泉は。里の一大事でもあるんだぞ？」

鬼黄泉は手についた汁を舐めて、ふっと笑う。

「まああちらは楽浪が付いておる。それにお主のほうが何か楽しそうじゃからの」

楽しいが判断基準？ まったく鬼というものは理解できないものだ。「しかしじゃが、その気はなんなのじゃ？ 鬼に似た気配するんじ

やが、人にも近い気がする」

そういえば、鬼黄泉は僕に禍々しい気が付いていると言っていたことを思い出した。

間違いなく、あの紅い目のことだろう。何かそのことで知っているかもしれないので話してみた。

「紅い……目じゃと？」

「知っているのか、鬼黄泉」

この反応はやはり何か知っている気配だ。しかし……。

「いや、知らんのじゃ」

……期待はずれだった。

「まあ、そんなに残念がるな。しかし、やはり気になっていたのはその気で間違いなかるう。なんせ、そやつは紅いのでな」

紅い気？ 気に色なんてものがあるのは初めて知った。確かに死期が近い人間は黒く見えるらしいが。そのほかは無色透明でモヤのよくな存在だ。

「その話はいずれにしよう。さてと、そろそろ暗くなってきたしもう。よいしょと」

なぜか鬼黄泉はベットのの中に入ってきた。

「本日はここに泊まるのじゃ」

また何を言っているんだこいつは。

「早く帰れ、それに見回りに来るかもしれないだろ」

「その点は大丈夫じゃ」

何を根拠に大丈夫だと……。

「常に封隔絶ふうかくぜつしておればのう」

「フウカクゼツ？」

聞いたこともないものだ。それは何か術のようなものだろうか？

「実際見てみたほうがいいだろう」

そういうと鬼黄泉は一枚の札を取り出す。それは紅家の札であることは間違いないのだが。

「封……隔絶」

次の瞬間、すぐ近くにいたはずの鬼黄泉の姿が消えたではないか。

「消えたと思っただじやろう。何、そなたがただ意識してないだけじや」

確かに近くから声だけがする。しかし、意識していないことで、これだけはつきり消えるものだろうか。

「じゃあためしに妾のことを考えて、先ほど妾がいた場所を集中して見るのじや」

言われたとおり、じつと空間を見つめ続けていると　ぼんやりと見えてくる。段々とはつきりしていき、そこに現れたのは鬼黄泉だった。

「これが封隔絶じや。これをしていれば人間どころか妖怪や霊にまでも簡単に気付かれまい」

便利な術だが、こんな術が存在しているのは知らなかった。そういえば、紅元徳様に助けていただいた時も見知らぬ術を使っていた気がする。

「この術は鬼が使う術。通称、鬼術きじゆつじや。実は元徳にこの術らを教えたのも妾なのじや」

「な、なに!？」

ということ、元徳様の師匠ということにもなるのか？

「まあ普通の人間じや、この術は使いこなせないからのう。それにあやつは特別だったわけじやしな」

特別……確かにそうでなければ紅家の長老もやってはいないだろう。

「では、お休みなのじや」

と、コロンと本当に自分のベットに寝だした。しかも、グースカツといびきまでかきやがった。

「のび〇か、こいつは」

さて入院中は暇でしょうがなくなる。それこそ寝るに越したことはないのだが、今までの状況を整理しておくべきか。

紅誠治の暗殺は失敗。魔界への入り口が閉ざされた俺は一人で、何者かによって助けられる。

着いた先は紅家暗部の里で、そこには清水さんと鬼黄泉がいた。帰ろうとした途端に誠治の手のものだと思われる少女に襲撃。そこで里に戻ると九字衆といわれるものたちが反逆行為と……。

まったく色々なことが起こりすぎだ。これだけのことが一度に起これば、こうぶつ倒れても不思議じゃない。

「しかし、紅家にスパイがいるか……」

考えてみると、誠治の勢力はかなり大きいものなのかもしれない。暗殺作戦の時も、まるで向こうは知っていたようで待ち構えていたものだし。

「……意外と近くにいるのか？」

あまり考えたくはなかった。自分の近くに敵がいるかもしれないという考えは。

「寝よう」

隣にいる鬼黄泉のように今は身体を休めることが先決なのかもしれない。

……

「ゲシッ」

不意に鬼黄泉に足で蹴られた。

「痛ッ。なんだよ、鬼黄ツムグ」

文句を言おうとした途端に小さな手で口を押さえられる。

「何か不穏な空気があるのじゃ。確かめに行くぞ」

不穏な空気……？ 確かにここは病院だから霊が1体、2体いてもおかしくないが。

「!？」

確かにこの空気はおかしい。この気配は……なんだ。

「行くぞ。こういうのを対処するのが紅家の役目じゃ」

いまいち気乗りはしないが、しょうがない。丁度、暇を持て余していたところだし。病室のドアを開け、廊下に出るとヒンヤリと空気が流れた。廊下は真っ暗だ、非常用の電灯も付いていない。

「おかしい……」

やはりタダ事ではないのが間違いないが、この状況は前にもあった気がする。

「異界化か？」

紫ババアにやられた死神との対決の時だ。あの時は病院を異界化して死神を閉じ込めたのだが。

「いや、異界化とは違う。ほれ」

そういつて、鬼黄泉は廊下にある窓を開けた。確かに外の景色は見えて、手を外にも出せる。

異界化は外の世界を遮断するものだ。ここは明らかに外と繋がっている。

「ナースセンターまで行くか」

ただの停電なのかもしれない。状況を確認める為に、ナースセンターまで行くことにした。

一旦に部屋に戻り、非常用の懐中電灯を手にとって向かう。そろそろ目的場所だが、やはり明かりは付いていなかった。

「あのー、すみませーん？」

暗闇に声をかけると。

「ああ、はい」

女性の声が聞こえた。たぶん看護師の人だろう。

「灯りが無いようですが、停電ですか？」

「いえ、たぶん電気系統に異常かと。電力は自家発電装置があるので切れる心配はありませんし、幸いに患者さんたちの医療器具には電気は通っているようですから」

なるほど、自家発電装置があるなら外が停電になっても大丈夫なはずだ。しかし、明かりの部分だけが異常？それに非常用の電灯も単体で光っているものだった気がする。

「明かりだけがないのか……」

「申し訳ありません。今、業者の方を呼んでいますから、そろそろ治るかと思えますので」

これは単に電気系統の問題ではないだろう。

一旦、病室に戻った僕らは鬼黄泉に何か知ってないかを聞いた。

「ふーむ、ヒマムシニユウドウ火間虫入道かもしれんろう」

「……入道系か」

入道というと男の妖怪だ。結構、厄介者が多くて身体もデカイのが多い。

「奴がすることは夜に頑張っている人を嫌いだな。明かりを消したりして邪魔するんじゃない」

なにその迷惑な妖怪。

「さあおう。生きているときは怠け者だったからじゃないからかう」

……成敗してやる。

「まあ待て。いくらなんでも奴一人でこの空気はないじゃろう。いや、前よりか強くなっておる？」

「何だつて？」

本当だ。確かに前よりかは強い……いや、強すぎる。なんだ？身体が重いぐらいだ。

「！すぐに屋上に行くぞ！」

鬼黄泉は何かを感じ取ったか、僕の手を引っ張って廊下へと出た。何かを急いでいるようだ。それに段々と先ほどの空気が重くなってくる。いや、この空気は大きすぎて分からなかったが妖気だ。普通の妖怪でこの妖気は今までに感じたことはなかった。

病院の屋上へと出ると、シーツを干すためだろう竿竹がカラカラと音を立てている。

「何か……来る!」

遠くの方を見てみた先には何かが飛んでくる。あれは 駕籠!?

「駕籠のようじゃな」

まさか、この気の正体は、あの駕籠なのか?

「この気、長年感じてなかったが間違いないじゃろう……」

駕籠は屋上へ着陸すると、目の前まで接近してきた。僕は身構えると、鬼黄泉はさつと手で待てとやられる。

「まさか、こんな場所に来るとはな」

駕籠の中にはどうやら何かいるようだった。そして、駕籠の引き戸がガラッと開くの中から出てきた。

「カタツ」とゲタの音が聞こえた途端に僕の身体は悪寒と吐き気を催す。

「こいつは……」

着物を着て、口にはパイプのタバコ。そして後ろに伸びた頭を持った老人であった。

あまりにも有名な妖怪だ。こいつは 。

「ぬらりひょん、久方ぶりじゃな」

ん? ああ、はいはい説明ね。それじゃあ宗治の久々妖怪教室。ぬらりひょん、人の家に勝手に上がりこんでお茶を飲み、あたかも自分の家のようにして居座る迷惑な妖怪だ。しかし、その妖気は他の妖怪とは格が違うほどの高さ。並の霊能力者程度なら気絶してしまうほど。それ故に妖怪の総大将ではないかと言われている。

「……鬼の姫か。なんだ次はこの小僧にでも入れ込むつもりか」

「ち、違うのじゃ! こやつはただの研究対象じゃ」

タバコをスーッと吸い込み、カツカと笑うぬらりひょん。

「やはりマルボ〇はいいのう」

案外、普通のタバコメーカーを吸っているようだ。

「ぬらりひょん、何ようじゃ？　こんな田舎町の病院なんぞに来よつてからに」

「そりゃもちろん、主らに会いに来た為だわい。元徳にも話は聞いたからの」

元徳様に話を聞いた？　まさか知り合いなのか。

「まあ、それも頼みごとがあつたからだが」

妖怪が頼みごと？　紅家も多くの妖怪たちを退治している存在。いわば敵同士なのに。

「ははは、わしなど妖怪たちを治めているのは一部分。特に悪さはせん妖怪どもばかりだ」

「なるほど。つまり退治される理由がない妖怪だからこそ人間と仲が良いと」

「そういうことだわい」

確かに妖怪全体が悪いわけではない。人を襲うのもいれば、そこらでちょっとしたイタズラをするぐらいの奴らもいる。

「火間虫入道もワシが頼んで明かりだけを消してもらっただけだ。

どうも人里は明るすぎる」

「で、頼みたいということは何んじゃ？」

鬼黄泉がシビレを切らして、少し怒った口調で言う。

「最近こちらの妖怪の里でも事件が起きてのう。妖怪たちが誘拐されるという何とも奇妙なものだ」

妖怪が誘拐？　普通妖怪が人間を誘拐するのは聞くが、それじゃあ逆だろう。

「多くの妖怪たちが誘拐された。何が原因かと探りを入れていたんだが……」

待てよ？　妖怪の力を使う奴がいた。

「……誠治か」

「そう、奴が誘拐していることが分かった」

誠治が使っていた術、妖月。妖怪を封じ込めた呪符を媒介にして九

字の術を使うものだ。

「つまり妖怪たちを呪符に封じ込めているということか」

「ひどい奴じゃ……そんなことをしておったのか」

そういえば鬼黄泉は誠治のその技を見たことがなかったのか。

「それでだが……ここらで協力をおもってな」

「協力？」

「ふむ……」

一瞬空気がまた違った流れになった。

「例えば、主は病。敵は多数の状況時の場合」

ああ、絶望だなそりゃ……。

「ということで、ワシが助太刀するということだ」

「樹！ 来るのじゃ！」

後ろには何百の霊たちがひきしめあっていた。

「確かにこりゃ絶望だな」

## 45話 ぬらり(後書き)

ここより妖怪たちがわんさか入ってくる?と思います。

## 46話 ビーバー

「ウオオオ……」

病院の屋上には数百の霊がこちらに向かっている。

「なんて数なんじゃ……」

鬼黄泉も驚いているが、いくらなんでもこの数は多すぎだ。

「あやつら聞く耳は持ちそうにおらん。地縛霊かのう？」

地縛霊とはその土地に恨みを抱えていつ居てしまう霊のことだ。その恨みから悪霊になるケースが多い。

で、あれば早速戦闘態勢に入ろうとした瞬間。

「あ、しまった」

今思うと自分はパジャマを着ている。常にお札は普段着の中に入れているのだ。

恐らく自分の病室にあるのだろう。しかし、屋上への出口は霊によって封鎖されている。

「まあ仕方ないわい。主は黙ってみておれ」

タバコを啜えたまま、ぬらりひょんは霊たちのすぐ近くまで寄っていった。

「ウオオオオ……」

霊たちはぬらりひょんに群がろうとした。

「それ以上近寄るな」

その言葉を発した瞬間、霊たちの動きがピタツと止まった。

ぬらりひょんの一步先にはまるで見えない壁があるかのようだった。

「な、何が起こっているんだ？」

その光景は何とも奇妙だと同時に悪寒と目まいが急に湧いてきた。

「うう……インフルエンザがぶり返したか？」

「これえー、ぬらりひょん。こっちには病人がいるのじゃ、少しは加減するのじゃー！」

鬼黄泉がぬらりひよんに対して怒っている。ということは、この気持ち悪さもぬらりひよんが原因なのか？

「すまんのじゃ、樹。奴の妖気を最大限に張り結界を張っておるのじゃ」

妖気の結界？ そんなものは初めて聞いた。そうか、この悪寒は妖気だったのか。

「手加減は知らんからな。しかし、こやつら少々骨が折れる相手だそうだわい」

そのぬらりひよんはあまり事態が良くないものだと分かったらしい。「ふむ、そうじゃな。この状況で倒れる霊が……ものの数体か」

よく見ると、その妖気に当てられたか、倒れて消えかかっている霊たちがチラホラいる。

「腕が落ちたか、ぬらりひよん。まあ、後始末は妾に任せるのじゃ」

鬼黄泉は僕の左腕にピタツと張り付いた。これはやはり……。

「いちおう言っておくが、僕は病人だぞ？」

「何、こうすれば手っ取り早いじゃろう？」

確かにそうなんだが、もう少し病人をいたわるといふ心はないものだろうか……。

左腕に張り付いた鬼黄泉は形を変えていき、肩部分に角、手の甲に鬼の顔が付いた籠手となった。

「なるほど、そういうことか」

ぬらりひよんはその様子を見て、何か納得している。

『敵は多勢。ならば、あの術がいいじゃろう』

左腕が勝手に動き、手を霊たちに向ける。

『封滅爆砕！』

その術は元徳様が僕を雷獣から助けてくれた時と同じものだ。口から出た札は1体の霊に貼り付く。

そして、次の瞬間　その霊は爆発したのだ。

その爆風から回りにいた霊たちも連鎖するかのよう爆発している。

「こらあ鬼黄泉！ その術はワシまで危険だわい！」  
いつの間にか、ぬらりひよんは空中に浮いて回避している。

『この術は見ての通り霊体を爆発物に変えるというものじゃ。爆風に当たればその霊も爆発するのじゃ』  
何かすごい恐ろしい術だったようだ。確かにそれが鬼の術と言われるのも納得できる。

霊たちの爆発の連鎖は続き、1体が数体に数体が数十体にと散らばっていった。

『あははは、フィーバー状態じゃ』  
まるで、ぶよぶよを楽しんでいるかのように霊たちが爆発しているのを楽しんでいるようだ。

「やはり鬼か……」  
鬼の破壊衝動は習性なのだと、鬼黄泉の様子を見て確信した。

ついに最後の1体が爆発すると、空中にいたぬらりひよんが戻ってきた。

「まったく、あの術を使うときは一声かけろい」

『何、ぬらりひよんなら当たっても大したことないじゃろう』

しかし、なぜあんな怨念を持った霊たちが沸いたのか不思議だ。いくら病院といえど数が多すぎる。

『ふむ、どうやら原因の種はあやつのようにじゃ』  
左腕が病院の貯水タンクの上を指す。

そこには小さな人影があった。

「あ、あいつは……」  
その人影には見え覚えがある。

月夜に照らし出されたのは、トンネルで襲われた時に見たあの金髪の少女だった。

「まさか、あの数を短時間で被うとは予想外……」  
なるほど、原因はこいつか。しかし、どうやってあの何百の霊を呼

び寄せたのか。

「ふむ、ワシの知り合いがそんな術を持っていたのがおつたな。確か西洋の術でネクロマンシーというものだったわい」

ぬらりひょんが言うネクロマンシーというものは確か黒魔術に詳しい紫ババアに聞いたことがある。

古代から占いとして使っていたが、いつからか悪用したものがいた為に禁術になったものだ。

「紅樹、単刀直入に言う。私と来なさい」

金髪の少女はあらかじめさまに言う。

『樹、あの女は少々厄介じゃぞ』

この状況でなければ、ホイホイとついていってしまいそうだが、行った先には地獄が見えていることが分かっている。

「デートならまたの誘いにしてくれ。いちおう今は病人なんだ」

「そういう訳には行かない。それに誠治様からは生死は問わないと聞いている」

無表情な彼女は何か文字をチョークで書き出している。

「!?!? 奴の動きを止める!」

その様子を見て、ぬらりひょんは叫んだ。

「もう遅い」

少女が乗っていた貯水タンクはメキメキと音を立て中に入っていた水が飛び出した。

「な、なんだ!?!」

「奴め、召喚術を使いおつたな」

召喚術? というトンネルの時に飲み込まれた化け物みたいなのを呼び出すというのか。

「くっ……一体どういう化け物が」

辺り一帯が水浸しになると一部から光り輝く物体が現れた。

『お、大きいのじゃ!』

こ、こいつは……。

「ビーバー？」

巨大な青黒いビーバーがアクビをしながら立っている。

「……何かと思えば、こけおどしのようなだったわい」

ぬらりひよんも流石に油断を見せたのか、タバコにまた火をつけた始めた。

しかしその瞬間、ぬらりひよんの手元にはすでに火が無くなっている。

「なるほど、図体のデカさだけが取り柄というわけでもなさそうだわい」

一瞬何が起きたのかわからなかった。しかし、ビーバーみたいなのが手を振り上げていたことは分かった。

「まさか……あの距離から攻撃してきたのか？」

ヤツの手には長く鋭い爪が生えている。もしかしてヤツには。  
『来るぞ！』

ビーバーみたいなのは手を振り上げ、即座に振り下ろす。辺り一面に広がった水溜りは振動し、白く見える何かがかがこちらに向かって走ってくる。

「早い！？」

とてもじゃないが避け切れなかった。

『妾を盾にするのじゃ！』

それは少々気が引けたが、この状況では仕方なかった。籠手で自分の身を守ると、その衝撃は全身に伝わった。

『くっ、なんじゃこやつの威力は』

「あれは刃？ こいつただのビーバーなんかじゃない！」

水が漏れている貯水タンクの上から金髪の少女は答える。

「この子の名前はアーヴァンク。ウェールズに伝わる幻獣<sup>ひょうじゅう</sup>。気性は

荒いけど、不思議とこの子は私に懐いてくれる。特に食べるものは魚なんだけど……」

魚……？　しかしここには魚なんて。

「なるほどな、その為に水を撒いたのか」

あたり一面は水が広がっている。つまり、あのビーバーから見れば僕たちは魚に見えるというわけか。

「丁度、この子もおなかを空いていたことだし。行け、アーヴァンク」

またアーヴァンクは右腕を振り上げる。

『そうはいかせんのだ！』

鬼黄泉の籠手からお札が射出される。

『陣！』

見事、お札は右腕に張り付き動きが一旦停止する。

「無駄よ」

金髪の少女は短く冷静に言い放った。瞬間、アーヴァンクはバキーンと音を立て張り付けたはずの札が破れている。

『陣を無理やり力で破るじゃと！？』

「くっ、ぬらりひょん。何か手はないのか！？」

ぬらりひょんは悠長にタバコを吸っている。

「ワシには手におえん。妖怪ならまだしも獣に靈力は通じんからな。主のような物理攻撃でしか相手に傷を負わせることはかなわん」

かといつても、今の僕には札も何も無い。鬼黄泉の札があるからといって、限度だってある。

方法なら一つしかない。

『それは却下じゃ』

「でも他に方法が！」

どうやら頭の中身を聞かれていたらしい。自分の中にいた鬼を呼ぶという方法を。

そんな話をしていると、アーヴァンクはバシャバシャとこちらに向かってきた。

『樹、接近戦じゃ！　在！』

左腕の鬼黄泉の籠手からジャキンと白い刃が出てくる。

「奴の腕を切り落とすのじゃ！」

仕方なしと、デカビーバーに切り込みにかかる。アーヴァンクは腕を振り、爪をまっすぐにこちらへと下ろす。なんとかそれを避け、まずは右腕を切ろうとするが。白い刃は爪で受け止められてしまった。

「意外と動作が早い！」

どの巨体とは似合わないスピードがアーヴァンクにはあった。受け止めたあと横腹に蹴りの一撃が加えられる。

「グワツ！？」

その衝撃に落下防止のフェンスまで吹っ飛ばされた。

「しっかりするのじゃ、樹！」

アーヴァンクはそのスキを見逃すことなく走り迫ってくる。逃げようにも身体が思うようにも動かなかった。やはり無理はできない身体だったせいもあるだろう。

あの爪をくらえば、無事ではすまない。覚悟をした瞬間　急に左腕が軽くなった。

「なっ！　鬼黄泉！？」

鬼黄泉は僕の前に立ち、両腕を広げていた。

「死にたいのか！　離れる！」

しかし、鬼黄泉は聞く耳を持たない。このままでは鬼黄泉が　。アーヴァンクの攻撃がもう少しで届きそうだった。鬼黄泉は目をつぶる。

「……………」

何が起きたのだろうか。アーヴァンクは鬼黄泉の前で止まっていた。いや、むしろ奴に敵意の意志が感じられない。しかし、アーヴァンクは手を出して鬼黄泉の身体を掴んだ。

「お、鬼黄泉！？」

だが、予想していたものとはだいぶ違った。なんとアーヴァンクは……鬼黄泉を頬にスリスリとしている。

「な、なんだあいつは」

その光景に思わず呆気に取られる。

「や、やめるのじゃー」

どうなっているなこれは。

「くっ、アーヴァンクめ。かわいい女の子がいると敵意が無くなる性格だから困る」

金髪の少女はそういうには、つまり……女好きな怪物だっというわけだ。

「でも、まだ召喚術は終わらない。次の幻獣を呼べば」

と、少女は詠唱しようとした途端、あつたはずのチヨークで書いた召喚術の術式が消えていた。

「そ、そんな。さっきまであつたはずなのに」

鬼黄泉を掴んでいたアーヴァンクは段々と存在が薄くなり、最後は消えて鬼黄泉は２メートルぐらいの高さから落っこちた。

「い、痛いのじゃ」

術式は確かに消えているが、一体なぜ……そういえば、ぬらりひよんの姿が。

「まあワシが消したからのう」

「ウワツ!？」

ぬらりひよんはいつの間にか、横にいた。どうやら僕達がアーヴァンクに目がいつている間に術式を消していたらしい。

「まあ無事でなによりだわい。さてお嬢ちゃん。まだやろうというのかい」

ぬらりひよんは金髪の少女に問うが、ばつが悪そうにそのまま退散していった。

「ふう、なんとか凌げたのじゃ」

ネクロマンシーに召喚術。確かにただの少女ではないことは事実だ。誠治は一体彼女をどこから連れてきたのか……。

「さすがに疲れたわい。話の続きは主が紅神社に帰ってから話す」  
ぬらりひよんはそのまま駕籠にのって、彼方へと飛び立っていった。

「まったくんだ災難じゃったな。妾たちも病室に戻るとしよう」  
そう言った途端に病院中の電気はつき始めた。

「明かりも戻してくれたようじゃな」

さすがに疲れたせいもあって、抜け出していたことを忘れ……その  
後、看護師に発見され説教くらったのはいうまでもない。

## 46話 ビーバー（後書き）

アヴァーシクはウェールズ語でビーバーだという意味だそうです。幻獣は妖怪や幽霊とは違いモンスターという一種なので、霊能力的なものに影響はありません。ぬらりひょんみたいな妖怪にとっては厄介な相手です。

## 47話 帰宅

辺りも暗くなりはじめ、回りの民家などの光に照らされている紅神社の真つ赤な鳥居。

毎日のようにここをくぐっていたのだが何日間くぐっていないだけで、まるで何年もという感じがする。

「……………帰ってきたな」

魔界に突入して以来、魔界に置いていかれ、紅家暗部の里に連れられ、里が襲撃され、帰れると思ったらインフルエンザを発症するわ……………。

「自分、呪われてるんじゃないか」

出来事が重なりすぎて、絶対にこれは偶然ではなく、わざとなのではないかと感じてくる。

まあ、まず家に帰ってきて早々することは。

「お前はリュックから早く出る！」

「の、のじゃああああ」

リュックの中にスッポリと入っていた鬼黄泉を引きずり出した。

「ええい、妾は久々の長旅で何時間も過こしていたのじゃぞ。さすがに疲労はたまるんじゃない！」

「僕の背中でグースカ寝てた奴が何を言うか！」

病院から退院した僕は、てっきり親父やらが迎えに来るのかと思いきや、車のガソリン代が高いのでパス。清水さんも急な事件が入ったとかで動くことができず、仕方ないのでバスと電車鬼黄泉を使って帰ることになってしまった。しかし、それまでの間こいつが気付かぬうちにリュックに忍び込んでいたのだ。

「ふふふ、妾の鬼術（封隔絶）は絶対バレれんのじゃ」

こいつ……………悪いと思っていない。

「とりあえず腹が減ったのじゃ、入るぞ」

さっそうと向きを変え、テクテクと住居の方にへと入っていった。

「ん？」

少しこいつに対して違和感があったが、僕自身も空腹だったし母に会いたかった為に気にしないことにした。

玄関を開けた僕らの音に気付いてか、ドタドタと走ってくる音が聞こえる。

「た、樹殿！！」

「つ、燕！？」

いきおいよく燕が自分へと抱きついてきたのだ。

「またその姿を見られたようとは、この燕、うれしくございます」

「ああ、燕ただいま」

まさか燕がこんなに自分を心配してくれていたとは、素直にうれしく思う。

その反応でかポンポンと燕の背中を叩く。

しかし、ハッと多くの視線が集中していることに気が付いた。

「ジーツ」

鬼黄泉をはじめ、母、親父、姉さんがいつの間にか立って見ていたのですぐに燕を離した。

「なんじゃ、樹。その娘はお主のこれなのかじゃ？」

と、鬼黄泉は小指を突き出してくる。その行動に燕は「これとは？」と疑問に思っていたが、僕は無言で鬼黄泉の頭を引っぱたいておいた。

「ただいま帰りました、親父」

「……たくつ、せつかくお前の部屋を使っていたのにな」

と、少しムカツとしてそのまま奥へと行く。しかし、親父のその行動はただの嬉しいことの照れ隠しだということは既に知っている。

「帰って来たわね」

「母さん……」

と、母は僕を抱きしめた。

「まったく、こんな仕事だから分かるけど、もう我が子を失うことはしたくないのよ」

母は涙をしながら強く抱きしめる。姉さんは少し気まずそうに顔をそらした。

「ごめん、母さん。ただいま」

「はい、おかえり。ご飯ならすぐできてるわよ」

ご飯という単語に鬼黄泉がすかさず食いついた。

「ご飯っ　　ご飯っ　　なのじゃ」

「ああ、その子がうちで預かる子ね。確か黄泉ちゃんだったかしら」  
どうやら本当の理由は教えず、都合よく合わせているようだ。まあ鬼の子なんて信じれないだろうしな。

「ごめん、いちおう清水さんに頼まれたことでもあるから」

「分かってるわ。じゃあ、黄泉ちゃんにご飯にしましょう」

鬼黄泉は母に手を引かれ、食卓の方へと連れていかれた。

「あっ、私も母様のお手伝いに」

「……さてと」

さすがに長旅の疲れもあったので、ご飯を食べてすぐに眠りたいと考えていた。

「おい、私は無視か」

ヒンヤリと冷たい空気と共に裾をつかまれた感触がある。

「そりゃ弱っている弟の看病より、アニメを見るのを優先した姉さんなんていないだろう?」

「樹!」

おっと、さすがに言い過ぎたか。

「リアルタイムで見るからこそ、価値があるのよ!」  
やっぱり駄目だこいつ、早くなんとかしないと。

「まあそれより無事に帰ってきたようだけど……なんか顔色悪いわ

ね

「どうやら今までの疲労は顔に出ているようだ。そういえば、姉さんは途中で帰ったので『ぬらりひょん』に会ったことを知らないのだった。」

「姉さん、ちよつと話があるんだけど」

「話……?」

僕は病院で会ったことの出来事を話した。ぬらりひょんが妖怪たちと協力してくれないかということ。謎の金髪美少女が来襲してきたことを。

「……まさかのぬらりひょんに会うとはね。分かった、このことは父さんにも話しておくから、とりあえずご飯のあとね」

久々の食卓にはなんとまあ豪勢であった。

「樹の復活記念だしね。腕によりをかけたわ」

母さん達に会ったのも久々だが、学校のみんなもどうしているのだろうか。正輝や結衣に美香さんも、呼べたらいいのに。

「ピンポン」

そんな時に家のインターホンが鳴る。

「はいはい、どちらさまー」

母さんが玄関にへと向かった。

「樹、これ美味しいのじゃ!」

「とりあえず、僕のひざをイスにして食うのはやめろ」

まったくこんな所を見られたら「ロリコンだ」と騒がれて「来いよ、アグネ○!」と言われかねない。

「ロ、ロリコンだああ!」

先ほど思っていた言葉通りに叫びが聞こえたと思ったら、正輝が立っていた。

「ちよつと児童にわいせつ行為していると警察に連絡しておくわ」

結衣も何か携帯を持ち始めた。

「久々に見た友人がロリコンになって戻ってきたとマル」  
美香さんも何かメモるな！

「ていうか、お前らどうしたんだ!？」

「そりゃ、お前の親父さんが戻ってきたと聞いて飛んできたんだよ」  
陰で親父がニヤニヤとこちらを見ていた。あのクソ親父め。

「とりあえず、みんなも座って食べちゃって」

母の言葉に来客一同は「はい」と声をかけ座り始める。

その間に鬼黄泉の人気さはすごかった。どこから来たのか、名前はなんていうのかとか、何歳とかは変なことを言いかねないので僕が全て代わりに答えたが。

「……樹、あんたもしかして」

その行動に結衣にはやはりロリコンなのではないかと疑われたが。

「ごちそうさま」

みんなも食べ終わり、僕の話聞く体勢になっている。

「少しだけ寝かしてくれよ……」

とりあえず仕事で少しここを離れていたということ、本当にインフルエンザにはなったという話はしておいた。

ウソは言っていないはずだ。

「で、仕事先でたまたま黄泉ちゃんを連れてきたと」

結衣がそう解釈した。

「まったく無理しないでよ。とりあえず疲れてるようだし、私は帰るわ」

「あつ、私も帰ります」

「んじゃ、俺もお二人さんを送るか。樹、また学校でな」

少し納得できない部分もあるようだが、3人は深く聞くことせず帰

つていった。

「さて……」

「樹殿、詳しく聞かせてもらえぬか」

その後姉さんと燕に両腕を掴まれたが。

「鬼黄泉ちゃんは樹の中の鬼を封印したと聞いたけど、樹はどうなの？」

確かにここ最近鬼の声が聞こえなくなったが　不思議な力が起きたことがあったのを話した。

「紅い目……ね」

姉さんは何か思い当たる節があるようだが。

「樹殿、して私の里に伝わる短刀は何処に行きましたか」

「短刀……魔界の扉を開く鍵だっけか」

そういえば、そいつのお陰で僕は助かったわけだがそういえばその後どこに行っただろうか。

確か　あいつが持って行って……。

「あいつ……？」

黒い鎧を着た大男……あいつは一体なんだったんだ？

「樹殿どうしたのだ？」

「いや、何でもなし。あの短刀はたぶん魔界に置いてきてしまったよ」

「さようか……」と燕は少し残念そうな表情をした。

「いや、樹殿が無事ならそれでよい。それに誠治は簡単に魔界に行き来することはできなくなったのだしな」

自分に言い聞かせるように燕は無理に表情を作りかえた。

「で、どうやら誠治のロリコン疑惑が立っているようだけど」

姉さんが言っているのはたぶん金髪の美少女のことだろう。

「うん、でもあの子が使っていたのはたぶん黒魔術だったんだと思う。もしかしたら紫<sup>大空</sup>ババア毒奈に聞けば何か分かるかもしれない」

そのことは後日話を聞きに行こう。

一方その頃

紅宗治は社である者が来るのを待っている。

「まったく……何年ぶりのことやら」

タバコに火をつけながら、じつと賽銭箱を見ていた。

「いやだねえ、妖怪からの頼みつてのはろくな事じゃない。それにたいていはタダ働きだしな」

その時、宗治の隣にはいつの間にか煙が増えていた。

「まったく小僧が、相変わらず変わっておらんな」

ぬらりひょんがパイプを吹かしていた。

「ぬらり、どうせ誠治のことだろう。分かっている」

「話が早くて助かるな。しかし、あの頃は仲のよかったお前達が今では敵同士になるとはな」

「よせ、昔のことだ」

宗治は気まずそうにすると、ぬらりひょんはカカカつと笑い始めた。

「それでマルボ〇がもうすぐ切れそうだな、もろいに来た」

「その分の代金プラスの頼み金の賽銭箱を払っていけよ」

## 47話 帰宅（後書き）

やっと紅神社に戻ってこれた。次回はあのババアも登場するのか？  
その前に学校編だ！

## 48話 鬼黄泉の憂鬱

「バシッ！」

神社裏の林では二つの木刀がぶつかり合う音が響いた。

「しばし見ない間に腕を上げましたな、樹殿！」

「ずっと寝てたわけでもないしな！」

樹と燕の両者が持つ木刀はミシミシッと今にも割れんばかりだった。

「樹殿、そろそろ学校にお行きになる時間ですよ」

「だったら、さっさと一本取らしてもらえるか？」

お互い退くことはなく、ただ時間だけが過ぎていく。

「あの2人、なかなか終わらないわね」

「まったく飽きもせずにやるものじゃな」

そんな2人を横目で見て座っていた綾香と鬼黄泉は優雅にお茶を飲んでいる。

「しかしまあ、鬼切りの娘がおったとはこちらはヒヤヒヤものじゃ」  
鬼黄泉は昨日のことを思い出し、少しブルツと震えた。

昨日の深夜

今までの経緯の説明で夜も遅くなっていた樹たちはその後、居間でのんびりとテレビを見ていた。

しかし、なにやら綾香と燕は何かをコソコソとしている。

「たつきー、妾は眠いのじゃー」

突然、眠気を訴えた鬼黄泉はゴロンツと樹のヒザに寝転がってきた。

「お前はここで寝るな、風邪引くぞ」

「ことわるのじゃー」

樹は仕方なしに鬼黄泉を持ち上げて居間から出ようとする。しかし、とっさに何かが樹の裾をつかんだ。

「……待て」

その正体は燕だった。

「つ、燕さん？ どうしたの？」

「……」

しかし、どうも様子がおかしい。先程コソコソ一緒にやっていた綾香の方を見てみると、何かの缶を持っている。

「あれは……ビール缶だと？ ということは」

樹に冷や汗が吹く、なんせ燕が酔ったことで過去に悲惨な目にあってきたこともあるからだ。

「姉さん！ なぜ飲ませた!？」

「ふふふ……」

口元を手で隠すように不気味な笑みを浮かべた綾香はスルスルと壁を抜けていった。

「に、逃げるな!？ くつ、こうしてはいられない」

急いで鬼黄泉を抱きかかえ、居間を出ようとする。しかし、時は既に遅かった。

「ガタツ……ガタガタガタ」

扉はすでに開けられない状態になっていたのだった。

「姉さんめ、やりやがったな」

樹は後ろを振り向くと、フラフラと千鳥足でなんとか立っている状態の燕がいた。

「あれー樹殿がー3人もいるー」

「やばい、ちゃんと見えてないなあれは」

樹は疑問に思っていた。なぜ綾香は燕が酒に強くないと知っていたのにも関わらず、ビールを飲ませたのか。

フワフワと先程壁を抜けて、外へと出ていた綾香は少しニヤついていた。

「樹は鈍感だからね。いっぱいライバルいる中で鬼黄泉ちゃんなんて増えたら争奪戦が始まり兼ねないもの。ここはやっぱり燕ちゃん

を応援しないとね」

神社の階段に座り、しばらくときを待つ。

「しかし、燕ちゃんも単純ね。なんとかお酒の力を借りて積極的にしようと思った手を考えていたのに」

綾香は居間で燕と話してあった内容を思い出した。

「やっぱり燕ちゃん、樹のことスキでしょ？」

「は、はあ！？ あ、綾香殿、一体何を申されておるのでしょう」

燕は顔を赤らめながら、しどろもどろで答えた。

「分かりやすい子ね……とりあえずまあ、これ飲んでみるといいわ」  
綾香は燕に黄色い液体が入ったコップを渡す。

「綾香殿、これは一体？」

「ふふふ、それはわね。今から何代も昔の紅神社の神主が作ったとされる秘薬よ。その効果は気になる意中と記憶ないままにゲットできるといふもので、その神主はその秘薬で縁結びの神とまで呼ばれたほどよ」

「ま、まことか！？」

『まあうちのお中元でもらったただのビールなんだけどね』

「積極的になつた燕ちゃんを見て、樹も黙っていられないはず。明日には感謝されてるかもね」

「フフフ」と階段で静かに綾香は笑った。

「たつきどのー」

「やめる燕！ 足にしがみつくな、てか力つえええええ！」

樹の足にしがみつき、じわじわと顔の方にまで上つてこようとする。

「く、鬼黄泉を抱えている状態じゃ振り払えないし、仕方ないここは……」

樹は鬼黄泉を居間の隅の方に投げた。

「ゴチッ」

丁度、頭をぶつけたようで鬼黄泉は頭を抑えている。

「痛ツツツ、何事じゃ！ 突然宙を舞った感覚がしたのじゃ！」  
どうやらその反動で鬼黄泉は起きたようだが、樹は顔に近づこうとする燕を振り払うのにそれどころではなかった。

「すまん鬼黄泉！ 緊急事態だ、手を貸せ！」

鬼黄泉はその状況を見て、一体何が起きてるのか疑問に思った。

「……この匂いは酒じゃな。あの小娘、酔いおったな」  
すぐに鬼黄泉は札を取り出して燕に向かい投げる。

「しばらくおとなしくしておるのじゃ！ 陣！」

陣の札が燕に張り付こうとした瞬間。

「ピキーン」

脳裏を駆けるような予感が燕には見えた。

「ほりゃっ！」

どこからか取り出した鬼切りの刀を抜き、その札を斬った。

「な、なんじゃ鬼切りの刃じゃと!？」

「んー？ この気はまさしく鬼ですぞ。たつきどのー、ここはわたくしがー」

燕は樹を抱きついたらまま鬼切りの刀を鬼黄泉に向ける。

「ま、待て！ あれは鬼黄泉だぞ！」

「いや、あれはまさしく悪鬼。あの人相の悪さが物語っていますぞ」  
「！」

「それはお前が酔っているから、そう見えるだけだ！」  
樹はなんとか止めようとするが、燕の腕力にガツチリ固定されている。

「うづつ、苦しい」

そのまま樹は気絶してしまった。

「くっ、妾も眠気が無ければ本気を出せるのじゃが」

鬼黄泉は寝起きたばかりなのでフラフラと意識が朦朧としていた。

「だが、刀の範囲は近距離じゃ。このまま近づかなければ……」  
「シユツ」と鬼黄泉の頬を風が通った。

「ま、まさか……」  
燕はただ刀を何も無い宙で振っていたただけなのに、ここまで風が来ていた。

何か冷たいものを感じて、頬に手を当て確かめると血が流れている。

「ヒイイ、疾風の刃じゃと!? あやつ鬼切り一族でも一部でしか使えぬ技を酔っている状態でやったじゃと!?」

これでは鬼黄泉は逃げるのもやっとなってしまったのだった。

「ハアハア……」

鬼黄泉にもさすがに疲れが出てきた。反対に燕の方はハイになってきている。

「うっ、ここまでか……」

眠気と疲労で鬼黄泉はその場で倒れこんでしまった。

「ヒヤッハー！ 鬼は消毒だああ！」

燕は鬼切りの刀を思いつききり振り下ろす。真空でできた刃が鬼黄泉に向かって飛んできた。

「バシンッ」

その瞬間、誰かの手が真空の刃を叩き落した。

「……まったくいきなりの登場じゃな。ぬらりひょん」

「小娘に劣るとは落ちたもんだな、鬼黄泉」

ぬらりひょんはニヤツと笑い鬼黄泉に手を伸ばす。

「いらぬ世話じゃ。妾が本気を出したら樹までも傷をつけてしまっパシツとぬらりひょんの手を払いのけると、むくりと起き出す。

「さて力を貸すのじゃ、ぬらりひょん。久々にアノ技を使うのじゃ」

鬼黄泉は札を取り出し構える。

「まったく……あの技は疲れるというのに、仕方ない。ハアアア！  
ぬらりひよんは渋そうな顔をして妖気を全開にさせた。

「封妖殻！」

鬼黄泉はそう術を唱え、ぬらりひよんが出した妖気に札を向けると妖気を吸っていった。

「くくくつ、ぬらりひよんの妖気を特と味わうが良いのじゃ！ほりゃ！」

札を放り投げ燕に貼りつける。

「な、なんだ？」

燕はその貼り付けられた札を気になったが、構わず襲って来た。

「ウガガー消毒ジャー！」

そこでぬらりひよんは懐中時計を取り出す。

「……5秒前、4、3、2、1」

「あぼんなのじゃ」

ドサツと燕はそこに気絶した。

「本当は妖気を貼り付けてパワーアップさせるものなんじゃが、ぬらりひよんの妖気にはさすがに耐えられまい」

ぬらりひよんは並の妖怪や霊能力者なら、そのあまりの強さに気絶してしまう妖気だった。

そこで封妖殻という妖気を集めて貼り付けたのである。

「まったくその術を攻撃として使うのお主ぐらいじゃわい」

「さて……ぬらりひよん、妾はもう寝る」

鬼黄泉はドスンッとその場で寝てしまった。

「まったく騒がしい奴らだわい」

ぬらりひよんはその場から立ち去っていった。

そして現在。

「今思えば全てお前のせいではないか！」

鬼黄泉は綾香を攻め立てる。

「おほほほ……！」

そういつて綾香はその場から逃げていった。

「しかしまあ……」

「あの2人は確かにおもしろいかもしれんな」  
鬼黄泉は樹と燕の様子を静かに見守った。

#### 48話 鬼黄泉の憂鬱（後書き）

封鬼殻は九字護身法でいう闘に当たるものです。  
次こそは次こそは学校に行かせる。

## 49話 久々の学校

「おはようー」と学校に行く通学路は生徒達が挨拶言いながら歩いていく。

もちろん僕もその例外ではない。

「おはよう樹」

幼馴染の岬結衣が僕を待っていたかのように立っていた。

「燕ちゃんもおはよう」

「おはようございます、結衣殿」

左隣を歩いていた燕にも挨拶を交わし、結衣は僕の右隣に並んで歩いた。

「昨日も会ったけど、本当ひさしぶりよね樹」

まあ確かに僕自身もインフルエンザということで何日も学校を休んでいた。しかし、今学期からよく休んでいるけど大丈夫なのだろうか？

「ああ、そうそう。はいこれ」

結衣は僕が不安そうな顔をしていたのが分かったのか鞆からノートを取り出し、それを僕に手渡す。

「あんたが休んでいた分、ノート写しておいてやったわよ」

まったくこいつもお節介な性格だ。まあそのお節介がありがたいことではあるのは違いないが。

「ゆ、結衣殿。私も英語のノートを見せてもらえぬか……？ 授業を眠ってしまったな」

「おいおい」僕と結衣の2人でツッコミを入れながら学校の門をく

ぐった。

玄関に着くと、見慣れた女子がこちらに手を振って歩いてくる。

「おはようございます、みなさん。樹さんも学校ではお久しぶりですね」

伊藤美香さんがニコニコと笑顔で挨拶をした。しかし、挨拶した瞬間に周りから僕に対して視線が集中された。特に男子共から。まあ女子3人に囲まれながら登校してくるとは「リア充爆発しろ」とか「樹死ね」とか思われていることだろう。

僕自身もそんな光景を見たらそうだ、それに間違いなくアイツもいっただろう。

「樹、爆発しろ」

まさかその二つが合体した悪口を言われたと気づき、その人物は誰なのかを確認する為振り返るとアイツがいた。

「おはよう、正輝」

僕は少々嫌味な笑顔で内藤正輝にあいさつの言葉を返した。

結衣と美香さんが別の教室の為に別れたあと、僕と正輝と燕は自分たちの教室に向かっていた。

「そついや燕ちゃんが隣に樹いないからいろいろ大変でさあ」

正輝が僕がいないときの燕の様子を語ってくれる。

「樹の机を毎回拭いたりしてな。まったく樹め憎いぞ」

「ま、正輝殿その話は……！」燕は正輝がベラベラと自分の様子のことを話すのに恥ずかしがって口を塞ごうとした。

「まあいいじゃないか燕。それに机拭いてぐらいなら感謝するさ」  
別に僕自身も怒ることではない。それに色々燕には心配をかけさせてしまったことだし……。そう思いながら教室の前につくと、クラスメイトの何人かが僕の顔を見て

「ひ、ヒイイイ!?!」

恐怖で顔を引きつった顔をしている……。気にしないで教室に入ると僕の机に群がる人。

「な、なんだ!?!」

人ごみをかきわけて自分の机の上に置いてあったものは……花? 「……………」

おいおいこれではまるで 僕が 。

「死んだみたいになつとるやんけえ! 誰じゃああああ!?!」

僕は教室の中にいる全員に聞こえるように叫び声を上げた。

訳を聞くとつまり燕が僕の机を大事にしすぎて、今日から学校に来るということで燕は祝いに花を机に置いておいたらしい……。

「燕たのむから……こういうことはやらないようにな?」

今気付いたが、あたかもそれが自分の席だったように主張していた浮遊霊の一種がいたが被っておいた。

「過去にもいるのかよ……この席に」

どうやら燕の置いた花をその霊が自分の為に使っていたかと思っ  
たらしい。

「やっぱり樹が来るとクラスが明るいな」

席に座っていた隣で正輝が笑って言う。僕の性格からしてクラスの  
人気者というわけではないと思うのだし、僕が休むことはたぶん定  
着していて心配されないと思っていたが。

「あつ、そんなことはないって顔してるな樹」

さすがに何年も友人をやっているだけあって、僕の考えていること  
などこいつにはお見通しのようだ。

「正輝殿の言う通りです。みなさん樹殿ことを心配しております  
ぞ」

燕にも言われ、少しそのことが嬉しくて照れてくる。

「ああ、あと……」

燕が言おうとした先に「ガシャーンッ」と教室の引き戸を勢いよく  
上げる音が聞こえた。

「おらああ紅！！」

あれは……ハイテンションなうちの担任の先生、秋本先生、通称  
アッキーモだった。

「どうしたアッキーモ。HRよりかはちょっと早い気がするけど」  
正輝は全力で走ってきたのだろう秋元先生に聞いた。

「お前に用はねえ内藤！ それより紅、まずは職員室に来るのが常  
識だろうが」

ああ、確かに。色々インフルエンザということになっていたのだ。  
いや、確かに発症したが。

「まあその様子なら元気そうだな。いちおう確かめてから教室に行かせるということだが、その心配ならなさそうだ」

他の子にもかからないようにする為なのだろう。秋本先生は息を整え教壇に上がった。

「とりあえず、ちらほら席が空いているが、まああと数分だからHRするぞ」

めちゃくちゃな。その数分を遅刻じゃなくなる希望として見ている生徒もいるだろうに。

「今日は久々に樹が来れたが、てめえらもインフルには気をつけるように。あと重要なこと一つ、今日だけは屋上プール近くの女子トイレは使わんように。水が出なくなっているらしいからな」

ああ、あの体育館上にあるプールのことか。しかし、プールにはまだちょっと早い。さすがにこの時期にあそこに入る人はほとんどいないだろう。

「怪しいな」

正輝がふと言つ。またこいつは何かたくらんでいるのだろうか。

「さすがに女子トイレには入るなよ正輝？」

今にも行きそうだったので止めに入れておく。

「んじゃHR終了。今日も授業寝るんじゃねえぞ！」

そういつて朝のHRが終了した。

学校の授業は対して変わりはない。でも結構休んでいたせいもあって、いくら結衣のノートをくれていたとしても勉強には遅れが出てくることには違いない。しかし家で勉強しようにも姉が邪魔してくると思うし、鬼黄泉も一緒になってやってくるだろう。

「仕方ないか……」

僕はあることを決心して、昼休みにいつものメンバーに言うことに

した。

ようやく授業も回り、昼休みの時間となった。そして、廊下には女子2人が弁当箱を持って待っている。

「樹殿、行きましょう」

燕もすっかりおなじみになってしまったが、美香さんの料理をとても楽しみにしているのだろう。

「正輝起きろ」

相変わらずこいつは授業中はずっと寝ていたのか。

いつものように屋上で食べるに移動し、美香さんの弁当箱が豪華なのに気付いた。

「あの美香さん？　なんで3段重ねの弁当箱なんだ？」

「いえだって今日は樹君が復活した記念ですから」

まるでキリストが復活したイースターみたいだな……。

「樹、このエビフライがパネェ！」

正輝がエビフライの尻尾を出しながらしゃべってくる。

「落ちて着いて食えよ正輝。そういえば結衣の弁当は？」

さつきから美香さんの弁当箱で結衣の弁当箱が見えないが。

「えっ？　ああ、私のはちょっと作ってなかったというか……」

……さすがにそれはウソだ。さつきから後ろにある弁当箱が気になっ  
つてしょうがない。

「とりえず出せよ。勿体無いだろう」

無理やり結衣の弁当を出させ、蓋を開ける。

「おお」

以外にも結構な内容の豪華さにみんなも関心する。

「結衣殿。そんな謙遜しなくても燕はいっぱい食べて幸せです」

さつきから燕がすごい量を食べている……確か普段の食事でも結構

な量を食べた。

「さて昼休み終了には少し早いが……」  
弁当を平らげた僕たちは少し一休みしている。

「それで今日はみんなに相談にのってほしいことがあってな」  
僕は先程授業中で決心したことをみんなに話す。

「放課後に勉強会？」

一同が口を合わせた。そう勉強会だ。さすがにこのままじゃ次のテストが危うい。

「ああ俺はパスだわ……」

まっさきに正輝がリタイアした、さすがにこいつには期待してないから大丈夫だが。

「丁度いいですから正輝さんと一緒に勉強しましょう」  
しかし美香さんが笑顔でストップをかけた。

「私も英語を教えてもらいたいのですが……」

燕も意外と自分に危機を持っているのだろう、自らしたいという。

「はあ……分かった。さすがに美香ちゃんだけ手が付かないだろうし、必然的に私は必要よね？」

まあ結衣にはそのつもりで話していたんだが。

最後の授業も終わって放課後の時間は図書室に行くことにした。まあ勉強をするのなら、あそこが一番だと思うからだ。  
正輝と燕を引き連れて図書室に入るとすでに結衣と美香さんの2人はいた。

「んじゃ早速だけど……」

僕はとりあえず今までのところを教えてもらうために教科書を開いた。

「この量は一人が付きつきりで見えた人がほうがいいですね、結衣ち

「やんお願いできますか？ 私は燕ちゃんと正輝君を見ますので」と美香さんが結衣と僕をくつつけようとする。別に僕自身は構わないのだが。

「わ、私は……」

さすがに結衣が顔が赤くなっているのを見ると、こっちまで照れそうになっってくる。

「結衣、すまんが見てくれ」

このままでは埒が明かないと見え、こちらからお願いしてみると。

「わ、分かったわよ。そこまで言うなら見てやるわよ！」

と、なんとというツンデレぶりを披露された。

「しかしなつかしいわよね、こっやって勉強会みたいなのするの。そっいえば小学生の頃に正輝も連れて勉強会をしていたような気がする、といつても途中からかならずしも遊んでいたが。」

「そっそっ途中から正輝とアイツが遊びだしちゃうからさ。いつも樹と」

アイツ……？ まさか結衣、記憶が戻ってきている？

「あれ……ごめん。ちよつとトイレいってくる」

やはり徐々に結衣の記憶が戻ってきているようだ。やはりそろそろ隠し通すのは限界なのかもしれない。

「……あれ結衣ちゃんどこいったの？」

正輝が気になって話しかけてくるが「お花畑だよ」と答えておいた。正輝はどうやら「？」と分かっていない顔をしていたようだ、美香さんは納得した。

「お花でも必要なのですか？」

燕はどうやらそのまま意味で捉えていた……。

1時間後

「遅い……」

いくらなんでもこれは遅すぎる。確かに男児のトイレは早過ぎだが、まさかあいつ……。

「久々のお通じか」

正輝が僕の考えている続きを言った。どうやらお花畑の意味を美香さんに教えてもらったようだ。

「正輝君、それセクハラ」

美香さんがちよつと怖い顔で正輝をにらみつける。

「しかし、いくらなんでも遅かるう。ちよつと様子を見てはこぬか？」

燕が提案したようにみんなで結衣を確かめに行くことにした。

「女子トイレはそつちで行って見てきてくれ。僕らはとりあえずそこらへんを探してみるから」

美香さんと燕をペアにしていかせ、僕と正輝はそこらへんを手分けして探すことにした。

それにもう放課後だ。いちおう学校にも厄介な奴らがいるので、燕を美香さんにつけておけば安心だろう。

「行くぞ正輝」

「おうよー！」

正輝を引き連れてそこらを探してみる。屋上、教室、体育館とありとあらゆる場所を見たがない。

「いないな……」

しかし、いくら探してもいない。頼みの綱は美香さんの方たちだがとどうやら向こうも体育館そばのトイレに来たようだ。

「樹さんもここにですが、私たちのほうもいませんでした」

どうやら向こうもいなかったようだ……。この体育館に来たことになると校内のほうはほとんど見たのだろう。ということは残りの一

つは。

「体育館上プールのトイレか……」

そこしかないが、なぜわざわざあそこまで行ったのだろうか？

それに今日はそのトイレは使えないはずだったが。

「とりあえず行ってみようぜ」

僕たちは階段を上り、プールそばのトイレに着く。

「ウツ」

少し不穏が空気の流れに気付いた。それに間違いない、これは靈気？

「樹殿！」

さすがに怪しいと燕も気付いたようだ。間違いない、結衣は何かに巻き込まれた可能性があるということだった。

#### 49話 久々の学校（後書き）

気晴らしに違う小説書いていたら、そっちのが人気になってきているという……。

でも大丈夫、こっちはこっちで続けていくよ！ ペースダウンすると思うけど。

## 50話 トイレの怪

「思い出せない……」

岬結衣は図書室から出ると、顔がどうしても思い出せない男が出てきて頭から離れない。

「樹とあともう一人の……もう！」

頭を映らなくなったテレビを直すかのようにボカンと叩いてみても何も変わりはなかった。

「もう少し……もう少しんだけど」

とりあえず結衣は目的であった女子トイレに向かうことにした。廊下を歩き、他のクラスの教室などを見て回ってみるが、放課後の時間は帰宅している人や部活の人などで残っている人はいない。

「早く戻らなきゃね」

樹をいつまでも待たせとくわけにはいかない結衣は少々早歩きで歩いた。

目的地の階段そばのトイレに着こうとした途端 何か声がすることに気が付いた。

「うっ……うっ……」

「女の子の泣き声？」 岬はその声がどこから聞こえているのかを確認しようとして耳を済ませた。

「どうやら階段上からのようだ。」

「この先は確か屋上プールに行くときに使う階段よね」

何か怪我でもしてしまっただろうか？ お節介の性格がモノを言  
つて結衣は確かめに行くことにした。

階段を上ると、少し薄暗い雰囲気でも人気も無い。当然だ、プール開  
きは少し先だし水泳部もまだ活動していない。

「……………誰かいるのー？」

本当に人がいるのかどうかと声を上げて確認する。

「……………誰もいないわね」

しかし、声を上げてもその返答は返ってくることはなかった。ただ  
の空耳だったのかと階段を降りかけようとした時。

「うっ……………うっ……………」

先程聞いた泣き声が近くで聞こえた。

「やっぱり誰かいる」と声の場所を探すが、どうやらすぐそのト  
イレの中からのようだ。

「あれ……………確か今日はそのトイレ使えないはずよね」

朝のHRでその連絡は回ったはずだ。もしかしたら忘れて使っ  
てしまった生徒が水が流せなくて困っているのかもしれないという考え  
が浮かぶ。

「しょうがないわね……………」

結衣は階段を上りなおして、プール近くの女子トイレに入ってみた。  
中はヒンヤリと冷たく暗い。

「電気ぐらい付けなさいよ……………」

電気のスイッチをカチツと押すが、電灯は付く事はなかった。

「あれ？」結衣はもう一度力チカチと何度もスイッチを押してみたが何も反応はない。

「電気が切れちゃってるのね」

仕方なく結衣はドアの前に立つ。

「どこにいるのー？」

声をかけたが、どこからも返答はない。「はあ……」とため息を付いて「ここ使ってたことは秘密にしておくから」とドンドンと順番に手前からドアを叩きドアを開いていく。

「いないわね……」

3番目のドアをノックしようとしたところ、そういえば定番のあの話を思い出す。

「確か3番目のドアに3回ノックすると、花子さんが出るのよね」  
しかし、そんな幼稚な話は小学生で卒業だ。そんなものがこの世界に存在するわけないと自分に言い聞かせ3番目のドアを叩いた。

「……何も反応なし」

試しに中も確かめてみたが普通のトイレだった。  
すぐに4番目のドアを叩いてみるが、やはり反応もない。

「やっぱり気のせいかな」

誰もいないのを確認したあと女子トイレをあとにしようとすると。

「……ザザッ」

トイレの水が流れる音が聞こえた。

「!？」

誰もいなかったはずなのにトイレの水が勝手に流れたことは驚いたが、なにより水が流れることにも驚いた。

「……どうということ？」

すぐにその水が流れたと思われる3番目のトイレを開けようとするが。

ドアは「ガチャガチャ」と音を上げ、鍵がかけられているようだった。

「……でもさつきは誰もいなかったのに」

そして、そこは3番目のドアということ思い出し怖くなってトイレから出ようとする。

「ガチャッ」

なんと入って来たはずのトイレの入り口には鍵がかけられていた。

「……な、なんで!? なんで鍵がかけらてるのよ!」

無理にドアを引っ張り押ししたりするが開く気配はない。

「ギイ……」

後ろのドアが開く音が聞こえた。恐る恐る振り返ると 3番目のドアが開いている。

「……ウソよ。花子さんなんて言わないわよ」

ドス……ドスと近づいてくる音に結衣は冷や汗をかき、その様子を

見た。

「きゃ、きゃあああ」

結衣をその正体を見た途端に悲鳴を上げた。

結衣を探しに来た僕らは探す場所として最後に残った屋上プール近くのトイレの前にいた。

その場所は他とは違って空気が冷たかった。

「間違いなく霊気だな」

トイレからいかにも何かいた気配が漂っていた。

「でもおかしくないか？」と正輝は話しかけてくる。

「だって、朝にアツキーモはこのトイレは使えないって言ったんだぜ？ 図書室からだとまた下の階のトイレ使えばいいのにさ」

その事は確かに最もだ。なぜこんなところに入ったんだ……？

それを調べる必要があるが……しかし、その場合だと入らなくてはいけないんだよな……。

「樹殿。これは止む終えませんぞ？」

燕が突然切り出した。一体何を言い出すのかと思えば……。

「そうね、ここは燕ちゃんの言う通り」

……まさか。

2人は「女子トイレを探索するから付いてきて」と揃えて言うて来た。

「……まあこんなところ入る人なんていないか」

確かにこのまま入るのをためらっていれば埒が明かない。仕方ない、ここは女子2人の意見に任せよう。

「あつ、じゃあ俺も」

正輝が付いてこようとしたので「だがお前はダメだ」と止めた。

「ちくしょうーお前だって興味あるんだろつがああー!」

まあその意見には否定できないが……。

中に入るとなんてことはない男子トイレの小トイレが無いだけの空間だ。

「……なんかがつかりしてません、樹君?」

美香さんにズバリ言われてしまったので「いや……」と答えておいた。

さてとりあえずは霊がいるかどうかの気配を探るために手を前に出し気を確かめる。

いわゆる<sup>れいし</sup>霊視という奴だ。

「……やはり3番目か」

どうみても3番目の扉からこの世のものではない気配がする。3番目といえば学校の怪談ではおなじみのトイレの花子さんだ。しかし、あれは小学校の話だ。高校のトイレでそんなのが出るとは聞いたことがないが……。

とりあえず意を決して3番目の扉をコンコンと叩いた。

「……コンコン」

一同「!?!」と驚いたが、まさか本当に人が入っていたのだろうか。さすがに男子がここにいるのはまずいので燕に確かめてさせてもらった。

「……このトイレは使えませぬぞ」

「……」

しかし応答は無かった。まさか結衣か？と思ってドアを開けようとしたところ。

「ガチャリ」とドアの鍵が開けられた。

「ギイ……」

ゆっくりと扉が開き、それを見て怖くなった美香さんが燕にしがみついている。

僕もごくりと唾を飲み、その正体を確かめた。

「……ばあ！」

出てきたのは見知った顔だった。今日は珍しく大人しいと思ったら、なぜかこんなところにいたとは。

「……姉さん。何やっていますか、こんなところで」

紅綾香、僕の幽霊になった姉が3番目のトイレから出てきた。

「何を連れないわね。てか、なんであんたが女子トイレなんかいるのよ」

確かに今のままでは痴漢騒ぎとなってしまったので姉に今までの経緯を話す。

「ええ、この女子トイレに入ったの！？」

何か姉さんは何がここにあるのかを知っているように驚く。

「綾香殿。ここに何かがあるのかご存知なのですか？ 確かに外から感じた気は綾香殿のものではありませんでしたが」

燕を姉さんに問うと、姉さんは何か渋ったような顔をした。

「あんまし言いたくないんだよね……」

しかし、こちらは緊急事態だ。もしかしたらその何かに結衣は巻き

込まれているのかもしれない。

「姉さん、頼む」念を押して頼むと「分かったわよ」と折れてくれた。

「夕子ゆづこさんがいる……？」

姉さんが話してくれた内容だと、どうやらこの学校にはトイレの夕子さんがいるらしい。

「で、樹君のお姉さんはその真相を確かめに来た」と

美香さんが言う通り、姉さんがこの学校の生徒だったときに女子が行方不明になる事件が起きて、真相を確かめようとしたが結局分からなかったというわけだ。

そして今になって真相究明のためにやってきたということだった。

「まあその行方不明者は救ったんだけどね。ただその時にその子がしきりに夕子さん夕子さんと言ったから、そう呼ばれているの」

夕子さんか……もしかしたら結衣もその夕子さんに捕まったのだろうか。

「結衣ちゃんが捕まったのなら急いだほうがいいわね。前にその行方不明の子がいたところは下の下水で見つけたから」

「げ、下水道にいたとなると行くの厄介だ……」。

「たぶん夕子さんというのは人を宝探しゲームさせるのよ。また同じところをするかもしれないから、私は下水見てくるわね」

そういつて姉さんは透けて下へと降りていった。

「便利な体ですよね、樹君のお姉さんって」

美香さんは感心しているが、なんせ幽霊だからな……。

「私たちも探しましょう樹殿」

とりあえずこの女子トイレの他のところを調べてみたが、特に何もない。とりあえず次の探す当てがないかを考えてみる。

「なぜ前の子は下水から……そして女子トイレ、共通することは……」

そうか……『水』か。

「プールだ。プールを見に行こう」

僕は急いで女子のトイレを開けようとした。しかし。

「ガチャッ」

鍵はなぜか閉まられている。まさか正輝が勝手に閉めたのかと重いドンドンと叩き、外にいる正樹に知らせようとした。

ドアには窓がついていて、外の様子が分かり正輝が近づいてくることも分かった。

「お、おい。どうしたんだよ」

その驚きから見ると、どうやら正輝が鍵を閉めたのではないようだ。そういえばこのドアに鍵というものが存在しなかった。

まさかの妨害をされたのか？

「正輝！ とりあえずそつちから引いてくれ」

男2人がかりで扉をどうにかしようとしたが、びくともしない。とりあえず、このまま時間をかけてしまったては仕方ない。

僕は札を取り出し構えた。

「正輝、離れてろ！ 臨！」

扉を一直線に構えて切るが「ガキーン」とはじかれてしまった。

「くそ、やはりダメか」

こんなときは燕の刀があれば……と思い、燕を見るが刀を持ってきていないようだ。

「すまぬ……教室の掃除ロッカーの中だ」

……役にたたねえ。

こうしている場合ではない、とりあえず正輝だけでも結衣の搜索をしてみらおう。

「正輝！ とりあえずプールにいった結衣がいなかどうか確かめる！」

大声で正輝に指示させ、正輝は「分かった！」と了解しプールへと向かった。

「さて……」

もう外に出ることは諦めて、女子トイレの方にもう一度向く。

「僕はこつちのことを確かめないと、夕子さん？」

誰にもいないはずの空間で僕は彼女を呼んでみた。

先程から冷たい空気の流れが急に激しくなった。つまりこの場にその夕子さんがあるということだ。

「樹殿、私は美香殿と離れております」

刀を持っていない燕と美香さんじゃ戦力にはならないということ燕は承知していた。

「ああ頼む」

美香さんは無言で燕にしがみついている。たぶんこれから起こるであろう予測を2人はしているのだろう。

僕はお札を構え、気配を探った。

いちおうトイレのドアを開け中を確かめていくが、やはり何もいない。

「3番目か」

恐る恐る3番目のドアをバツと開けたが、やはり何もいなかった。

「ふっ」と息を整えようとするが、バツと急に首根っこを掴まれた。

「ウワッ!?!」

すさまじい力で首を絞められるが、掴まれているはずの手などの形は見えない。

「くっ、臨!」すぐに札を宙で切り裂き、絞められていた首は楽に

なつた。

「靈感があっても姿見えない……？ こりゃ確かに姉さんが分からないわけだ」

そんな姿が見えないものと戦うということは初めてだった。

「どうする……せめて奴の場所が分かれば」

すると突然、「ザザーツ」と水が急に流れる音が聞こえた。

「!?!」その音の方向を確かめると、どうやら水道の蛇口から水が噴出している。

「このまま水攻めにする気か!?!」

噴出した水はもう足元までかさを増してきていた。

## 50話 トイレの怪（後書き）

トイレの花子さんは、みなさんの学校にもありましたか？

私はたぶんあれは一種の口寄せの術で、どこの学校にも同じ霊を呼んでいるというということではないでしょうか。こっくりさんみたいな。

## 51話 鏡

トイレに閉じ込められた僕らは水道が壊れて水攻めにあっていた。

「こりゃ動きにくいな」

たださえ広くはないトイレだ。水浸しになれば戦いにくいことこの上ない。

しかし、問題はその行動を行った正体が見えないということだ。相変わらず辺りをグルッと見ても、それらしきものはいない。

確か親父もこんな霊と戦ったことを思い出した。いくら靈感があつたとしても姿が見えない霊というのはどうしてもいるらしく親父もそういつた特殊な霊と戦ったことがあるらしい。

しかし、ある方法で親父は見えたと言っていたな……。

「なんだっけ」

それを小さい時に聞いたものだったので、肝心の部分が頭から抜けてしまっている。

まずは水を止めることが先だろうか、水道に近づき蛇口を閉めようとしたが、固いビンの蓋が開けられないようにびくともしない。

あまりやりたくはないが、ここは闘くつで肉体強化をし、蛇口を無理やり閉めるしかないと考えた僕は札を懐から取り出した。

「闘！」

札を右腕に貼り付けると、力がみなぎってくる。これでどうにか蛇口も無理やり閉めることができるだろう、まああとで筋肉痛で悩ま

せられるのだが。

「とりゃあああああ！」

さすがの馬鹿力となると、蛇口も「ギギイ……」と音を立てて水の出も少なくなってきた。これでどうにかなるはずだと確信はしていたが、案の定そこで夕子さんが黙っているはずはなかった。

「樹殿！」

蛇口に奮闘している僕は燕に呼びかけられ後ろにいる二人を見ると、美香さんが倒れている。

迂闊だった。僕は美香さんが憑依体質で霊障（霊による障害）に対する手段を持ってないことを忘れていた。

「美香さん！」

蛇口を放した瞬間、また水の出は元に戻る。しかし、そんなに構ってるところではなく、美香さんに応答が無いか確かめたが、倒れたまま起きる様子もない。

「燕離れている。これは憑依しやがったな」

恐らく憑依したのは夕子さんだ。こうした悪霊が人間に取り付くと碌な事は起きない。なぜなら、このまま憑き殺されるケースもあるということだ。まあ僕の前でそんなことをさせる気はないが。

「そろそろ起きたらどうだ夕子さん？」

僕の問いかけに答えるようにムクつと美香さんは身体を起こす。しかし眼はまるで死んでいる人のようだ。こりゃ完全に身体を乗っ取られてしまっているのだろう。

「……探して」

ボソッと美香さんが言うが、これは夕子さんが言っているのだろう。だが、これは好機だ。

僕は札を取り出して、美香さんに貼り付けた。

「うああああああ」

美香さんは小さく唸り声を上げるが、霊に取ってみれば、これは縄できつく縛っているようなものだ。

まだ成仏はさせない。なんせ聞きたいことがあるのだから。

「結衣をどこにやった？」

しかし、下をうつむいたままでその返事はしようとしな。燕は無言で心配そうに見ている。

どうやら夕子さんは話せるような相手ではないようだ。であれば、強行手段に用いるのみ。

「陣！」

術を唱えると、貼り付けられた札は陣へと変化し、美香さんはなおも苦しそうな表情をする。

これはもう縄どころではなく全身に重しを乗せられたようなものだ。あまり美香さんにも負担がかかるから使いたくはなかったが、まあ仕方ない。

「結衣をどこにやったんだ？」

続けて同じ質問を返すと、反応が違かった。いや、というより。

「うっ、身体が重い……」

憑依が解けた……？ 慌てて、僕は札を取り剥がそうとする。

「ぐわあ！？」

瞬間、身体が風圧のようなもので吹き飛ばされた。勘違いしていた、奴は美香さんに憑依はしていない。

まるで憑依をしているように見せかけ、身体を操っていたのだ。

トイレの端から端まで吹き飛ぶと、壁のタイルが「ガシャン」と割れた。

「いてて……」

少し埋もれた壁から起き上がると、美香さんはガシヤガシヤと扉のドアを開けている。

「何やってんだ、夕子さんは」

「樹殿！」

燕が叫んで鏡に指を差した。その鏡を見てみると何か違和感があった。

「僕らが今いる人数は……3人。でも、写っているのは……1、2、3、4？」

そうか……トイレに閉じ込めたのは別の存在だったのか。すぐに僕

は札を取り出して、その別の存在がいる場所へと投げる。

「臨！」

ズサツと突き刺さる音がすると同時にポトッと札は落ちた。丁度、ガシヤガシヤ開けようとした扉もバタンと開きだし一斉に水が廊下の方へと流れていった。

しかし見るからに夕子さんが乗り移った美香さんは外に出たがっていた。この真相は夕子さんが仕業なのではないのかもしれない。

「樹殿！ 美香殿が！」

夕子さんに取り付かれたであろう美香さんがプールとは方向が違う屋上の方へと全力疾走していった。

「くそ！ 燕！ お前は刀もってこい！」

そのままの燕では何も役に立たないと思った僕は燕に刀を取りに行かせるように指示し、僕は全力で美香さんを追いかける。

屋上に行く扉に着くと、迷うことなくその先に進んでいく。しかし夕子さんは確か水に関連するものところに人を隠すと姉に言われたはずだ……。

「屋上に水……？ 待てよ。確か……なんかあったはずだ」

ここは学校だ。プールに水道やらで大量の水がいるはず。そしてそれが屋上に関係するもの……。

「貯水槽か！？」

すぐに美香さんのあとを追うと、美香さんは思った通り貯水槽によじ登っていた。しかし、普通なら貯水槽は工具がない限り開けられないはずだ。

「……！」

貯水槽によじ登った美香さんは何かじっとしていたと思うと、次の瞬間に目をつぶりはじめた。

「ピシッ」と音が鳴ると、がっちりと閉めてあるはずのボルトが僕の下に落ちている。

「おいおい……嫌な予感がするぞ」

僕は急いで美香さんのところによじ登り、抱き掴む。

「バシャーーン！」まるで水風船が破裂したかのように貯水槽は壊れ、中に入っていた水はあたり一面に飛び散った。

そして、そこには結衣が倒れこんでいるのを見つけた。すぐに結衣のところに行き、身体を起すが意識はない。

「おい、結衣！　しっかりしろ！」

顔をペシペシと叩くが反応は無く、息をしていなかった。僕は結衣をその場で寝かせ、結衣の顔を上げる。

「（許せよ、修二）」僕は静かに思うと、結衣に人工呼吸をした。

「ぶはっ……」

結衣は意識を取り戻すと、水を吐き出した。

「ゲホゲホっ……」

すぐに結衣は気絶して、また倒れた。僕は安心だと分かるとフェンスにもたれかかせる。ふと気付くと、また何かの物体が傍を転がっていた。

「あれは……もしかして」

その物体はうちの学校の女子制服を着ている。これは間違いなく……夕子さんの。すると突然に美香さんも起き上がる。僕はこれで終わったのだと思ったが、美香さんは僕のいる向こうのほうへと指を差す。

「まだ終わってない」

そう静かにいうと、僕はその瞬間突かれたように飛ばれ、屋上のフェンスにぶつかった。

「そうか……別の存在がいるんだっただな」

夕子さんがこの事件を起したわけではない。それとは別の何かがこの事件を起したのだ。僕は札を構え、見えない何かに戦いを挑むことになった。

しかし問題がある。先ほどのトイレでは鏡があったので敵がどこに

いるかもわかったが、ここは屋上だ。

鏡もないし、何か反射するものもない。

「……………どうするか」

見えない相手を挑むというのはいくらなんでも戦うのは不可能だった。いくらあの時の敵がゆっくり見える目があったとしても見えなければ解決にもならない。

そして当たり構わず札を飛ばしたとしても、結衣や美香さんにも被害が及ぶ。

「グッ！」

第2の攻撃が来ると、フェンスに押し付けられるままガシガシと猛攻された。

「列！」

札を前に出し、防御の姿勢をとっても後ろのフェンスに押し付けられるのは変わらなかった。『ギギギッ』とフェンスが鈍い音を立てている。

「このままじゃ……………落ちる」

そういえばこちら側の下にはある物があったはずだ。

「プールに……………イチかバチか！」

僕はフェンスをよじ登り、下にあるプールにへと飛び込む。「バシ

ヤーン」とギリギリダイビングをすることができた僕はすぐにプールサイドへと出ると、そこには正輝がいた。

「またすごいことしたな樹」

驚いているが、それどころではない。見えない何かもそのプールに「バシャーン」と飛び込んだことが分かった。

「おいおい、なんだよあれ」

正輝が驚くが、それを聞きたいのは僕だ。

「ここには正輝もいるから下手な真似できないし」

ピチャピチャと水面に歩くようにあとが出て、徐々にこちらに向かってきている。

「樹殿ー！」

燕の声が上から聞こえた。すると、先ほど僕のせいで歪んでいたフエンスに燕の姿が出ている。

「……！？」

そして、また別の姿が水面には映し出されていた。そこにまるで自分とそっくりの人影がいたのだ。

「そうか、こいつが」

僕はこれを好機と見え、すぐに札を取り出して投げ出す。

「陣！」

するとピタリと自分そっくりの人影は足を止めた。

「一気に行くぞ！！ 在！」

残りの札をばら撒き、在を唱えると札は一斉に手元に集まり刀の形となっていく。

「在月、臨！」

刀の形へと出来上がった瞬間に僕は真空の刃で臨を作る。

「ザシュッ」

人影はそれを受けていくと、どんどん傷跡のようなものが見えてきた。僕は連続で臨を唱え続け、とうとうプールの奥へまでと後退させることにできた。

「これで終わりだあああ！」

僕は傷跡のあるほうへと走り込み、刀を振る。

『グギヤアアアアア！』

人間とは思えない断末魔が響くと、人影はまるで立体のように姿が現れ半分へと崩れ落ちた。

「……………終わったか」

丁度、力を使い終わったのが在月が消えていく。しかし、こいつは一体なんなのだろうか。これは幽霊でも妖怪の仕業でもない。黒い物体を持ち上げようとした途端に辺りには硫黄の臭いがした。

「これは……悪魔か？」

悪魔は死ぬとき黒い物体と硫黄となって残していくと言われている。もしかして今までの原因は悪魔の仕業だということなのだろうか。

「……悪魔とはな」

悪魔にはいい思い出がない。そして今回巻き込まれた結衣のことを思うと、どうしてもあの時のことを思い出してしまう。

「修二……」

僕はすぐに清水警視に連絡をし、夕子さんの行方不明事件は貯水槽で遺体という形で見つかった。原因は変死だったが、その原因を言ったとしても遺族には信じてはもらえないだろう。

「何、こういう仕事をしていればよくあることだ」

と清水警視は言っていたが、さすがに悔しそうな顔をしていた。

結衣や美香さんも目が覚めると、何事もなかったのようになり日常へと戻った。しかし、なぜあのとき悪魔が現れたのかは理解できない。正輝は調べたいと言っていたが、場所が女子トイレなので調べるに調べられなかったそうだ。

僕はこの事件を忘れようと思っていた、あの姉さんが真相に気付くまでは。

「……これは合わせ鏡？　もしかして鏡の悪魔を召喚した。という  
ことはこの学校に……」

## 51話 鏡（後書き）

大変お待たせしました。もう3ヶ月ですか……早いもので。色々ゴタゴタとしていましたが、またしばらくかけることになりそうです。

## 52話 癒し

「悪魔か……」

夕暮れ時の神社の社の中で紅宗治と綾香は対面しながら話していた。宗治は割れた鏡の一部を見つめながらタバコを片手で吸っている。

「確かにこれは悪魔を召喚する時に使う鏡だ。合わせ鏡で午前零時丁度になると悪魔が出ると言われているが、これはその悪魔を合わせなくても出すという代物だ。こんな怪しげなものを持っている輩は俺の知り合いに二人しかいないが、場所が学校だ。そんな所に隠す暇はあるのか？」

綾香はただ目をつむって黙って聞いていたが、何かに気づいたのか綾香は目を開けた。しかし、その口を開く前に宗治は言葉を続けた。

「ああ、お前も気づいただろう。俺の知り合いにいたら一人は誠治。だが奴が仕掛けるとしたら女子トイレではなく、樹を狙うなら男子トイレだろう。そしてもう一人、大空零奈だ。あいつならそんな怪しげなアイテムを持っているだろうが、そのメリットはない。ましてや裏切りものだとしても同じく狙うなら俺が樹、もしくは燕だ。ではなぜ岬結衣を狙ったのか。それは彼女に個人的な感情を持つものだけ」

綾香は黙って立ち上がり、外へと出る障子を開けた。

「父さん、私はしばらく樹から離れています。少し調べたいことがあるので」

そういつて綾香は日の出が落ちると共に消えていった。

「まったく樹は次から次へと厄介ごとを持つてくるもんだ……。これも紅家の呪いなのかもしれんな」

宗治はタバコが小さくなるのを見ながら考え込んだ。

「あーあ、なんかどつと疲れたな」

正樹が帰りのHRが終わったと同時にその言葉をつぶやいた。だが、それを言うならこつちのセリフだ。こちらとら魔界に行つては閉じ込められるわ、秘境の里に行くわ、インフルエンザにかかるわで結衣が行方不明事件だわで、疲れたどころではない。むしろ死ぬ。それになぜか朝から背中になにか乗つかられたような感覚で体が重い。

「なあ帰りにどつかに寄り道しねえか樹。結衣や美香ちゃんや燕ちゃん誘つてよお」

正樹のその提案はたぶんゲーセンだろうか？ いや、たぶんそのメニューを誘うならカラオケあたりだろう。しかし、高校生だということに僕は遊ぶという感覚を久しく忘れていた気がする。1日ぐらいそういう日があつても罰は当たらないだろう。

「じゃあカラオケで」

そう正樹に短く伝えると待つてましたとばかりにノリノリに「おうよ！」と答えた。と、その間にいた燕が「？」と疑問を持ってそんな顔をしている。

「どうした燕？」

燕に聞くと「から揚げがどうしたのだ？」と言った。僕はその言葉に失笑するしかなかった。

「おいおい、そういう話は私のいないときに話せよ」

僕らの話が聞こえたのか、アッキーモモとい秋本先生が注意してきた。

「ふ、先生無駄だぜ。ダメといわれても行きたくなくなるのが男つてもんだ」

正樹がそう反論するが、さすがにそれはダメだと止めようと思つたが。

「まったく……まあほどほどにしとけよー」  
あるうことか先生が引き下がったことに驚いた。その言葉に正樹とキョトンとした顔で見つめたが、正樹はしばらくするとニヤリと満面の笑みを浮かべた。帰り際に秋本先生がこちらを見て同情のようなまなざしをしたのは気のせいだろうか？

「それで私たちを誘ったんですか」

美香さんは少し苦笑いをしながら、廊下を歩いている。まったく申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「で……樹」

結衣が暗めに僕を見ている。まさかまだあの時の事件から気分が治ってないのだろうか。

「あんだ……なんで後ろに鬼黄泉ちゃんがひつつているのよ」

「……へ？」

僕はすぐに背中を手をやり何かの物体をつかむと、上に持ち上げてみると見覚えのある着物を来た幼女がそこにいた。

「何しているんだ……鬼黄泉」

「放すのじゃー」

どおりで朝から重いと思ったのはこれだったのか。というか気づかなかった僕も僕だが、いくらなんでもありえないだろう。ていうかなぜ正樹や燕も教えてくれないんだと、そちらの方を見ると。

「いや、ついわざとなのかと」

という言葉が返ってきた。俺はそこまでこいつに背中におんぶをしたいとは一度も思ったことない。

「樹、最近うちに構ってくれんのじゃー。だから付いてきたのじゃ」  
構うも何もこいつが勝手にうちに来たただだ。ていうか、この展開

はこいつも一緒に神聖な歌広場カラオケに行かないといけないのか。いや、あつてはならない。ここは先に……。

「なあ鬼黄泉。あとで遊んでやるからここはいったん家に……」「鬼黄泉殿も一緒に空桶とやらに行きましようぞ」「

……途中で話を邪魔された燕にギロつと視線を向ける。正樹は同情したのか僕の肩にポンと手を置いた。

「仕方ない……てか自分の足で歩け」

鬼黄泉は僕の背中から降りることを拒んだが、投げ飛ばしておいた。

何か久々の学校の近くの繁華街に出た気がする。比較的ここらは治安もよく、悪い奴らの溜まり場とかもない。

そういえば鬼黄泉を連れて、ココらへんに来たのは初めてだった。

鬼黄泉は初めて見るものばかりなのか僕の手を引いて、あっちこっちへと連れまわす。

「あんたたち、そうしているとまるで兄妹みたいね」

結衣にそう笑われた。まあ正確には歳のには姉弟、いや祖母孫というぐらいの差なのだが。すると正輝が続げざまに「いや、それよりあれはロリコ……」「おい、刺すぞ」

とツツコミを入れておくと「ひゃー樹さんが怖いわー」と美香さんに助けを求めている。

そういえばそのカラオケ屋というのはどこにあるのだろうか。僕は正輝に聞くと「ああ、もう少し先に新装オープンで安いところがあるんだ」と返答をした。

確かそちらの方向は駅前の方に出るはずだ。少しだけ嫌な予感がしていた。

その予感は見事的中してしまった。

「ここだ、ここ」

正輝に案内された先は……思い出したくもない。あれは誠治の手のものの鬼に騙されたときの元廃墟ビルだった。

どうやらカラオケ会社が買い取って改装したらしい。だが、なぜだろうか。前より一層の嫌な気配が漂っている。

「ま、正輝君？　ここってなにか大丈夫なのですか？」

美香さんが心配そうに聞いたが、やはり僕だけじゃないようだ。だが逆に燕は少し張り切っている。

「なるほど、空桶というのはこのような場で鍛錬することなのですか」

まだ意味を分かってないが、これはこれでもおもしろいので意味はまだ教えないでおく。と、このときに一番怖がる奴は間違いない。

不意に制服の裾をつかまれたと思うと、結衣が横でブルブルと震えていた。ここでいつもの僕なら即効この嫌な気配を解決させて終わるのだろうが、そうはいかない。

今日、僕はあえての目標を決めたのである。

『今日は一般人のようにあえて気付かずに過ごし、結衣を怖がらせないこと』と。

なんでこんな理由を思いついたのか、それは日ごろからの御被いに關してのストレスからも来ている。

気が付かなければ余計なものに足をつっこむこともない。御被いを稼業にしている者がいふべきことではないが、今日1日ぐらいしても罰は当たらないだろう。

「さあ行くこうぜ」

妙に気合を入れた声で僕は先導を切ると、鬼黄泉は何かの気配を感

じているのか黙りながら、僕の肩にピヨンと乗った。  
そのことに先ほどのテンションはどこにいったのか不思議に思っ  
ていたが、僕は気にせず店の中に入る。

「く、暗い」

店内はいかにも暗いイメージで、空気も淀んでいる。

「なあ樹。今更だがやっぱ別のところに……」

さすがの正輝も止めようかと思っていたが、そうは行かない。もう  
ここまで来たのなら矢でも鉄砲でももってこいだった。

受付に顔を出すと、妙にめずらしかったのか僕の顔をマジマジと見  
た店員が出てきた。

「……もしかしてお客さんですか？」

そんなことを聞いてくるが、お客以外に受付に来るのはどういう奴  
なのだろうか。

「ええと、学生4人にお子様が1つと」というと鬼黄泉は「妾はお  
子様じゃない……」と言いかけた瞬間に鬼黄泉の口を無理やり手で  
閉じた。

許せ鬼黄泉。料金の節約のためだ。どうせ鬼黄泉の料金は僕が持つ  
ことになるのだろうか。

「それでは303号室のご案内で」と案内表が渡される。僕らは行  
こうとすると、店員が呼び止めた。

「ああ、部屋番号は間違えずに。あとノックされたとしても勝手に  
あけないでください。こちらから開けますので」

どういう意味だ……。まるっきりそこまで言われると何かあります  
よ的な。僕はコクンとうなづく。「ああ、あと」とまた呼び止めら



すると突然、正輝の歌の最中なのに燕が立ち上がる。「どうした燕」と聞けば「つまり空桶というのは幽霊と歌うことを……」と言いかけた瞬間にそばにあったマイクを燕に投げると見事に頭に命中し燕は倒れた。

「え、何。幽霊って？」結衣も不安そうに聞くが「いや、優麗と歌うっていうことだ！」と苦しい言い訳をする。

僕は気分と治して、鬼黄泉の方を見ると店内の食べ物メニューを見てよだれを垂らしていた。確かに気持ちは分かるが、こういった場所での食べ物が高い。まあドリンクぐらいなら別にいいのだが。それに気付いたのか、美香さんが「黄泉ちゃん、何が食べたいの？」と聞いて来た。

すかさずそこは止めに入ろうとすると美香さんは「いえ、私も食べたいんですが、私だけでは量が多いと思うので」とまるで天使のよう言う。

「んじやな、これじゃこれじゃ」

と鬼黄泉がメニューが決まったようなので注文はさすがに僕がしようとして受け付けるための電話を手に取り、受話器を耳に当てる。

「プルルルル……ガチャ」

さてメニューを頼もうとした瞬間「苦しい……」と受話器の向こうから聞こえてきた。

僕はすかさず電話を切る。その行動にそこにいたメンバーは不審がったが僕はすかさず「なんでもない」と答えておいた。

次もかけてみると「はい」と先ほど店員の声が聞こえたので、注文を言うと「かしこまりました」との声が返ってきた。さてこれで終わると思うと「すかさずお客さん、何か問題はありますか？」と

聞いてくる。もちろん「はい、何もありませんよ」と答えておいた。しばらくすると、トントンとノックしたのもう来たのだろうとドアの近くに座っていた僕はドアを開けようとすると　ドアの隙間からこちらをジッと片方の眼で女性が覗き込んでいた。明らかに店員とは思えない形相で。

僕はそれをバタンとすかさずに閉める。

「あれ？　来たんじゃないのか？」と正輝に言われたが「いや、別のところだったみたいだわ」と答えておいた。

無事に今度は頼まれて食べ物が来ると、真っ先に鬼黄泉はそれらを飛びつこうとしたので、それを右手で持ち上げて止める。

「鬼黄泉、まずは美香さんにお礼しなさい」

本当ならこれは美香さんが頼んだものなのだ、それをこいつは真っ先に全て食べようとしている。

「いえ、そんな……」と美香さんは遠慮していたが、それは僕が教育方針として許せない。

「美香、ありがとうなのじゃ」

鬼黄泉は短く言ったあと、すぐに食べ物に手をつけている。隣にいた結衣がその一連の行動をしばらく見ていると口を開いた。

「あんた達、なんか親子みたいよね。なんか親戚みたいなものなの？」

そういえば鬼黄泉に関しては仕事先で連れてきたとしか言ってなかった。実際こいつと僕は何の関係もない赤の他人だが不思議とそう感じさせない。

「いや、やっぱりそれは樹がロリ口……」

正輝が失言を言おうとしたので手元に置いてあったマイクを投げつけて頭に命中させた。すると鬼黄泉は一旦食べるのをやめるところこちらにチロリと向く。

「血筋じゃよ樹」

まるで僕が考えていたことが分かるように答えが返って来た。しかし、こいつの正体は鬼だ。とすれば……血筋というのは僕の中にいる鬼ということなのだろうか。

「ああ、では樹君と黄泉ちゃんは親戚なのですね」

美香さんはそう解釈したようだ。まああながちそうなるのではあるのか。さてと、そんな話はあとにしてまずは久々に歌おうとリモコンに曲を入れる。

「ようし、歌うぜー！」

マイクを手に取り、流れてくる曲にリズムを取る。いつもカラオケといえば姉さんが幽霊になっても行きたいと言い出し、1人カラオケという状況なのに自分は歌えないことばかりであった。その為、久々に歌えると思うとよりマイクを握る手に力が入る。

「~~~~」さあもうすぐ歌いだしが始まる。モニターを見て発声しようとした瞬間。

「ザッ……！！！」

いきなりモニターに砂嵐がはしった。「ちょ、なんだ。故障か!？」正輝があわててモニターに触れようとしたが、どうにもならない。しかし、僕はそれが何が原因なのかだいたい分かってしまった。

「……樹。店員さんに電話を」そう結衣が促すが、僕にその言葉は届かなかった。

なんせ自分がこれでようやく歌えると思っていたものを止められてしまったのだ。長年溜め込んできた怒りがこみ上げてくる。

「トイレ行きがてら店員さんに言ってくるから、待ってる……」

僕は鞆を手に取り、部屋から出た。

「……ゆるさんぞ。ゆるさんぞ！早く成仏したいと思わせてやるぐらいやってやる！覚悟しろ！」

鞆の中に入れていた大量の札を握り締め、僕は怪しい気配のする方へと駆けていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1971i/>

---

オハライ！（仮）

2011年3月23日22時11分発行